PRIDEと電撃合体! タイソンに独占インタビュー!!

enterbrain MOOK

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

2006 AUTUMN

760yen

9.10 PRIDE
無差別級GP決勝戦
緊急速報号

悲願の初優勝! 独占インタビュー

ミルコ・クロコップ

敗れてなお大ブレイク!

ジョシュ・バーネット

最強を目指し続けた男の夢ついに叶う!

ミルコの魂百まで!!

完全独占スクープインタビュー

マイク・タイソン

ヒョードル人気アメリカで爆発!!
10.21PRIDEラスベガス大会
現地徹底取材先取り大特集!!

PRIDE武士道に
五味隆典包囲網!!

石田光洋
川尻達也
青木真也
ギルバート・メレンデス

印刷・製本／大日本印刷株式会社

CONTENTS

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

表紙撮影／乾晋也

2006 AUTUMN

取材協力／（株）ドリームステージエンターテインメント、DSE USA、DEEP、髙田道場

ら“神々の闘い”へ——

N-WEIGHT FINAL ROUND

“怪物たちの宴”から

9.10 PRIDE GP 2006 OPEN

Cro Cop

N

最強を求め続けた男が崖っぷちからの王座戴冠!!

“NOW or NEVER”

「今回、ぶざまな試合をしたら俺はグローブを置くつもりだった」

“無冠の帝王”ミルコがついに悲願のPRIDE王座に就いた！ K-1から『PRIDE』に戦場を移して3年半。自身32回目の誕生日でもある9月10日、幾度にも及ぶ挫折を乗り越え、ついに『PRIDE』のベルトを腰に巻いたミルコは、人目もはばからず涙を流した。そのときミルコの胸に去来したものは何か。そして、ミルコはどんな思いでこの闘いに挑んだのか。王座戴冠から一夜明けた11日、“初代PRIDE無差別級GP王者”を独占直撃した！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫
試合写真／乾晋也、山口比佐夫、平専英

独占ロングインタビュー

Mirko C

PRIDE GP 2006 OPEN-WEIGHT CHAMPION

——昨夜は悲願のPRIDE無差別級GP優勝、および王座獲得おめでとうございます！

ミルコ　ありがとう。

——いまの率直な気持ちを教えていただけますか？

ミルコ　試合後のインタビュールームで答えたとおり、人生最高のバースデー・プレゼントをもらった気分だね。まさに人生最良の日だよ。

——では早速、その最良の日を振り返っていこうと思うのですが。今回、100・4キロと、かなり体重を絞ってきましたが、これはどういった理由から絞ってきたんですか？

ミルコ　絞ったというより、ハードなトレーニングを積んだ結果、自然にこの体重になったんだ。

——それだけ今大会に懸けてトレーニングしてきたわけですか。

ミルコ　それもそうだし、ようやくハードトレーニングを積めるような身体になったとも言える。

——どういうことですか？

ミルコ　じつは以前から鼻の手術をしようと考えていたんだ。これはK－1時代からの言わば古傷なんだけど、鼻骨を折って以来、鼻の内側に骨が出ているようなかたちになっていて、俺は鼻で呼吸するのが難しかった。その結果、これまではどうしても口で呼吸をすることになって、スタミナ面に悪影響を及ぼしていたんで、今回チームに帯同したサッカーのクロアチア・ナショナルチームのドクターでもあるイゴール・ユキッチという医師に相談したんだよ。そしたら彼が鼻が通る塗り薬を調合して塗ってくれたんだ。

——鼻がスーッとするような薬ですか？

ミルコ　そうだね。それを塗ってトレーニングをして、鼻から呼吸ができるように慣らしてきたら、鼻呼吸ができることで、走り込みやスパーリングをやっても息が上がらず、質、量ともに、いつも以上の練習ができた。その結果、自然と体重が落ちたんだよ。

——では、今回凄くコンディション良好で、スタミナも充分に見えたのは、鼻呼吸ができるようになったおかげでもあるわけですね。

ミルコ　そう思ってるよ。これまで鼻で息ができないことで、とにかくスタミナに不安があったが、鼻呼吸ができるだけで、これほどまでに違うのかと自分でも驚いたくらいだ。いつも以上にハードなトレーニングを積み、食事もしっかり摂り、睡眠も充分できた結果、グッドシェイプに絞ることができたのだからね。この鼻が通ったことが、今回の勝因の一つでもあるんだ。

——なるほど。動きの良さの裏には、鼻の塗り薬があった、と。

ミルコ　あとはプーラ（クロアチア南部の温暖な街）でのトレーニング・キャンプに今回初めて参加してくれた、イゴールとバレンティーノという二人の若いタイボクサーの存在も大きい。彼らは93キロと97キロの若い選手なんだが、これが非常にいい練習相手になったんだ。彼らが俺にスパーリングでガンガン向かってきてくれた。それがよかったね。普通、新入りが俺とスパーリングしたらどうしても遠慮が出てしまい、本来ならもっといいパンチを打って来れるヤツでも、大事な際（きわ）の部分で遠慮して打ってくれないんだ。それじゃあトレーニングにはならない。俺がスパーリング・パートナーをボコボコにするだけじゃ、自信過剰になるだけだからね。しか

Mirko Cro Cop

［PRIDE無差別級GP準決勝］
○ミルコ・クロコップvsヴァンダレイ・シウバ×
（1R 5分22秒、KO）

2002年に"K-1vsPRIDE"という図式で行なわれ、判定ナシの特別ルールでドローという結果だったこの一戦。4年越しの決着戦となった今回は"ミスターPRIDE決定戦"の名に恥じない大激闘となった。序盤からガンガン前に出て左右のフックを振り回すシウバに対し、ミルコはそれを闘牛士のようにさばきながら、強烈な左ミドルを叩き込んでいく。それでも前に出るシウバにミルコの左ストレートが直撃。目尻を切ったシウバはドクターチェック。ストップの恐れもあったが、試合を再開するとシウバはなおも前に出る。しかし、右目は完全に塞がり視界不良。そこへミルコが伝家の宝刀、左ハイキック一閃！ 超劇的勝利でミルコは決勝進出。シウバはPRIDE初のKO負けとなったが、ミスターPRIDEの名にふさわしい闘いぶりだった。

し今回、プーラに来てくれた若い二人はガンガンきてくれたんだ。俺を食ってやろうというくらいにね。

――それが"仮想ヴァンダレイ"には打ってつけだったわけですか。

ミルコ　まさにそうだね。今回の試合前のテーマは、とにかく下がらないこと。自分から前に出てインファイトで仕留めることだったんだ。それが彼らとのスパーリングのおかげでできたように思う。

――たしかに、このところ打撃が単発になりがちだったのが、久々にミルコ選手らしい前にプレッシャーをかけてのラッシュが見られましたよね。

ミルコ　それもスタミナがあったがゆえだよ。ここ数試合、クロコップらしい試合が見せられなかったのは自分が一番よくわかっている。後ろに下がりながら受け手に回って、左ハイキックを狙うためだけに、距離を取ろうとして、相手に組みつかれる。去年の8月にヒョードルに攻略されてから、それの繰り返しだった。だから俺も32歳を迎え、ヴァンダレイ相手にまた同じように後ろに下がって、後手後手に回るふがいない試合をしたら、そのときはもう潔くグローブを置こう、そう決めていたんだ。

――えっ！　そこまで考えてましたか‼

ミルコ　だから今回は、"NOW or NEVER"だと自分に言い聞かせていたんだ。いま苦しいトレーニングに耐えてベルトを巻くか、それとも永遠に俺は無冠で終わるのか。

――やはりシウバというのは、それだけのものを懸けるに値する相手でもありましたか？

ミルコ　それは言うまでもないだろう。なんと言っても、あのヴァンダレイ・シウバなんだからね。

――そして見事にシウバをKOして完全復活したわけですが、階級下のシウバがミルコ選手に打撃で真っ正面から向かってきたことについてどう思いますか？

ミルコ　もちろんリスペクトしているよ。誰でもできることじゃない。いまはヴァンダレイのケガがたいしたことないことを願うだけだ。

――やはり左ハイキックやパウンドはかなりの手応えがありましたか？

ミルコ　もちろんあったけど、最初の左ストレートで勝負は決まっていたと思う。あれこそがソリッド・インパクトだった。ヴァンダレイはあのパンチが見えていなかっただろうね。

――今回、一、二回戦では温存していた左の蹴りを惜しげもなく出していきましたけど、左足甲のケガはもう万全なんですか？

ミルコ　いや、じつはまだ癒えていないんだ。もう一年もだましだましやっているが、なぜかへんなふうに柔らかく腫れるんだよ。もしかしたら、これは現役を続ける限り付き合わなければならないかもしれない。でも、昨日は決勝戦だからね。それにもう俺にはあとがない。ケガを承知で左で蹴っていこうと思ったよ。

――あと今回、いつもと違い、入場のときのTシャツがかつて着ていたものでしたけど、あれはどういった考えで着てきたんですか？

ミルコ　（ニヤリと笑って）

［PRIDE無差別級GP決勝戦］
○ミルコ・クロコップvsジョシュ・バーネット×
（1R 7分32秒、KO）

ともに準決勝を年間ベストバウと級の大熱戦で勝ち上がってきたミルコとジョシュが、無差別級GP決勝で激突。ジョシュは序盤から前回のミルコ戦と同様、ジャブを放ちながら距離を詰め密着を試みるが、ミルコは突き放し組みつかせない。逆に左ミドルやパンチのコンビネーションでジョシュを追い込む。ジョシュもミルコ渾身の左ミドルをキャッチし、寝技に持ち込もうとするがミルコは倒れない。なおも距離を詰めるジョシュに対し、ミルコはボディブローとアッパーのコンビネーションを叩き込み、崩れるように倒れたところにさらにパウンドの雨を降らせる。そして左のパウンドが左顔面を直撃したところで、ジョシュがタップアウト！　この瞬間、無冠の帝王ミルコがついに、PRIDE初戴冠！

まぁ、俺だってゲンを担ぐことぐらいあるさ。だから俺がシウバ戦のときは俺が『PRIDE』に乗り込んできて、怖いもの知らずで連勝していた頃のTシャツ。そして決勝では二度ジョシュを倒したときに着ていたチーム・クロコップのTシャツだったんだ。

――なるほど。準決勝でシウバに勝って、決勝までのあいだというのは、どういったことを考えていましたか?

ミルコ とくに何も。身体を横たえて、マッサージをしてもらい、気持ちを途切れさせずに決勝を待っていただけだ。

――ノゲイラvsジョシュの試合は気になりましたか?

ミルコ もちろん気になったよ。俺はK－1出身だから、トーナメントのアヤというものをよく知っているが、誰が勝ったか、どう勝ったか、どれだけスタミナを残しているのかということが、凄く気になるものなんだ。そういった意味で言えば、恐らく俺とシウバの試合を見て、ジョシュもノゲイラも焦ったはずさ。俺がスタミナを残して、勢いもあって決勝に上がってるんだからね。

Mirko Cro Cop

PRIDEのベルトを腰に巻いた瞬間 すべての苦労が報われた気がした

――では、決勝のジョシュ戦では、すでに心理的に上回っていたわけですか。

ミルコ それもあるし、あと俺は二度ジョシュに勝っているからね。そういった面でも俺のほうに心理的なアドバンテージはあったと思う。ただ、俺自身の気持ちではノゲイラに決勝に上がってきてほしかったんだ。

――それは、一度敗れているノゲイラにリベンジしたいということですか?

ミルコ いつもノゲイラの紹介VTRが流れるたびに、俺が腕十字を極められタップアウトする姿が映し出される。そんな屈辱はすぐにでも晴らしたいからね。でも、昨日の試合を見ると、やっぱりノゲイラにとって１１０キロ以上の体重は重すぎるんじゃないか? 以前より動きが鈍いよ。昨日の俺だったら、初めてノゲイラを史上初めてKOすることもできたんじゃないかと思う。

――試合後、リング上でジョシュと話をしていましたけど、あれは何を話していたんですか?

ミルコ 「クロアチアに来いよ」って言ったんだ。ジョシュとは3度も闘った。もう試合をしなくていいだろう。だから、これからは一緒にトレーニングしようぜって声を掛けたんだ。きっとお互いにとって、いい効果があるはずだ。

――そして本当に念願だったPRIDEのベルトをようやく腰に巻きました。頂点に立つまでには、何度も挫折があったり、いろんな苦労があったと思いますけど、い

ま思い起こしてどんなお気持ちですか？

ミルコ　そうだなぁ。96年に初めて日本に来てジェロム・レ・バンナと闘ってから10年。そう、いつの間にかもう10年にもなるんだ。その間、数々の挫折を経験して、届きそうで届かなかった夢をようやく手に入れることができた。あのベルトを手にした瞬間、すべての苦労が報われた気がしたね。

——髙田本部長にチャンピオンベルトを巻いてもらった瞬間、ミルコ選手が涙を見せていましたけど、やはりそのときいろんな想いが去来しましたか？

ミルコ　いや、わからない。なぜか自然に涙が溢れてきた。

——念願のベルトを初めて巻いてみた感触は？

ミルコ　重かったね。これだけのトップファイターが争って得たベルトなのだから、それだけの価値があるし、物理的な重量もずっしりとした重さがあるんだ。

——先ほど、シウバ戦でぶざまな試合をしたら、グローブを置くつもりだったという話がありましたけど、ここまでの道のりで「もう辞めよう」と思ったこともありますか？

ミルコ　現役を長く続けていると、いろんなことがある。そんな気持ちになることだってあるさ。でも、ここで辞めてしまったら、俺はこの世界で何も残せなかったことになる。人々もクロコップのことなど、次第に忘れてしまうだろう。

——いや、そんなことはないと思いますけど……。

ミルコ　人の記憶とはそういうものさ。やっぱりのちのちまで残るのは、歴代王者なんだよ。つまり、俺が『PRIDE』で命懸けで闘った証があのベルトなんだ。

——なるほど。では今回、念願のPRIDE王者になったわけですけど、次なる目標はやはり打倒ヒョードルということになりますか？

ミルコ　もちろん、借りを返さなきゃいけない相手であることは間違いない。でも、焦ってはいないよ。ヒョードルは病み上がりで、10月にはラスベガスで復帰戦もあるから、たとえば、その二カ月後に俺とやることはないんじゃないか？

もしヴァンダレイが出られないなら代わりに俺がUFCに出てもいい

Mirko Cro Cop
1974年9月10日、クロアチア出身。96年にK-1に初来日。99年「K-1 GP」で準優勝。01年、総合初挑戦で藤田和之と対戦し、ヒザ蹴り一撃でTKO勝利。その後、永田さん、桜庭らを下し「プロレスラーハンター」と呼ばれる。03年から主戦場を『PRIDE』に移し、ヒョードル、ノゲイラとともに「ヘビー級三強」の名をほしいままにする。05年8月、ヒョードルの持つPRIDEヘビー級王座に挑戦するも敗北。今年、PRIDE無差別級GPに優勝し、ついにPRIDEのベルトを腰に巻いた。188cm、100.4kg。

——まあ、そうですよね。

ミルコ　それより、『PRIDE』がアメリカ大陸を征服しにいくのなら、無差別級GP王者として、俺が前面に立たなきゃいけない責任ができたんじゃないかな。そして、いま一つ考えていることがあるんだ。

——なんでしょうか？

ミルコ　11月にUFCでシウバとチャック・リデルの試合が予定されているだろう？　もしヴァンダレイが昨日のケガでこの試合に出られないのなら、俺が代わりに出るのもいいんじゃないかと思っている。

——シウバの代わりにUFC出陣ですか！

ミルコ　俺もヴァンダレイと同じように『PRIDE』を代表として闘うという気持ちは持っているからね。チャックは階級が一つ下だけど、普段の体重は俺と変わらないし、身長だって変わらない。向こうが受けるなら、俺はやってもいいと思うんだけどな。

——UFCのヘビー級には興味はありませんか？

ミルコ　興味はないこともないが、俺が闘うべき相手は見当たらないな。王者のティム・シルビアにしたってリーチ以外で俺が劣っている部分は何もない。チャックのほうがよっぽどいい相手になるんじゃないか？

——辛辣ですねぇ（笑）。もしUFCに上がるチャンスがあった場合、ルールの違いは気になりませんか？

ミルコ　気にならないね。1ラウンド5分、ヒジ打ちが認められるルールは俺にとって好都合だとさえ思っている。

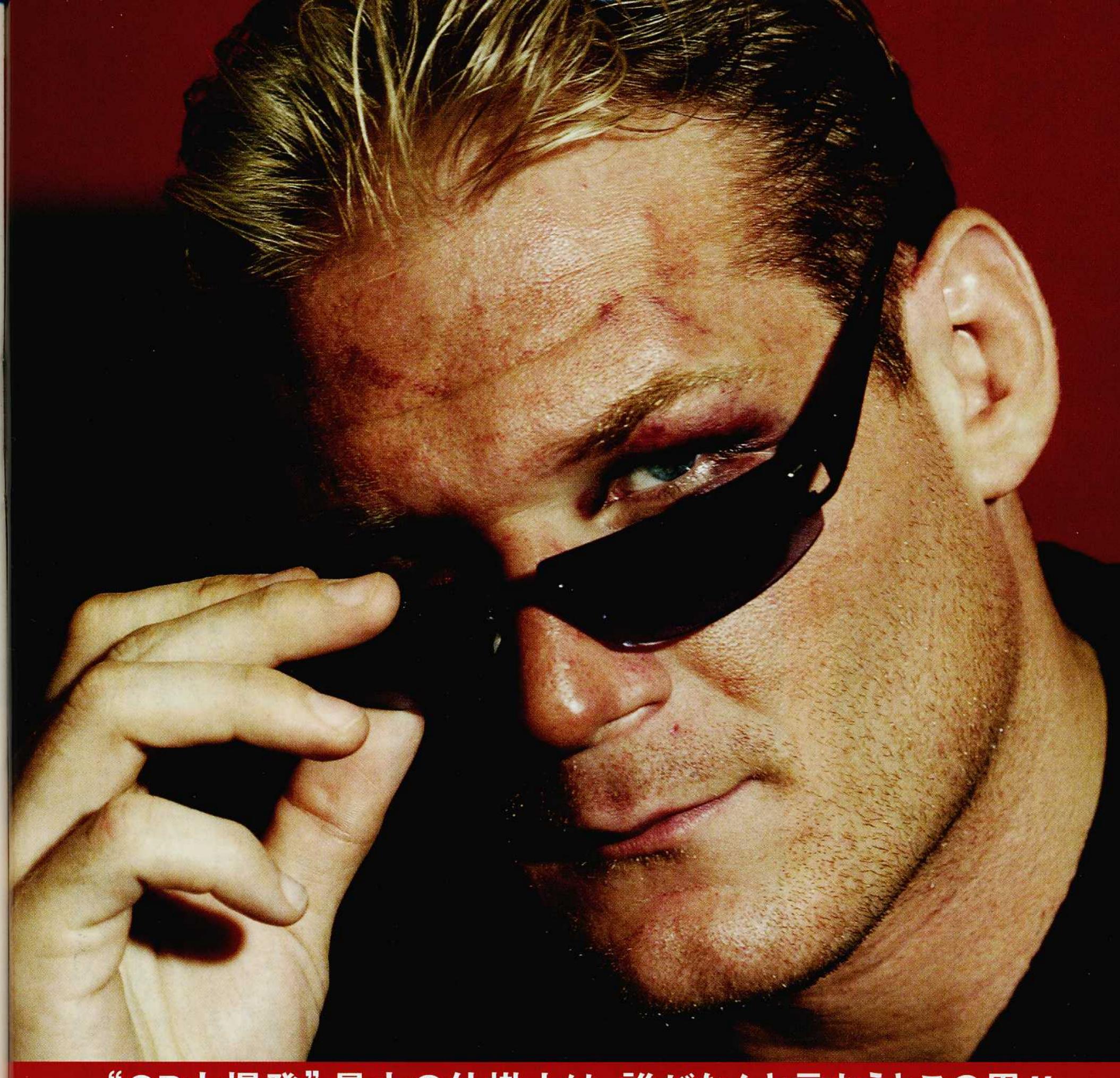
——では、次なる目標の一つに、『PRIDE』とUFCの二冠王というものもありますか？

ミルコ　そうなればいいけど、目標というわけではない。UFCの王座を獲ることより、ヒョードル、ノゲイラ、ハントに借りを返すことのほうが、ずっと大変なことだと思うからね。

——あと最後にもう一つ。マイク・タイソンの『PRIDE』参戦が取りざたされていますが、ミルコ選手はタイソン戦に興味はありますか？

ミルコ　以前から言っているとおり、タイソンが受けてくれるのなら、俺はいつでもOKだ。もちろんボクシングルールでもいい。でも、いまのタイソンじゃボクシングルールでも俺には勝てないよ。試合を受けてくれるかどうかはわからないが、それだけは間違いないことだ。

——わかりました。では、PRIDE無差別級GP初代王者、ミルコ・クロコップの今後の活躍に期待してます！

【06年9月11日／都内・某ホテルにて収録】

“GP大爆発”最大の仕掛人は、誰がなんと言おうとこの男!!

『PRIDE無差別級GP2006』準優勝者

ジョシュ・バーネット

BARNETT

「GPで証明できただろ? ゴッチやロビンソンの“キャッチ”は本当に強いんだ、って!」

聞き手／橋本宗洋　構成／松下ミワ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

大会翌日の会見で、髙田延彦統括本部長はジョシュ・バーネットをこう評した。

「まぎれもなく、この大会のMVP」

まったく異論はない。ただ少し付け加えるなら、ジョシュが「この大会の」MVPではなく、GP全体のMVPだということだ。ヒョードル不在で開催前は盛り上がりに欠けるともいわれた無差別級GPに〝熱〟を呼び込んだのは、シアトルからロスに拠点を移し、〝ジゴクノレンシュウ〟で「100パーセント生まれ変わった」ジョシュにほかならない。

開幕戦で裏優勝候補といわれたエメリヤーエンコ・アレキサンダーを潰し、二回戦では飛ぶ鳥を落とす勢いのマーク・ハントを秒殺。そして準決勝では、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラと格闘技史上に残る名勝負を展開してみせた。ヒョードルは最強の寝技師たるノゲイラの寝技を封じることで勝利したが、ジョシュは真っ向から寝技勝負を挑み、それどころか関節技を極めかけるシーンさえ作って判定勝利。これこそ〝プロレスラー〟ジョシュの面目躍如である。

決勝でミルコに三度目の敗北を喫したとはいえ、ジョシュの評価はまったく落ちることがない。ノゲイラ戦での大ダメージというハンディキャップを抱えながらリングに上がり、凄まじい迫力でワキ腹にミドルキックを叩き込まれ、それでもその足をつかんでテイクダウンを試みたジョシュ。その姿に勝敗を超えた何かを感じなかった者はいないはずだ。この日、ジョシュが見せたのは単なる試合ではなかった。彼は肉体と精神がどこまで苦境を克服できるかというギリギリの臨界点をさらけ出してみせたのだ。だからこそ、我々は心を動かされた。

さらに驚くべきことに、彼は大会翌日の記者会見に出席。本誌のインタビューにも応じてくれた。ジョシュ・バーネット。彼こそは本物のプロフェッショナルである。

――じつは、今回インタビューさせてもらえたことに驚いているんですよ。昨日の試合であれだけダメージを負って、しかも残念ながら負けてしまったわけじゃないですか。そういう状況だったら、翌日の記者会見やインタビューをキャンセルする選手も少なくないですから。

ジョシュ　確かに、今日のボクは顔は腫れてるし疲れてる（笑）。だけど、取材をキャンセルしようとは思わないんだ。プロっていうのは、試合をするだけが仕事じゃないからね。マスコミと一緒にイベントを作り上げていくのも選手にとっては大事なことなんだよ。それに、ファンは試合を終えた選手が何を考えてるのか、どう思ってるのかを知りたいはずだよね。その気持ちはボクもファン出身だからよくわかるんだ。だから、その気持ちに応えるのがプロの責任ってもんだとボクは思うな。

――さすがですね。ではさっそく試合を振り返っていただきたいんですが、試合直後は「なぜかギアが入らなかった」とおっしゃってましたよね。

ジョシュ　そうなんだよ。理由は全然わからないんだけどね。それはボクが感じた今回の最大の課題だね。

――これまでとは練習方法が違ったとか、そういうことはあったんですか？

ジョシュ　練習方法は多少、変えたんだ。ただ、それが今回の試合でギアが入らなかったことにどれだけ影響があるのかはわからない。そういう部分も含めて、今後の課題だってことだよね。まあ一つ言えるのは、このところ試合数が多かったということじゃないかな。何しろ、この一年で7試合もしてるからね。

――去年のミルコ戦から数えて……ん、『PRIDE』では6試合ですよね？

ジョシュ　いやいや、『U-STYLE』でタムラ（田村潔司）とやってるよ。

――……あ！

ジョシュ　あれもハードな試合だったからねぇ。うん、この一年は本当に充実してたし、あっという間だったね。

――昨日の試合に話を戻すと、まず印象

気持ちを高めるのに『愛をとりもどせ！』ほど効果的な曲はほかにないね

［PRIDE無差別級GP決勝戦］

○ミルコ・クロコップvsジョシュ・バーネット×

（1R 7分32秒 KO）

準決勝でノゲイラと死闘を制し、決勝にコマを進めたジョシュ。しかし、それを待っていたのは三度目の闘いとなるミルコだった！　ジョシュは強烈な右ローでミルコを崩しにかかり、ミルコの放つ一発KO級のミドルキックは身体でキャッチしてしまうなど、〝ありえない〟攻防を連発!!　そんなジョシュの勇姿に観衆はすっかり魅了されてしまったのだった。

JOSH B

的だったのがノゲイラ戦で見せたフロント・ネックロックなんですよ。あれは"ゴッチ式"の極め方でしたよね。

ジョシュ　（通訳を待たず）そう、ゴッチスタイル！　柔術家が使うフロントチョークは相手をまっすぐ引きつけて、自分の身体を前屈みにしながら絞めるんだ。でもゴッチ式は相手の首をねじるように極めるんだ。それに腕だけじゃなくワキ、太腿と3点で絞り上げる。手のクラッチの仕方も違うね。こういう、柔術技とは違うバリエーションのサブミッションはほかにもいろいろあるんだよ。マット・ヒュームやビル・ロビンソンから教わったそういう技を『ＰＲＩＤＥ』で見せることができたのは嬉しいね。

――１ラウンドの足関節の攻防も凄かったですよ。まるでヴォルク・ハンvsアンドレイ・コピィロフを見てるみたいで（笑）。

ジョシュ　ホントそのとおりだよ（笑）。最初はアンクルホールドを狙って、それからヒールホールド、アキレスケン（アキレス腱固め）と連携させていったんだけど、ポジションがよくなかったね。

――いま、総合格闘技では寝技イコール柔術というイメージがありますけど、ジョシュさんには"それとは違うものを見せたい"という意識が強いわけですよね。

ジョシュ　そう、キャッチレスリングをね。確かに柔術は広く普及してるけど、決して最強ではないんだっていうことをノゲイラ戦で見せることができたと思う。

――実際、ノゲイラ選手とグラウンドで渡り合って判定勝ちってとんでもなく凄いことですよね。ノゲイラ選手にトップを取られて返すってだけでも信じられないのに、さらに関節を極めかけたっていう。

ジョシュ　実際、グラウンドファイターとしてノゲイラよりボクのほうが優れているってことは見せられたと思うよ。キャッチレスリングの特徴って、常に"極め"を狙いにいくということなんだ。でも、柔術はポジショニング重視だよね。ノゲイラ戦でジャッジがボクを支持したのは、サブミッションを極めかけるシーンが多かったからだと思うんだ。それとボクが勝てたのは、単に技術の違いだけじゃなく、フィジカル面も含めたアスリートとしてのトータルな能力の差もあったんだと思う。

――２ラウンドの最後にもヒザ十字にトライしてましたけど、足関節って基本的にリスキーだと思われてるじゃないですか。あの大舞台で凄い勇気ですよね。

ジョシュ　みんなは足関節をリスキーだっていうんだけど、ボクはそうは思わないんだ。たとえ技をエスケープされても、すぐに次の技に移行すれば危険は回避できる。

――トーナメントの闘いでは、よく"初戦でダメージを負わないことが重要"っていわれますよね。でも無差別級ＧＰのファイナルでは、みんなアグレッシブすぎるくらいにアグレッシブで、４選手の誰一人として"ケガをしないように"とか"手堅く勝とう"っていう姿勢じゃなかったように見えたんですよ。

ジョシュ　それは、あえてそうしたというよりも"そうするしかなかった"というのが正直なところだね。だってあのメンバーだよ？　勝とうと思ったら、最初から全力を出すしかないんだよ。

――厳しい相手ばかりだからこそ、守りに入っていてはいけないんだと。

ジョシュ　そう。付け加えて言うなら、そもそもボクたちはそういうタイプの選手だってことだね。

――ただ、その代償は決して少なくなか

ジョシュのスパーリングトレーナーが真実を語る!!

［青い目のシューター］エリック・パーソン

――今回のジョシュ選手の闘いぶりはいかがでしたか？

パーソン　本当にハードだったね。何しろ一日で二試合、それもタフな相手とばかり闘ったわけだから。決勝では負けてしまったけど、敗因はやはり準決勝で疲れてしまったことだと思う。試合前のコンディション自体は、これまでよりもよかったんだ。ただ、今回はパワーを重視した練習をしてきたので、スタミナに難が出てしまったのかもしれないな。

――実際、普通の選手ならノゲイラ戦でエネルギーを使い果たしてしまっていてもおかしくないですよね。

パーソン　そうだね。それに、ミルコが絶好調だったというのも大きいよ。ミルコの動きや試合ペースがおそろしく速かったから、疲れた状態のジョシュはついていけなかったんだ。今回の試合はトーナメントだから2ラウンド制。当然、普段の3ラウンドの試合より流れも速くなるんだよ。

――ノゲイラ戦を終えたあとのジョシュ選手は、どんな状態だったんですか？

パーソン　とにかく疲れ果てていたね。ヒザ蹴りで目をやられていたし、鼻血も出ていた。それにガードポジションを取ったときにヒザを傷めてもいたんだよ。

――そういう状況で、決勝でもあそこまで頑張ったんだから凄いですよね。

パーソン　私もそう思うよ。ジョシュの精神力には本当に脱帽するね。負けたとはいえ、ジョシュはあの試合を誇っていいし、私もセコンドとしてジョシュのことを誇りに思うよ。

――今年に入ってからのジョシュ選手は、本当に素晴らしい闘いを見せてますよね。本人も「生まれ変わった」って言っているんですが、それはパーソンさんのジムで練習するようになったことも大きいようですね。

パーソン　そう。シアトルからロスに移って、ジョシュは本当に変わったよ。以前の彼はコンディションの作り方がよくなかったし、練習相手にも恵まれてなかったね。シアトルでは、ジョシュの周りはみんな"仲間"だから、切磋琢磨していこうという雰囲気が薄かったんじゃないかな。

――ジョシュ選手を鍛え直すために、最も力を入れたのはどんな部分でしたか？

パーソン　戦略の部分と、あとはとにかくスパーリングをたくさんやることだね。ロスにはいい選手がいっぱいいて、たとえ相手がジョシュだろうと恐れることなくスパーリングを挑んでいけるんだよ。そういう相手と練習することで、ジョシュ自身にも向上心が生まれてくるしね。

――ただ、ジョシュ選手はロスに来た時点ですでに有名人でしたよね。そういう厳しい練習環境に、すぐに入り込めたんですか？

パーソン　それはまったく問題なかったよ。私はこれまでケン・シャムロックやウラジミール・マティシェンコ、フランク・トリッグといった選手のコーチをしてきた。その実績をジョシュも信頼してくれて、素直に指示に従ったんだ。それに、そもそもジョシュは厳しい環境を求めたからこそロスに来たわけだからね。

――今後、ジョシュ選手がさらに成長を果たす余地はありそうですか？　あるとしたら、それはどういった部分なんでしょうか。

パーソン　ジョシュのポテンシャルはこんなもんじゃないよ。私から言わせれば、ジョシュはまだまだ赤ん坊だよ（笑）。

――これだけ強くて、まだ赤ん坊ですか（笑）。

パーソン　とくに打撃に関しては、これからどんどうまくなっていくと思うよ。ベビーフェイス・アサシン（＝童顔の暗殺者。ジョシュのアメリカでのキャッチフレーズ）が本物の男になるのは、これからだよ。

Erik Paulson
1993年6月24日修斗でて公式戦デビュー。その後、1996年5月には同じく修斗で川口健次を下し、第二代ライトヘビー級チャンピオンに君臨。現在は現役を引退し、指導者として活躍。ジョシュのスパーリングトレーナーも務めている。

［PRIDE無差別級GP準決勝］

○ジョシュ・バーネットvs
アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ×
（2R 判定2-1）

完璧に極っているこのチョークを見よ！　ジョシュvsノゲイラは、一方が極めかかると、また一方が切り返し逆に極めかかるという、瞬きもできない、いやっ！　瞬きしてはいけないほど目まぐるしい展開に。“柔術マジシャン”ノゲイラの腕十字をジョシュが凌いだ瞬間なんかは、会場のほぼ全員が涙を流したほどだった!!（というくらい凄かった）。

ボクの人気が爆発した理由？　やっぱりボクがプロレスラーだからだと思うよ

ったと思います。実際のところ、準決勝が終わったあとのダメージはどんなものだったんですか?

ジョシュ　とにかく疲れてたよ。ひたすら疲れてた（苦笑）。

――それでも、決勝では入場のときに『愛をとりもどせ!』を歌いながら入場してきましたよね。あの姿だけでウルッときたファンも多いと思いますよ。

ジョシュ　あのときは身体は疲れてたけど、精神面は最高潮だったね。気持ちを高めるのに『愛をとりもどせ!』ほど効果的な曲はほかにないね（笑）。体力的な面ではボクにハンディがあったと思う。でも入場しながら思ったのは、〝どういう結果が待っていようと、とにかく全力を出し尽くすだけだ〟ってことなんだ。

――ミルコ戦も敗れたとはいえ素晴らしい試合でしたよ。プロレス以上にプロレスらしいエモーションを感じたというか。

ジョシュ　そう感じてもらえたんなら嬉しいな。ボクはプロレスとソウゴウを分けて考えてないからね。

――試合中に起こった〝ジョシュ〟コールも感動的でしたよ。ジョシュさんはこのGPを通じて『PRIDE』での人気が爆発した感じですけど、それってつまりテレビの力を借りないでブレイクしたということですよね。それって最近の格闘技界では本当に異例のことですよ。

ジョシュ　それは、やっぱりボクがプロレスラーだからだと思うよ。プロレスラーは勝つか負けるかだけじゃなくて、自分の感情を試合を通じてファンに伝えないといけない。それができたから、ファンはボクを応援してくれるんだと思う。ただ、できれば会場だけじゃなくテレビでもボクの試合、『PRIDE』を楽しんでほしいとは思うけどね。今回の試合は本当に素晴らしかったと思うから、テレビアサヒもその価値に気付いてくれるといいんだけどね。

――え、テレビ朝日ですか!?

ジョシュ　あ、間違えた。フジテレビだね（笑）。テレビアサヒはシンニホンだった（笑）。今回の大会は、本当にたくさんの人に見てほしかったよ。放送されていたら大反響があったと思う。そういう意味では、フジテレビは損をしたんじゃないかな。

――次は10月にラスベガス大会がありますが、出場はできそうですか?

ジョシュ　ダイジョウブ。ラスベガスの大会には必ず出て、今度こそノーザンライトボムを決めたいね（笑）。

――一夜明け会見では「『PRIDE』という世界最高峰の闘いをライブで観るというのがどういうことなのか、アメリカのファンにも味わってもらいたい」とおっしゃってましたね。

ジョシュ　テレビで観ても充分にエキサイティングなんだけど、会場の熱やパワーを実際に感じるって経験には格別なものがあるからね。まして『PRIDE』となればなおさらだよ。昨日、さいたまスーパーアリーナに来た人が感じたような想いを、アメリカのファンにも感じてほしいね。それをやるのが、これからのボクの大事な責任だと思う。

【06年9月11日／都内某ホテルにて収録】

Josh Barnett
1977年11月10日、アメリカ・ワシントン州出身。第7代UFCヘビー級王者、現・第10代キング・オブ・パンクラシスト無差別級王者という実績を積み、この度、ついに無差別級GP準優勝という栄光を獲得！　191cm、116.0kg。

名解説者にしてGP開幕戦出場の

髙阪剛が見た『PRIDE無差別級GP決勝戦』

激闘に次ぐ激闘で空前絶後の盛り上がりを見せた『PRIDE無差別級GP決勝戦』。開幕戦でマーク・ハントと壮絶な殴り合いを繰り広げるも敗退すると即引退を表明。現在は解説席で高田本部長と絶妙な掛け合いを展開している"世界のTK"髙阪剛に見事優勝を決めたミルコ・クロコップ、そして10年来の友人であるジョシュ・バーネットを中心に今年のGPを大会直後の控室で振り返ってもらった。

構成／松澤チョロ　撮影／乾晋也、平専英

――『PRIDE無差別級GP決勝戦』はミルコ優勝という結果に終わったわけですが、PPV中継の解説を務めた髙阪さんに総括していただければと思っております。

髙阪　いや～、もう今日はミルコ（・クロコップ）に尽きるでしょ。

――たしかに、シウバ、ジョシュという強豪二人を完璧に下しての優勝ですから、文句のつけようがないですね。

髙阪　ミルコのためにあったような大会っていうかね。よくもまあ、あそこまでモチベーションも含めて準備をしてきたなっていうのが正直なところですね。

――体調からモチベーションからバッチリでしたよね。

髙阪　試合に向けての調整とかトレーニングっていうのは、ホントに針の穴に糸を通すようなもんで、うまくいけばスパッとはまるんですけど、ちょっとでも気持ちのバランス、身体のバランスが崩れると、いくらやっても糸が通らないんですよね。

――ミルコ選手っていうのは、モチベーションや体調が、かなり試合に影響するタイプだと思うんですが。

髙阪　そういうのもあるからこそ、今回は試合に向けて、しっかり調整したかったんだと思うんですよ。それが、ビターッて完璧に合わせてきたっていうのが、ホントたいしたもんだなと思いますね。

――優勝したミルコ選手はもちろんですけど、今回の無差別級GPのもう一人の主役といえば、髙阪さんも古くから知っているジョシュ・バーネットでしたよね。

髙阪　あそこまでいったら優勝してもらいたかったですけどね。でも、ノゲイラ相手に、あそこまでカウンター、カウンターでいけたのは、さすがだと思いましたね。

――カウンターっていうのはグラウンドのカウンターってことですか?

髙阪　まあ、立ち技も含めてですけど。ジョシュvsノゲイラ戦っていうのは、総合格闘技っていう枠の中で、自分のできることできないことっていうのを分別した上での二人の闘いっていうのが観客にわかりやすく伝わった試合だったんじゃないかと思いますね。

――会場での観客のリアクションを観ると、ジョシュvsノゲイラは最初から最後まで、ずっと沸きっぱなしでしたからね。

髙阪　やってる人間には、もちろん二人の凄さはよくわかるんですけど、今日の試合を観たら一見さんでも「総合っておもしろい」って思うんじゃないですか。ジョシュvsノゲイラの前の試合のヴァンダレイとミルコの試合っていうのは、言ってみれば総合でも打撃戦って感じの試合だったんで、その二試合を観たら、わかりやすく総合でのグラップリングと総合での打撃戦の良さが伝わったと思いますね。

――どちらの試合も間違いなく世界最高峰といえるでしょうね。

髙阪　そういう意味では、決勝戦ももちろん素晴らしかったんですけ

ホント、ミルコのためにあったような大会でしたね。よくもまぁ、あそこまで準備してきたな、と

強豪二人を立て続けに下し、なおかつ32歳の誕生日という、ミルコにとっては、これ以上ない一日に。最後にマイクを取った髙田本部長は「今日出てくれたすべてのファイターにありがとうございましたっ！ そして、ここに集まってくれたすべてのファンにありがとうございましたっ!!」と深々と頭を下げた。みんな男だ!!

ジョシュが本来の力を出せたらノゲイラから一本勝ちできてたと思う

ど、あの準決勝の二試合だけでも、モノ凄く価値がある試合だったと思ってますけどね。

――髙田本部長も、今回の無差別級GPで準決勝に上がった4選手は、MMAの世界での最高峰ではなく、すべてのアスリートの中の世界最高峰と言ってましたけど、今日の試合を観て、あらためてそう感じましたね。

髙阪　そう言ってもおかしくないと思いますよ。自分はプレイヤーとしての目で見ても、ミルコ、ジョシュ、ノゲイラ、ヴァンダレイの4人と同じぐらいの技術であったりとか、体力を持った選手っていうのは、広くいると思うんですよ。ただ、試合もそうだし、とくに今回みたいにトーナメントっていうのは一発勝負が長く続くっていう凄く特殊なもんですからね。

――たしかに、優勝するためには一発勝負を続けなきゃいけないわけですからね。

髙阪　それに向けて、その一発にすべて照準を合わせきったっていうのが凄いと思うんですよ。4人が全部そうやってやってきたわけですからね。まあ、中でもやっぱりミルコはちょっと飛び抜けてたけど、とにかく濃いトーナメントだったたっていうか（笑）、凄い準決勝、決勝だったと思いますよ。

――ホント、その3試合は濃い試合でしたね。

髙阪　自分、正直言って、いままで観たことないッスね。

――それは、どういう意味ですか？

髙阪　いや、プロの大会で、ここまで濃いトーナメントっていうのは。あのメンバーで、準決勝、決勝って、中身から何からやり切ったたっていうのは記憶にないですね。

――ワンマッチではブーイングが起こるような試合もありましたけど、無差別級GPの3試合は一試合もハズレはなかったですからね。

以前からジョシュの寝技について「ノゲイラ以上」「極めの強さは半端じゃない」と語っていたTK。それを実証するかのようにスタンドでのチョーク、アキレス腱固め、ヒザ十字と攻め立てたジョシュだったが極めまでには至らず。次に期待だ！

髙阪　4選手とも、一瞬も気持ちが途切れなかったし、いいもん観せてもらったなと思いますね。凄い励みにもなりましたし。

――髙阪さんも今回の無差別級グランプリにエントリーされていたわけですけど、優勝者が決まったっていうのは、複雑な思いもあったりするわけですか？

髙阪　いや、とくにそれはないッスよ。ただ、今回のグランプリっていうのは、同じ志を持った者だけが集まって、ミルコが獲ったベルトに向かってやってきたわけですから。自分としては、今回出場したメンバーに対しては、仲間っていうつながりを感じますけどね。

――優勝したミルコは誰が見ても素晴らしかったと思うんですけど、髙阪さんが以前から「ジョシュの寝技はノゲイラ以上」って言っていたのが、ある意味、証明されたんじゃないかと思うんですよ。

髙阪　そうかもしれないですね。

――髙阪さん的には、ジョシュならノゲイラ相手に、あれぐらいやれて当然だっていう部分は肌を合わせて感じていたわけですか？

髙阪　そうですね。ただね、もうちょっと、やってほしかったたっていうか、やれたはずだっていうのは正直ありますね。

――具体的にはどういう部分ですか？

髙阪　いわゆる詰めのところなんですけどね。最後の最後でヒザ十字を取ったんですけど、ジョシュは動きのうまさとか、技を仕掛けるうまさの他に、極めの強さっていうのが凄くあるんですよ。そこをしっかり出してほしかったなぁっていうのはありますね。そしたら、ノゲイラからも一本勝ちできたと思うんでね。

――ジョシュ本人もヒザ十字とスタンドでのチョークで極められなかったことを悔やんでましたね。

髙阪　そうでしょうね。ノゲイラから一本取れるだけの力は持ってますし、常に一本勝ちかKOを狙ってますから。勝ちとはいえ、判定でっていうのは悔やんでるでしょうね。ただね、今日の状態のノゲイラにあそこまでやって競り勝つっていうのは、それだけでも尋常じゃないと思いますけど（笑）。

――たしかに（笑）。しかも、そのあとにミルコが待ってるわけですからね。そんな過酷なトーナメントはないですよね？

髙阪　もう、これからもないんじゃないですか（笑）。自分も長いこと、いろんなトーナメントを観たり、実際に自分もやってきてますけど、こんなトーナメントは観たことなかったなぁ……（しみじみと）。

――裏MVPというか、ミルコに敗れたシウバも、敗れはしましたが凄い試合を見せてくれましたし、評価は全然下がってないですからね。

髙阪　ハッキリ言って、ヴァンダレイは最初のフックでミルコに全部握られてるんですよね。ああいうパンチを自分も食らったことあるからわかるけど、たぶん1秒にも満たない0・5、いや0・2秒ぐらい一瞬意識が飛んでるはずなんですよ。そこから、「うわっ」って後に下がらないで前に出ていくっていう繰り返しでしたからね。ミドルもらっても、あんなミドルもらったら呼吸ができなくなるんですけど、たぶんヴァンダレイは呼吸もしないで前に出て行ったと思うんですよ（笑）。

――そんな感じでしたよね（笑）。

普通だったら、あんなミドルを食らったら、ごまかしてタックルに行ったりするもんですけど、シウバは逆にガンガン前に出て行くんで、ホントにプロだなって思いましたね。

髙阪　ですよね。そういうことをヴァンダレイは、たまたま〝できた〟んじゃなくて〝やれる〟んですよね。でも、ヴァンダレイに限らず、準決勝に出た4人は今日で燃え尽きてもおかしくないッスよ！（笑）。

――4人とも真っ白な灰になっちゃいますか（笑）。

髙阪　少なくとも一カ月は休みをあげたいですね。あの4人はどっかでボーッとしてたほうがいいッスよ、絶対（笑）。

――そうですね。ケガの具合は心配ですけど、榊原代表によるとミルコやジョシュは10月のラスベガス大会の出場の可能性もあるみたいなんで、一カ月休むのは無理かもしれません（笑）。

髙阪　それはしんどいなぁ（苦笑）。まあでも、今日はホントに、いいもん観せてもらって、あの4人には感謝したいですね。

【9月10日／ミルコ優勝決定から30分後、TKの控室にて収録】

これだけ素晴らしい試合やってれば、『PRIDE』の大勢に問題なし!!

——獏さん！　昨日はやっぱり、ご自宅の小田原からさいたまスーパーアリーナに駆けつけられたわけですよね。

獏　そりゃあ、もちろん駆けつけましたよぉ〜！

——そりゃそうですよね。愚問でした（笑）。

獏　しかし、昨日は本当にあっぱれな大会だったねえ……（腹の底から唸るように）。

——とくにGPの3試合はどれも年間ベストバウト級の名勝負でしたからね。

獏　そうだねえ〜。フフフフフフフフフ。

——笑いが止まらないぐらい（笑）。

獏　もう、どの試合から話せばいいのかなぁ。フフフフフ……。

——と、とりあえず試合の感想をお願いします（笑）。

獏　というより今回は誰を応援していいかわからなくて、本当に困っちゃったねえ。ミルコにシウバ、ノゲイラにジョシュでしょう？　この4人なんて、俺の中では本当に横一線。誰が勝ってもいい、誰にも負けてほしくない！　そういう複雑な心境だったからねえ……。

——ほとんどのファンがそういう心境だったと思いますね。

獏　まずミルコとシウバ！　あの試合はもちろん素晴らしかったしねえ〜。たださ、俺はいくら無差別級といってもシウバにはクラスの問題が大きかったと思いますよ。

——普段、闘い慣れないヘビー級との体格差が不利に働いた部分がありましたか。

獏　そうだね。あとはミルコの調子がよすぎた！　でも一番、興味深かったのは、シウバのドクターチェックがやけに長引いていたでしょ。待ってるミルコが急速にイライラし始めたじゃない？　あの苛立ってるミルコにはゾクゾクしたねえ！

——あの場面は、ドクターに対して試合延長を要求するシウバの「PRIDEのためなら死ねる」覚悟も見え隠れしましたよね

獏　あきらかに「やらせてくれ！」って言ってたよね。ポルトガル語だから、詳しくはわからないけど（笑）。退かないシウバも偉いよねえ……。偉いといえば、ジョシュは今回、キャッチ・レスリングを全面に押し出して試合したわけじゃない？　カール・ゴッチが聞いたら涙を流して喜びそうなセリフを言ってさ。俺も小説を書いてて、柔術にUWFみたいな技術が通用するか？　って興味はず〜っとあったけど、ジョシュは柔術の方程式にとり込まれない、いままでは考えられない逃げ方をしてたじゃない？

——あげくには、ゴッチ式のフロント・ネックロックや変形のヒザ十字まで仕掛けて（笑）。

獏　そうそう。あそこに新しい柔術攻略法が見えたよなぁ。

——そして、メインのミルコvsジョシュはジョシュへの期待感が凄まじかったですよね。

獏　もうミルコがかわいそうなくらい、ジョシュへのコールが凄かったし、GPの立役者は完全にジョシュだったねえ。でも俺はどっちも応援できないから、どっちかピンチになったらピンチになったほうを「逃げろ！」って応援してたんだよ。もうハラハラして忙しかったよ。

——それはお疲れさまです。

獏　あと気になったのは、試合開始前の立ち会いでジョシュは、ミルコになんか言ってなかった？

——どうやら「まつげが目の中に入ってるから、取ったほうがいいよ」って教えてあげたみたいですね。

獏　……あそこはいい場面だったねえ。あそこで一瞬だけ笑ったミルコもよかったし、本当に美しいシーンだったよ。あの笑顔はジョシュが相手だったからこそ、出たんだろうねえ（しみじみと）。

——そして、笑ったミルコが最後は涙をこぼしましたけども。

獏　う〜ん。ただ、あそこで泣くのは政治家としては失格なんだよね。

——失格ですか！

獏　政治家って人前では涙をこぼしちゃいけないんですよ！　本心や野心を隠さなきゃいけないわけだから。

——政治家に涙は厳禁ですか！

獏　だけど、まあ……ミルコだから俺が許そう！（笑）。

——結局、許しますか！（笑）。しかし、本当にこれが地上波で観られないのは、もったいないですよねえ。

獏　そうだなあ……。でもさ、これだけ素晴らしい試合やっていれば大勢に問題なしでしょう。ここまで盛り上がったら、大晦日にはテレビもやるんじゃないの？

——地上波放送が復活するんじゃないかと？

獏　どうかは知らないけど、やってほしいよねえ。フジテレビはもう放送しないのかなぁ。さっさとやりゃあいいと思うけど……。ただ、何度も言うけど、テレビでやろうがやるまいが、俺はなんだって観に行くからいいんだよ！

——そこは揺るぎない獏さんのスタイルですよね。でも、次回大会はアメリカ・ラスベガス大会ですから、ちょっと難しいんじゃ……。

獏　（さえぎって）行くよ、ラスベガス！　すでに航空チケットとかホテルの手配も済んでるからねえ〜。

——ダハハハハ！　おみそれいたしました（笑）。

獏　俺はUFCやアブダビにも行ったけど、こういうのはやっぱり現地で目撃しないとダメなんだよねえ。タイソンも来るみたいだしさ、こんなにロマンを感じることってないでしょう。

——タイソン絡みでいえば、『PRIDE』の中国進出の噂もあるんですよね。

獏　おお！　俺は中国までも行きますよ〜!!

【06年9月11日／電話インタビューにて収録】

ゆめまくら・ばく■1951年神奈川県小田原市生まれ。小説家。77年のデビュー以来『キマイラ吼』『陰陽師』シリーズなど話題作を続々と発表。また格闘技をテーマにした『餓狼伝』を20年にわたり、執筆するなどその格闘技への造詣は広く深い。99年、ヒマラヤ登山を扱った『神々の山嶺』で第11回柴田錬三郎賞受賞。ほか代表作に『陰陽師』など。

夢枕獏、菊地成孔 二人の論客が語る PRIDE無差別級

夢枕獏

PRIDE無差別級GP決勝戦

9・10『PRIDE無差別級GP決勝戦』を会場で観戦した二人の論客がこの大会を検証。
『PRIDE』の巨大なクライマックスを体感した両者は、いったい何を考え、そして何を語ったのか？

構成／真下義之

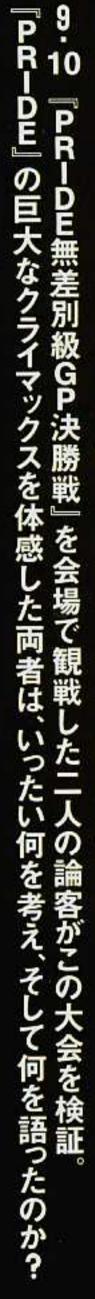
菊地成孔

帝国の傾斜化と誇大妄想の中、誕生日に初優勝したミルコ

もし、あのままフジテレビが撤退していなかったら。DSE帝国の繁栄にわずかの傾きもなく、すべてがあのままだったら、今日の大会はどうなっていただろうか？

PPV観戦でさえ、掴みきれないだろう変化がパンフレットなどに溢れていた。だいぶ小さくなってしまった巨大ビジョンは、グラビアアイドルのエロDVDのCMを何度もリピートしている。

「試合内容以外は」としよう。「フジのゴールデンタイム感」から一転し「テレ東の深夜枠感」に「先端スポーツ文化の帝国感」から一転し「老舗プロレス団体の黄昏感」に変わったPRIDEの会場で、多くの者が何を感じたのだろうか？　先号の優勝予想で私は「この団体を救うのは自分たちだ」というファン心理が会場を多数派を埋めるのではないかと予想したが、会場に入った瞬間、それが半分は外れていることがわかった。

「自分たちがなんとかしないとダメになってしまう」と思わせるほどにはDSEは瀕死に見えないし、「PRIDEがなくなってしまったら自分は終わりだ」というほどには観客は瀕死に見えなかった。横浜の大学生による「PRIDEフラッグ」なるもの、吉田道場の選手による「PRIDE愛」なるものが、冷えきった道ばたのカップ麺ほどの扱いを観客から受けたことがそれを証明していた。そしてそのことは、なかなかタフで素晴らしいことだ。

古来、巨大帝国という存在は、傾斜の予感に対して「潔く死ぬ」という選択などしたことがなく、発狂しようが変わり果てようが生き延びようとし、古来、観客という存在は「純愛に殉じた」ことなど一度もなく、自分勝手で、もしも愛する対象などがみつかったら、その死を見物して破滅の感傷に浸ろうとする。それが健全である。

会場を覆っていたムードは「これからどうなるんだろうな。自分は関係ないけど、とにかく楽しもう。あ、シウバだ！　うおー！　シウバー!!」といった、現代的かつ一般的なもので、つまらなくなったり寒くなったりしたら、いつでも逃げる準備は万端なのである。

そうした人々を中心に4万人以上が集まっているように見えた。厳密に言えば「人々はみなそうした」のである。

この日の主役は圧倒的にミルコ・クロコップである。ふたたび先号の予想で私は「ミルコのモチベーションの質は受動的／鬱的」としたが、これは予想屋としてはとんでもない見落としと言える。誕生日だったのである。

「ガキじゃあるまいし。誕生日で張り切るかよ」などと言うなかれ。万能感と自己愛の増殖に自分でも歯止めの利かないミルコにとって「誕生日など小さなことだ」とクールにしている。というあたりまえのことは苦行に近いはずだ。

加えて、政治家や映画スターとしての顔も持つ、このクロアチアの英雄が、帝国の斜について鈍感でいられるわけがない。帝国はラスベガスだのタイソンだの中国だの、まるでUWFインターの様に誇大妄想めいたことを言い出す中、自分は三度目の正直の初優勝なるか？　しかも今日は誕生日だ。見ないようにしないといけないことが山ほどある。そしてそれこそが自分の得意技だ。抑圧と自己愛によってモチベーションが上がり、モチベーションが上がりすぎたときに起こす「不機嫌」の発作がミルコを支配した。入場式で見せた久しぶりの「凄まじい不機嫌さ」を観て、私は圧倒された。

冷静な批評家の側面も持つノゲイラに「彼は自分だけの独善的なストーリテリングに熱中しすぎる」と見事に斬って取られたバーネットの言う、「キャッチ・アズ・キャッチ・キャン」の奥義を始めとする、あらゆる奥義は、ノゲイラの言う通り独善的なもので、つまりは外在化せず、ほとんど誰も見ることはなかった。しかし、それでも勝利は転がり込む。自己愛と独善性が勝利したトーナメントのピークは、決勝のレフェリー・チェック時に見せた「バーネットがミルコの（互いの）顔の傷を気遣う」図である。このシーンはフィニッシュへの鮮やかな伏線になっていた。

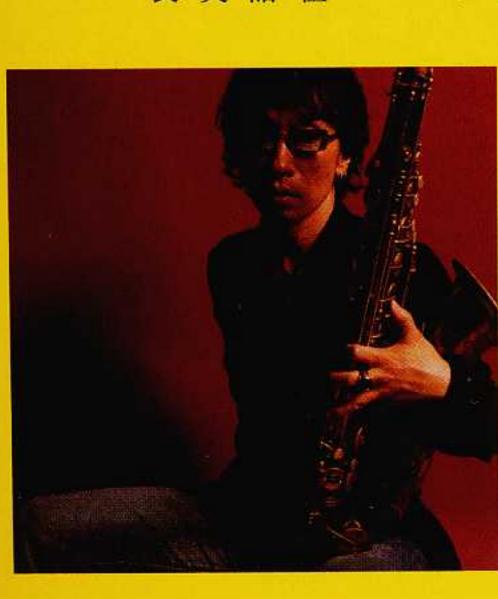
お得意の「崩落するような、感極まった泣き顔」を見せたあと、「英語では上手く伝えられないので」と英語で言ってから、ミルコはかなり長い優勝スピーチをクロアチア語で行ない、会場がどれだけ静まり返っても意に介せず、それは続けられ、最後に英語に戻ると「今日は私にとって最高の日だ。世界中の私のファンにお礼が言いたい」といった、一転して誰でも聴き取れる短いメッセージを添えた。そして、固唾をのんで翻訳を待っていた我々には、何故か最後の部分しか訳されなかった。

ナチュラルアングルとはこういうことだろう。私は勝手にそれを「もう来年にはDSEはないかも知れない。私にとっては、今夜がラストチャンスだったかもしれないのです」。もしくは「この、世界で最高の舞台で、とうとう優勝することが出来ました。年末はヒョードルと闘います。そして私が世界一だということをみなさんに証明してみせます」と言ったのだと思い込むことにした。

きくち・なるよし■1963年生まれ。音楽家／文筆家。先鋭的ジャズ・ミュージシャン活動の一方、膨大な知識を駆使した異形の批評家として音楽、映画、料理、ファッション等の著作多数。昨年、格闘技批評「サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍～僕は生まれてから5年間だけ格闘技を見なかった～」（白夜書房）出版。東京大学、国立音楽大学非常勤講師（音楽理論史）。

〜を使いこなせ!!

無差別級GP大炎上! されど〝闘いの大博打〟はまだまだ続く——丁か、半か? ドボンか、DーBORNか!?

大注目だった9月10日のジャッジメント・デイは、選ばれし者4名のサバイバルゲームの末——本当に悔しいが、マット界は大惨敗してしまった。大、大、大、大失敗! だって、ほかの立候補者3名がいずれも投票数6000オーバーしたのに、マット界代表の猪木快守氏は、たったの771票ぽっちでドボン!!

……以上、PRIDEファンは誰も見向きもしない熱海市長選結果報告を、意味ありげに大会総括原稿の冒頭で使うという、この余裕ときたらどうだ。いやもう『PRIDE無差別級GP決勝戦』のGP3試合は、鳥肌立ちまくりの最高のデキだった。放っておいてもいろんな人がほめるだろうから、ここではあえて〝猪木快守バンザイなしよ〟原稿を書き殴りたいぐらい、口出しするのは野暮なハイクオリティ。こうして今年の5月からスタートした無差別級GPは、『PRIDE』の底力を最大限に発揮して幕を閉じたわけだが、人は追い込まれたときこそ、〝火事場のクソ力〟と言うべき、怒濤の展開をダイナミックに見せつけてくれる。

『週刊現代』問題、桜庭和志の電撃離脱、まさかのフジテレビ・ショック。逆風吹き荒れ絶体絶命の窮地に追い込まれたDSEが放った起死回生の豪速球は、ヴァンダレイをオクタゴンに電撃登場させたことに始まり、〝あの〟マイク・タイソンを担ぎ出し、全米本格進出。そこで生じるUFCとのシュートなつばぜり合い、などなど大振りも大振りの大仕掛け。ファイティング・オペラに目を向ければ、タマアゴからザ・エスペランサーなる最強怪人が産み落とされた。

立て続けにDSEが札を張る〝闘いの大博打〟——。その鉄火場を我々はただただ傍観して熱狂するしか手だてはなく、はたしてどういう目が転がり止まるかは、神の

——混乱、危機は“気づき”のきっかけである

いまこそ不安定を

PRIDE無差別級GP総括

文／ジャン斉藤　撮影／山口比佐夫

みぞ知る領域。一つだけわかったことは、興行の本質とも言うべき、混乱や不安定さをエネルギーに変えていくという断じて正しい姿勢が浮き彫りになったことだ。

そういえば、その昔、あるエライ人に連れられて、高名な古武術家から〝不安定の使いこなし〟というお話をうかがったことがある。たいそう難しいお話は、ほぼ左耳から入って右耳へ出ていったが、とりあえず勝手に以下のような解釈している。間違っていても、んなこと知るかっ‼（アフロを被って場違いな自虐ボケ）。

——安定を求め、両足でしっかりと大地を踏みしめると、一方の足をすくわれたときにバランスを崩しやすい。逆に不安定な姿勢に身を置くことによって、安定しているときには使えなかった身のこなし方やさばき方に気づくという——。

思いもよらない混乱、危機、不安定な状況に陥った『PRIDE』は、いったい何に気づいたのか。興行におけるダイナミズムの源、『PRIDE』の本領である〝挑戦し続けるロマン〟に拍車が掛かったという意見もあれば、いや、その動きを単なる〝暴走〟と呼ぶ声もある。

ただ、安定にドップリ浸かってしまうということは、極端に言えば、変化を試みようとせず、それで〝終わり〟なのだ。安定しているがゆえに、本当に変わってはいけないもの、変えてはいけないものに、気づかない恐れもある。

不安定を使いこなそうとする『PRIDE』は、やがてバランスが保てずにドボンするのか、それとも待望の〝ドBORN〟を果たして新たな世界観を築くのか。GPは終幕したばかりだが、タイトでヒリヒリする極上の物語の再開幕は、もう間近に迫っている。

PLAYBACK
【開催発表～開幕戦】

1月15日
▶無差別級GP開催概要を発表

2月26日
▶『PRIDE.31』開催
▶ヴァンダレイとコールマンがリング上で乱闘に
▶ハリトーノフがアリスターにTKO負け

4月2日
▶『PRIDE武士道—其の拾—』開催

4月5日
▶榊原代表、正式にヒョードルの一回戦欠場を発表

4月13日
▶藤田の無差別級GP参戦が決定
▶榊原代表が『週刊現代』に対し「訴えます」

4月29日
▶桜庭和志が高田道場を退団しフリーに

5月3日
▶**桜庭和志が『HERO'S』のリングに登場——①**

5月5日
▶『PRIDE無差別級GP開幕戦』開催
▶高阪剛がマーク・ハント戦をもって引退
▶榊原代表が桜庭離脱の心境を語る「桜庭は家族だと思っていました」

○ミルコ・クロコップ vs 吉田秀彦×
(1R 7分38秒 TKO セコンドタオル投入)

一回戦で西島に何もさせなかった吉田が、自ら希望してミルコとの対戦を実現。だが、ハイキックを見せるなどの場面もあったものの、ミルコが繰り出してきた右中心の攻撃に戸惑う中、右ローキックを集中され、ついにダウン。ミルコ強し！ を印象づけた。

○ヴァンダレイ・シウバ vs 藤田和之×
(1R 9分21秒 TKO セコンドタオル投入)

当初予定されたヒョードルが結局欠場となり、急きょ出場を決めたミドル級王者・シウバ。"怪物対決"は期待通り超ド級の攻防となり、終始攻め込みまくったシウバは藤田の人間離れした打たれ強さもものともせず。寝技でも藤田の腕を破壊するオマケまでつけて激勝！ とんでもない試合だった！

○ミルコ・クロコップ vs 美濃輪育久×
(1R 1分10秒 KO)

ある意味、今回のGPの"隠し玉"的な存在だった美濃輪。5年越しの対戦希望を実現させたが、ミルコのパンチの前に防戦一方。起死回生のニールキックも不発で、パウンド地獄に陥り、KO負け。ミルコの強さばかりが光った試合だった。

○吉田秀彦 vs 西島洋介×
(1R 2分33秒 三角絞め)

開幕戦のメインを飾った"柔道vsボクシング"の日本人対決。だが期待された西島のパンチはほとんど見られず、早々と組みついた吉田がテイクダウンすると三角絞めへ。総合経験の差があまりにもわかりやすく出た一戦となってしまった。

○藤田和之 vs ジェームス・トンプソン×
(1R 8分25秒 KO)

PRIDEファンの誰もが待っていた、あの男が帰ってきた！ 猪木事務所を離れて参戦した藤田は、"ゴング＆ダッシュ"もせず勝ちにきたトンプソンの猛攻に「危ない！」と思わせながらも、驚異的な逆転劇を見せ、右フックでKO。すげえ！

右手親指付け根の手術のため開幕戦は欠場となったヒョードル。二回戦からのシード参戦が予定されていたが、回復が長引き、エントリーは見送り。代わりに、急きょオファーを受けたシウバが「『PRIDE』のために」と緊急参戦を決めた。

2006完全プレイバック

文／須羽ミツ夫　構成／松下ミワ　試合写真／乾晋也

本来、男と男が闘うのに体重なんか関係ない。合図と同時に殴り合い、蹴り合い、極め合うのに、何キロ以上とか以下とか、言ってられない。それが無差別級であり、すべての闘いの原点であるはずだ。「無差別級」の名のもとでは初めて開催された今年のGPは、それを改めて確かめるようなトーナメントになった。

「無差別らしい闘い」を今回、一番多く体験したのは、やはり優勝したミルコ・クロコップだろう。一回戦がウェルター級（というか、この人こそ「無差別級」か）の美濃輪育久、二回戦がミドル級（～ヘビー級）の吉田秀彦、そして準決勝がミドル級王者のヴァンダレイ・シウバ。純粋にヘビー級の選手は、決勝のジョシュ・バーネットが最初、という流れとなった。

だからといって、ミルコが楽に勝ち進んできたなどとは誰も思わないだろう。一番軽い美濃輪にしても、何をしてくるかわからない選手。結果的に短時間で終わったものの、ミルコ自身に油断という二文字はまったくなかった。その後の吉田もシウバも、一瞬も気の抜けない一戦に。その中で、美濃輪にはパウンド、吉田には右ロー、シウバには左ハイとまったく違う技で勝ち進んだのだから、見事と言うしかない。

そして決勝も、優勝候補の呼び声高かったジョシュ・バーネットにKO勝ち。じつは『PRIDE』始まって以来、トーナメントを判定なしで勝ち抜いて優勝したのは、全階級を通じてミルコが初めてである。圧倒的に勝ち進んだ印象のある03年ミドル級のシウバ、05年同級のマウリシオ・ショーグンですら成し遂げていないこの事実を見るだけでも、今回のミルコの凄さがわかろうというもの。世界中からこれだけのメンバーが集まってのトーナメントを勝ち抜くにはあらゆる能力が要求されるが、ミルコは優勝しておつりが来るほどの完璧さを見せつけた。

準決勝に終わったジョシュはエメリヤーエンコ・アレキサンダー、マーク・ハントを相次いでサブミッションで撃破。とくに二回戦では見事なシェイプアップに成功、ミルコへの連敗でいま一つ上がっていなかった『PRIDE』で

ANTONIO RODRIGO NOGUEIRA

○アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ vs ファブリシオ・ヴェウドゥム×
(3R終了 判定 3-0)

"柔術ではノゲイラ以上の実績の持ち主" と紹介されて参戦したヴェウドゥムが、ついにそのノゲイラと対峙。しかし、両者の差をつけたのはスタンドのパンチ技術だった。右フックでダウン気味に倒し、グラウンドでもギロチンにとるなど圧倒。二回戦唯一のフルタイム戦も、文句なしの判定勝利。

PLAYBACK
【開幕戦後～二回戦】

5月6日
▶榊原代表がPRIDEアメリカ大会の詳細を発表

5月18日
▶無差別級GP二回戦について、ヒョードル欠場とヴァンダレイの参戦が発表される

5月19日
▶クイントン・"ランペイジ"・ジャクソンがWFAに移籍発表

6月4日
▶『PRIDE武士道 ウェルター級GP開幕戦』開催

6月5日
▶**フジテレビ、PRIDEの放送打ち切りを発表**——②

6月7日
▶DSE、フジテレビ問題について公開記者会見を敢行

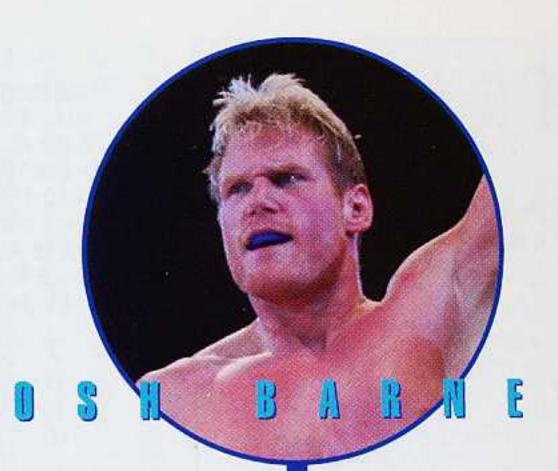
6月12日
▶高田延彦、『ゲーテ』誌上で桜庭和志について言及

6月15日
▶中尾さんがPRIDE参戦を発表

7月1日
▶『PRIDE無差別級GP二回戦』開催

▶PRIDEのマット広告になぜか『kamipro』のロゴ

▶中村和裕の入場前にドンペンくんが登場

JOSH BARNETT

○ジョシュ・バーネット vs マーク・ハント×
(1R 2分02秒 羽根折固め)

潔く引退したTKの敵討ちに挑んだジョシュは、二ヵ月前よりもさらにシェイプアップして来日。割れた腹筋が話題を呼んだ。試合もハントの打撃を確実に封じ、あっさりテイクダウンに持ち込むと理想的な流れで一本勝ち。スキのない勝ちっぷりに、髙田本部長も巷の「ジョシュ優勝説」を支持!

○アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ vs ズール×
(1R 2分17秒 腕ひしぎ十字固め)

なかなか対戦相手の決まらなかったノゲイラだが、最終的に70キロ重いズールとの "逆無差別" マッチに。だが両者の実力差はいかんともしがたく、ノゲイラが余裕でテクニックを披露し腕十字で勝利。ケガもなく万全の状態で二回戦に進出した。

○ファブリシオ・ヴェウドゥム vs アリスター・オーフレイム×
(2R 3分43秒 腕固め)

勢いに乗ってGP出場権を掴んだアリスターが旋風を巻き起こすかのような攻めを見せたが、ヴェウドゥムに凌がれるとスタミナ切れを起こし、失速。その勝機を見逃すヴェウドゥムではなく、しっかりとサブミッションでの一本勝ちを決めた。

○ジョシュ・バーネット vs エメリヤーエンコ・アレキサンダー×
(2R 1分57秒 V1アームロック)

ジョシュがついに、その力と才能をPRIDEマットで開花させた! アレキサンダーは得意のパンチで前半戦のペースを握ったが、指の脱臼で失速。ジョシュがパンチを返し、グラウンドに持ち込むと顔面へのヒザ蹴りから一気に仕留めた。

○マーク・ハント vs 髙阪剛×
(2R 4分15秒 KO)

「このGPを最後に引退」を公言してエントリーされたTKが、K-1王者ハントを前にその覚悟を全開! 壮絶な殴り合いで何度も危ない場面がありながら、気力で立ち向かう姿は見る者すべてを感動させた。日本総合格闘技史上最高の散り際だ!

PRIDE無差別級GP2

の評価をグーンと高めた。準決勝のアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ戦では期待されたとおり、目まぐるしい攻防を展開。最終的にミルコに敗れたが、改めてその総合力の高さを示した。

開幕当初はヘビー級王者エメリヤーエンコ・ヒョードルの参戦が注目の的となったが、結局手指の手術後の回復が遅れ、見送りに。その穴を埋めたのが、二回戦からシード参戦となったヴァンダレイ・シウバだった。打撃の回転の速さは相変わらずだが、藤田戦ではグラウンドでもあわや一本勝ちという場面を創出。このキャリアでいまなお成長中という、恐ろしい王者だ。ミルコ戦でも顔面から激しく出血しながら、最後まで勝負を諦めない姿勢が観客の心を打った。これほどの完敗を喫したのは初めてだが、また荒々しく復活してくれることだろう。

心を打ったといえば、忘れてはならないのがTKこと髙阪剛だ。2月大会で「このGPを最後にしたい」と表明して出場を直訴、リアル「負けたら即引退」という厳しい条件を自らに課し、一回戦のマーク・ハント戦に臨んだ。元K—1王者を相手に一歩も引かない打ち合いを挑む姿は、見る者すべてを感動させた。どんなに殴られても最後まで向かっていこうとし、まさに「前のめりに倒れた」彼こそ開幕戦のMVPにふさわしいだろう。試合後には予告どおり、あっけないほどあっさりと引退を発表。だが大会が終わった直後には練習を始めていたというあたり、あまりにもTKらしい。

日本人としては計5選手が出場したが、一回戦を突破したのは藤田和之と吉田秀彦の二人だけ。猪木事務所を離れフリーとなって『PRIDE』のリングに帰ってきた藤田は一回戦のジェームス・トンプソン、二回戦のヴァンダレイ・シウバと、これまた歴史に残るような激闘を展開。時として日本人選手が見失いがちな「本能の闘い」ができる数少ない男、藤田の参戦で、間違いなく今年のGPは〝重量感〟を増した。彼がいないあいだに多くの選手が現われており、見たい対戦カードはまだまだある。

吉田秀彦にとっては、苦いトーナメントにな

PLAYBACK

【二回戦後〜決勝戦】

7月9日
- **ヴァンダレイがUFCに登場「チャック・リデルと闘いたい!」——③**

7月13日
- ファン参加のポスター撮影会開催
- 無差別級GP決勝ラウンドのカードが発表される

8月17日
- PRIDE自転車サポーター（横浜国立大プロレス研究会メンバー）が日本列島縦断を敢行
- 高田本部長、PRIDE自転車サポーターの出発直前に寝袋、地図、雨具などを渡す

8月19日
- **PRIDEアメリカ会見にマイク・タイソンが登場「PRIDEの連中を見てたら燃えてきた」——④**

8月24日
- **榊原代表、「タイソンとはファイト契約をした」発言——④**

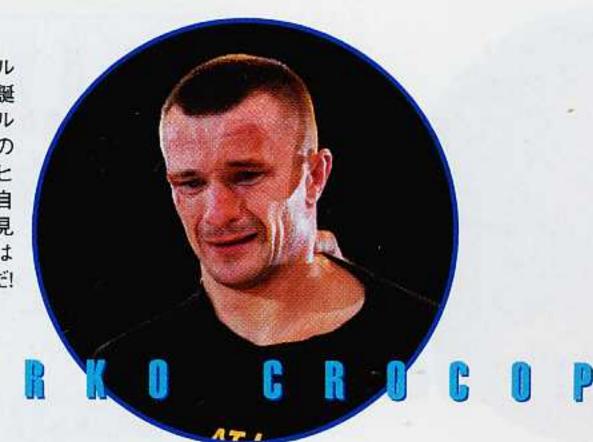
8月26日
- 『PRIDEウェルター級GP二回戦』開催

9月1日
- 吉田秀彦、高田本部長、PRIDE広報・佐伯氏がファンクラブイベント『PRIDE BEER GARDEN』で『PRIDE無差別級GP』の勝敗を大予想。

9月8日
- 渋谷でのPRIDEファイター公開記者会見が催されるも、開始すぐにパニック状態になり中止に。

9月10日
- 『PRIDE無差別級GP決勝』開催。

二連続KOで決勝トーナメントを走り抜けたミルコは、表彰式で涙を見せた。この日、32歳の誕生日を迎えた彼には、初めてのチャンピオンベルトという最高のプレゼントが贈られた。試合後のコメントでは「今日は私の日だった」と語り、ヒョードルが4強にいても勝てたと自信の発言。自分が破ったシウバ、ジョシュを気遣う様子も見せ、王者の風格を早くも漂わせた。さあ、次はいよいよ、ヒョードルのタイトルに挑戦する番だ!

MIRKO CROCOP

この日のミルコ優勝を受け、榊原代表はヒョードルvsミルコを大晦日に実現させる方向で動くことを明言。ヒョードルはラスベガス大会でコールマンを下し、ミルコと再び相まみえることになるのか? 両者の動向に注目だ!

○ミルコ・クロコップ vs ジョシュ・バーネット×
（1R 7分32秒 KO）

ジョシュは開始から前に出て組みにいく。左ミドルもキャッチするがミルコはパンチ、それに対しジョシュは首相撲からヒザ蹴り。ミルコは出血しドクターチェックが入る。スタンドになるとボディ、ミドルとミルコの打撃が走る。また組みにいったジョシュだが、ミルコは隙間を空けて左ボディ二発。これで崩れたジョシュにミルコは上から鉄槌、パウンドを連打。ジョシュも抵抗するが、最後は無念のタップ。

RESERVE MATCH

○エメリヤーエンコ・アレキサンダー vs セルゲイ・ハリトーノフ×
（1R 6分45秒 KO）

ロシア人同士による因縁の対戦となったリザーバー戦。パンチの攻防では一枚上手のハリトーノフが優位に立ったが、アレキサンダーの右ストレート二発がもろにヒットし、ハリトーノフがまさかのダウン。覆い被さったアレキサンダーがパウンドとヒザを連打し、逆転勝ちを果たした。ハリトーノフは復帰戦を飾れず、痛い連敗となった。

○ジョシュ・バーネット vs アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ×
（2R終了 判定 2-1）

1ラウンド、打撃の攻防から左フックを入れ倒したのはジョシュ。一進一退の中、終盤にノゲイラは腕十字に。ジョシュがこれを凌いで上を取ったところでゴング。2ラウンドもスタンド、グラウンドと攻守が目まぐるしく入れ替わる中、やはり終了直前にジョシュがヒザ十字にいくが極めきれず試合終了。判定は1ラウンドの左フックと最後のヒザ十字が評価されたかジョシュに軍配。

○ミルコ・クロコップ vs ヴァンダレイ・シウバ×
（1R 5分22秒 KO）

いきなりラッシュを仕掛けるシウバに、ミルコは左ストレートからパウンド連打で出血を誘う。長いドクターチェックが入るも試合は再開。流血しながらもなお向かっていったシウバだったが、ミドルで注意を引いたミルコは必殺の左ハイを炸裂させた! モロに食らって頭から出血しつつ倒れたシウバ。戦慄のKO劇で、ミルコが決勝進出を決めた。

った。一回戦は西島洋介をあっさりと三角に下し、打ち合いを期待したファンからは不満の声が漏れた。このあたり、勝つだけを考えればいいわけではない『PRIDE』というリングの厳しさだ。そして二回戦ではミルコのローに倒れた。警戒していなかった右の攻撃、しかもローでの敗戦は吉田にとっては屈辱もの。彼の復活劇も、今年後半のテーマとなってきた。

開幕戦直前に桜庭和志の『HERO'S』移籍が明らかになり、2nd ROUND前にはフジテレビが撤退と、今年のGPには常に暗いニュースがつきまとった。だが、リング上にその余波はまったく見られなかった。それはリザーバーも合わせてトーナメント参加全選手が、それぞれにファンの不安を吹き飛ばすような試合を展開してくれたからにほかならない。二回戦の試合後には、多くの選手が「『PRIDE』を信じろ」というメッセージを残した。だがファンの心に響いたのは、やはり極限まで身体を張ってとんでもない闘いを見せてくれた選手たちの生き様以外にない。「『PRIDE』は大丈夫」。今回、GPをその目で見たファンの誰もが、不安を一掃されたに違いない。

そして、闘いはまだ続いていく。休む間もなく10月にはラスベガス大会が開催され、いよいよヒョードルも復帰する。年末に向けての勢力図は、このGPの結果によって全面的に塗り替えられた。負傷でGP出場を棒に振ったショーグンも戻ってきた。まず期待されるのは、ようやく頂点に立ったミルコ・クロコップとヘビー級王者ヒョードルの激突だ。このGPで見せた完璧なまでの調子の良さを持続すれば、ミルコのリベンジも見えてくる。二人の対戦は大晦日に実現するのか? そして、ウワサされるUFCとの全面対抗戦も気になるところ。PRIDE戦士に休息のときはない。表彰式で涙を見せたミルコも、すぐに新たな闘いに気持ちを切り替えるはずだ。また敗れた者たちの仕切り直しの闘いも、すでに始まっている。この無差別級GPを通過したことで、『PRIDE』のリングは間違いなく、タフさを大幅に増した!

事件で振り返るPRIDE無差別級GP

1 桜庭和志、『HERO'S』に電撃移籍!!

無差別級GP開幕二日前、東京・代々木第一体育館で開催された『HERO'S』のリング上に、前田日明から「これから参戦するもののふ中のもののふ」として、タイガーマスクを被った桜庭和志が呼び込まれたのだ！　その場ではアナウンサーからの質問にも「タイガーマスク」としか名乗らず、明確な回答はしなかったが、それがサクであることは誰の目にも明らか。そして翌日の会見では、ついに素顔で、参戦を明言したのだった。

伏線は、前月末に報じられた「髙田道場からの離脱」だった。直後は「円満離脱、系列で〝桜庭道場〟設立へ」とされていたが、事態はまったく別方向へ。直後のGPに直接の影響はなかったものの、やはり客席にも関係者にも、ショックがなかったと言ったらウソになる。だが、選手たちはそれを吹き飛ばすような激闘を展開。まさに〝逆境に強い『PRIDE』〟を印象づけた。

大会後、サク問題について榊原代表は「家族と思っていたが、裏切られた気分」と激白。

2 フジテレビ、『PRIDE』の放送を全面打ち切り！

前日の『PRIDE武士道』さいたま大会の余韻もさめやらぬ6月5日、その発表はあまりにも唐突になされた。「DSEの契約違反が判明したため、同社との契約解除、同ソフトの放送及びイベント開催への関与を中止する」

同日、PRIDE道場開きに訪れていた同局スタッフすらも知らされていなかったという、この発表。一週間後に予定されていた前日の武士道の中継もご破算になるという、緊急事態だった。

このとき、誰もが3月から週刊誌誌上で繰り広げられていたネガティブ・キャンペーンとの関連を思い起こした。3日後に急きょ開催された、選手54人、一般ファン600人を巻き込んでの緊急会見で榊原代表はフジテレビから、「信用、品位、イメージに対する保持、配慮をドリームステージが怠った」との理由を聞いたと明かし、「反社会勢力」との付き合いと同じくまったく身に覚えがなく、もちろん週刊誌誌上の一連の記事も事実無根の捏造だと説明。囲みでは顧問弁護士の立ち会いのもとで、さらに詳しい経緯を明らかにした。

この措置により、『GP 2nd ROUND』以降の地上波放送も中止されたまま。大会開催も危うい、との憶測もあったがDSE側はGP、武士道ともに予定どおり開催することで、さらなる不安の声を断ち切った。

会見では大晦日の「男祭り」開催、そして初進出となるアメリカ大会も発表され、「いつも通り」どころか「いつも以上」の『PRIDE』をアピール。今年終盤、『PRIDE』は急速な巻き返しに打って出る！

3 ヴァンダレイ、UFCオクタゴンに登場!!

『GP 2nd ROUND』終了から間もない7月8日（現地時間）、アメリカ・ラスベガスで行なわれたUFC61のさなか、ダナ・ホワイト社長がオクタゴンに「自分の友人」として一人の男を呼び込んだ。PRIDEミドル級王者ヴァンダレイ・シウバだ！　一週間前に藤田和之を大激闘の末に下したシウバは、続いて入ってきたチャック・リデルとにらみ合い！　11月、同イベントでの対戦が濃厚と報じられた。

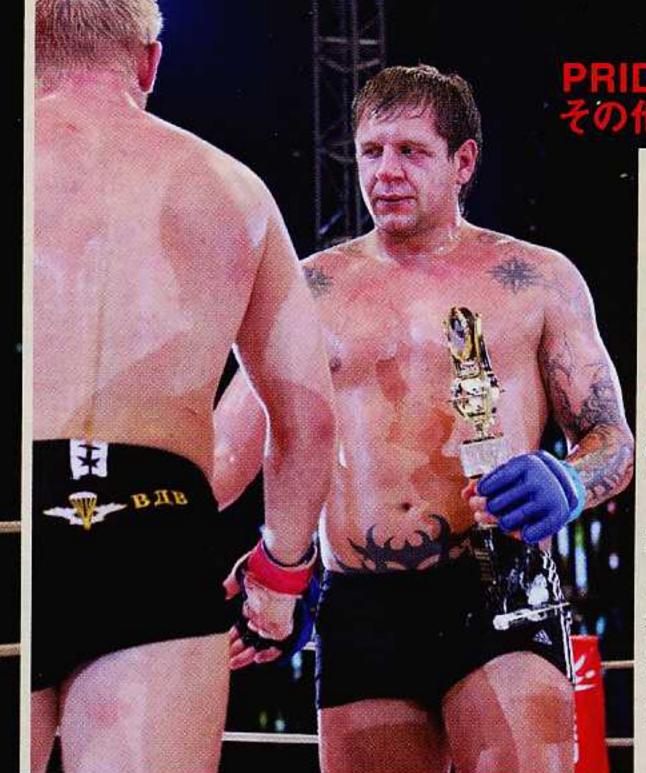
『PRIDE』とUFCといえば、当のリデルがミドル級GPに参戦するなど、断続的ながら交流が続いている。近年はK―1との接近が取りざたされていたが、今回、10月に『PRIDE』が初のアメリカ進出を果たすことで、一気に全面戦争突入か？と、世界中が色めき立った。

その後、リデルはレナート・ババルとのタイトルマッチも制し、迎撃態勢は万全。シウバのケガの状態が気になるが、正式決定すれば世界中が注目するはず。そこから全面戦争が展開されれば、日米の総合格闘技人気はさらに加熱するはずだ。MMAブーム加速の火種は、シウバとリデルの試合が握っている！

4 マイク・タイソンが『PRIDE』とファイト契約！

8月19日、アメリカ・ロサンゼルスで行なわれた『PRIDE』ラスベガス大会のカード発表会見に、〝あの〟マイク・タイソンが現われたのだ。もちろん、単なるゲストではない。榊原代表と握手を交わした元プロボクシング統一世界ヘビー級王者は、「PRIDEの一員になれてとても嬉しい」と発言。その場では契約の内容はコンフィデンシャル（機密）とされたが、榊原代表は後日、タイソンと「ファイト契約を結んだ」と明言。なんらかの形で、タイソンが『PRIDE』のリングで試合を行なう可能性を示唆したのだ。

K―1、あるいは『Dynamite!!』のリングへの登場が長らく取りざたされていたタイソンだが、ここにきての電撃発表に、格闘技界は激震！　早くもボクシング出身の西島洋介が「できればやりたい」と表明すれば、吉田秀彦も対戦を希望するなど、反響も特大。ヒョードル、ミルコ、シウバなど誰と当たっても超話題カードとなるだけに、10月にも行なわれるという追撃会見が待たれるところ。『PRIDE』のアメリカ進出は、誰も想像しなかったスケールで世界の格闘技界に大旋風を巻き起こしつつある！

PRIDE無差別級GP決勝戦 その他の試合 PLAY BACK

ロシア人がロシア人を返り討ち!!

[PRIDE無差別級GPリザーブマッチ]
○エメリヤーエンコ・アレキサンダー vs セルゲイ・ハリトーノフ×
(1R 6分45秒 KO)

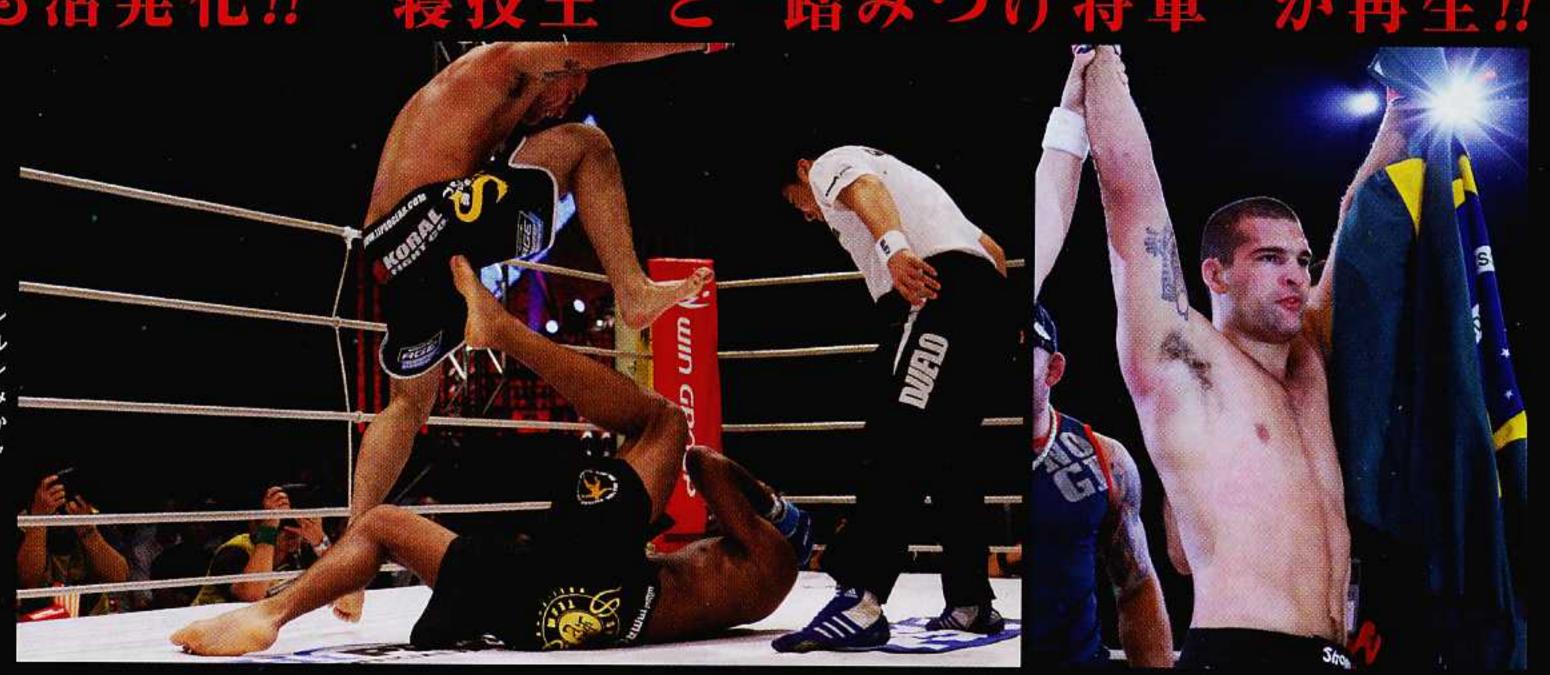
誰もが完全復活を熱望する"死神"ハリトーノフが元同門のアレキと無差別級GPリザーブマッチで再起戦。両者譲らぬ打撃戦を展開するもハリトーノフが頬を指して挑発すると、アレキが怒濤の打撃コンボで衝撃KO葬！　迷走気味のハリトーノフはまたもや覚醒ならず、次世代ヘビー級戦線はカオス状態に……。

○ヒカルド・アローナ vs アリスター・オーフレイム×
(1R 4分28秒 タップアウト)

混戦のミドル級戦線で"寝技王"アローナとアリスターが激突！　アリスターの猛攻を凌いだアローナはローキックでバランスを崩し、アリスターを捕獲してバックから頭部へパウンド三昧！　亀になったアリスターがリングス・オランダイズム溢れる弱々しいタップアウト負けを披露。

ミドル級前線も活発化!! "寝技王"と"踏みつけ将軍"が再生!!

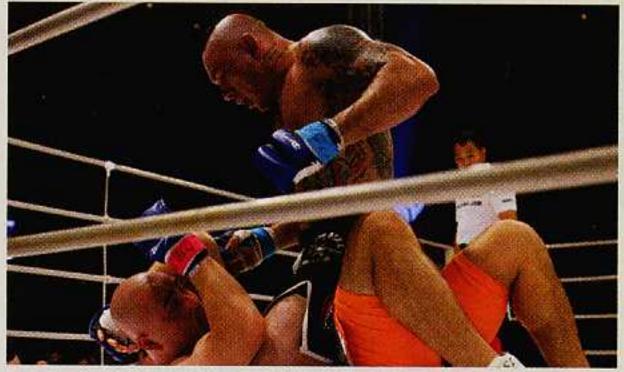
○マウリシオ・ショーグン vs ザ・スネーク×
(1R 5分29秒 KO)

右ヒジ負傷から半年ぶりに復帰のショーグンは、10.21ラスベガス大会のケビン・ランデルマン戦を前にザ・スネークと激突。ショーグンはサイドから一気にマウントを奪取し、"踏みつけ将軍"の異名よろしく、驚異の跳躍力から二度、三度顔面を踏みつけまくるデンジャラスKO劇！

『PRIDE』のハードルは高い！　今月の"もっとがんばりましょう"

○中村和裕 vs 中尾"KISS"芳広×
(3R終了 判定 3-0)

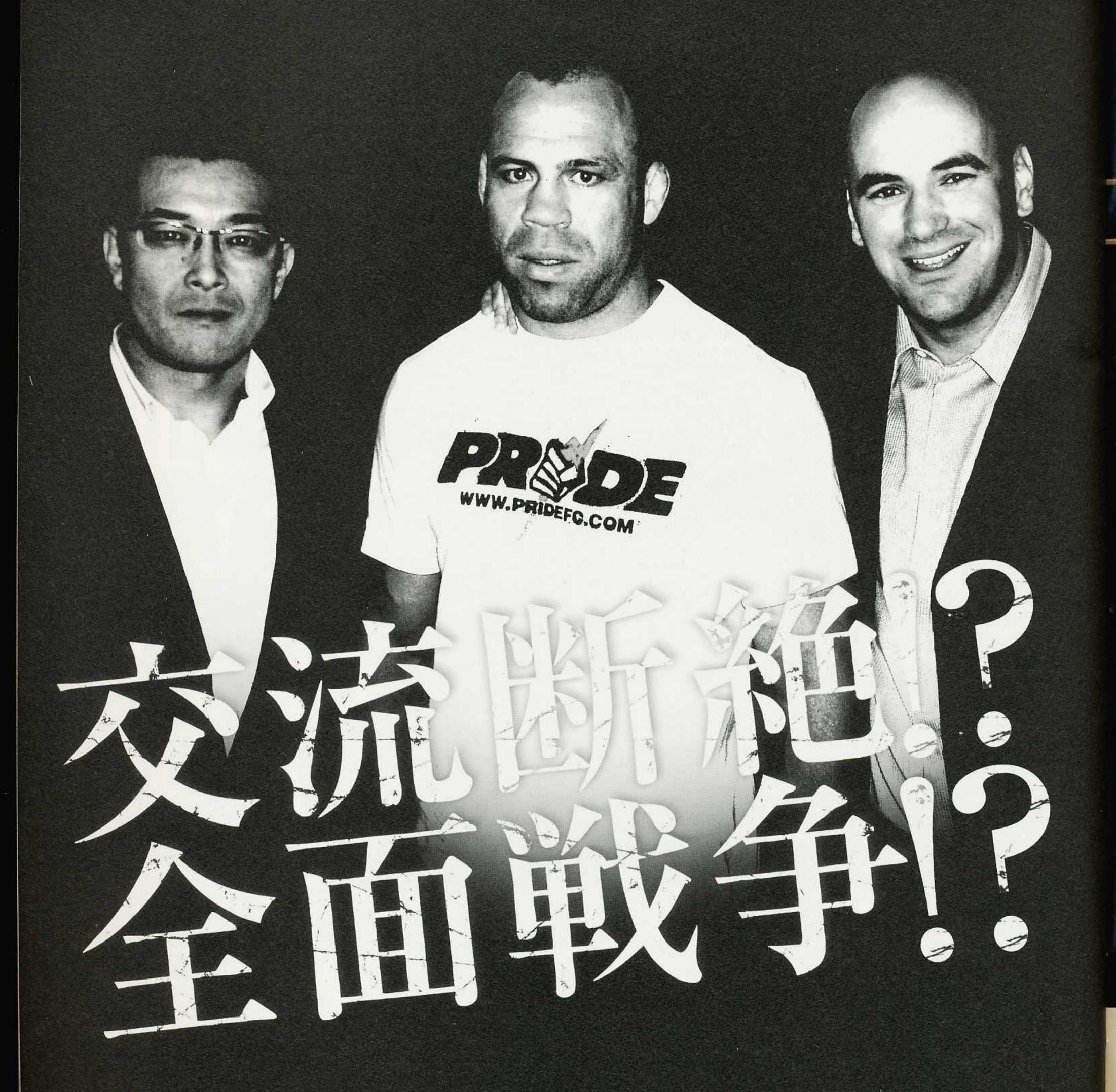
プチ因縁のカズと中尾さんの激突は、「『PRIDE』をナメるな！」と怒り心頭だったもののアグレッシブに攻めきれないカズと中尾さんが濃厚に見つめ合う膠着三昧となり、結果的にある意味、中尾ペース？　そんな"二人っきりの世界"に会場からは嵐のような大ブーイング。

○ヒカルド・モラエス vs イ・テヒョン×
(1R 8分8秒 TKO セコンドタオル投入)

"韓国シルムの横綱"イ・テヒョンが『PRIDE』初登場＆総合初挑戦だったものの、相手のモラエスとともに打撃もフラフラ。グラウンドもフラフラ。と徹頭徹尾＆終始一貫したフラフラ三昧！　最後はフラフラのまま両者がコーナーで石と化す異常事態に場内騒然!?

○エヴァンゲリスタ・サイボーグ vs 西島洋介×
(1R 3分24秒 裸絞め)

「顔にパンチをもらわず、パンチを当てる自信はある」とタイソン参戦で気勢の上がる？　"和製タイソン"西島だったが、モヒカン頭の改造人間の猛威には防戦一方。スリーパーからの完封負けで三連敗。はたして復活はあるか？　立て、立つんだ西島～！

シウバvsリデル戦実現に暗雲!?

交流断絶!? 全面戦争!?

PRIDE×UFC特集

迎撃体制万全のUFCの現在

もういくつ寝ると、ヴァンダレイvsリデル戦!!……のはずだったが、なんだか雲行きが怪しくなってきた『PRIDE』とUFCの交流関係。10月にラスベガス大会を控える『PRIDE』にUFCは敵意剥き出し！ どうする、どうなる!?

©Dave Contreras

8.26 UFC62

ネバタ州ラスベガス

［UFCライトヘビー級選手権］
○（王者）チャック・リデル（アメリカ）
vs
（挑戦者）レナート・ババル（ブラジル）×
（1R 1分35秒 TKO）

10連勝中のババルに何もさせず!!　パンチの連打で突っ込んできたババルをいなしながら、右ストレートを炸裂!!　主導権を握ったリデルは、倒れ込んだババルにパウンドを浴びせて完勝!!　こりゃ強いわ！

UFCの絶対王者、難敵ババルに完勝！

リデル強いわ!! モヒカン全部立った!!

——されど、ヴァンダレイとの頂上決戦は消滅か!?

TUF一期生で人気者フォレスト・グリフィンはボナーに判定勝ち。ここで問題です。さあ、どちらがグリフィン？　正解者には抽選で何かあげるので、答えを「伝説のグレイシー復帰!?」係まで!

和術慧舟會の岡見勇信は、アラン・ベンチャーに判定で完勝。その試合内容に満足しない観客からブーイングが起こったが、"中量級日本最強"の呼び声も高いだけに、次戦のインパクトを期待したい。

リデルの次期挑戦者にはティト・オーティズが挙がっているが、フォレスト・グリフィン戦を見るかぎりティトは復調してないし、人気面だけで優遇された感ありあり。やっぱりヴァンダレイ戦が見たい!!

右手はシェイクハンド、左手にはナイフ!! PRIDEとUFCの緊張感を探る――!!

右手はシェイクハンド、左手にはナイフ――。

ヴァンダレイ・シウバのオクタゴン電撃登場が〝夢の懸け橋〟となった『PRIDE』とUFCの急接近は、冒頭の表現が当てはまる。そして、いま両者はナイフを握る左手に力が入っているのかもしれない。

8月26日、アメリカ現地時間にて行なわれたUFC62。メインイベントのライト級ヘビー級チャンピオンシップにおいて、王者チャック・リデルが挑戦者レナート・ババルを一蹴！　鳥肌どころかモヒカンの毛が総立ちの強さを見せつけたUFCの絶対王者は、試合後のオクタゴンで「ティト・オーティズだろうが、ヴァンダレイだろうがやってやる‼」とアピール。UFCサイドが「11月のUFC65で実現」をアナウンスしていたリデルvsヴァンダレイ戦へ弾みをつけた！

さあ、あとはヴァンダレイの『PRIDE無差別級GP』の行方次第‼――と思いきや、夢の頂上対決の実現のどころか交流断絶、潰すか潰されるのかの地獄の興行戦争の雰囲気さえ漂ってきている。ヴァンダレイvsリデル、消滅!?　いったい両プロモーションのあいだで何が起こったのか。

『PRIDE』からすれば、合同興行ならまだしも、交流があるとはいえオポジションへの選手貸し出し。参戦条件面の折り合いで難航するのは容易に想像できる。ヴァンダレイ参戦の見返りとして、『PRIDE』が10月21日ラスベガス大会への選手派遣をUFCに要請したところ、断われたという話もある。

本誌50ページから掲載されている榊原DSE代表のインタビューを読めばわかるとおり、『PRIDE』サイドは交渉続行の姿勢を崩していない。それとは対照的に、ダナ・ホワイトUFC代表は「日本人とビジネスをするのは難しい」と、交渉難航を認めるコメント。UFC62大会終了後には、『PRIDE』迎撃の姿勢を表わす過激な発言を繰り返した。このような緊張関係をアメリカMMA市場に詳しい関係者はこう解説する。

「『PRIDE』とUFCは、お互いのテリトリーを侵犯しなければ、基本的につかず離れず。今年の春にホイス・グレイシーがK-1を通じてオクタゴンにカムバックしたときも、UFCは『PRIDE』に〝決して敵に回るということではない〟と連絡を入れてきたみたいだしね。ただし、その後、『PRIDE』はフジテレビの中継を打ち切られ、リアリティ・ショーの成功でビッグマネーを手にしたUFCの勢いは増すばかりで状況は変わりつつあるのはたしか」

本誌がここ数号の特集で再三取り上げているように、アメリカMMAマーケットの巨大化、資金面の潤沢ぶりは日本マット界にも大きな影響を与えている。日本を主戦場にしなくても稼げる時代の到来、いや、日米逆転の時は刻々と迫っているのだ。

UFCのPPV全米セールスはあのWWE『レッスルマニア』を超え、『INOKI GENOMU』の38万円チケットばりに高騰するプレミアチケット（こっちは本当に販売）。

未曾有のMMAバブルにより、続々と新規参入が相次ぎ、とあるプロモーションは、豊富な資金力をバックにUFCや『PRIDE』のトップファイターに根こそぎコンタクトを図っていたという動きがあった。

〝きっかけはフジテレビ・ショック〟を受けてアメリカに活路を求めたと思われがちな『PRIDE』だが、早かれ遅かれ、〝アメリカの魔の手〟の対応策は問われていた。

もちろん、巨大マーケットに浸食する企みも『PRIDE』サイドにはある。前述の関係者は『PRIDE』、そしてUFCの野望をどう見ているか。

「一般的な意見かもしれないけれど、UFCは『PRIDE』を吸収するつもりだし、『PRIDE』は隙あれば、UFCのマーケットを横取りする気だよ。だからUFCは『PRIDE』のラスベガス進出に相当ナーバスになっている。マイク・タイソンのまさかの担ぎ出しにしても、『PRIDE』に本当に出場するかどうかはさておき、UFC関係者は驚きの声を隠せなかったというしね」

ということは、このまま左手のナイフが相手を切り裂くのか？

「う～ん。UFCは『PRIDE』のナイフだけに注意を払っていればケガをしないってもんじゃない。背後からズブリと刺そうとしているプロモーションはたくさんある。それにトップファイターの顔ぶれもマンネリ気味だし、UFCは『PRIDE』との交流は進めたいのは本音。だから――お互いをナイフで切り裂きながら、それでも握手をし続けることはあるかもしれない（笑）」

『PRIDE』とUFC。両プロモーションの関係性だけでは決して語れない、百鬼夜行のアメリカMMA市場。右手はシェイクハンド、左手にはナイフの状態は、奇妙な関係を持って続くのかもしれない。

（キャプテンUSA）

『MMA WEEKLY』スコット・ピーターソンが
クールなUSAニュースをお届け!!

再出張版

USA Cool 宅急便

あと1ヵ月強と迫ったPRIDEアメリカ大会。しかし、発表されたカードにUFC勢の名前はナシ!! さらに当初予定されていたUFCでのヴァンダレイ・シウバvsチャック・リデルの頂上対決が消滅との情報も。二大勢力が競うことになる米国市場。その水面下で何が起こっているのか!?

聞き手/デューク東郷　助手/上杉パントマイム

vsUFC 11月開戦が消滅?
シウバとリデルの
頂上決戦の行方は……!?
その一方でタイソンを米国進出の
PR戦略に起用したPRIDE!
初舞台ラスベガス大会の
展望はいかに!?

PROFILE

【すこっと・ぴーたーそん】格闘技情報WEBサイト『MMA WEEKLY』(http://www.mmaweekly.com/)を主宰。ビッグマッチのたびに来日。八王子某所に居を構え、日米格闘技事情に精通している。最近覚えた日本語は「青山にはキレイな女性が多いです」

――……出所したばかりの高倉健が演じる主人公・島勇作から、「自分を待っていてくれるなら、家の前に青いハンカチを下げてくれ」と妻・光枝と約束したことを打ち明けられた花田欣也こと武田鉄也は、勇作と一緒に旅をともにしてだね。

スコット　ふんふん。それで?

――道中でいろいろあるわけだけど、ラストシーンはもう圧巻なんだよ! 家の前には何十もの青いハンカチがなびいて、その中で勇作と光恵はなんのセリフも発しないまま抱き合いエンドロールを迎える。……愛に言葉はいらないんだよなあ。

スコット　ふ～ん。それがいま日本で話題の青いハンカチのエピソードかあ。

――脳みそのシワが増えたでしょ?

スコット　どーでもいいけど、肝心のユウキ・サイトーという若者はどの場面に出てくるんだ?

――ユウキ・サイトー? ジャン・サイトーなら知っているけど……。

スコット　それはこの連載のナビゲーターのアンタが長期休暇中の尻ぬぐいした『kamipro』編集者! もしかして、またウソをついてボクを騙そうとしてるんじゃないの?

――いやあ、しばらく上海へ遊びに行ってたからねえ。詳しいことはこれから調べるとするけどさ、そんなことより!

スコット　そんなことよりって、アンタが勝手にしゃべりだしたんだろ。

――(無視して)ボクがこの連載を休んでるあいだ『PRIDE』のラスベガス大会の機運が相当盛り上がってるじゃないか!

スコット　『フォックス・スポーツ・バー&グリル』の会見はもの凄く盛況だったらしいよ。会見場に派遣した記者から感想を聞いたけど、「会場前には長い行列ができていて、熱気が凄かった!」って。とくにハードコアなファンは盛り上がりまくってる。ただ、逆に『PRIDE』にはUFCほどカジュアルなファンはまだついてない。UFC61にシウバが登場したときも、メチャクチャ反応があったわけじゃなかったようにね。だから、今回の興行もまだまだ"知る人ぞ知る"っていうとこかな。

――じゃあ、大会成功の行方はまだつかめない感じだ?

スコット　今回の記者会見場と、大会会場の巨大なトーマス&マックセンターは規模がまったく違うから。フタを開けてみるまで、このイベントが成功するかはわからない。まあ、実際のアメリカの『PRIDE』ファンの総数がこの大会でだいたいわかるんじゃないかな。

――アメリカ進出を展開しようとしている『PRIDE』の真価が問われるってわけだ。

スコット　とにかく会見は大盛り上がりだったそうだけど、その中でも、とくに人気が高かったのがエメリヤーエンコ・ヒョードル。その会見には、もうみんなが知ってるようにマイク・タイソンが姿を現わしたんだけど、なんとヒョードルはタイソンよりも歓声を集めていたらしいよ。

――そんなにヒョードルの人気は高いんだ!

スコット　とはいっても、会見場には一般の人やボクシングファンじゃなくて、MMAファンが集まっていたということが大きいんだけどさ。でも、ヒョードルの人気は群を抜いて高くて、なんというか、アメリカのファンのあいだでは、神秘的な存在。すでにリビング・レジェンドの域に達している。今回は「未知のロシアの怪物がアメリカに初上陸!」ってニュアンスでビッグインパクトを残したのは間違いないね。

――そのラスベガス大会のカードとして、

アメリカ人にとってヒョードルvsコールマン戦は新旧"伝説"対決になる

いざ！米国市場戦!!
USA Cool宅急便

ヒョードルvsマーク・コールマン、マウリシオ・ショーグンvsケビン・ランデルマンが同時に発表されたけど、アメリカのファンとしてはこのマッチメイクはどうなの？　日本のファンからすると、一昨年のヘビー級グランプリで決着がついているから、いまいち反応に困るカードだったりするんだけど。

スコット　いや、アメリカのハードコアファンはけっこう喜んでいるよ。というのも、コールマンはかつてUFCでナンバーワンの栄光を勝ち取って伝説となった男。もちろん年齢的にもピークから落ちてきているんだろうけど、まだまだ人気はあるし、アメリカではもう6年以上も闘ってないからね。逆に観たがっているファンは多いんだよ。それにかつての〝負けを知らない男〟が、現在進行形の〝負けない男〟と闘うわけだから、ある意味、このあいだUFCでスマッシュヒットを記録したホイス・グレイシーvsマット・ヒューズのような意味合いにも取れる。問題は、どこまで『PRIDE』のプロモーションが効果的に展開できるかどうかだろうね。

――そのヒョードルの相手としては、UFCヘビー級王者のティム・シルビアがオファーを断って、会見では「シルビアが逃げた！」とさえアナウンスされたらしいじゃん。

スコット　この連載の熱心な読者ならご存じだろうけど、シルビアが簡単にヒョードル戦を受けるわけがないよ。UFCにとっても、シルビアを『PRIDE』に出場させるのはなんの利益もない。そもそもシルビアがヒョードルに勝てるわけがないし、『PRIDE』とUFCではヘビー級の実力差がありすぎるからね。

――実力差はともかく、UFCの選手派遣はありえないのかな？

スコット　交渉は難航するだろうなあ。あのダナ・ホワイト（UFC代表）が気軽に選手を送ることは考えにくい。だってUFCの選手を送ることは、『PRIDE』のパブリシティに貢献するかもしれないけど、UFCにはメリットがない。つまり、「UFCの選手が出るから、『PRIDE』を観に行こう！」って思うファンはいるかもしれないけど、UFCは『PRIDE』に選手を貸し出さなくたって知名度はあるんだから。

――興行側、選手側からしても、『PRIDE』に派遣するメリットはないということか。UFCファンはどう？　彼らは『PRIDE』の対抗戦は望んでいないのかな。

スコット　それはまったくない（即答）。

UFC61のセミファイナルで激突した、因縁深いティトとシャムロック。試合はティトがテイクダウンからのエルボー連打で秒殺勝利! しかしあまりにも早すぎたレフェリーストップのため、完全決着を求める観客からはオクタゴンに大ブーイングが。一部報道で引退すらほのめかすシャムロックは、『PRIDE』との興業戦争第一戦となる10月14日のUFNでリベンジマッチに臨む!!

©Dave Contreras

UFCヘビー級王者・シルビアがヒョードルから逃げた!

――寂しい答えだなあ。期待している日本のファンが馬鹿みたいじゃないか！

スコット　カジュアルなUFCファンは「フォレスト・グリフィンこそ最高!!　ヒャッホ～！」って感じだからねえ。べつに交渉が決裂したってガッカリはしないさ。

――話をまとめると、11月に予定されていたヴァンダレイ・シウバvsチャック・リデル戦も消滅する方向と考えていいの？

スコット　とりあえず予定されていた11月はない。というか、最初から両者の言い分は食い違っていただろ。UFCは「11月」とアナウンスしたけど、『PRIDE』は「早ければ11月」という具合に。それに最近になってダナは「日本人とビジネスをするのは難しい」といったニュアンスの発言をしているんだ。逆に『PRIDE』側は「アメリカ人とビジネスするのは難しい」と思ってるだろうけど（笑）、いずれにせよ対戦が実現しなかったときは、お互いに悪口を言い合って、対抗戦が実現できなかった責任をなすりつけ合うかたちになるだろうね。

――消滅しそうな原因はどうしてなの？

スコット　お互いが主張する条件面の問題が主だろうけど、前から言ってるように、UFCなんて最初から『PRIDE』を潰す気だからね。

――それだけ、『PRIDE』のアメリカ進出に脅威を感じているってことだね。

スコット　『PRIDE』ラスベガス大会は10月21日だけど、まずUFC61で早すぎるレフェリーストップのため完全決着といかなかったティト・オーティズvsケン・シャムロックの因縁対決をメインに、UFCは10月10日に（スパイクTVで放送する）UFNをぶつけてきた。

――どーでもいいけど、あの二人、またやるんだ（笑）。

スコット　さらに、10月14日には本戦のUFC64が開催され、ミドル級王者リッチ・フランクリンとアンデウソン・シウバのタイトル戦が発表されている。また空位になっているライトヘビー級王座のタイトル戦も行なわれるらしい。つまり、UFCの作戦としては、『PRIDE』上陸前に、観客を吸い上げてしまおうって魂胆さ。

――そこで、『PRIDE』が持ってきた秘密兵器がボクシング元世界ヘビー級王者のマイク・タイソンというわけだったんだけど、このプロジェクトはかなり極秘に行なわれていたらしいね。

スコット　タイソンにはホントに驚いた!!　メディアの中でも、噂すら流れなかった。誰もこのことは知らなかったと思うよ。

――アメリカのコアなMMAファンは、どんな反応を示しているんだい？

04年ヘビー級GP開幕戦で対戦! ヒョードルvsコールマン PLAY BACK!!

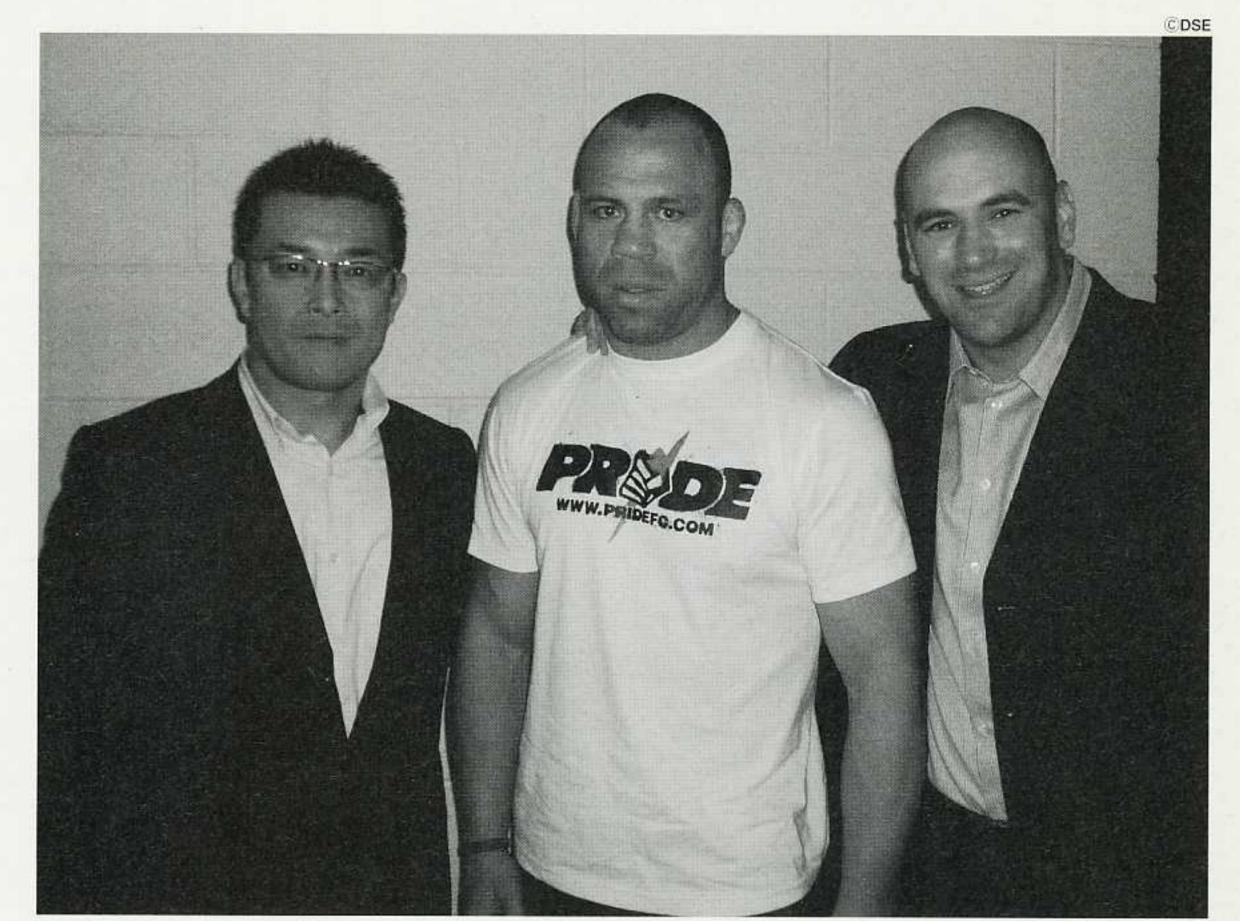
04年のGPで激突した両者。氷の拳を振り回すヒョードルにコールマンのタックルが炸裂し、テイクダウン成功! そのままバックに回ったコールマンは、一気にチョークへ! いきなり勝機が訪れたコールマンだが、ヒョードルは冷静に正面を向いて脱出。しかしスタンドに戻っても、コールマンの激しいタックルに再びテイクダウンを奪われるヒョードル。珍しい、その攻め込まれる姿に場内からは驚きの声が! 優勢にパウンドを放つコールマン。が、次の瞬間、王者のサンボ仕込みの腕十字がズバリ! 1R2分11秒、ヒョードルがあっさりと逆転勝利を奪った。

スコット　最初に触れないといけないのは、タイソンはK―1のイベントにもパブリシティのために出ていた。でも結局、試合はしなかった。だから一般的な評判としては信頼がない（笑）。

――え〜、いよいよ電機が動きます！　日本でも永久電機と並び称される不発弾物件だからなあ。

スコット　『PRIDE』はタイソンと試合契約を結んだとのことだけど、ファンはそんなに期待はしていないね。「タイソンを引っ張り出すのは簡単だけど、試合をさせるのはまた別のこと」というのが率直な反応。ボクの運営しているウェブサイト『MMA WEEKLY』でタイソンが登場した翌日に「タイソンは『PRIDE』で何をすると思いますか？」というアンケートを取ったら、約50パーセントの人が「何度かのメディア露出」という回答だった（笑）。

――HAHAHAHA！　いや、それは至極真っ当な感想だと思うよ（笑）。

スコット　それはK―1の前例だけじゃなくて、これまでの彼のトラブルの歴史もあるから、その反応は自然だよね（笑）。とはいえ、タイソンは誰もが知っている選手。だから『PRIDE』のPR戦略としては、正しい動きと言えるよね。アメリカにはタイソンを嫌う人もいるけど、ファイトが好きな人は飛びつくトピックだよ。

――一般のマスコミはこのニュースを報じたの？

スコット　いや、一般のメディアはまったく扱ってなかった。

――じゃあ、PRにならないじゃん！

スコット　いやいや、それは今回の件が特別に認知されてないというわけではなくて、アメリカでは一般のマスコミがMMAを取り上げること自体が本当に珍しいんだ。どちらかというと、日本のスポーツ紙がMMAを取り扱ってるのが異常なぐらいで。

©DSE

「日本人とビジネスするのは難しい」（ダナ・ホワイト代表）

――知りたいのは、いまのマイク・タイソンにどれくらいの価値があるのかってことなんけど。

スコット　本当に試合をするとなれば、メチャクチャ価値はあるよ。ボクシングファンも集まって、チケットも売れるだろうし、PPVの件数にしたってとんでもない数字になると思う。でも、大事なのは対戦相手。強いキック系のバックグラウンドを持った選手を用意できれば、ボクシングファンは入ってきやすいと思うな。

――グラップラーじゃダメ？

スコット　アメリカのファンはグラウンドになったら、ブーイングする人がまだいるからね。それにタイソンのグラウンドゲームにはなんの期待もないでしょ？

――オモプラッタを仕掛けるタイソンは見てみたいけどなあ。

スコット　ボクが言っている意味合いは「グラウンドができない」前提だよ！

――（無視して）ところでタイソンのギャランティはどのくらいなんだろう。

スコット　そこは大事な話！　今回のPR戦略もその価格が極端に高いようだと満点はつけられない。噂によると、K―1なんかパブリシティ出演だけのためにとんでもない金額を払ったそうだからね。

――これぞ〝マイク・タイソン業〟といった感じだ（笑）。

スコット　でも、タイソンはその直後の04年7月にダニー・ウィリアムズにKO負けを喫して、翌年にも無名のケビン・マクブライドに6ラウンドで試合放棄。この連敗でいまはもう値段がかなり暴落している。

――じゃあ、手が出しやすいかもしれない。

スコット　あと最近の風潮からすれば、タイソンのギャランティはPPV件数のパーセンテージをもらえる契約にするはず。ちなみに、タイソンは8月12日にトーマス&マックセンターで開催されたWBCヘビー級タイトルマッチで解説を務めているんだけど、そのときのギャランティは2万ドルだったと報じられている。

――そろそろ結論を聞こう。本当にタイソンは試合をするのかい？

スコット　どういう試合形式になるのかわからないけど、なんらかのかたちでやると思うよ。

――……本当かよ（舌打ちしながら）。

スコット　アンタに聞かれたから意見を述べただけじゃん！

――そうだけどさ、ホントに闘うと思う？

スコット　じつは、『The Las Review Journal』という現地でもっとも大きい販売部数のある新聞の報道によると、ラスベガスにある『アラジン・リゾート&カジノ』がそのホテルカジノ内にタイソンのトレーニング施設を設けて、10試合のエキシビションマッチ（非公式戦）を数カ月以内にやるんだ。だから『PRIDE』もちゃんと条件をクリアすれば、タイソンをリングに担ぎ出せないこともないよ。

――実際、本当にタイソンが『PRIDE』に上がるとすれば、ボクシング界に反発する動きはないのかな？

スコット　ボクシングの専門サイトの主宰者に聞いたんだけど、ボクシング界ではタイソンのことはとくに話題にはなってないらしい。なぜなら、ボクシング界にとって彼はあくまで〝過去の人〟だから。ただ、ボクシングはいま人気がかなり低迷してい

る。だから、何かしら干渉して、MMA人気にあやかろうとはするかもね。むしろ、もしタイソンの『PRIDE』出場がボクシング界にとって利益を生むのなら、絶対に利用しようとするだろうし。

――実際に『PRIDE』などが、ボクシングの試合をすることは可能なの？

スコット アメリカ国内に関していえば、エキシビションマッチなら可能だろう。ただ、それよりもタイソンがどういう形式とはいえ、アスレチック・コミッションが管轄する大会に出ることのほうが難しいんじゃないかな。ネバダ州では、過去の問題から試合に出られないだろうし、他の州のアスレチック・コミッションもネバダ州の意向を尊重するだろうから。ただ、関係各組織とパイの配分をうまくやれば、そこは政治的にクリアされるかもしれない。そこは金、金！ 金次第だよ！

――世の中、銭ズラ！（蒲郡風太郎調）。

アメリカの公開記者会見で“格闘技界に革命を起こすパートナー”として紹介されたタイソンだが、アメリカのファンの反応は下のアンケートの通り。

スコット ボクの意見としては、『PRIDE』がうまくやれば解決できる問題ばかりだけど、もっとも難しいのは、タイソンに試合をさせることだよね。彼は本当にお金に困ってない限り試合には出てこないんじゃないかな。それにタイソンがMMAにチャレンジするとは思わない。

――オモプラッタを仕掛けるタイソンは見てみたいけどなあ。

スコット しつこいよ！ ただ、知名度の面からPR戦略としてはもう充分に成功だよ。アイコンとしては最適なパートナーを連れてきた。今後、『PRIDE』がタイソンを使ってどのような戦略を考えているか、そこは興味深いところだね。

――OK！ スコット、次号も詳しい話を聞かせてくれや～～っ!!

スコット なんで締めが髙田延彦なんだよ。意味不明！

【8月24日／「スターバックスコーヒー」表参道店にて収録】

アメリカ人緊急アンケート！ 協力／MMA WEEKLY

Q『PRIDE』でタイソンは何をすると思いますか？

回答	割合
A1.何度かのメディア露出	47.8%
A2.何もしない	24.03%
A3.総合の試合	15.81%
A4.ボクシングのエキシビション	12.61%

USA Cool宅急便 NEWS

リデルvsシウバ戦が消滅へ？

8月26日に開催されたUFC62で、チャック・リデルはレナート・ババル相手に自身が保持するライトヘビー級王座の防衛に成功。これにより、UFC61でダナ・ホワイト代表が対戦を予告したように、ファンのあいだではPRIDEミドル級王者ヴァンダレイ・シウバとの一戦が待ち望まれることになったが、事態は容易に進まないようだ。ダナは大会終了後の記者会見で「彼らは（リデル vs シウバ戦を）口には出すが、実現させようとはしない」とDSEを批判。一方、シウバについては「彼が試合をしたがらないと言ってるわけじゃない。彼のことはリスペクトしているよ」とかばう発言も。「この試合は間違いなくいい試合になるし、実現しなかったら罪になる」と言うダナだが、本当にこの頂上対決実現に努力しているかどうかは不明だ。また、シウバに代わってリデルの対戦相手として名前が挙がっているのがティト・オーティズ。10月14日のUFNでケン・シャムロックと対戦することが決定済みのティトだが、UFC62のメイン終了後にオクタゴンに登場。リデルと舌戦を繰り広げ、次のタイトルチャレンジャーであることを印象づけた。ダナもティトとの防衛戦を12月30日の大会で行なう発言をしているため、リデル vs シウバ戦の実現の可能性はさらに低くなりそうだ。

UFC62試合結果
8.26 ラスベガス／マンダレイ・ベイ・イベントセンター

[UFCライトヘビー級選手権]
○（王者）チャック・リデル（アメリカ）
vs
（挑戦者）レナート・ババル（ブラジル）×
（1R 1分35秒 TKO）

[ライトヘビー級]
○フォレスト・グリフィン（アメリカ） vs ステファン・ボナー（アメリカ）×
（3R 判定3-0）

[ライト級]
○エルメス・フランカ（ブラジル） vs ジャミー・バーナー（アメリカ）×
（3R 3分31秒 腕ひしぎ十字固め）

[ウェルター級]
○ニック・ディアス（アメリカ） vs ジョシュ・ニアー（アメリカ）×
（3R 1分42秒 アームロック）

[ミドル級]
○岡見勇信（和術慧舟會東京本部） vs アラン・ベルチャー（アメリカ）×
（3R 判定3-0）

和術慧舟會の岡見勇信はUFC初出場を勝利で飾った。
ⒸDave Contreras

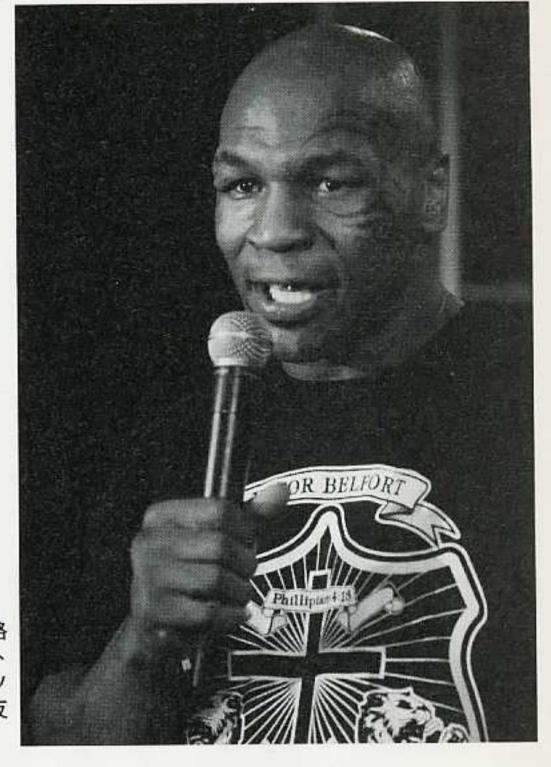
アントンが『東京サーベルズ』を結成!!

チーム別都市対抗戦という新しいコンセプトを立てて、MMA業界に参入した新興格闘技団体IFLに猪木チームが誕生!! 9日に開幕したワールドチーム・チャンピオンシップ初戦で新結成されたアントン率いる『東京サーベルズ』がバス・ルッテンの『ロザンゼルスアナコンダ』と激突した。猪木チームには日本から浜中和宏も参戦。また、トム・ハワードも『東京サーベルズ』の一員として闘っている。試合結果は締め切りの都合によりわからないため各自調査!! また豊富な資金をバックに猪木を大使に就任させパット・ミレティッチ、ヘンゾ・グレイシーらビッグネームをコーチに起用し話題を提供してきたIFLだが、新たにマーク・コールマン、カーロス・ニュートンともコーチ契約を締結。大晦日には『男祭り』ばりにFOXスポーツで2時間の放映枠を獲得している。

ホジャー・グレイシーがついに総合参戦!!

05年のアブダビコンバット99キロ&無差別級の2階級制覇を成し遂げ、世界が注目する男、ホジャー・グレイシーがついに総合デビュー！『PRIDE』参戦もウワサされたホジャーだが、選んだ舞台はアメリカのMFC。11月14日のデビュー戦の相手は日本でも知名度の高いドン・フライに決定した。ロシア資本のバックアップに加えて、東海岸アトランタのオンライン・カジノ会社のスポンサーシップを得るMFCは、一部報道によると、デビュー戦のホジャーに約25万ドルという破格のオファーをしたとのこと。はたして、その実力のほどはいかに？ なお、ホジャーがデビューする同大会は全米にPPVで流される。

リアリティ・ショー『TUF』シーズン4がスタート!!

UFCブームの火付け役『TUF』の4作目がついに開始! 今シリーズは、これまでシリーズと違い、新人ではなく過去にUFCに出場したベテランが登場。UFCで栄光を勝ち取れなかったファイターが再びUFCの頂上を目指していくストーリーだ。最終的に勝ち残ったファイターには10万ドル(1150万円!!)の賞金に加えて、ミドル級とウェルター級へのタイトル挑戦権が与えられるという、これまでにない待遇が与えられることになる。またシーズン途中に試合に敗れて脱落した選手には、残っているチームメイトを助けると同時に、その活躍ぶりによっては、負傷者が出た場合に代打として登場できるようになるなど敗者復活戦的な要素も残されており、感動的なドラマが生まれる土壌はある。第一回放送の視聴率は1.7パーセントをマークし、人気の高かったシーズン3の平均視聴率をキープ。まだまだUFC人気に翳りはなさそうだ。

日本人として初めてレギュラー参戦を果たした

TKが語るUFCそして『PRIDE』アメリカ戦略

アメリカのファンはお祭りを待っているんです!!

髙阪 剛

『PRIDE』ラスベガス大会が10月21日に、ヴァンダレイ vs リデルが11月に予定され、熱気が高まってきているアメリカ・マット界。だが、現地で取材または観戦した邦人が絶対的に少ないため、日本ではまだまだベールに包まれている部分が多いのも正直なところ。そこで、話を聞くならこの人が一番！ というわけで、リデル vs ババル戦の解説を務めた直後の"TK"髙阪剛にアメリカの格闘技事情について語ってもらった。

聞き手／ジャン斉藤　構成／辻 将人

——先ほど、WOWOWで放送されるUFC62の解説を終えられたばかりだそうですね。

髙阪　そうですね、はい。

——メインはどうなりました？

髙阪　レナート・ババルに勝ちましたよ、チャック（・リデル）。完勝ですね。

——あ、勝ちましたか！　ということは、11月に〝予定〟されているヴァンダレイ・シウバ戦に一歩近づいたことになりますが、髙阪さんの目から見てこの一戦はどうご覧になっているんでしょうか？　選手や関係者からは「オクタゴンではリデルに地の利がある」と言われてますけど。

髙阪　いや〜、それはあんまり関係ないんじゃないですか。闘いに何が必要かっていったら、やっぱり経験ですよ。オクタゴンの経験はもちろんチャックのほうに軍配が上がりますけど、結局は〝闘う〟ということの経験をどれだけ凝縮できるか、そういう蓄積が最後にものを言うので。「オクタゴンだから、こういうルールだからこっちが勝つ」っていうもんでもないんですよね。確かに凄く細かいところでは左右したりするんですけど、チャンピオンレベルになると、その場所その場所で対応できるだけのスキルを持っているので。

——その瞬間、肌で対応してしまうぐらいのものをヴァンダレイもリデルも持っているという。

髙阪　じゃないと、チャンピオンにはなれないですよ。彼らクラスになると、相手のちょっとした風穴を、大きな隙に広げてしまうことができるんです。たとえばヴァンダレイなんかは、一発の有効打を決めたら、そこからのたたみかけ方が凄く強いじゃないですか。

——ヴァンダレイはいったんラッシュした

ら、ほぼ確実に相手を仕留めますね。
髙阪　チャンスだと思ったら、もらいながらでも中に踏み込んでいく。ホントに強い選手にはみんな言えますけど、必ずそういうセンスを持ってますよね。

――では、UFCは4点ポジションの頭部ヒザ攻撃がルールで禁じられていますが、その差も大きな影響は及ぼさないと？

髙阪　それほど関係ないと思いますよ。要はそういう状態にさせるのが強さの証であって、させられるというのは力が足りないっていうことなんで。だからお互いいままでやってきたことに自信があるから、細かいルールはほとんど意味ないですよ。あとはもう気持ちの問題になってくるし。

――髙阪さんから見て、チャック・リデルというのはどういう選手ですか？

髙阪　打撃主体の選手なんですけど、ある意味UFCの中でスタンドの打撃がこれだけ重要だってことを見せつけた選手の一人ですね。いまの総合って、スタンドが強くないと勝てないですから。だからそのスタイルを知らしめた一人だと思うんですよね。ただ打撃やるんじゃなくてタックルを切る技術があって、いわゆるスタンド全般ですよね。そのスタンド全般の技術っていうのを総合格闘技に転化した。凄くわかりやすい試合をやりますからね。

――ヴァンダレイの打撃とはどういう違いがありますか？

髙阪　チャックはただリーチが長いからだけじゃない。相手に届く打撃というか。で、ヴァンダレイは届かせる打撃やから。自分が踏み込んで中に入って、あとはスイングのフックにしても身体全体を使って打ちにいったりとか。その差は大きいと思うんですよね。同じように見える打撃を使った総合の選手であっても、その違いはあると思いますけど。まあでも、このクラスの選手の闘いだと、その日の体調や運なんかが大きいでしょうね。

――それぐらい実力伯仲している、と。それで、いまUFCはアメリカで一躍ブームになっているというお話なんですけども。

髙阪　会場はとてつもない熱気だし、毎回毎回フルハウスですからね。ケーブルテレビで放送している『ジ・アルティメット・ファイター』（以下TUF）の影響で、いままで格闘技なんか観たことない人も観るようになったのが一番大きいんだと思いますよ。それまでは好きな人だけがPPVで観ていたのが、なんとなくテレビをつけたらTUFをやってるわけですから。そりゃ広まりますよね。

UFCのファンはじっくり攻防なんか観ない どれだけ楽しんで帰るかが重要なんです

――髙阪さんがUFCにレギュラー参戦されていた頃と比べて、会場内の雰囲気やファン層は明らかに変わってますか？

髙阪　いや、雰囲気自体はあまり変わんないですね。やっぱり観に来ている人たちからしたら、"お祭り"なんですよ。UFCはカジノと隣接している会場でやることもあるから、カジノの客が「なんだか知らないけど、おもしろそうだな！」って感じで興味本位に観に来ますしね。だから、アメリカのお客にとっては、「どれだけ楽しんで帰るか」ということが重要なんです。

――"お祭り"騒ぎができるかどうかがポイント。

髙阪　そうですね。日本のファンのようにじっくり攻防を観たりするような観客はほとんどいないですよ。今日もそうでしたけど、スタンドでお見合いが続くと、10秒かからないで一斉にブーイングが起こりますね。

――たった10秒ぐらいで！

髙阪　ホントに（笑）。寝技でもちょっと固まったりとか、倒すつもりのないパウンドがあったりしたら即ブーイング。それがアメリカなんですよ。

――そういった環境に身を委ねていたら、選手は自然と鍛えられますよね。

髙阪　自分も鍛えられましたよ。どんどん自分からアグレッシブに仕掛けるっていうことに関しては。だって自分がやっていた頃なんて、アグレッシブに試合しない選手はどんどん外されていったし。初参戦でヘタな試合をやったら、もう一発でアウトですよ。もし勝っても絶対に次は呼ばれないですから。

――厳しいですねえ。その厳しさが一流の選手をつくりあげるというか。髙阪さんは以前のインタビューで「アメリカ人は物事の主旨を理解するのに一～二年ぐらいかかる」というお話をされてましたけど、いまのMMA人気はこのジャンルの醍醐味やおもしろさを理解したということなんですか？

髙阪　いやあ、とても理解している

TKが語る UFCそして『PRIDE』アメリカ戦略

見てみぃ！

TK UFC全戦績

98.3.13 アメリカ・ルイジアナ州 ボントチャートレインセンター
［UFC16-Battle In The Bayou］
○vs キモ
（判定3－0）

98.10.16 ブラジル・サンパウロ
［Ultimate Brazil］
○vsピート・ウィリアムス
（判定3－0）

99.1.8 アメリカ・ルイジアナ州 ボントチャートレインセンター
［UFC18-Road to The Heavyweight Title］
×vsバス・ルッテン
（延長1R2分13秒TKO）

99.7.16 アメリカ・アイオワ州 ファイブシーズンイベントセンター
［UFC21-Return Of The Champions］
○vsティム・レイシック
（2R終了時TKO）

99.11.14 千葉・東京ベイNKホール
［UFC23-Ultimate Japan2］
×vsペドロ・ヒーゾ
（3R1分12秒KO）

02.5.10 アメリカ・ルイジアナ州 ボザーシティ・センチュリーセンター
［UFC37-High Impact］
×vsリコ・ロドリゲス
（2R3分25秒TKO）

とは思えないですけどね（笑）。

―そうなんですか（笑）。

高阪　理解したんじゃなくて、さっきも言いましたけど、とにかく彼らは〝お祭り〟を楽しみたいだけなんですよ。ズッファ体制になってUFCがなぜ成功したかと言えば、その〝お祭り〟感を戻したからだと思うんですよね。たとえば、試合以外の部分で、入場テーマ曲をその選手に合うものにしたり。最近はやってないけど、花火を使って演出を派手にしたり。なおかつフタを開けてみたら、あれだけ凄い試合をやっているわけですから。

―要はエンターテインメントとしての度合いを深めていったわけですね。ズッファ体制前というのは、そういう見せる部分にあまり力を入れてなかったんですか？

高阪　そんなに力は入れてないですね。SEGのときはとにかく試合の中身だけで。

―よく「アメリカ人はアメリカ人が勝つことにしか興味がない」って言い方もされますけど。

高阪　いや、そんなことはないですよ。ただ、実際、試合が起こってしまえばそういう雰囲気になるのは当たり前なんですよ。

―まあ、そうですよね（笑）。知らない異国の選手よりは、同胞のアメリカ人を応援しますね。

高阪　自分なんて、最初のキモ戦のときなんかブーイングしかなかったですよ（笑）。

―あのときって、キモのカムバックのための大会だったんですよね。

高阪　そうなんですよ。だから「凄いブーイングを受けるんだろうな」って思ったんですけど、それにしてもあそこまでブーイングしなくてもいいんじゃないかって思いましたけどね（笑）。

―予想を超えるブーイング（笑）。

高阪　凄かったですよ、ホントにもう。逆に気持ちよかったですね。一人も声援を送ってなかったんで、そのおかげで「やったろやんけ！」ってなるし、そのせいで勝てたっていうのは絶対にあると思いますね。

―でも試合を重ねるごとにブーイングが声援に変わっていって。

高阪　そうですね。チャンピオンシップに絡む試合もさせてもらいましたし。だからいま現実的に起こっていることを受け入れる姿勢はあるんですよ、アメリカ人でも。まあ、いまはMMA自体の人気が高まっているから、どんどんアメリカ人の選手は増えていくと思いますけど。

―UFCは夢の舞台になっているわけですね。

高阪　しかもラスベガスとかの大都市で試合ができるわけですよ。日本で暮らしていると、とくに東京近辺だと見えづらいんですけど、アメリカってド田舎からもの凄い選手が出てきたりすることがあるんですよね。で、そういうヤツらは「ラスベガスで試合がしたい！　UFCで俺はスターになるんだ!!」ってことだけを考えて毎日必死にトレーニングして。ハッキリ言って、大統領の名前も知らないような連中がね（笑）。

日本とは違ってどんどん自分を売り込まないといけないのがアメリカのお国柄。上を目指すなら試合に勝つことはもちろんだが、しっかりマイクでアピールすることも重要な要素なのだ。

歓声が「ゴ〜〜〜〜〜〜ッ!!」っていう感じ あの〝音〟だけは日本でも経験したことない

―大統領よりもラスベガスですか（笑）。

高阪　ホントに。アメリカには空港降りたら一面大草原で、もう牛の糞の臭いがするようなところがありますから。そんなところから「草の根分けてでも這い上がってやるぞ！」という連中が集まってきている。

―TUFはそのステップとしての役割になっていますが、高阪さんの目から見てTUF出身のファイターはいかがですか？

高阪　今日もTUF出身のファイターが試合したんですけどね。自分、これは2〜3年前から言ってたんですけど、最近の選手は総合格闘技をイチから始めてる。もう最初っから目指す場所がオクタゴンであったり『PRIDE』であったりするのが、いまと昔が違うところなんですよ。

―いまの選手は、最初から総合格闘技というジャンルの中に明確な目標を持ってスタートできますね。

高阪　昔は柔道やレスリングをやってて、「これから総合のプロになろう」って決心して総合を始めてたんですけど。いまの選手は最初から柱が総合格闘技なんで、凄くソツがないことを普通にやるんですよ。自分の特性、たとえば打撃に自信があるんやったら、そこを柱にして、なおかつタックルを警戒する技術を練習したりとか。そういうふうな一本の柱をもとに練習を組み立てたり、試合のやり方を練習することができるんですよね。

―高阪さんの年代っていうのは、手探りでマニュアルを作っていったところがありますもんね。

高阪　そうですね。だからいま思えば間違ってることを平気でやってたりしてましたから（笑）。だけどそれは全然、無駄にはなってないんですよ。いまの選手は最初から完成度が高いんですよね。昔は、打撃系の選手にはタックルに入って倒してしまえばなんとかなったけど、いまはそれが通用しない。全部できなきゃいけないし、なおかつ自分でどの部分に柱を置くかっていうところに凄く重点を置かなきゃいけなくなってきてるんで。

―では、育成番組出身だからって、侮れないところがあるんですね。

高阪　いや、侮れないですよ。むしろ、よくぞ育ててたというか、見つけたというか、という気はしましたけどね。

―なおかつ彼らはギラギラしたモチベーションも持ってるわけですし。

高阪　ホントにね、「やってやる！」という気持ちは相当ですよ。たとえUFCに上がれたとしても、初めはいわゆる本戦前の試合とか、下のほうの試合なんですが、観客自体がフルハウス時の10分の1ぐらいしかいないんですよ。

―あ、前座はそんなもんなんですか。

高阪　メインにならないとフルハウスにならない。後半になれば立ち見の客もいっぱい出てくるんですけど。だから「そこから這い上がってやろう！」という気持ちは高まるはずなんですよ。ちなみにUFCは観

TKが語る UFCそして『PRIDE』アメリカ戦略

「おまえが言うか?」というアピールもあるけど(笑)そうじゃなきゃアメリカでは生き残れないですから

に行ったことあります?

——ないです。

髙阪　メインのときの歓声なんか、もうなんにも聞こえないぐらい轟音なんですよ。

——ご、轟音?

髙阪　「ゴ～～～～～ッ!!」っていう音しか聞こえない。セコンドの声もアナウンサーの声もレフェリーの声も、なんにも聞こえないんですよ。そんな中で闘うことになれば、「こんな注目されるんやったら、やったろやんけ!」って自然に奮い立つんですよね。

——日本でそういった轟音を体験したことはありますか?

髙阪　ないですね。自分ね、あの轟音だけは日本でも経験したことないです。見たことも経験したこともないですよ。『PRIDE』でもあんな音を聞いたことない。

——プロレスの会場でたまに発生する〝重低音のストンピング攻撃〟ともまた違うわけですか?

髙阪　いやいや、全然比べものになんないですね。ひょっとしたら会場の仕組みのせいかもしれないですけど、声じゃなくて〝音〟なんですよね。

——それはぜひ体感したいですねぇ。

髙阪　うん。あの〝音〟だけは行かないとね、観ないとわからないです。あれはテレビ中継からも伝わらないです。テレビだとそれだけ音が大きかったら何もわかんないんで、ちょっと絞ってるか、もしくは拾わないようにしてるのかわかんないですけど。自分は2～3回ぐらいオクタゴンで気を失なったことがあるんですけど、復活したときにその音から入るんで、ホントになんか叩き起こされるような感じですよね。

——選手からすると、病みつきになる〝音〟というか。

髙阪　もうハッキリ言ってやめられないですよね。だから「もう一回オクタゴンに戻りたい」っていう気持ちになるのは、あの轟音なんですよね～。

——10月には『PRIDE』ラスベガス大会が行なわれますが、その轟音を発生できるか、どうかも楽しみの一つですね。

髙阪　そうですね。『PRIDE』はアメリカで初開催ですけど、ベガスや西海岸は格闘技を受け入れる体制が凄く整っているし、それと同時に、『PRIDE』は向こうでも放送してるじゃないですか。結局、いま目の前で何が起こっているのかっていうのが大事なんですよ。

——ヒョードルもロシア人なのにプロモーションイベントではタイソンより人気があったそうですから。

髙阪　ヒョードルがあれだけの試合を重ねて、連戦連勝で、しかもアグレッシブな闘い方で。そうなると国籍なんてまったく関係なく人気出ますよ。

——でも、英語でアピールしない選手はなかなかオーバーできないって聞きますけど。

髙阪　はいはい、そのアピールの仕方も問われてくるんですよ。試合後のオクタゴンでアナウンサーに「今日の試合、どうだった?」って聞かれて、凄くダメな試合で最終的にポロッと勝ってしまったときでも、「あれが俺の強いところなんだよ!」って凄いアピールするんですよね(笑)。

——ツッコミ待ちぐらいのアピールをしますか(笑)。

髙阪　それはね、見ててもおもしろいですよ。「おまえが言うか?」ということを平気でアピールするっていうね(笑)。あれは育った環境や文化の違いを強く感じますよ。

——じゃあ日本でよくある「しょっぱい試合をして～」「今度は一本かKOで～」というような反省気味のマイクはないんですかね。

髙阪　いや、あり得ないですよ。まあ、たま～にそういう律儀なっていうか、控えめな選手もいますけど、最終的には「俺は強いんだ!!」ってことをちゃんと自分でアピールするっていう。

——髙阪さんはどうでした?

髙阪　自分はしゃべれないとダメだって気づいたんで勉強したんですよ。それでティム・レイシックに勝って、そのあとインタビューされたときは、自分でももうちょっと関節やパウンドで勝ちたかった気持ちはあったんですけど、「とにかくタイトルマッチをやらしてくれ!」っていうようなことを英語でまくし立てて。

こうさか・つよし■1970年3月6日、滋賀県出身。柔道四段というバックボーンで94年にリングス入団。95年にトーナメント・オブ・J優勝。その後、日本人として初めてUFCのレギュラー参戦を果たす。04年にパンクラススーパーヘビー級王座を獲得。06年5月のマーク・ハント戦で現役を引退し、現在、WOWOWのUFCや『PRIDE』のPPVの解説を務める。

——試合の反省より猛アピールをして(笑)。

髙阪　っていうか、そうじゃなきゃアメリカでは生き残れないですからね。

——控えめなことが美徳として通用しない国なんですね。

髙阪　全然、そんなのもう。だから控えめっていうか、要は何も言わなかったらそこまでだし、むしろ「俺なんか全然たいしたことなかったですよ」って言うとマイナスに見られてしまうんですよ。

——謙遜したらそのままストレートに受け取られるという(笑)。

髙阪　いや、でもよく考えたらそれって凄く当たり前なことの一つなんですよね。だって「どういうことをやられてるんですか?」って聞かれて、「格闘技をちょっと」って返したら、「ああ、ちょっとしかやってないんだ」ってやっぱり思われるじゃないですか。とくにアメリカなんて自分みたいに外国人がいっぱい住んでるし、なかなか細かいニュアンスで伝えることができないので。最初にちゃんとその人の人物像はどういうものかっていうのを自分で確認をしておかないと、そのあとの付き合いに影響が出てくるんですよ。だから言ってもらったほうが親切なんですよねえ。

——『PRIDE』も大袈裟すぎるぐらいのアピールが必要なのかもしれないですね。今日はありがとうございました!

【8月27日/都内・WOWOW放送センターの食堂にて収録】

究極格闘技UFCはダナ・ホワイトだけじゃない！

WOWOWプロデューサーおおいに吠える!!

ついでにRINGSの舞台裏も赤裸々に告白！

WOWOWチーフプロデューサー

大村和幸

「UFCとK-1、PRIDE、どれがいいかを視聴者に判断してもらいたい！」

K-1、PRIDEにもの申～す!!　と言わんばかりに、WOWOWプロデューサー大村氏が大絶叫！　UFCの放送開始から4年。ヴァンダレイvsリデルの対戦を前にUFC爆発のカギを握るこの男に『kamipro』が直撃インタビュー。さあ、みんなで究極格闘技UFCの魅力を読破せよ!!（ついでに、リングスの裏話も読もう～）。

聞き手／須羽ミツ夫　構成／松下ミワ

©Photo Courtesy of UFC

――大村さんはリングス中継の最初から携わってらっしゃったそうですね。だとすると、新生UWFを中継するという話の頃から……。

大村　そうです、そうです。あれは1990年の夏でしたかね。「UWFを放送するよ」というところからスタートしたんです。で、そうこうしているうちに年末の松本大会で一気に大変なことになっちゃって。

――UWFの選手会がフロントとの絶縁を宣言した大会ですね。

大村　その後、UWFは三つに分かれましたよね。藤原組と、Uインターと、前田さんのリングスと。で、それぞれから中継の話はきたんですよ。あの当時、Uインターは人員的にもまとまっていた。藤原組はメガネスーパーのバックアップをもとに話がきて。それで僕自身も迷ったんだけど、やっぱり〝UWFの精神〟っていうのは前田日明だろうと。前田日明がひとりぼっちになっても、この線でいくしかないだろうと決断しました。

――三つの中からリングスを選んだわけですね。

大村　ほかを否定するんじゃなくてね。やっぱりUWF本来の思想っていうのは、前田日明の思想だろうというところに行き着いて、前田日明と手を組むことにしたんですよ。ひとりぼっちでしたよね、あのときの前田日明は。

――そうですね。日本人選手は誰もいませんでしたから。

大村　それでクリス・ドールマンとかビル・カズマイヤーとかの外国人選手が来て、旗揚げの91年5月11日、横浜アリーナは4試合だけだったんですけど、凄く盛り上がったんですよね。前田頑張れってことで入場者は約一万人くらい。知ってる選手は前田とドールマンだけでした（笑）。

――そういう人も多かったはずですよね。

大村　よくそれだけ入ったなあと思って。その光景を見て、リングスをチョイスしたのは間違いではなかったっていう実感はありましたね。

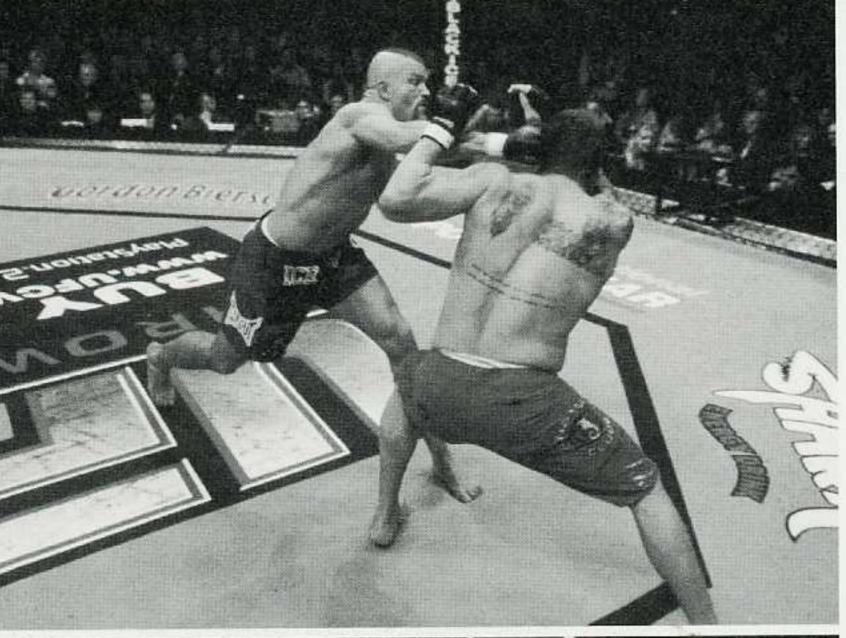
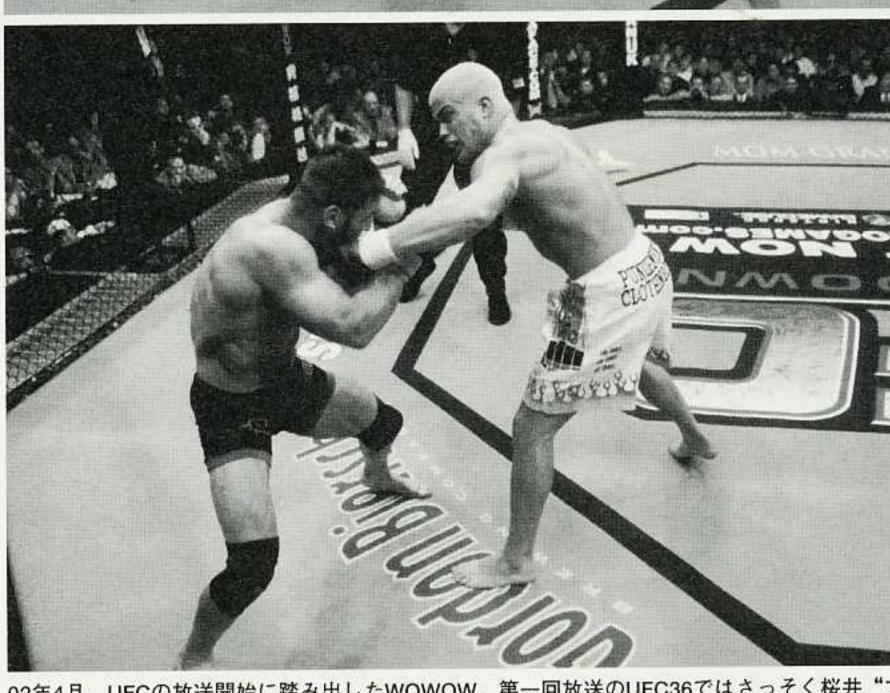
――UFCの話に入る前に、リングスの頃のことをもう少しお聞きします。前田さんとは、番組製作に関して直接話されることはあったんですか？

大村　直接はなかったですね。「次の大会はどんな試合があるんですか？」とか、そういうのはありましたけど。プロモーションで必要でしたから。番組の中身については、まったくなかったわけではないけど、あまりしなかったですね。

――注文がついたりということは？

大村　まったくないです。あくまでも我々のペースでやらせてもらいました。むしろ我々のほうが前田さん、リングスへのお約束として、すべての試合を余すところなく見せますよ、と。二時間で。当時から二時間枠でしたからね。その中で、全部の試合をほとんど切ることなく、キッチリ見せますよと。全体を見せることがリングスの魅力ですよね、というこちらの基本姿勢は話したことはあります。

――当時は、第一試合からの中継はほ

とんどなかったですよね。
大村　なかったでしょう。当時はプロレス中継が花盛りでしたけど、リングスは総合格闘技色を非常に強めたもので、寝技の攻防が多かったじゃないですか。それで僕は、あの手の中継としては初めて天井カメラを導入したんですよ。それによって、真上からの視点というものが、いまでこそ当たり前になってますが、初めて実現したんですね。
――リングス中継が初導入したんですか！
大村　そうすることによって、試合の魅力もより伝えることができるだろうということで。それまでも、撮り方によって工夫はしてたんですが、クレーンカメラとかを使ってもちょっと魅力が出し切れないと。やっぱり寝技をきちんと伝えるには、真上からじゃないとダメだってことでやり始めたのが、まあ、オリジナリティですよね、当時の。
――リングスはその後、ＫｏＫ路線が導入されたりして紆余曲折ありましたが。
大村　進化はしましたよね。より緊迫感を増した内容にはなったんですが、ウチの視聴率もお客さんの来場数も含めて、下がってきちゃったってことで、反比例したんですよね。場内のお客さんは凄く盛り上がってたんですが。リング上は進化してるのに、なんでお客さんは来てくれないんだろう、なんで視聴率は下がってるんだろう？　という複雑な思いはありましたね。
――ヴォルク・ハンなんかに代表されるように、ＵＷＦスタイルの延長にまだファンタジーというか、幻想を抱ける部分があったそれまでの路線から、ＫｏＫルールになってより厳しい闘いを追求するようになって、お客さんも変わりましたよね。
大村　お客さんがついていけなかった部分はあったのかもしれないですよね。そこは僕らの努力不足かもしれないです。
――リングスの放送開始はＷＯＷＯＷ立ち上げ直後でしたよね。それは日本初の有料放送の起爆剤にはなったんでしょうか。
大村　本放送開始が91年4月です。その4月に後楽園で旗揚げイベントをやって、実際の旗揚げ戦が5月。当初から凄い人気だったんですが、どんどんどんどんうなぎ登りになっていって、年末からトーナメントを始めて。最初は東京と大阪だけだったんですけど、そのあとは仙台とか福岡とかでもやり始めて、もうチケットがプラチナチケットになっちゃったんですよね。それで視聴率も、局で一番になりました。
――看板番組になったわけですね。
大村　だから、助けてもらいましたね。お互いに成長して、助け合ってたんでしょうね。凄いときはホントにチケットが手に入らなくて、すぐに完売でした。

02年4月、UFCの放送開始に踏み出したWOWOW。第一回放送のUFC36ではさっそく桜井"マッハ"速人vsマット・ヒューズの大一番を放送。その後も、オクタゴンで行なわれた数々の名勝負を放送し続けている。ヴァンダレイvsリデルが実現すれば、また歴史的な一戦を放送することになりそうだ。
©Photo Courtesy of UFC

――ＷＯＷＯＷのウリである映画、音楽というエンターテインメントに、格闘技が加わったと。
大村　そう。だから、ＷＯＷＯＷのブランド的な色も出せたんですね。いまやってるＵＦＣはアメリカからの中継じゃないですか。リングスは我々の開局と同時にできたものですから、オリジナル・コンテンツとしての意味合いが非常に出せたんです。当時、有料放送ってのが出てきたぞっていう「新しい」イメージがウチにはあったんですね。お互いに、いい意味で影響し合ったんですね。
――だとしたら、２００２年の活動休止は余計に寂しかったんじゃないですか。
大村　そうですね。流れがリングスからＫ－１に移りましたから。
――Ｋ－１は一躍、格闘技ブランドの代表格になりましたからね。
大村　そこが大きな分岐点だと思うんですよね。あとは前田日明の引退。そのあとは田村潔司などが頑張ったけれども、やっぱりリングスは前田日明なんだっていうのはね、計り知れないところがありますね。
――そのあいだ、ＪＷＰ中継も放送してましたよね。
大村　やってました。僕は担当してな

格闘技の中継としてはＷＯＷＯＷが初めて天井カメラを導入したんですよ

旗揚げ戦からリングスの放送を欠かさず続けてきたWOWOWだが、02年に契約終了。それと同時にリングスも活動一時幕を閉じることになった。当時、代表の前田日明は「また戻ってくる！」と高らかに宣言したが、う〜ん、現実は厳しい!?

僕自身も迷ったんですけど、やっぱりUWFの精神っていうのは前田日明だろうと

いですけどね。リングスより短期間でしたね。

—そうですか（笑）。メガネスーパーを資本としたSWSも一時期、やってましたよね。

大村　そうですね。SWSはWWF（現・WWE）との合同興行がありましたよね、東京ドームなんかで。あれを中継して、その流れでSWS、WARをやってた時期もありました。

—これはさらに短期間ですね（笑）。

大村　やっぱり、メインはリングスですから。あくまでリングスを軸にして、という考え方でしたから。

—かなり前置きが長くなりましたが（笑）、UFCの話を。

大村　2002年4月が放送開始ですね。リングスが終わったのがその年の2月ですから、ちょうどいい時期にスイッチできたんですよね。それで、最初の放送となったその年の3月の大会で、ちょうど桜井"マッハ"速人が出て。

—UFC36のマット・ヒューズ戦ですね。

大村　それで放送開始の会見にも、マッハさんに出てもらいましたね。

—放送が決まったのは、どのような経緯で？

大村　まあ、いろいろあいだに入ってる人がいてということなんですが、UFCってネバダ州のラスベガスを本拠地にしてますよね。ボクシングも、ラスベガスが中心じゃないですか。それを統括してるのが、ネバダ・アスレチック・コミッション。日本で言う体育協会みたいなものですね。ここの許可が下りなければ、ラスベガスでボクシングはできないんですよ。ライセンスなんかも下りない。だから、昔タイソンがラスベガスから追い出されたんだけど、アトランティックシティのほうではライセンスが下りて、試合ができると。

—違う州だから可能なんですね。

大村　そう。そのアスレチック・コミッションがUFCを管轄してるわけですよ。だからこれはスポーツライクなものであって、一般の格闘技とは違うと。ネバダ・コミッションが許可してるということで、非常に格式のあるものだと。で、僕らはボクシングの中継も早くからやってますから、その関係者から「UFCをやりませんか」という話が来たんです。

—なるほど。

大村　同じネバダ州コミッションに入ってるなんて、普通はあり得ない。岸記念体育館に、格闘技団体の事務所があるようなもんですよ。

—それはあり得ないですね（笑）。

大村　それぐらい格式のあるものなんですよ。それならやろうかと。試合も、ホイスがいたときみたいに血みどろじゃないし。ズッファ社になってからは、

きちんとルールに基づいて、早めに試合を止めるということで、それがネバダ・コミッションに認められたわけですよ。それで推薦を受けて、放送を始めました。

——UFCは基本的に向こうからパッケージで映像が来て、それを加工するかたちですよね。やっぱり、作り方は違いますか。

大村　いや、基本姿勢は変わりません。一試合目からキッチリ見せましょうということですね。いまも昔も、リングス時代もUFCも。ただ、UFCは現地の放送が3時間なんですよ。だから、一日ディレイで放送してるんですが、試合以外の部分なんかは切ってますね。時間があるようだったら、入場なんかも見せますが。

——実際、番組の作りは至ってオーソドックスですよね。

大村　あくまでも、リング上で起こっていることがすべてじゃないですか。我々がどんな作りをしたって、それには敵わないんですよ。撮り方の工夫はありますけど、そこは現地の方々がやることで、ウチらが手を出せることではない。だとしたら、ウチらはそれをキッチリ見せましょうと。それが我々の思想だし、ペイテレビとしての基本理念だと思うんですよね。そのために視聴者からお金をもらってるわけですから。

——髙阪さん、宇野選手、フリーライターの稲垣収さんという解説陣も、コアなファンからすると合点がいく組み合わせですよね。

大村　そうですね。知名度のある人を呼んでくるっていう手もあるんでしょうが、どうしても内容に入り込めないんですよね。連続性のあるものですから。その場その場だけの現象を見るだけでは語れないんで、僕はこういう布陣にしてるんです。

——視聴者はマニア層を想定しているんですか？

大村　マニア層ということではないんですが、日本ではK−1や『PRIDE』を見て、ある程度慣れた方がいるわけじゃないですか。そういう方々に、

©April Pishna

UFC人気の起爆剤となった格闘リアリティ・ショー、TUF。日本ではWOWOWをはじめ、いずれのチャンネルでも放送は決まっていない様子だが、アメリカで一大フィーバーを巻き起こしている番組なだけに、一度見てみたい!!

シウバがどこまでできるのかっていうのを見る大きなチャンスだと思うんですよね

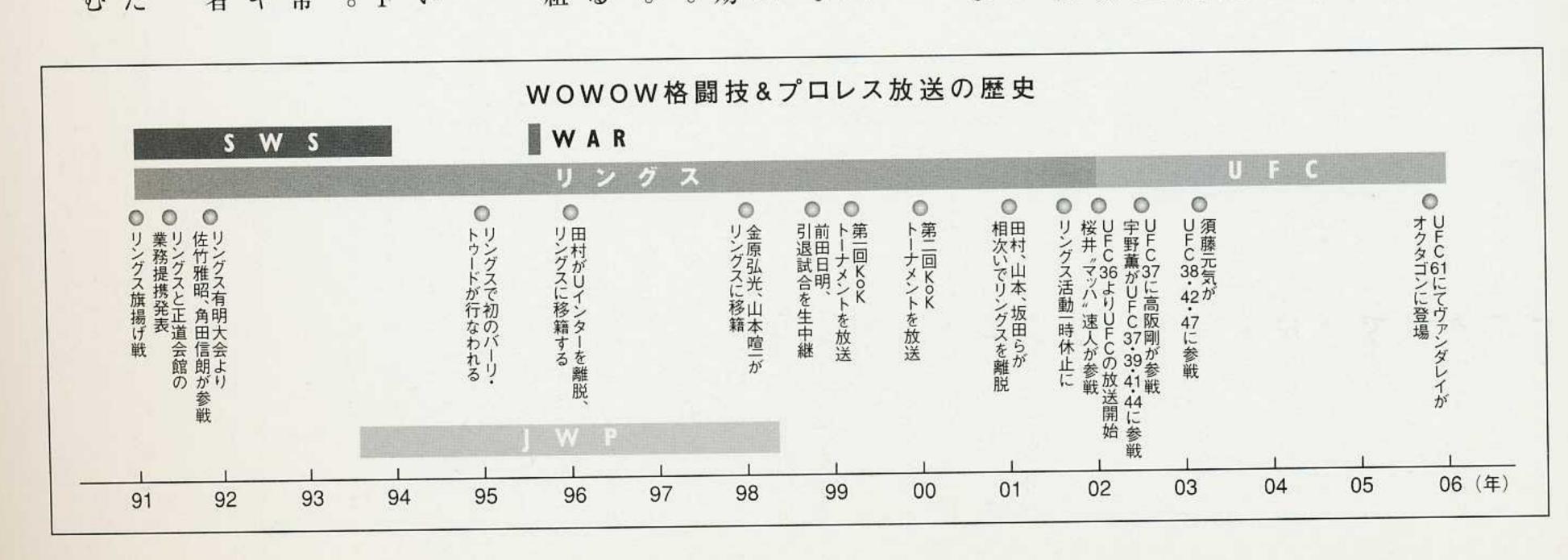
こういうものもあるよという提示ですよね。だから、ホントは広い層に見てもらいたいんですよ。それで、そんなに遅い時間にはやってないんです。月曜日の夜10時ですから、見ようと思えば、中学・高校生も見られる時間帯なんです。だから見てもらって、K−1や『PRIDE』と比較してもらいたい。それで、『PRIDE』に出てる選手なんかも、みんな「UFCに出たい」って言ってるわけじゃないですか。僕はどっちがいいかは、言いません。視聴者の方々が、見て判断してくださいと。そのために、余すことなく見せますよと。

——押しつけはしないと。

大村　そう。K−1とか『PRIDE』を見てる人だったら、わかると思う。見られる土壌にあるわけだし、このパンチは効いてるとかこの絞め技は有効だとか、わかるわけじゃないですか。金網の闘い方は少し違いますけどね。今回、（ヴァンダレイ・）シウバも出るじゃないですか。そのために特集を組むんでしょ？

——まあ、否定はできません（笑）。

大村　高山善廣とか藤田和之も出たいと言ってたし、日本人でも最後はUFCに出たいと思っている選手は多い。彼らの気持ちの中では、UFCを非常に意識している。だったら、それをキッチリ見せましょうと。あとは視聴者の皆さん、判断してくださいと。

——さきほどシウバの名前が出ましたが、UFCと『PRIDE』とからむことでの放送の変化はありますか？

大村　『PRIDE』なんかを見てる人にとって、より身近になってきたんじゃないですかね。あのシウバが出るんだということで、より親近感が湧く。いままでは、人によっては、これはアメリカのものだという意識しかなかったものが、より身近に感じられて、じゃあシウバはどこまでできるのかっていうことを見る大きなチャンスだと思うんですよね。UFCのオクタゴンにシウバが上がる予定ですから、そこでの反響を見てみたいという気持ちはありますね。

――ダナ・ホワイト氏とはお話されたことは？

大村　ありますよ。印象は……実業家ですよね。選手じゃないのに人気があるんですよね。不思議なタイプですよね。なんというか、選手がみんなついてくる。

――『PRIDE』やK―1との関わり方を見ても、かなりの策士という印象を受けるんですが。

大村　今回『PRIDE』はシウバという、エース中のエースを持ってきた。そこで、ビジネス面を重視したんだと思います。

――いま、UFCはアメリカ国内でも「ジ・アルティメット・ファイター」（TUF）という番組をきっかけに人気が上がっているみたいですね。

大村　ええ。スパイクTVが、WWEを放送してたのをやめて、UFCに変えちゃったんですよね。それを見ても、いま、時流はUFCだってことがわかりますよね。それにUFCは独自の道場で、ランディ・クートゥアーとかをコーチにして予選をやるわけじゃないですか。それで、勝ち抜いたら本戦に出てくる。これは人気が出ますよ。やり方がうまい。ああいうのは、むしろ僕らがやりたいくらいですよね。日本でトーナメントをやって、勝ったら向こうで出られるっていう。

――TUFは日本での放送は……。

大村　いまのところ、予定はないです。できないわけじゃないんですが、いまは本戦をしっかり見せましょうということで。まして、本戦も二カ月に一回だったのが、ペースが上がってますからね。これが落ち着いたら検討したいと思います。アルティメット・ファイト・ナイト（UFN）も日本人が出たりしてますから、併わせてね。

――いま、WOWOW局内で格闘技はどういう位置づけなんでしょうか。

大村　スポーツの中で、3本柱があるんですよ。まずテニス。グランドスラムのうち3つやってます。それからサッカー。ヨーロッパのサッカーですね。そして格闘技。ボクシング含めて。サッカー、テニスはシーズンスポーツですが、通年でやれるのが格闘技なんですね。その意味では、非常に日常的な、視聴習慣のつきやすい競技だと思ってます。視聴率も、UFCはスポーツの中で一番ですからね。

――ちなみに大村さんイチ押しの選手は？

大村　僕はねぇ〜……アルロフスキーだったんですけど、最近はどうしちゃったの？　みたいな。あれはねぇ、北の湖になると思ったんだけどなぁ〜。とんでもないヤツが出てきたと。ヘビー級だし、ルックスもいいし、寝技もOK、打撃もOK。こいつに勝つヤツはいないと思ってたら……ねぇ（笑）。

――最近は不調ですよね（笑）。UFCにもし注文があるとしたら？

大村　絶対王者が出る必要はないけど、毎回出るような、おなじみの選手はほしいですよね。アルロフスキーがそれになると思ったんだけど（笑）。あとは日本人選手をもう少し出してほしい。宇野選手もまた出場してほしい。髙阪さんは引退しちゃったしね。ライト級なんか、日本人同士でやってもいいじゃん、とも思うんですけどね。

――とりあえず当面はUFC一筋ですか。

大村　そうですね。放送するのはUFC一本でいきます。いまは、もっと盛り上げたいですね。UFCの魅力を存分に伝えて、潜在的なファンに見てもらうこと。そこは『kamipro』さんにもお願いしたいところですね（笑）。

【06年8月25日／WOWOWにて収録】

スパイクTVがWWEからUFCに変えたのを見ても 時流はUFCだってことがわかりますよね

■おおむら・かずゆき　1960年4月11日、山梨県出身。映像関係の実務経験を生かし、90年、WOWOW立ち上げに参加。故・ジャンボ鶴田さんとは遠縁にあたり、小・中・高・大学とすべて同じ学校を卒業している。

『UFC63』
アメリカ・カリフォルニア州 アナハイム・アローヘッド・ポンド
9月23日（土）［現地時間］

［対戦カード］
マット・ヒューズ vs BJペン
マイク・スウィック vs デビット・ロアゾー
ジェイソン・ランバート vs ラシャド・エヴァンス
ジョー・ローゾン vs ジェンス・パルヴァー
ガバ・ルイディガー vs メルビン・ギラード
ホジャー・ウェルタ vs ジェイソン・ラインハート
マリオ・ネイト vs ガブリエル・ゴンザーガ
ダニー・アバディ vs ジョージ・グーグル
デビッド・リー vs タイソン・グリフィン

［WOWOW放送］9月25日（月）22:00〜
［放送問い合わせ］WOWOW　0120-480801

PRIDE.32
"THE REAL DEAL"
THOMAS & MACK CENTER
LAS VEGAS
OCT.21,2006

タイソン襲来!!

風雲急を告げる
10.21 PRIDEラスベガス大会
先取り徹底大特集!!

ドル人気、大爆発!!

最強皇帝、待望のアメリカ初登場に“タイソン・サプライズ”を超える大歓声!!

アメリカでヒョードル人気大爆発！ 8月19日（現地時間）ロス郊外の『FOXスポーツ・グリル』で行なわれたPRIDEラスベガス大会公開記者会見。タイソン登場のサプライズばかりが取り上げられがちなこのイベントだったが、じつは真の主役は、待望のアメリカ登場をはたす、エメリヤーエンコ・ヒョードルだった。

現在、MMAブームと言われているアメリカではあるが、『PRIDE』がどこまで認知されているか、今回のイベントにどれだけファンが集まるか未知数であったが、フタを開けてみればギッシリ満員の大盛況。そこにつめかけた“青い目の格闘セレブ”のお目当てこそがヒョードル。その人気はとにかく異常なほどだった。

今回来場したPRIDEファイターは、一人一人、紹介VTRつきで入場してきたのだが、ヒョードルの場合、ビジョンにその姿が映し出されただけで、悲鳴のような大歓声が起こる。そのボルテージは、ジョシュ、バローニといったアメリカ人ファイターをはるかに上回るものだった。そして、ついに本物のヒョードルが登場。場内はスタンディング・オベーション&フラッシュの雨だ。

ここで司会者が観客に向かって「10月21日、ついにヒョードルがアメリカで試合を行なう。ヒョードルと誰の試合が見たい？」と振ると、客席からはシルビア、ジョシュ、シウバの声。

「シルビア？　オファーは出したんだけど、彼は『ノー』と言って逃げたんだ」と答えると、場内大ブーイング。

「しかし、この強豪から逃げない男がいる！」そこへ登場したのが我らが熱血オ

8.19 アメリカ・南カリフォルニア
FOX SPORTS GRILL

『PRIDE.32 "THE REAL DEAL"』ファン公開カード発表会見リポート

タイソン登場のビッグサプライズに沸いた8.19PRIDEファン公開会見。しかし、ファンが待ち望んだ真の主役は、エメリヤーエンコ・ヒョードルだった！『PRIDE』アメリカ上陸を待ちわびた、"青い目の格闘セレブ"たちが集結し、異常な盛り上がりを見せたイベントの模様を完全リポート！

取材／堀江ガンツ　撮影／黒田史夫

イベント会場となったテーマレストラン『FOXスポーツ・グリル』の前には、炎天下にも関わらず、早くから長蛇の列ができた。アメリカの"格闘セレブ"の期待感をうかがわせる。

会場内はご覧の混雑ぶり。写真はイベント開始前、プロモーションビデオが流されているところだが、ヒョードルらが画面に映し出されるだけで、異常なほどの大歓声が起こった。

英語でスピーチを行なった榊原代表。「サカキバラは呼びにくいので、"ノブ"と呼ばれています」と挨拶すると、場内からは「ノブ」コールが。これからは日本でも「ノブ」と呼ぼう！

『PRIDE』アメリカ初進出のメインカードはヒョードルvsコールマン。アメリカ人のコールマンが挑戦するにも関わらず、会場ではヒョードルへの歓声のほうがはるかに多かった。

イベントが終わったあとも、大勢のファンがヒョードルを"出待ち"。大会前のファンの熱は日本以上と言ってもいいだろう。10.21当日ははたしてどれだけの熱いファンが集まるか？

ヒョード

ヤジ、マーク・コールマンだ。

「俺は自分とアメリカのために、この男を倒す！」そう、ファンの愛国心を煽るように宣言したコールマンだったが、なんとファンの反応は、歓声とブーイングが半々。それに対し、ヒョードルが「アメリカに来られて嬉しい。10月はベストを尽くす」と語ると、場内は割れんばかりの大歓声に包まれたのだ。これには本当に驚かされた。

ロシア人王者に立ち向かうアメリカ人という、コールマンが絶対にベビーフェイスになる図式にも関わらず、ファンの支持はヒョードルに集中。アメリカのファンのあいだでのヒョードル人気は、ナショナリズムをも超えるものだったのだ。

このあと、マイク・タイソンがサプライズ登場をはたし、もの凄い歓声に包まれたが、ヒョードル登場時には及ばなかった。アメリカの格闘技ファンにとってヒョードルは、それだけの求心力を持っている。

10月21日、この求心力が、遠心力となって爆発する！

救世主か、悪魔か？
あのタイソンが、ついにPRIDEについて語った!!

「PRIDEのリングで闘ったら さぞや気持ちいいだろうな」

8月19日（現地時間）ロス郊外で行なわれたPRIDEラスベガス大会公開会見でサプライズ登場をはたしたタイソン。この会見直後、なんと本誌のインタビューに答えてくれた！『PRIDE』と電撃合体を表明したタイソンの真意はいったいなんなのか？ 貴重な生の声を完全独占でお届けします!!

聞き手／堀江ガンツ　撮影&通訳／黒田史夫

Mike TYSON

「今日は、スペシャルゲストが来ています。ボクのブラザー、マイク・タイソンです！」

8月19日にFOXスポーツ・グリルで行なわれたPRIDEラスベガス大会ファン公開会見終盤、DSE榊原代表のこの呼びかけを受けて、なんとあのマイク・タイソン登場した！

ほとんど事前に情報が漏れなかったこのビッグサプライズに、悲鳴のような大歓声に包まれる場内。これまでK－1を始め、スポーツイベントに観客として姿を見せることはたびたびあったタイソンだが、総合格闘技の公式イベントにゲストとして登場するのは初めてのことだ。

タイソンは榊原代表を始め、ヒョードル、ジョシュら壇上のPRIDEファイターと一通り握手を交わしたあと、マイクを握って話し始めた。

「ここにいるファイターは、もっとも素晴らしいアスリートたちだ。俺はいま、彼らと同じ舞台に立つチャンスを得た。近い将来、『PRIDE』に参戦するよ。彼らと世界に向けてショーができるなんて凄いね。『PRIDE』の一員になれて嬉しいよ。『PRIDE』には輝かしい未来が待っている。

俺自身はこれまでいろんなトラブルに巻き込まれて、大変だったけどさ（苦笑）、人生は悪いことばかりじゃない。またお金を稼ぐんだ」

こう、時折、笑みを浮かべながらスピーチしたタイソン。「『PRIDE』の一員になれて嬉しい」という発言のとおり、最後は選手全員と集合写真に収まった。

そしてイベント終了後、久々にファンの大歓声を受け上機嫌だったからか、タイソンから本誌のインタビューに対してなんとOKの返事が！

ダメ元でイベント前、タイソンのマネージャーに頼んでおいたものが、本当に実現してしまったのだ。我々に与えられた取材時間はわずか5分間。しかし、『PRIDE』との合体を表明した直後、タイソンの貴重な肉声が聞けることには違いない。こうしてマイク・タイソン独占ショート・インタビューは実現した。

──ミスター・マイク・タイソン。今日はお会いできて光栄です！

タイソン　オマエら、日本人だろ？

──はい。日本のMMA&プロレスリングマガジンです。

タイソン　コンニチワ。俺は日本人が大好きさ。いつも俺に親切にしてくれる。仲良くしようぜ。

──よろしくお願いします！　まず、今日はどういった理由でこのイベントに顔を出したんですか？

タイソン　ミスター・サカキバラに招待されたから来たんだよ。いろんなファイターやファンに囲まれて楽しかったね。

──『PRIDE』の印象を聞かせてください。

タイソン　とても素晴らしい選手が揃っていて、そのオーガニゼーションも優れている。『PRIDE』の一員になれて、俺は幸せだね。

──興味あるファイターはいますか？

タイソン　ビクトー・ベウフォートは友だちなんだ。彼の試合を間近で観たいね。あと、ボブ・サップはどこに行ったんだ？

──タイソン選手同様、ただいま休業中のようです（笑）。

タイソン　あと、あのロシアン・ガイは凄いヤツだな。

──ヘビー級チャンピオンのエメリヤーエンコ・ヒョードル選手ですね。

タイソン　そう、ヒョードル。俺は彼のファンだよ。凄いファイティング・スピリットを持っているし、パンチもいい。あとフィル・バローニもいいフックを持っているな。ファイティングってやつは気持ちと頭脳が大事なんだ。俺も彼らと一緒に闘ってみたいね。とても気持ちがいいはずだ。

──タイソン選手は昨年6月（ケビン・マクブライドに6ラウンドKO負け）以来、試合から遠ざかってますけど、そろそろリングが恋しくなってきたんじゃないですか？

"人類60億最強の男"ヒョードルと、"宇宙最強の男"タイソンがついに遭遇！ タイソン自身「ヒョードルのファン」だと言うが、はたしてこの二人が同じリングに上がることはあるのか？ 壇上でガッチリ握手を交わした榊原代表の手腕に期待したい。

タイソン　それはわからない。いまはただ、自由を楽しんでいるだけだ。俺もかつていろいろあって、リングが嫌になったこともあるからな。でも、今日『PRIDE』の連中を見てたら燃えてきたよ。あ～、俺も金が稼ぎてぇなってね（笑）。いつか『PRIDE』のリングに立ちたいよ。そうなったら素晴らしいね。

──タイソン選手はMMAには興味がありますか？

タイソン　MMAは大好きだよ。とてもエキサイティングな試合だし、エンターテインメントとしても素晴らしい。

──10月21日のPRIDEラスベガス大会は観戦に来ますか？

タイソン　ああ、その予定さ。いろんな人の試合が観てみたい。楽しみにしてるよ。

〈ここでマネージャーから、そろそろインタビュー終了だと告げられる〉

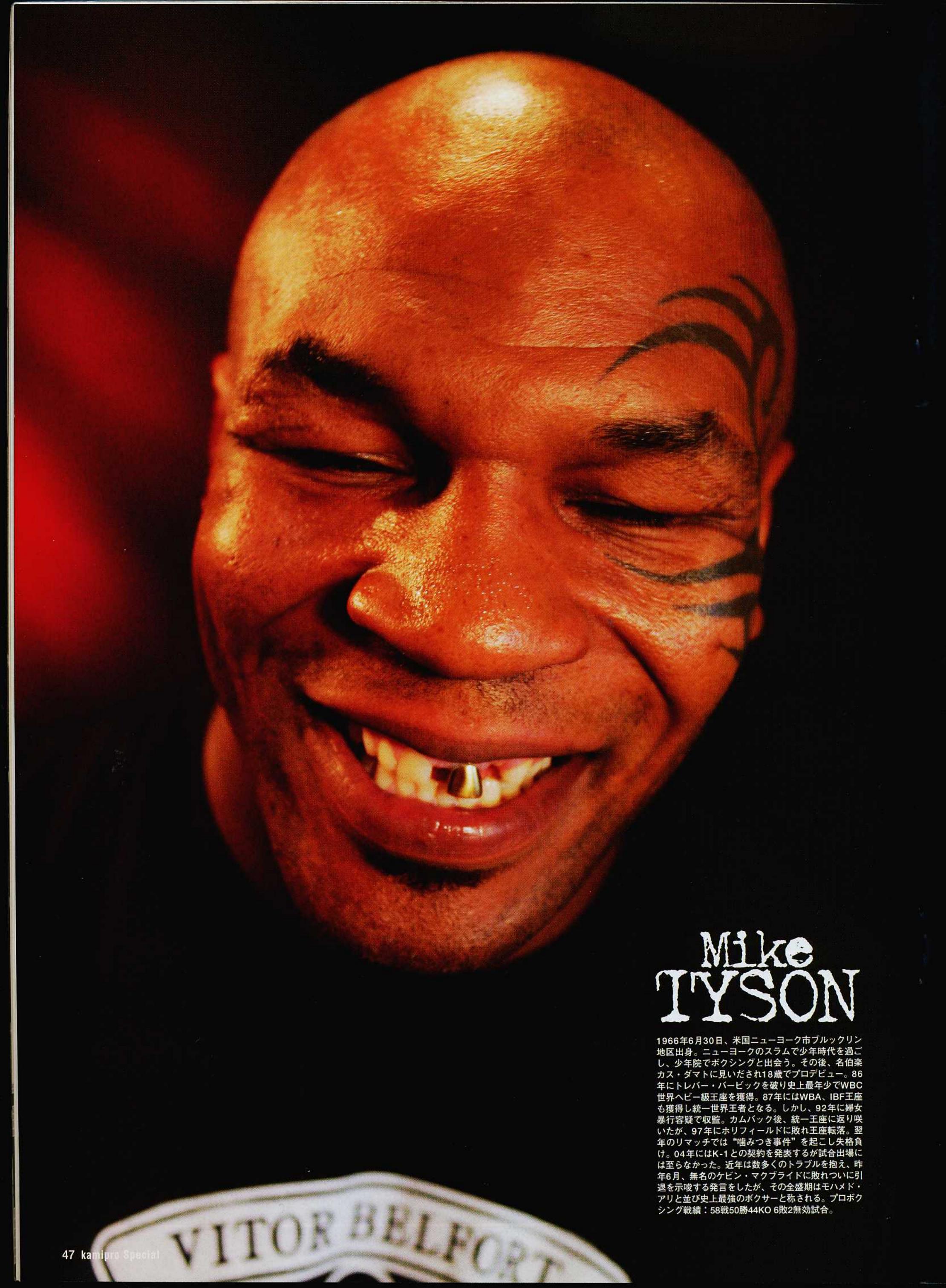
──では、最後に日本のファンに一言メッセージをお願いします。

タイソン　いつも応援ありがとう。俺は日本人が大好きさ。みんなに会いたいし、ミスター・サカキバラにも感謝してるよ。

わずか5分間のインタビューだったが『PRIDE』やMMAに対する思いをとてもフランクに語ってくれたタイソン。「いつか『PRIDE』のリングに立ちたい」という発言は、タイソンが参戦を希望しているようにも、まだその気はないようにも取れるが、タイソンが『PRIDE』に対して、極めて好感情を抱いていることだけは、間違いないだろう。

はたしてタイソンvsPRIDEファイターのスーパーファイトは実現するか？　次なるアクションにが然、注目だ！

Mike TYSON

1966年6月30日、米国ニューヨーク市ブルックリン地区出身。ニューヨークのスラムで少年時代を過ごし、少年院でボクシングと出会う。その後、名伯楽カス・ダマトに見いだされ18歳でプロデビュー。86年にトレバー・バービックを破り史上最年少でWBC世界ヘビー級王座を獲得。87年にはWBA、IBF王座も獲得し統一世界王者となる。しかし、92年に婦女暴行容疑で収監。カムバック後、統一王座に返り咲いたが、97年にホリフィールドに敗れ王座転落。翌年のリマッチでは"噛みつき事件"を起こし失格負け。04年にはK-1との契約を発表するが試合出場には至らなかった。近年は数多くのトラブルを抱え、昨年6月、無名のケビン・マクブライドに敗れついに引退を示唆する発言をしたが、その全盛期はモハメド・アリと並び史上最強のボクサーと称される。プロボクシング戦績：58戦50勝44KO 6敗2無効試合。

賛否両論 マイク・タイソン『PRIDE』と電撃合体を Do The Judge!

携帯サイト『kamipro Hand』で緊急アンケート実施!

飲み込むか? 飲み込まれるか? 世界で最も有名な格闘アイコン、マイク・タイソンが『PRIDE』と電撃合体!! 現地時間8月19日、10月21日に開催される『PRIDE』ラスベガス大会のカード発表会見で発覚したこのビッグサプライズ。タイソンという"異物"投入で、賛否両論がうずまくこの問題を緊急アンケート!

構成／真下義之

Q.1 マイク・タイソンと『PRIDE』の電撃合体、あなたは賛成ですか? 反対ですか?

賛成 65% ／ 反対 35%

賛否両論! マイク・タイソンと『PRIDE』の電撃合体は、賛成が65パーセントを獲得! しかし、この65パーセントはタイソンの『PRIDE』参戦の期待感に加えて、アメリカ進出における"広告塔"の役割を評価する声も多い。一方、反対意見ではタイソンとK-1の交渉破綻の過去を危惧する人も。はたして『PRIDE』にとってタイソンという毒薬は吉と出るのか? 凶と出るのか?

賛成した人の意見

- 『PRIDE』を有名にしてくれそうだから。
- あの薄いグローブで、パンチを振り回すタイソン……ゾクゾクする試合が観れそう。タイソン率いるボクシング軍vs『PRIDE』軍なども観てみたい!
- ラスベガス大会のパブリシティには、よいのではないでしょうか?
- アメリカ戦略の成功には知名度のあるタイソンが不可欠。DSEとお互いが満足する関係を築いてほしい。
- おもしろくなれば、なんでもいい。
- いまの『PRIDE』には話題が必要ですよ。今後、拠点をアメリカに向けるなら大収穫でしょ。タイソンはヒーローとヒールの二面性をもっているので活躍できなくてもありかなと。
- 腐ってもタイソン。
- ほかの選手たちが有名になるチャンス
- K-1にいても戦う相手がいない。『PRIDE』のほうが相手も多く、ルールも向いている。
- ボクシングは一般的にメジャーだから、注目されていいと思う。
- 純粋な競技化が進む『PRIDE』において、こういったイレギュラー的特別マッチはさらなる広がりへの起爆剤になると思う。単純に楽しみだ。
- 以前のアントニオ猪木のように広告塔として良いと思う。
- 利用するだけ利用したら、本来の『PRIDE』で勝負すればいい。
- 彼は格闘界のレジェンド。『PRIDE』という最高の舞台によくぞ来てくれたという感じ。熱いファイトを見せて欲しい! もう言葉はいらない!
- 『PRIDE』が世界展開する上での、うってつけのカモだと思う。
- 賛成ではあるが「PRIDEルールに挑戦」という条件付きの賛成です。ボクシングマッチなら意味はないでしょう?

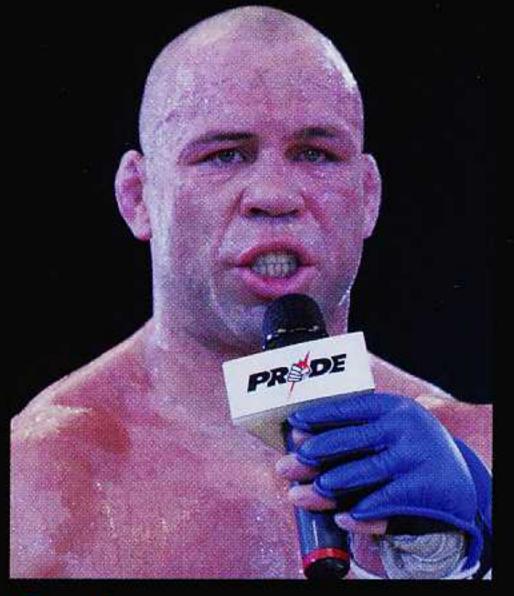
反対した人の意見

- 出場しそーにないから。
- 『PRIDE』にとって劇薬にしかならず、副作用があまりにも大きすぎる気がする
- ロートルが過去の栄光だけで輝ける場所であってはならない!
- もう化石でしょ(クリチコなら期待)。榊原氏の過去の発言にも納得いかない。
- 『PRIDE』はいままでもいろんな選手、団体を利用し、幻想や夢を壊してきた。これ以上、夢を壊さないで!
- どうせ試合しないんだから、お金がもったいない。
- もう歳だし、実戦からも遠ざかってるし、ただの売名行為としか思えない、総合で勝てるわけがない、頼むから試合には出ないでほしい。
- K-1は金食いの厄介者を手放せて良かった。絶対にトラブルを起こすと思う。
- タイソンに金を使わず、いろいろな国の未知の強豪や煽りVTRに金を使ってほしい。
- PRIDEボクシングルールなんて言うのは、榊原社長が自分のやっていることにプライドを持っていない証拠だし、ボクシングをリスペクトしていない証だと思う。
- いままでの路線から外れすぎで、夢が広がるより迷走と感じてしまう。
- 素晴らしい伝説を壊してほしくない。
- すでに終わった"元選手"は髙田ひとりで十分。世界最高峰を名乗る『PRIDE』が愚行をなすことで、本来の選手の価値が貶められてはならない。
- どうせなら、現役ランカーを引っ張ってこい!
- K-1への嫌がらせとしか思えん。最近の榊原社長の発言は、中国の市場に期待したりで、イノキゲノムっぽく不安でたまらない。
- すでに幻想のないタイソンの圧倒的現実なんて興味ない。『PRIDE』はどこに行っちまうんだ!!

てほしい。

Q.3 『PRIDE』のマットでマイク・タイソンに期待する事は?

- 積年の夢、髙田統括本部長とのエキシビションマッチ実現を希望!!
- 対西島、ミルコ、ハントなど、立ち技出身の選手たちがボクシング勝負でどこまで通用するかが観たい。
- やるんであれば特別ルールでなく普通のPRIDEルールで!
- 本気でやってみろ!
- このままずっと『PRIDE』に関わっていってほしい
- 総合でボクシングの素晴らしさを世間に知らせてほしい。西島vsハントのような試合をしてもらって、タイソンの第二の人生をファンみんなで祝福してあげたい
- 現実問題、一線級と渡り合うのは厳しいでしょう。飽きられるまでの3試合ぐらいが限度だと思うけど。でも観たい
- パフォーマーとして楽しませておくれ。練習してないだろうから、勝敗には期待していません。
- ルール問題で振り回される可能性が大ですが……夢のカードとしてボクシングルールでのミルコ戦は観たい!
- シンプルに『PRIDE』の立ち技大会(計画が続いていたら)に参戦。
- 海外版統括本部長として、がんばってもらいたい。
- 話題だけを作らないで、しっかりとリングにあげてほしい。
- タイソンには『PRIDE』ルールでやってもらって、パウンドでボロ負けしてほしい。
- まぁ、格闘技版レッスルマニア的な起用ならいいんじゃないですか。
- 脚の筋を傷めているんだから、試合はしないでほしい。
- これを機にプロボクサーがもっと『PRIDE』に参戦してくれれば嬉しい。
- フジテレビの放送再開。
- 期待感はまったくないので、どうでもイイです。
- タイソンってやっぱドル箱だからビジネスとしては『PRIDE』が潤うんじゃないかな!
- 正直言って、総合の試合をするとは思えないし、することに期待していない。してくれるならもちろん嬉しいが。選手としてよりも世界戦略の広告塔として頑張ってほしい。
- 最後に男の意地を見せてもらいたい。
- タイソンが、どこまで狂暴か知りたい。
- 漫画の敵キャラみたいなスーパーヒール。最後は負けるが、前半メッチャ強いキャラを期待。
- PRIDE戦士と交流して、ボクシングテクニックを伝えることを期待する。
- 耳を噛んだり、といった反則決着だけは勘弁し

Q.2 マイク・タイソンと闘わせたいPRIDEファイターは？

1st ミルコ・クロコップ 271票

3rd ヴァンダレイ・シウバ 175票

2nd エメリヤーエンコ・ヒョードル 180票

6th 藤田和之 56票

5th 西島洋介 75票

4th マーク・ハント 148票

7th	なし	39票
8th	美濃輪育久	34票
9th	吉田秀彦	19票
10th	セルゲイ・ハリトーノフ	15票
次点	髙田延彦	11票

ボクシングルールでの登場が噂されるタイソンだけに、1位から5位まで打撃系オールスターが勢揃い！　1位を独走ゲットしたのは『PRIDE』打撃シーンを象徴する男、ミルコ。ストリート育ちの札付きのワルと警官〜国会議員のエリートとの正反対の両者だがミルコはK-1在籍時からタイソン戦を熱望！　2位と3位はヘビー級の"皇帝"とミドル級の"絶対王者"が順当にランクイン。4位には"和製タイソン"西島とパンチだけで名勝負を展開したハントが登場。その西島は藤田を押さえ、日本人としては最高位の5位にランク！　さらに次点には過去に対戦寸前まで行った髙田統括本部長も登場！　どの顔合わせも実現すれば、全米も鳥肌立ちまくり！

●耳を噛んだり、といった反則決着だけは勘弁してほしい。

●ぜひ立技限定でやってほしい。タイソン登場なら民放も放映の可能性有るし。小川なら寝業ありでやってほしい。

●ネームバリュー、実力、実績、キャラクター、申しぶんなし！　選手として期待！

●（『PRIDE』側に）競技の違い、過去のネームでは通用しないことを見せてほしい！

●ロートルには期待できません。中尾さんのキス攻撃を期待！　ー編集長、私は未熟モノでしょうか？

●やはり腐ってもタイソン。あのパンチは侮れません。

●メカタイソンとなり格闘技界でメカブームの起爆剤になってもらいたい。

●総合の準備をしてほしいし、特別扱いはしてほしくない。

●リングに上がるまでは、タイソンを信用しない。

●何も期待しない。何世紀も前のチャンピオンなんか引っ張りだしたって、いまの『PRIDE』で勝てるわけがないし二戦か三戦したらいなくなるのが関の山！

●言い方は悪いが「最高峰の客寄せパンダ」になってほしい。

●噛ませ犬。

●タイソンは『いかに楽して金を手にするか』ということしか考えてないと思うので何も期待してない。それよりDSEが騙されないか心配だ。

●グラウンドになったら勝ち目のないタイソンだが、ハントとならパンチ勝負が出来る！　万が一、グラウンドになっても一本取られることはない！

●以前はFEGについていた（？）のに、いまはDSE。その節操の無さはアリ。桜庭以上に架け橋になりうる可能性があると思う。

●期待することはない。DSEがアメリカ進出のため、知名度を利用したいだけだと思った。ボクシングに対する冒涜になるからと一度は引退したのに、復帰するってことはエキシビジョンって思ってるのでは？

●『PRIDE』の"曙"として、過去の栄光に傷がつくような無様な姿をさらすことを期待……。ピークの過ぎたタイソンが勝ち続ける『PRIDE』ってのもアレだし。要は対アメリカ向けの広告塔でしょ？

●初期の『PRIDE』に感じた殺伐とした雰囲気、何が起こるかわからない緊張感を取り戻してほしい！　本気のタイソンが耳を噛みちぎるくらいの"殺気"を観たい。

●「いまさら」の一言。高い買い物に尽きます。結果的に貧乏くじを引かされた感じ。いままで『PRIDE』は応援してましたが、なんかこのままズルズル滑りそう。大丈夫かな？　タイソンが真面目にやると思う人っているのかな？

●ファイターとしての価値はなくなってきているが、タイソンを引っ張り出すのは日本格闘技界にとっての宿願。盛り上がりに期待します。タイソンの商品価値は下がるだろうけど。

●K−1はよい意味でうさん臭いが、プライドがそれをやっちゃリアルにうさん臭い。噛みつきやアングルもK−1ならウケるけど。ハッスルでエスペランサーとでもやればよいのでは。

●とりあえずタイソンは負けると思うけど、リングに一回は立ってほしい。立ち消えはもう勘弁。

●立ち技のみならK−1に「戻って」ほしい。『PRIDE』ならPRIDEルールでやってほしい。

●『PRIDE』の立ち技部門がたんなるキックルールではない独自の形式を取るならタイソンもそのほかの選手も活かせるので、タイソンという点を線に繋げるのが肝要。

●いまさらグラウンドを覚えろとは言わない。パンチだけで勝ち続けろ〜！

このビッグサプライズは
何をもたらすのか!?
PRIDE、
タイソン獲得の真意を直撃!!

タイソンと世界を舞台に 革命を起こします!!

アメリカでの10.21PRIDEラスベガス大会の正式発表会見となった、8月19日（現地時間）のファン公開型会見で、マイク・タイソン登場というビッグサプライズを仕掛けた『PRIDE』。大会告知の巨大アドバルーンを掲げた格好だが、はたして『PRIDE』とタイソンの本当の関係はどうなっているのか？　今後の海外戦略構想も含め、イベント翌日、ロス市内のホテルでDSE榊原代表を直撃した。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／黒田史夫

ドリームステージエンターテインメント代表取締役

榊原信行

――昨日の『PRIDE』ラスベガス大会発表会見では、マイク・タイソン登場という、まさにビッグサプライズがあったわけですけど。

榊原　サプライズになりますかね？（笑）。

――何をおっしゃいますやら（笑）。この「タイソン登場」というのは、もともと練っていた企画なんですか、それとも急に降って湧いたものなんですか？

榊原　降って湧いたということはないですね。もう今年の春先からアメリカ進出に向けてラスベガスで話をしてる中で、タイソンサイドの方から「今後海外で活躍していく場を求めているので、いろいろ相談に乗ってほしい」と、タイソン側の人間を紹介されたんですよ。そして彼らと話をしていった結果、「だったら、おもしろいことができるんじゃないか」ということで、今回、タイソンに登場してもらったんですけど、現実的には、ずいぶん前にお互い合意に達していて、もう契約も終わってるんですよ。

――すでに契約済みですか！　その契約というのはもちろん……。

榊原　どういうかたちにしても「試合をする」という契約です。だから本当なら昨日、そういった発表をすることも考えていたんですけど、まずはサプライズ的に登場してもらって、後日、正式にタイソン同席の記者会見を開いて発表させてもらいます。

――このタイミングでタイソンを担ぎ出そうと思った一番の動機はなんだったんですか？

榊原　やっぱり一つはタイソンの持つ知名度ですよね。『PRIDE』としてはアメリカ戦略の一つとして、タイソンのボクシングと『PRIDE』の総合格闘技が融合することによっての化学反応を起こしながらアメリカの中で『PRIDE』の認知を広めたいということがあるんですよ。

――タイソンの名前を使って、『PRIDE』自体の知名度を高める、と。

榊原　しかもタイソンというのは、モハメド・アリと並んでアメリカだけでなく、世界的に知名度がある人じゃないですか。それは他のスポーツを含めてもそうだと思うんですよ。たとえばメジャーリーグのバリー・ボンズにしても、過去のNBAのマイケル・ジョーダンにしてもアメリカ国内では知名度はあるけれども、万国共通かっていうと、やっぱりタイソンには及ばないと思うんですよ。

――アメリカのメジャースポーツって、国内と国外では相当温度差がありますもんね。

榊原　そう考えると、やっぱりタイソンの知名度は半端じゃない。そこで彼と僕らがいま考えてるのは、一番は当然アメリカだし、それと合わせて同時に世界、とくに中国に向けて展開しようと考えてるんですよ。

――中国ですか？

榊原　はい。日本では報道されてませんけど、4月にタイソンと一緒に中国に行ってるんですよ。じつは最初にタイソンと会ったのは中国だったんです。

――そこで落ち合ってというか。

榊原　そう。その前から関係者の人たちといろんな話をして、「じゃあ中国で会おう」ということになって。

世界戦略を考えたパートナーとして タイソンはうってつけだったんですよ

PRIDE タイソン獲得の真意

――それにしても、なぜ中国なんですか？

榊原　タイソンは服役中、毛沢東のことを凄く勉強したんですよ。

――そういえば毛沢東のタトゥーを彫ってますよね。

榊原　世界のスーパースターが毛沢東を彫ったということで、中国ではナショナルヒーローなんです。だから僕らがタイソンと中国に一緒に行ったときも、タイソンが初めて中国に来るということで、国会議員の人たちを含めて全メディアが集まって、新聞の一面でしたからね。だから（タイソンがタトゥーを彫っている）毛沢東やチェ・ゲバラじゃないですけど、我々としては、タイソンとともに世界を舞台に革命を起こしたい！

――革命を起こしますか！

榊原　それはもう総合格闘技の中のマーケットの取り合いとかじゃなくてね。だからアメリカもそうだけど、中国、ロシア、ヨーロッパといった世界戦略を考えたとき、アライアンスを組むパートナーとしてタイソンはうってつけだったんですよ。

――総合格闘技がまったく知られてない国でも、タイソンは知ってるという人はたくさんいるでしょうからね。

榊原　中国なんかとくにそうだと思うんですよ。今年の4月、西安というところで中国初の総合格闘技の大会が開かれて、その大会を僕らもサポートさせてもらったんですけど、（開催するためには）すべて国家機関の許認可がいるんですよ。で、我々としては中国の中での許認可はいただいてるんで。

――あ、もうすでに許認可を受けてますか。また仕事が早い（笑）。

榊原　そういうこと含めて水面下でいろんな中国サイドとの交渉折衝はすでに体育協会や武術協会も含めてやってますからね。

――ちなみに、K―1もたしか6月ぐらいに曙さんが中国に行ったりしてましたけど、それとは全然違うんですか？

榊原 違います。あれは散打の大会に曙さんがゲスト出演するという話じゃないですか。中国というのは拳法とか、立ち技の国だから、まだ総合格闘技の理解が少ないんですよ。でも、そういった中で4月に初めて総合格闘技の大会が開かれて、じつはそのとき『PRIDE』の島田レフェリーもそこでレフェリングしてるんです。

――島田レフェリーがひと足早く中国進出してましたか（笑）。

榊原 選手もPRIDEグローブをはめてもらってね。だから武術の国である中国は、人口からしても今後、大きなマーケットになるポテンシャルを秘めているけれど、総合格闘技に関してはまだまだ発展途上なので、そういう中に我々が進み出る中で、マイク・タイソンという人の力をうまく活用できたらいいなと思ってますね。タイソンとともに中国進出をはたそう、と。

――タイソン自身も海外進出のパートナーがほしくて、そこで選んだのが『PRIDE』だったということなんでしょうか？

榊原 そうですね。彼はアメリカでも試合をできることはできるんですけど、ライセンスの問題で、まだネバダ州では試合ができないんですよ。過去に試合中、ホリフィールドの耳を噛んだりとかいろいろあって揉めて、ネバダ州のアスレチック・コミッションからライセンスを剥奪されてるんです。でも中国とか海外では試合ができる。そして日本でも来日さえできれば試合は可能なんでしょうけど、僕は無理してタイソンを日本に入れようとは思ってないんですよ。

――日本入国はやはり難しいんでしょうね。

榊原 いろんな働きかけは今後していこうと思ってますけど、それよりもPRIDEファイターvsタイソンというかたちでイギリスでやるとか、ロシア、中国でやるとか、そういうことを考えてます。だから、ただ単純に〝アメリカ版PRIDE統括本部長〟としての役割だけを期待してるんじゃないんです（笑）。

――早くも一部では「客寄せパンダだろ」とか言われてるみたいですけどね（笑）。

榊原 当然、広告塔という役割もありますが、タイソン自身がやる気になってるんですよ。いろんな話をしたんですけど、彼が言っていたのは、自分が孤児で生まれたこともあって、その中でボクシングと出会って生きる活力や喜びを手に入れて、一つのことで頑張っていった結果いまの自分がある、と。それからタイソンが孤児院にいるとき、モハメド・アリがそこに訪れて、そのときタイソンは「自分もボクサーになろう」と思ったそうです。だから同じように自分が何か動くことによって、子どもたちに夢やチャレンジスピリットを与えたい、と。この6月30日で40歳になったけど、40歳になったいま、最後にもう一回リングに上がって闘う姿を見せて、子どもたちとか世界の人々に「人生はいいことも悪いこともあるけどチャレンジしてくんだ」ということを伝えたいって言ってたんだよね。そこは僕らも凄くシンクロするところがあるんで、「じゃあ、そういうものをグローバルなかたちで進めていこう」という話になったんですよ。

――タイソン自身はMMAをやってみたいという意欲もあるんですか？

榊原 凄くあるみたいですね。総合格闘技についてもムチャクチャ知ってますよ。

――昨日、インタビューしたときも、タイソンの口から「フィル・バローニのフック

はいい」っていう言葉が飛び出してびっくりしましたよ（笑）。

榊原　だからよく観てるし、興味は凄くあるみたいですね。まぁ、総合をやるかどうかは、これからの話し合い次第ですけど、今後のタイソンのことで言うと、近々、ラスベガスのアラジンというホテルにタイソンのトレーニング場所ができて、公開トレーニングをするんですよ。それが次の闘いに向けたタイソンの正式スタートということになります。

――では、タイソン自身、『PRIDE』のリングも含めて、ファイターとして、もう一度再起する気持ちになってるんですね。

榊原　そうです。イベンダー・ホリフィールドが先日、43歳で現役復帰したじゃないですか。おそらく、そういったものにも感化されていると思うんですけど、タイソンがボクシングの世界戦クラスの試合で、12ラウンド闘い抜けるまで自分を作り上げるのは、少し時間がかかるんじゃないかと思いますけどね。それならばと、彼がMMAという新しい競技にホントにチャレンジするのか、そのへんは今後の話し合い次第ですけど、僕個人の考えでは、いまのタイソンがMMAでやったって、PRIDEファイターに敵うわけないと思うんですよ。

――普通に考えたら、寝かされて終わりですよね。

榊原　いまから総合の練習を積んでも、さすがに追いつかないと思うんだよね。だったら僕なんかは、PRIDEファイターがタイソンの得意なボクシングルールでチャレンジすればいいと思うんですよ。たとえば、ボクシングルールでタイソンvsミルコとか、マーク・ハントとか、藤田、吉田といった選手たちが、タイソンと殴り合いでどっちが強いかやってみるという。そういった闘いを『PRIDE』のリングでやってもいいかなって。

――ミルコなんかは以前から「タイソンとボクシングマッチでやりたい」って言ってましたよね。

榊原　だからいっそのこと、PRIDEファイターvsタイソン十番勝負とかやってもいいと思うんだよね（笑）。まずはイギリスでジェームス・トンプソンが挑んで、最後はロシアでタイソンvsヒョードルとかね。

――オープンフィンガーグローブを着けたボクシングルールでもいいですしね。

榊原　ま、そういったことはすべて今後の話し合いですけどね。

――いま現在は、どういったかたちで合意しているんですか？

榊原　「PRIDEのリングで試合をする」ということで合意しています。そこにはボクシングルールも当然入るし、ルールや対戦相手については、今後両者が協議していくということです。

アマチュアボクシングでも45戦（40勝）のキャリアを誇るミルコ。以前からボクシングルールでのタイソン戦を熱望していただけに、タイソンが『PRIDE』に上がるなら、この夢の対決がついに実現するか？

ミルコやハント、藤田がタイソンにボクシングルールで挑戦してもいい

――もう何試合契約ということも決まっているんですか？

榊原　そのへんは、契約の秘密保持事項に抵触しかねないので、ここでは言えません。タイソンの今後に関しては、10月のラスベガス大会前に正式に発表します。

――それはアメリカで記者会見を行なうということですか？

榊原　そうです。そこでタイソン同席のもと、具体的な発表をする予定です。これまで「タイソンとやります」という声だけで、打ち上げ花火に終わった人たちが多かったじゃないですか。僕らはそれはしたくない。だから、具体的に「この日にタイソンがリングに上がって、この人とこういうルールで試合をします」ということがきちっと発表できるように、これから一カ月ぐらいで最終の詰めを行なって、それを点で終わらせないで線につなげて、『PRIDE』を世界に広めていく。だから、最初はタイソンの名前で観にきた世界の人たちが、イベント後は「総合格闘技っておもしろいね」とか、「ミルコって凄いね」、「ヒョードルって強いね」という感想が出るように、タイソンを入口に『PRIDE』の魅力を伝えていけたらいいな、と思ってます。

――あくまで『PRIDE』の魅力を伝えるための手段であると。

榊原　そうですね。だからタイソンについては、日本やアメリカなんかよりも、総合格闘技の認知度がまだ低い、中国とかそういう国々に最初に我々がキックオフするための起爆剤にしたいと思ってます。そのためにも、タイソンが闘うにあたって、どういうルールで誰とだったら、そこに勝負論があって、「観てみたい」と思えるのかっていうところを考えていこうと思ってます。

――そうすると、10月に初めて『PRIDE・32』というかたちでラスベガス大会が開かれますけど、『PRIDE・34』とか『PRIDE・35』は全然違う国でやる可能性もあるんですか？

榊原　もちろんありますよ。早ければ年内に中国で大会をやります。

――10月のラスベガスと大晦日のあいだに、もう一大会あるかもしれないと？

榊原　そのあいだかもしれないし、大晦日にやるかもしれないし。

――大晦日！　じゃあ、大晦日はさいたまスーパーアリーナと中国、両方でやるかもしれないわけですか？

榊原　そう。さいたまと中国同時開催で二元中継したいんですよ。たまアリのビジョンに中国からの中継が流れて、レポーターが「そろそろタイソンの試合がマカオのマカオドームにて行なわれます。さいたまで観てる皆さ〜ん！」とか言ってね（笑）。

――『レッスルマニア3』みたいですね（笑）。

榊原　それか、格闘技の「ゆく年来る年」みたいな感じで、中継をつないで放送するっていう、そういったテレビ的なイメージはでき上がってるんですけど、いかんせん悲しいことに地上波がない（笑）。

――ダハハハ！

榊原　だから、日本の皆さんにはスカパーで観ていただかなきゃだめかな、と。

――地上波のほうは、そろそろなんとかな

PRIDE タイソン獲得の真意

我々はシウバをUFCに出す準備はできているし、シウバも了解している

らないんですか？

榊原　いやあ、僕もなんとかしてほしいですけど（笑）。やっぱりプロモーションを考えると、地上波というのはホントにほしいですからね。

――今回のタイソン登場のサプライズなんかも、夜のスポーツニュースで流れたらインパクトが全然違うでしょうからね。

榊原　フジテレビの『SRS』とか『すぽると』で独占で流せたんですけどね（苦笑）。残念ですよ。アメリカではFOXスポーツが全部流してくれたんだから。なんとかしたいですね、ホントに。

――一部報道では、テレビ朝日との話がなかば合意に達してるみたいなのがありましたけど。

榊原　いや、全然そんな話はないです。

――あとは、『PRIDE』が『コンドル』というタイトルになるとか盛んに吠えてる愉快な出版物もありましたけど（笑）。

榊原　コンドル？　それ、どっかが持ち込んだ違うイベントじゃないですか？　ありえないですね。

――やっぱりありえませんか（笑）。

榊原　地上波に関しては、そんな簡単なハードルじゃないと思いますよ。日本という国はやはり村社会で「右へならえ」なんだなと痛感してますから。自分たちのモノサシで判断するのではなく、「フジテレビさんがやめてるからウチもちょっと……」みたいな部分がやっぱり多いんですよ。だから、一歩ずつ信頼を取り戻すように頑張るしかないからね。

――ちょっとタイソンの話に戻るんですけども、タイソンといえば3年前にK―1と契約を結んだことが発表されましたけど、それは今度、『PRIDE』がタイソンをリングに上げる際、足かせにはならないんですか？

榊原　それについては問題ありません。僕らも最初タイソン側から話をいただいたときに、「でもタイソンはK―1さんと契約してるんじゃないんですか？」って、まずそこを最初に確認したんですよ。そうしたら、タイソンサイドは「もうK―1との契約は終わってるし、支障はきたさない」と。それで我々も向こうも弁護士さんが入って、「何も支障をきたさないように契約をきちんと結びましょう」ということでやってますから、問題はないと思います。

――では、裁判で争ったりするようなことにはならないと。

榊原　ならないでしょう。でも、これまでK―1さんや猪木さんが「タイソンが試合をします」って言いながら何も起こらなかったから、ファンの人たちにも「今回の『PRIDE』もまた何も起きないだろう」っていうふうに思われてると思うんですよ。

10.21『PRIDE.32』の会場となるトーマス&マックセンターは、収容人数1万8000人を誇るラスベガス一の大会場。『PRIDE』はアメリカ初進出でこのビッグアリーナをフルハウスにできるか!?

――それは確実にありますね（笑）。

榊原　マスコミの皆さんも「またタイソンかよ～」って、日本では多分そうだと思う。だから我々としては逆に、日本に向けてタイソンの話題で大きくブチ上げる気もないし、世界戦略を考える上で着実に話を進めていけばいいと思っているので。ただ、ホントに難しい人だから、大騒ぎだけしてファンをガッカリさせることはしたくない。だから、きちっとした発表ができるときに正式にアナウンスしたいと思います。

――では、まだまだ予断は許さないと。

榊原　ただ、少なくとも昨日は間違いなくヒョードルの隣にタイソンはいたんだし、「PRIDEの一員になれて嬉しい」というコメントを言ってるわけじゃないですか。で、みんなと一緒に写真を撮って。

――『kamipro』の取材まで受けてましたからね（笑）。

榊原　うん、『kamipro』の世界独占取材ね（笑）。そういったことだけとっても、いままでとは違うと思うんですよ。だって猪木さんとタイソンのツーショットはなかったでしょ？

――なかったですね。

榊原　イベントの観戦に来たとかそういうのではなく、公式イベントのゲストとして登場ということもなかったと思うんですよ。そのあたりの可能性はちょっと感じてもらえたらと思いますね。10月21日にゲストとして来てもらうことも約束してもらってるんで、当然、そのリング上でも世界に向けてアナウンスできたらと思います。

――でも、アメリカの『PRIDE』のリングでボクシングマッチをするのは難しいんですよね？

榊原　それも完全に不可能じゃないと思うんですよ。5本ロープのリングでのボクシングが認められないなら、隣りにもう一つボクシングのリングを作って、タイソンの試合だけそっちでやってもいいし。

――それはコロンブスの卵ですね（笑）。

榊原　だから、これは別の話ですけど、ホントにUFCと合同で格闘技版スーパーボウルみたいなビッグイベントができるんだったら、そのときは絶対にオクタゴンとリング両方用意しなきゃダメだと思うんですよ。それでUFCルールとPRIDEルー

ルの試合を交互にやらないと、ホントの対抗戦にはならないと思いますから。

――その後、UFCとの話し合いは具体的に進んでいるんですか？

榊原　我々はヴァンダレイを出す準備はできてるし、ヴァンダレイも了解してる。だから、9月10日のGPが終わり次第、一気に話は進むと思いますよ。僕らとしても、UFCとケンカをするつもりはないし、いまアメリカの中でUFCとケンカしても敵わないだろうし。

――向こうの土壌で真っ向勝負するのは無謀でしょうね。

榊原　マーケットで見ても、企業としての力を比べてみても、我々としてはフジテレビの放送をなくしたりして、正直、収入もダウンしてるわけじゃないですか。だからUFCとはホントいいかたちで協力し合える関係を保って、『PRIDE』のアメリカでの一つのポジションを築くことを考えたいと思ってますけどね。

現地時間8月19日に行なわれたファン公開型『PRIDE』ラスベガス大会発表イベントでも、「アメリカのPRIDEの父」と紹介され、榊原代表とガッチリ握手を交わしたエド・フィッシュマン。この実力者の後ろ盾なくして、『PRIDE』のアメリカ進出はなかったと言っても過言ではないだろう。

アメリカ進出における最大の協力者が〝アメリカのPRIDEの父〟フィッシュマンです

――でも、UFC側はしたたかというか、シウバをオクタゴンに上げる一方で、『PRIDE』ラスベガス大会の一週間前に大会をぶつけてきたりしてますよね。

榊原　それはやっぱりね、逆の立場だったらそうなると思うんですよ。ラスベガスといったら彼らにとったら庭じゃないですか。その庭に日本人がノコノコ入り込んで大会開かれちゃ気分悪いでしょう。それは逆の立場だったらよくわかるんです。だからホントに揉めないようなかたちで、「ちょっとやらしてください」っていうふうに下手に出てね（笑）。

――「すいません、お庭ちょっとお借りします」みたいな感じで（笑）。

榊原　それはやっぱりアメリカという巨大マーケットの中では僕らなんてホントちっぽけな存在だから。これからどれだけアメリカの協力者を築いていけるか、単純にいい大会を作るだけではなくて、周辺環境を整備するのも凄く大変だなあっていう気がしますね。

――その協力者の一人が、昨日イベントに出られていた方なんですか？

榊原　そうです。〝アメリカのPRIDEの父〟エド・フィッシュマンです。

――そのフィッシュマン氏はどういった方なんですか？

榊原　人間としては凄く頭がよくて行動力のある人なんですよ。経歴で言うと、ハラスグループっていうカジノのオーナーであったり、オーナーでありながらカジノゲーム機のポイントカードの開発者であったり、あとはテレビ番組のプロデューサーとか、いろんなことを過去やってきた、クリエイティブなこととビジネスセンスに富んだ非常に愉快なおじちゃんですね。

――カジノ王みたいな感じですか。

榊原　カジノ王というより、カジノ界、エンターテインメント界に絶大なる影響力と人脈を持った実力者という感じですかね。アメリカのカジノグループのホントのトップの人たちと直接会いに行けるという、そのエドさんが持つネットワークを僕らも活用させていただいて、スティーブ・ウィンに会わせていただいたりとか、今回のラスベガス大会はシーザースパレスの全面バックアップを受けられることになったんです。

――そんな実力者とどのようにして知り合ったんですか？

榊原　これは我々がお願いに行ったのではなく、エド・フィッシュマンのほうから4年前に日本で行なわれている『PRIDE』に興味を持ってくれたんですよ。それぐらい世界中の新しいエンターテインメントにアンテナを張ってる人だから。それで我々も2003年の東京ドーム大会にご招待したんですけど、それを観て「これはやっぱり凄い」、「これをどうしても自分が協力してアメリカで開催したい」という思いを持ってくれて、そこから3～4年の付き合いなんですよ。

――いいイベントを作っていったら、そんな大物が向こうからやってきてくれた、と。

榊原　そうなんですよ。それ以来、日本に

次回は2月下旬。来年はアメリカ国内で4〜5回大会を開催する予定です

も何度も来ていただいてますから。だから昨日今日始まった関係じゃないんですけど、ホント僕らみたいな財産もなくて、「やりたい」という熱意しかない日本の小さな会社と、よく同じ目線で協力してくれたなあっていう、そこに対しても凄くリスペクトしてるんですよ。

——普通は会おうと思っても会えない方なんですよね？

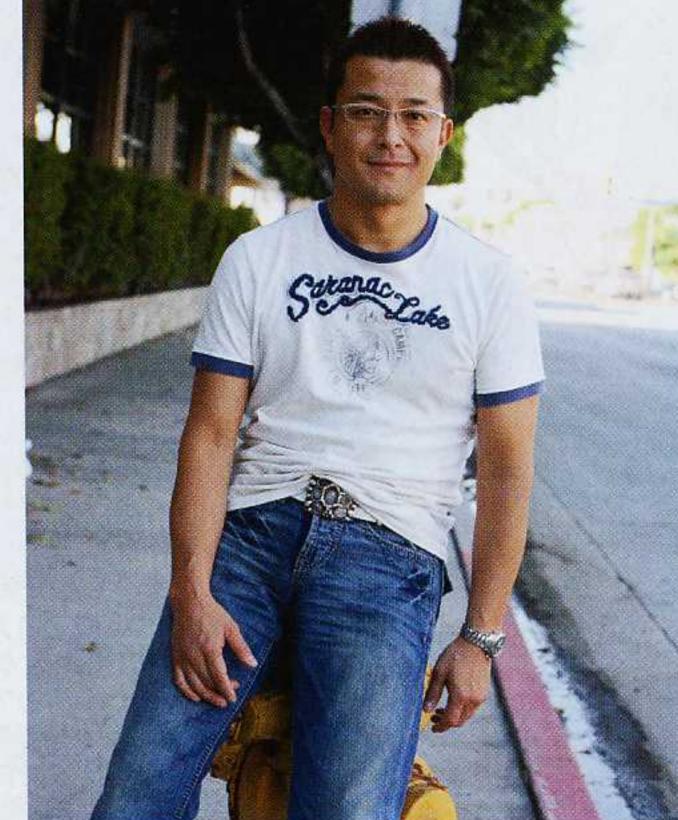
榊原　ムチャクチャ大物だし、凄いお金持ちだしね（笑）。奥さんは当時のミス・アメリカだし、自宅はロス郊外の高級住宅地マリブのビーチの上に建ってて、近所にはバーブラ・ストライザンドやトム・ハンクスが住んでいたりするんですよ。

——凄いご近所さんですね（笑）。

榊原　凄いでしょう。僕もエドに紹介してもらって、ディック・クラークっていう『アメリカン・ミュージック・アワード』の司会をずっとやってる、日本でいうと関口宏さんとみのもんたさんを足して×2したぐらいの超有名人と食事させてもらったり。しかもエドはそのディック・クラークと食事してるときも「ちょっとマイケル・ジャクソンに電話する。あいつは子どもの頃から可愛がってるんだ」とか言うんですよ（笑）。

——冗談みたいな話ですね（笑）。

榊原　冗談みたいな話でしょ？（笑）。そんな人が自ら我々を見初めてくれたことに対しては非常にありがたいし、ホントに人と人の出会いはわからないなと思いますね。そういう人たちのバックアップがあって、ようやくアメリカでの開催にこぎ着けましたけど、やっぱり日本とアメリカでは社会の仕組みも価値観も考え方も違うので、10月の大会に向けては正直言って不安しかないですけどね。

——でも、昨日のイベントなんかにしても、ホントにファンの反応はいいですよね。

榊原　いいですね。ロサンゼルスの前にラスベガスでもファンイベントを初めて行なったんですけど、ホームページだけの告知だったんで、ファンが来てくれるかどうか凄く心配してたんですよ。そしたらホントに600人ぐらい来てくれましたから、手応えはありますね。ただ、トーマス＆マックセンターという1万8000人も入る大きな会場なんで、さすがにハードコアなファンが2万人近くも集まるとは思えない。でもなんとかフルハウスにして、その1万8000人の人たちの度肝を抜きたいですよね。試合もそうだけど、トータルのショーとして、イベントとしての完成度をきちっと見てもらって、次回は年明けすぐの2月下旬を予定をしてますから。来年はアメリカ国内で年間4〜5回はやろうと思ってるんで。でも、それもこれも今回の大会が成功しなければ難しいですからね。

PRIDE タイソン獲得の真意

——今回にかかってるわけですね。

榊原　そうですね。だからホントに全力で頑張りたいと思います。

——わかりました。では最後に、『PRIDE』とは別の話になりますが、8月5日に桜庭選手が『HERO'S』第一戦を行ないました。この試合はご覧になりましたか？

榊原　その日に試合があるのは知ってたんですけど、結局、生で観る勇気はなくてですね、考えたくなかったんで他のことをしようと思って出かけていたんですよ。当日は結果だけ知らせてもらって、「ああ、そうだったんだ」と思って。あとからも観る気にはなれなかったんですけど、何かの機会でチラッと観たんですよ。

——ご覧になられた感想は？

榊原　う〜ん、ホントによく頑張ったと思うし、強いハート持っている。「やっぱりサクっていうのは凄い選手なんだなあ」って改めて思いましたけどね。ただ、なんていうのかな、いまやってることがホントに桜庭選手がやりたかったことなのかな、とは思いましたね。それと主催者の人たちのことで言えばね、「PRIDEのマッチメイクは桜庭の身体に合わないような相手とやらせて、ボロボロにした」云々を言ってたのに、これまでで一番桜庭選手を命の危険にさらした、アローナ戦以上に悲惨な試合をさせたことに対して、我々に浴びせた言葉とやってることが違うんじゃないかと。サクを守ってあげて、サクの良さを活かしてあげる試合があれだったっていうのは凄く残念。なんかホント単純に広告塔として桜庭和志を必要としたのかなあっていう。「なんとかの髙田延彦」とか無神経なことをして、『PRIDE』で残した彼の実績を、現役としての最終章を否定するような無神経なものには、僕はホントにしてほしくなかったなって思いますね。

【06年8月20日（現地時間）／米国・ロサンゼルス市内 某ホテルにて収録】

PRIDEに本物の救世主ついに現わる!!

“アメリカのPRIDEの父”エド・フィッシュマン

With DSE榊原代表

ついに『PRIDE』に本物の救世主現わる! 前ページの榊原代表インタビューの中で“アメリカのPRIDEの父”と呼ばれていたエド・フィッシュマン氏。この人こそ、PRIDEアメリカ進出の最重要人物なのだ。もともとはハラスグループという巨大カジノのオーナーであり、カジノのポイントカード開発者でもあり、テレビ番組やエンターテインメントのプロデューサーでもあった、アメリカのカジノとエンターテインメント業界両方に絶大なる影響力を持つ超大物であるフィッシュマン氏。この人の後ろ盾があって初めて『PRIDE』はラスベガス進出が可能になったのである。本誌はロス郊外の超高級住宅地マリブに建つ、このビッグショットの自宅にDSE榊原代表とともに訪問。独占インタビューを行なうことに成功した!!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／黒田史夫

豪邸訪問&本邦初インタビュー!!

PRIDEラスベガス進出は
この人なくしてありえなかった!
米国カジノ&エンターテインメント業界の
超大物に
独占アクセス成功!!

The American Fa

ED FIS

——今日はご自宅にお招きいただきありがとうございます！

エド　日本からはるばるようこそ（ニッコリ）。

——太平洋のビーチ上という素晴らしいロケーションにある豪邸でびっくりしてるんですけど、榊原代表はこちらには何度かいらっしゃってるんですか？

榊原　僕はもう何度も来てます。アメリカの自分の家みたいなもんなんで（笑）。

エド　ノブは来るたびに自宅のようにくつろいでもらってるからね（笑）。

——榊原さんは「ノブ」って呼ばれてるんですか？（笑）。

榊原　はい（笑）。でも、ホントに凄いところですよね。隣がバーブラ・ストライザンドで、近所にはスティーブン・スピルバーグやトム・ハンクスが住んでるんだから。

エド　それに我が家の隣は〝日本〟なんだよ。

——は？　どういうことですか？

エド　太平洋を挟んで向こうは日本だからね。ガハハハハ！

——ビリオネア・ジョークでしたか（笑）。榊原代表も素晴らしい友人がいますね。

榊原　ホントに我々としたらアメリカに進出しようにも、なんのツテもない中で、エドさんと出会えたことによって、こうしてラスベガスで大会を開けるようになったと言ってもいい存在ですから、本当に感謝してますよ。

——では、エドさんと『PRIDE』のそもそも出会いから教えていただきたいんですけど。

エド　たまたま共通の友人を通じて紹介してもらい、私が2003年の東京ドーム大会を観戦したことがそもそもの始まりだね。

——あのノゲイラvsミルコやシウバvs吉田があったドーム大会をご覧になられてるんですか。

榊原　ラスベガスにいる我々と一緒に動いてくれたり、サポートしてくれる仲間がたまたまエドさんの友人でもあったんですよ。それで『PRIDE』に凄く興味を持っている」と聞いたので、「じゃあ、ぜひ一度、僕らのショーを観てください」ということで招待させていただいたんです。

——実際に『PRIDE』をご覧になった感想はいかがでしたか？

エド　私はこれまで35年間にわたってエンターテインメント業界に関わってきて、ファイトについてもモハメド・アリやマイク・タイソンを始め、いろいろなビッグマッチを間近で観てきた。その私にとっても、『PRIDE』のイベントにはいままで感じたことのない驚きと感動があったね。5万人近い観客が格闘技の試合に熱狂していることも驚きだったし、ショー全体を通した制作、プロダクションの凄さにも圧倒された。そして、なんとしてもこのスーパーイベントをアメリカで開催したいと思ったんだ。

——もう、その時点でアメリカに持ってくることを考えていましたか。

エド　だからアメリカに帰ったあと、私は『PRIDE』やMMAについていろいろと情報を集めた。その中で、私の30年来の友人にチャック・ノリスという俳優がいるんだが、格闘技に詳しい彼に意見を求めたところ『PRIDE』は世界でもナンバーワンのMMAイベントだ。ぜひアメリカに持ってくるべきだ」と言うので、確信を持った。

これがロサンゼルス郊外の超高級住宅地マリブの太平洋のビーチ上に建つフィッシュマン氏の豪邸。部屋の窓からはひろびろとした海が広がり、家から一歩も出ずに、そのままボートで太平洋に漕ぎ出せるという別世界だ。ちなみに趣味はフェラーリの新作が出るたびに買い替えること。こんな方とぜひお近づきになりたい!!

友人のチャック・ノリスに「世界一のMMAイベント」だと教えてもらったんだ

なんのツテもない中でエドさんと出会えたことでアメリカに進出できたんです

——なんとチャック・ノリスの推薦ですか（笑）。

エド　そして私自身、日本での感動が忘れられなかったこともあって、このイベントをアメリカに持ってくるために、再度日本に行って、ノブと交渉を持ち、今後どういうふうにアメリカでやっていくかについて話し合ったんだ。

榊原　この東洋のイベントに興味を持つアンテナの鋭さと、行動力がエドさんの素晴らしいところですよね。

——エドさんとはどういったことをお話しされたんですか？

榊原　僕らにとってはアメリカ進出というのは夢だったわけですけど、どうやったらアメリカ人に受け入れられ、感動させることができるか。それからアメリカの社会やビジネスの仕組みもわからなかったわけですよ。そこをエドさんに教えてもらったり、僕らアジアの人間が普通にやってても会えないようなビッグショットを紹介してもらったりして。その中で、当然エドさんとの信頼関係も深めていって、時間をかけて、アメリカで花を咲かせられるような下準備をここまでともに協力してやってきたんです。

——そういう大物たちも「エドさんが言うんだったら間違いない」という感じだったわけですか。

榊原　そうですね。僕らがいくらプレゼンテーションしても、それをギャランティしてくれる人、保証してくれる人が同じアメリカ人で、信頼と

実績のある人じゃないと、やっぱりアメリカ社会ではなかなか受け入れてもらえないですからね。

エド　私は1972年からラスベガスで映画、テレビ、ショーに関わり、ハラスグループというカジノのオーナーでもあったので、カジノとエンターテインメント業界には顔が利く。だから今回はまず、私と長い付き合いのあるシーザースパレスを紹介したんだ。シーザースパレスというのは、ハラスグループの中の一つのカジノだが、その日本現地代表に7月1日の『PRIDE』を観てもらって、そのスケールの大きさに驚いていた。それがきっかけで、10月のラスベガス大会もシーザースパレスがスポンサーとなり全面バックアップして行なうことになったんだ。これは『PRIDE』にとっても、シーザースパレスにとっても喜ばしいことだと思う。

榊原　本当に僕らでは、名前は聞いたことがあっても、会う方法すらない人たちといとも簡単に会わせてくれるんですよ。以前、一日でラスベガスのカジノのトップ一通りと会わせてもらったことがありますからね。

――カジノのトップ全員ですか！

榊原　スティーブ・ウィン（キング・オブ・ラスベガスと呼ばれるラスベガスのカジノ＆ホテル王）を始め、シーザースパレス、MGMグランド、マンダレイベイなどのオーナー全員ですよ。たぶん、一日でオーナー全員と会えるのは全米探してもエドさんしかいない。そういったエドさんが、これまで何十年もかけて作ってきた人脈や信頼を今回は全面的に活用させていただいたんです。

――その結果がシーザースパレスの全面バックアップなわけですね。

榊原　やっぱりラスベガスはファイティングスポーツのメッカですけど、その中でもシーザースパレスというのはナンバーワンだと思うんですね。これまでのボクシングを中心とした歴史、実績を考えても。そのシーザースがメインスポンサーとして名前を出して、我々のイベントをハラスグループをあげてバックアップしてくれるなんて、そんなこと僕たちだけでどれだけ頑張ってもできることじゃない。エドさんの力があってこそですよね。

エド　これまでシーザースパレスは総合格闘技のスポンサーになったり、大会に関わったりすることはまったくなかった。いろんなオファーはあったが、ずっと断ってきたんだよ。でも、『PRIDE』のコンセプトや考え方をノブを始めとしてDSEのスタッフが一生懸命説明した結果、シーザースも本気になってやってくれることになったんだ。MMAのイベントというのは、（アメリカでは）ここ2～3年で凄く話題になって大きくなってきてはいるが、これがどこまで成長するものなのかは、誰にもわからない。でも、多くの人にこのスポーツの魅力を理解させるためには、大きなイベントを開いて、次にやるときはさらに大きくやる。そうして広くアピールしていくためには、まずカジノに理解してもらうのが一番いい方法なんじゃないかと思ったんだ。

私は『PRIDE』を格闘技のスーパーボウルだと思っている

――大衆に理解させるために、まずはカジノ側に理解させると。では、エドさんは『PRIDE』をアメリカに持ってくる上で、まず何が必要だと思いますか？

エド　初めて『PRIDE』がアメリカに来るにあたって、まずはUFCやWFEといった他の格闘技イベントと、どこが違うかをハッキリと見せるべきだと思う。『PRIDE』には他のイベントよりはるかに素晴らしいファイターが揃っているし、演出を含めたイベント全体の構成もずば抜けている。これをそのままアメリカの観客に見せたら、おそらくその迫力と完成度に圧倒されるだろう。だから、まずそれをできるだけ早く見せられたらと思っているよ。

榊原　エドさんの言うとおり、我々も日本でやっている『PRIDE』とスケール感やクオリティで遜色ない大会を、どうやったらアメリカの地でできるのかということを一番に考えてますね。それには当然、言葉の問題もあるし、制作チームも日本と同じように動けるチームを作らないといけない。そのために、いろんな人や会社を紹介してもらって、全力で準備をしているところです。

――2万人規模の格闘技イベント自体、アメリカではなかなかありませんもんね。

榊原　トーマス＆マックセンターはラスベガスで一番大きな会場ですからね。

エド　アメリカにはNFLのスーパーボウルや、MLBのワールドシリーズなど、何万人も観客を集めるスポーツイベントはあるが、ボクシングを含めた格闘技で2万人の観客を集めたというのは、私の記憶の中でも本当に少ない。そういった意味でも、10月21日は、ラスベガスのスポーツやショービジネスにとっても、歴史的に大きな第一歩になると言えるだろうね。

――『PRIDE』のようなスケール感や完成度を持った格闘技イベントが開かれるのは、ラスベガスのショービジネス界にとっても"事件"である、と。

エド　そのとおり。ラスベガスは世界一の観光地であり、世界中から観光客が集まってくるが、その観光客の目的の一つは、世界一のエンターテインメントを見ることでもある。しかし、いままでのボクシングや、他のファイティングショーというのは、エンターテインメント性を失なっていたように思う。そこへ今回『PRIDE』が来て、ファイティングとエンターテインメントが見事に融合し、トータルパッケージのショーとして格闘技を見せるというのは、まったく新しいエンターテインメントとして、ラスベガスのショービジネス界にもショックを与えるだろうと、私は強く思うよ。

――たしかに、UFCやボクシングはメインイベントだけに興味が集中するかたちで、『PRIDE』のようなトータルパッケージのショーではありませんよね。

榊原　だから我々としては、オープニングからエンディングまでが一つのパッケージになった、完成度の高いショーとして、シルク・ド・ソレイユやセリーヌ・ディオンとかと同じエンターテインメントとして観てもらいたいと思ってるんです。だけど、もちろんリング内は本物のリア

8月19日のファン公開会見でも挨拶に立ったフィッシュマン氏は「ラスベガスでナンバーワンのイベントにする」と高らかに宣言。この人が言うと、真実味も違う！

ルファイトとしてね。

エド　私は『PRIDE』を格闘技のスーパーボウルだと思っているんだ。スーパーボウルもオープニングがあり、前半戦があり、ハーフタイムショーを挟んで、後半戦、そしてエンディングがある。そこには、ただフットボールのゲームをするだけでなく、世界中の大物がゲストでパフォーマンスをしたり、トータルパッケージのエンターテインメントになっている。そしてもちろん、そこに出場する選手も世界最高のアスリートだ。そういったスーパーボウルと同じようなイベントを格闘技で実現させたのが『PRIDE』なんだ。その『PRIDE』をラスベガスで開催すれば、間違いなくアメリカ格闘技界に新たな価値観を植えつけ、新しいスタンダードを築くと確信しているよ。

——『PRIDE』というイベント自体が新しい価値観なんですね。

エド　だからこそ私は『PRIDE』をアメリカに持ってこようと思ったんだよ。UFCと同じようなものだったらわざわざ持ってくる必要はない。いま、アメリカでは新しいMMAのイベントがたくさんできているが、どれもこれもUFCの劣化コピーばかりだ。それじゃUFC以上の成功なんて到底望めない。『PRIDE』は、まったく新しいコンセプトを持ったエンターテインメントだからこそ、UFCを超えることができるんだ。

——逆に『PRIDE』が今後アメリカで成長していくには、どんなことに注意しなくちゃいけないと思いますか？

エド　とにかくイベントの質を下げないことだと思う。日本と同じクオリティのものをアメリカに持ってきて、初めて『PRIDE』のライブを観るアメリカの観客に、強い衝撃を与えること。そうすれば、もう他の団体は真似しようとしてもできないだろう。UFCに似たイベントがたくさんできたように、『PRIDE』の真似をするイベントも必ず出てくる。しかし、いまから「『PRIDE』みたいにやりたい」といっても一日、二日でできるわけではない。いまの『PRIDE』のクオリティは、9年間やってきた集大成だと思うので、それはどこも真似ができないし、その9年間で培ったものをアメリカでも見せてほしい。

榊原　日本で『PRIDE・1』が開催された1997年10月11日から数えて、ちょうどこの10月で10年目に突入するんですよ。10thアニバーサリーイヤーのファーストイベントが、今度のラスベガスのショーなんです。だからエドさんの話じゃないけど、これまで自分たちが汗をかいたり、恥をかいたりして、つらい思いをした経験はお金では買えないじゃないですか。だから本当にその集大成として、アメリカの人に僕らが培ってきたものを全部見せて、それでアメリカの地に根を生やしていける努力をしたいと思ってます。そのためには、〝アメリカのPRIDEの父〟と呼ばせていただいているエドさんに、これらも変わらぬ全面バックアップ、それこそ親が子どもに注ぐような無償の愛を注いでいただけたらな、と（笑）。

——と、〝息子〟が申しておりますが、〝父〟としてはいかがですか？

エド　もちろん、これからも『PRIDE』をサポートしていくつもりだが、〝PRIDEの父〟というと年寄りみたいに思われるので、〝PRIDEのアニキ〟と呼んでいただきたいな（笑）。

——ダハハハハ！　父ではなく兄貴でしたか。

榊原　訂正させていただきます（笑）。

『PRIDE』のスロットマシンやリアリティ・ショーの制作をいま進めているところなんだ

エド　実際、いま私は『PRIDE』という新しいエンターテインメントに携われて本当に若々しい気分なんだ。エキサイティングだし、凄く楽しんでやってる。私自身、ここまで来たら、もう好きなことしかやらない。『PRIDE』が本当に好きだからやってるんだ。いまの私の夢は、2003年に観た東京ドームと同じ規模の大会をアメリカで開くこと。そのためには、多くの人に観てもらわなきゃならないので、アメリカのテレビで『PRIDE』のリアリティ・ショーを放映する企画をいま進めているんだよ。

——『ジ・アルティメット・ファイター』のPRIDE版ができますか！

榊原　いま紹介してもらってるところなんですよ。あらゆることをやっていきますよ。日本で放映してもらえないぶんね。……あ、これは訳さなくていいから（笑）。

エド　あとは『PRIDE』のスロットマシンの制作にも入っている。

——『PRIDE』のスロットマシン！

榊原　エドさんの会社と契約させていただいて、年内にも『PRIDE』のスロットマシンが、ラスベガス及び世界中にデビューする予定なんですよ。凄いでしょ？（笑）。

——日本のパチスロ機のキャラクターになるどころじゃないですね（笑）。

榊原　世界規模ですから（笑）。

エド　スロットマシンはもう制作に取りかかっていて、10月のラスベガス大会でサンプルを披露するつもりだ。そして年内には、まずシーザースパレスに設置して、そこから世界に向けて発売していく。私はチャック・ノリスとロシアでカジノを共同経営しているので、ロシアでの発売も内定しているんだ。将来的にはモスクワで『PRIDE』の大きなイベントもやりたいと思っている。

——なんか凄まじい話になってきましたね（笑）。アメリカだけでなく世界ネットワークも持ってますか。

榊原　エドさんはアメリカでいま一番人気のあるクリスピー・クリーム・ドーナツのイギリスでの権利も持ってますからね。

エド　毎月新しい店舗が増えているよ。ただ、私は経営しているだけで、実際にドーナツを作っているわけではない（笑）。

——またしてもビリオネア・ジョークですね（笑）。

榊原　そのドーナツショップのイギリス一号店がオープンするイベントには、ポール・マッカートニーが友人としてゲスト来場するぐらいですからね。

——凄い人が友人ですね（笑）。

榊原　でも、エドさんはこんな大物なのに営業するときは自分の足で稼ぐし、運転手をつけるわけでもないし、我々みたいな若僧とダイレクトに会って、フランクに話してくれる。本当に頭が下がりますね。

エド　私はノブと知り合って、DSEの社員の働きを見て、彼らならアメリカでのショーも100パーセントのエネルギーを注いでやってくれると信用しているんだ。そうでなければ、私の信用、信頼をすべて投げ出してこのイベントに懸けることは絶対にない。いままで35年間にわたってアメリカ、ヨーロッパでショーを開いてきた私の信用、信頼を投げ出して『PRIDE』をサポートするのは、それぐらい私はこのイベントに自信があるからなんだ。

——じゃあ、将来的には榊原さんも

これがPRIDEスロットマシンと同じ型のイメージ図。こんなものが作れるのは、カジノ界に強い影響力を持ち、自身も7つのカジノを経営するエドさんならではだ。

こういう家に住めるようになりますかね（笑）。

エド　一昨日、ロサンゼルスで開催されたファンイベント（公開会見）

大会当日はアメリカ国内外からいろんな大物を連れてくる予定だ

〝アメリカのPRIDEの父〟として無償の愛を注いでいただけたらと（笑）

The American Father of PRIDE

ED FISHMAN

こういう家に住めるようになりますかね（笑）。

エド　私はこの周辺に6軒分の土地を持ってるから、そこに家を建てるといいよ（笑）。

榊原　とりあえず、あの（ボート機材が置いてある）小屋を売ってもらおうと思ってるんですけどね（笑）。

――まずはボート小屋からスタートする、と（笑）。では、10月のラスベガス大会は期待しておりますので。

エド　アメリカ人はもちろん、日本のファンの人たちもたくさん来てほしいね。ファーストイベントに実際に足を運んで、その場の雰囲気を感じるというのは、凄く貴重で大事なことだと思う。なぜなら、一回目というのは一度しかないから。ぜひ、ラスベガスに訪れて、ラスベガスという街の楽しさもエンジョイしながら、『PRIDE』を観てほしい。そして時間があったら、我が家に遊びに来て、一緒にボートで釣りに行くのもいい（笑）。

――それは最高のツアーですね（笑）。

エド　10月の大会は、観客がのちのち「俺はあの場にいたんだ」と自慢できるようなイベントを見せてあげたいと思っている。私自身、2003年に東京ドームで『PRIDE』を観た体験というのは非常に重要なものだった。今回のラスベガス大会を開催する一番の動機になったわけだからね。きっと今度の10月の大会も初めて来たファンにとって素晴らしい体験になるだろう。

――アメリカでも多くのファンが『PRIDE』の開催を待っていたでしょうからね。

エド　一昨日、ロサンゼルスで開催されたファンイベント（公開会見）でも、終わってから外に出たら、たくさんのアメリカ人ファンに「『PRIDE』をアメリカに持ってきてくれてありがとう」と、感謝の言葉をもらったんだ。嬉しかったね。ますますやる気になったよ。まだ大会まで6週間あるんで、当日はアメリカ中からいろんなビッグショットを連れてきたいし、アメリカ国外からも自分と関わりのある人間に声を掛けていきたいなと思っているんで、たぶん10月の大会ではファイター以外にも、いろんなスターが見られると思うよ。

――リングサイドには凄いメンバーがズラリと揃う可能性もあると（笑）。

榊原　本当に映画の中でしか見たことがない人や、アメリカの有名人たちが、ひょっとしたら客席で見られるかもしれませんよ（笑）。

エド　ですから、このインタビューを通じて、「来なかったら本当に後悔するよ」と、日本の皆さんにもぜひ伝えていただきたい（笑）。

――わかりました。しっかりと伝えさせていただきます（笑）。

エド　これまで3年間ずっと下準備をしてきて。ノブともいろいろとイベントについて話をして、今回ようやく本当にアメリカで大会を開くことになって、誰よりも私が一番興奮している。10月21日はみんなで、その興奮と感動を分かち合えたらと思っています。皆さん、ラスベガスでお会いしましょう！

【06年8月21日（現地時間）／米国カリフォルニア州マリブ、エド・フィッシュマン邸にて収録】

――バタービーンさんには『PRIDE』の エタイもできるしカラテもでき、柔術やレス

インゲン豆
ダイエットの極意も
特別伝授!!

でしょう!

”

Bean

米ボクシング界の超人気者が語る
アメリカで成功する方法!

タイソンの相手？ そんなの
ボクしかいないで

8月19日（現地時間）に行なわれていたプロモーションイベントにマイク・タイソンがサプライズ登場をはたし、いよいよ盛り上がりをみせてきた10.21PRIDEラスベガス大会。しかし、『PRIDE』がアメリカで受け入れられるのか、そしてタイソンは本当に登場するのか。未知数な部分も依然と多いことも確かだ。そこで本誌は「アメリカ格闘技界」と「ボクシング界」双方に詳しいこの男、バタービーンに直撃インタビューを行なった。

聞き手／“和製バタービーン”橋本宗洋　撮影／乾 晋也

Butter

“史上最強の4回戦ボーイ”

――バタービーンさんには『PRIDE』のことはもちろん、アメリカのボクシングや業界事情などもお聞きしたいと思ってます！

バタービーン　OK、なんでも聞いてよ。

――まずはですね、『PRIDE』初参戦の印象からお願いします。

バタービーン　格闘技イベントとしては、世界でもベストなものの一つだと思ったね。とてもプロフェッショナルで、エンターテインメント性が高いと思った。そして何より素晴らしいのは、やっぱり試合だよ。ボクの試合はちょっとダメだったけど（笑）。

――今回、美濃輪選手に負けるまで、このところMMA6連勝中だったそうですが、バタービーンさんにとってMMAのおもしろさはどんなところにありますか？

バタービーン　まずいのは、自分の体重をより活かせるってことだね。

――実際、抑え込んだだけでタップが奪えそうですもんね（笑）。

バタービーン　でも、昨日はうまくいかなかったな。やっぱり小さい選手は、それだけ動きも速いからね。技術や戦略にも長けているし。でも、ボク自身は正面からアタックする単純明快なファイトが好きなんだけど（笑）。正直なところ「二年前にMMAを始めていればなぁ」って思うんだよね。そしたら、ミノワとの試合も違った結果になったんじゃないかと思うよ。じつをいうと、まだ柔術の練習を始めて日が浅いんだよ。だから負けちゃったんだけど、いまはアメリカン・トップチームで練習してるんで、そう時間をかけずに強くなれると思うんだけどね。

――これまでバタービーンさんは、たくさんのトップボクサーを見てきたと思うんですよ。そういう選手と比べて、MMAファイターの魅力っていかがですか？

バタービーン　MMAファイターのいいところは、まさに総合的なところだよ。彼らはムエタイもできるしカラテもでき、柔術やレスリングもできる。そういうところが素晴らしいね。MMAでは、ボクシングやキックは小さなピースの一つでしかないというのがおもしろいな。それにPRIDEファイターのほうが、ボクサーよりもプロフェッショナルに感じるね。ボクサーには「アイツは嫌いだ」とか「その条件では試合したくない」なんていう人間も多いんだよ。でも『PRIDE』の選手は、組まれた相手なら誰にでも立ち向かっていくよね。

――たとえば、MMAにもモハメド・アリとか、シュガー・レイ・レナードみたいなカリスマ的なスター選手も出てきますかね？

バタービーン　もちろんだよ。デニス・カーンはもうすぐそうなるだろうね。それにヒョードル。彼はすでにあらゆるジャンルの中で

も最高のアスリートだと思うよ。

——バタービーンさんは、これまでタフマンコンテストから始まってボクシング、K-1、そしてMMAと様々なジャンルに関わってきましたよね。中でもMMAは若いジャンルなんですが、その可能性をどのように感じてますか？

バタービーン　いま、アメリカではその可能性の大きさを誰もが感じてるんだよ。MMA業界はどんどん成長を続けていて、ボクシングのプロモーターたちもMMAのイベントをやりたがってるんだ。ボクのところにもボクシングのプロモーターから電話がかかってくるんだけど、「ウチのイベントでMMAの試合をやってくれないか」ってオファーだったりするからね（笑）。

——では、アメリカでの『PRIDE』の将来も非常に明るいと。

バタービーン　そうだね。でも、アメリカで成功するには一つだけ欠かせないことがあるんだ。それはアメリカ人の観客に向けた選手を使わなきゃいけないってことだね。

——ああ、それはDSE USAのスタッフも言ってましたね。「アメリカ人はアメリカ人にしか興味がない」って。

バタービーン　たとえばヒョードルは本当にグレートなファイターなんだけど、アメリカでは一部の人にしか知られてないよね。

ヒョードルはたとえボクシングルールでも タイソンに勝てると思うけど、 アメリカでそれをやってもPPVは売れないよ

——いまヒョードル選手を知ってるのはコアなMMAファンだけでしょうね。

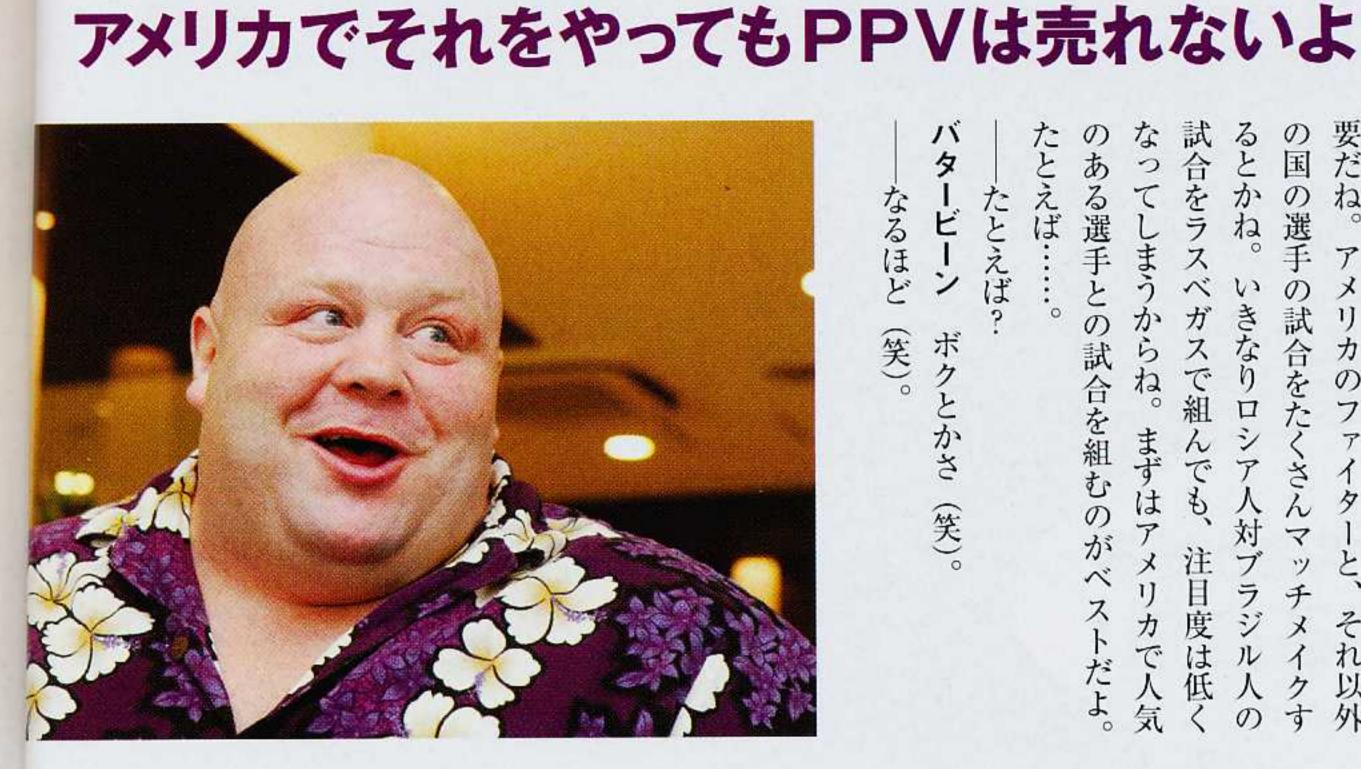
バタービーン　だから、最初の何回かはアメリカ人の選手をたくさん起用する必要があるんだ。その中で、徐々にヒョードルたちの存在が浸透していけばいいと思うよ。

——とはいえPRIDEファイターには日本人をはじめブラジル人、ロシア人も多いですよね。彼らアメリカでなじみの薄い選手が人気を得るには、どんなことが必要でしょう。

バタービーン　一番大事なのは、何度もアメリカで試合をして、ファンに存在を知られることだよ。それに興味を持たせる仕掛けも必要だね。アメリカのファイターと、それ以外の国の選手の試合をたくさんマッチメイクするとかね。いきなりロシア人対ブラジル人の試合をラスベガスで組んでも、注目度は低くなってしまうからね。まずはアメリカで人気のある選手との試合を組むのがベストだよ。

——たとえば？

バタービーン　ボクとかさ（笑）。

——なるほど（笑）。

バタービーン　そうやって認知させていけば、『PRIDE』の選手はクオリティが高いから、アメリカでも絶対に人気が出るよ。

——アメリカのファンには、どんなタイプの選手がウケそうですか？

バタービーン　PRIDEファイターは、みんなそれぞれレベルが高いしキャラクター性も強いから、そのままで勝負できると思うよ。ショー全体に関してもそう。必要なのは認知度だけだよ。それだって何度か試合をすれば大丈夫だしね。ボクが見た選手でいえば、そうだな……あの、カーリーヘアーで入場した日本人がいたよね？

——ああ、郷野選手ですね（笑）。

バタービーン　彼なんかはアメリカでも人気が出ると思うよ。

——あのダンスは世界基準でしたか（笑）。

バタービーン　試合そのものもよかったよね、とてもタフで。入場から試合内容まで、全部含めてレベルが高いね。それと、デニス・カーンと闘ったロシア人の選手もよかった。

——アマール・スロエフですか。

バタービーン　彼は本当にタフな選手だったよね。血を流しながら、最後まで闘志を失わなかった。アメリカのファンは、ああいうタイプの試合が好きなんだよ。

——とにかくタフにガンガンやり合うという。

バタービーン　それだけじゃなく、オールラウンドな試合を見せるのも大事だね。打撃はもちろんウケるけど、レスリングも柔術も、いろんな展開がある試合がいい。

——それから、先日のアメリカでの記者会見に、マイク・タイソンが登場しましたよね。タイソンと『PRIDE』が組むことに関してはどう思いますか？

バタービーン　もしタイソンが本当に『PRIDE』で試合をするのなら、大きな力になることは間違いないね。

——やっぱり、いまだにタイソンはビッグネームなんですね。

バタービーン　でも間違えちゃいけないのは、契約したり記者会見に顔を出すことじゃなく、本当に重要なのは実際に試合をすることだよ。それができなければ、何もメリットはないんじゃないかな。

——むしろここから先が重要なわけですね。

バタービーン　噂では、タイソンは今後10ラウンドや12ラウンドじゃなく、4ラウンドで試合をするんじゃないかって言われてるんだ。そうなったらボクの出番だよね（笑）。

“史上最強の4回戦ボーイ”

Butter Bean

8.26『武士道』での美濃輪戦で、いきなりドロップキックを食らうバタービーン。やった美濃輪も素晴らしいが、これを食らったあと吠えるバタービーンが最高！

タイソンは『PRIDE』の大きな力になる。でも、試合をしなけりゃなんのメリットもない

——なにしろ4回戦世界チャンピオンですからね（笑）。

バタービーン　実際の話、バタービーンvsマイク・タイソンという試合が組まれれば、新たなファン層の獲得につながると思うよ。彼とやるんだったなら、ボクシングもいいけどMMAルールでもいいな。まあ、彼は怖がってやらないだろうけど（笑）。

——4回戦の試合とか、MMAに関してはバタービーンさんのほうが実績がありますからね（笑）。

バタービーン　そのとおりだよ（笑）。これからタイソンが『PRIDE』でどういう試合をするのかわからないけど、たくさん勉強しなきゃいけないのは間違いないしね。MMAを「ストリートファイトと一緒じゃないか」なんていう人間もいるけど、そうじゃないからね。MMAほど多くの技術が必要な格闘技は他にないんだから。

——タイソンはボクシングの第一線から離れて久しいですけど、それでも試合をするとなれば格闘技ファン、ボクシングファンに与えるインパクトは大きそうですか？

バタービーン　それは相手にもよるね。

——タイソン一人の人気だけではダメだということですか。

バタービーン　そういうことだね。彼の人気自体は、当然だけど昔ほどのものはないからね。マッチメイクの魅力で売っていくのがいいと思うよ。

——たとえばどんな相手との試合ならウケますかね？　まあバタービーン戦以外で、ということになりますけど（笑）。

バタービーン　そうだね、たとえばバスター・ダグラスともう一回やるとかね。

——ジェムス・"バスター"・ダグラス！　世紀の番狂わせのリマッチですか（90年2月11日、東京ドームでタイソンとダグラスは対戦。"噛ませ犬"と見られていたダグラスがまさかのKO勝ちを収め、タイソンは世界王座から陥落している）。

バタービーン　あとはジョージ・フォアマンとかね。

——究極のオールド・タイマー対決（笑）。

バタービーン　そういう試合を組めば、話題になることは間違いないよ。たとえばヒョードルとタイソンが試合をしても、アメリカではチケットもPPVも売れないよ。もちろん結果は見えてるし、たとえボクシングの試合でもヒョードルが勝つと思う。それくらいヒョードルは強いんだけど、売り上げにはつながらないよね。あとはMMAファイターやボクサーじゃなく、WWEのプロレスラーでもおもしろいかもね。昔、WWEの『レッスルマニア』でボクとバート・ガンっていう選手が、リアルファイトのボクシングマッチをやったことがあるんだけど、凄くPPVの数字が良かったからね。とにかくタイソン一人の人気じゃなくて、相手が重要ってことだね。もちろん最高なのはボク（笑）。

Butterbean■1968年8月3日、米国出身。本名エリック・エッシュ。米ボクシング界で「史上最強の4回戦ボーイ」として人気を集め、IBAスーパーヘビー級、WAA世界ヘビー級のタイトルを獲得。03年からK-1に参戦し、同年大晦日の『Dynamite!!』で総合に初挑戦（須藤元気に敗れる）。美濃輪戦の前にはこっそりMMA 6連勝も挙げている。180cm、175kg。

——ボクサーがMMAのリングでMMAやボクシングの試合をするのは、アスレチック・コミッションで問題にはならないんですか？

バタービーン　あ～、それはどうだろうね。詳しくはわからないけど、問題があるならエキシビションという形式でやればいい。それはボクシングの公式記録に残らないというだけで、試合そのものはリアルファイトでやればいいんだよ。

——エキシビションという形式を借りて、ガチンコをやればいいと。

バタービーン　判定がなくても、KOすればいいわけだしね。観客にはどっちが強いかわかるんだからそれでいいよ。

——MMAの試合をするにしろボクシングの試合をするにしろ、『PRIDE』に上がるにあたってタイソン選手に何かアドバイスはありますか？

バタービーン　業界として、そんなに大きな違いはないと思う。試合をしてファイトマネーをもらうって点では一緒だからね。何より大事なのは、MMAをやるんならしっかりとMMAの練習をしておくってことだよ。

——それと最後にお聞きしたいのが、リングネームの由来なんですよ。タフマンコンテストの試合に備えて、インゲン豆（バタービーン）を食べて減量したっていうのは本当なんですか？

バタービーン　本当だよ。ひたすらインゲン豆とチキンを食べて、短期間に50ポンド（約22キロ）減量したんだ。おかげでインゲン豆が嫌いになったけどね（笑）。

——ほぉ～。じゃあいまの身体は"ダイエット済み"ってことですね（笑）。

バタービーン　いまの身体は、当時よりもっと絞れてるよ。体重は変わってないけど、パンツのサイズは小さくなってるんだ。お腹の脂肪が取れて、筋肉がついてるんだよね。

——そうですかぁ……。じつはですね、ボクもダイエットには非常に興味があるんですけど、なかなか成功しないんですよ（笑）。

バタービーン　そうか。じゃあボクがダイエット成功者として秘訣を教えるよ（笑）。やっぱり、大事なのはエクササイズだね。

——それが一番苦手なんですけどねぇ……。

バタービーン　（無視して）それにタンパク質を摂ること。魚とかチキンだね。米は白米よりも玄米を食べる方がいい。あとは3食がっちり食べるんじゃなく、少ない量を6回くらいに分けて食べるのがいいよ。

——やっぱり近道はないってことですね。

バタービーン　キミもボクのような身体を目指して頑張ってよ（笑）。

【06年8月27日／名古屋市内、某ホテルにて収録】

日米のバタービーン同士、夢の顔合わせとなった今回のインタビュー。はたして日本最重量の格闘技ライター橋本氏は、ダイエットに成功するか？　僕は無理だと思います（編集・堀江）。

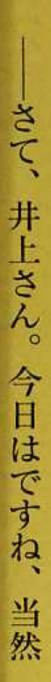
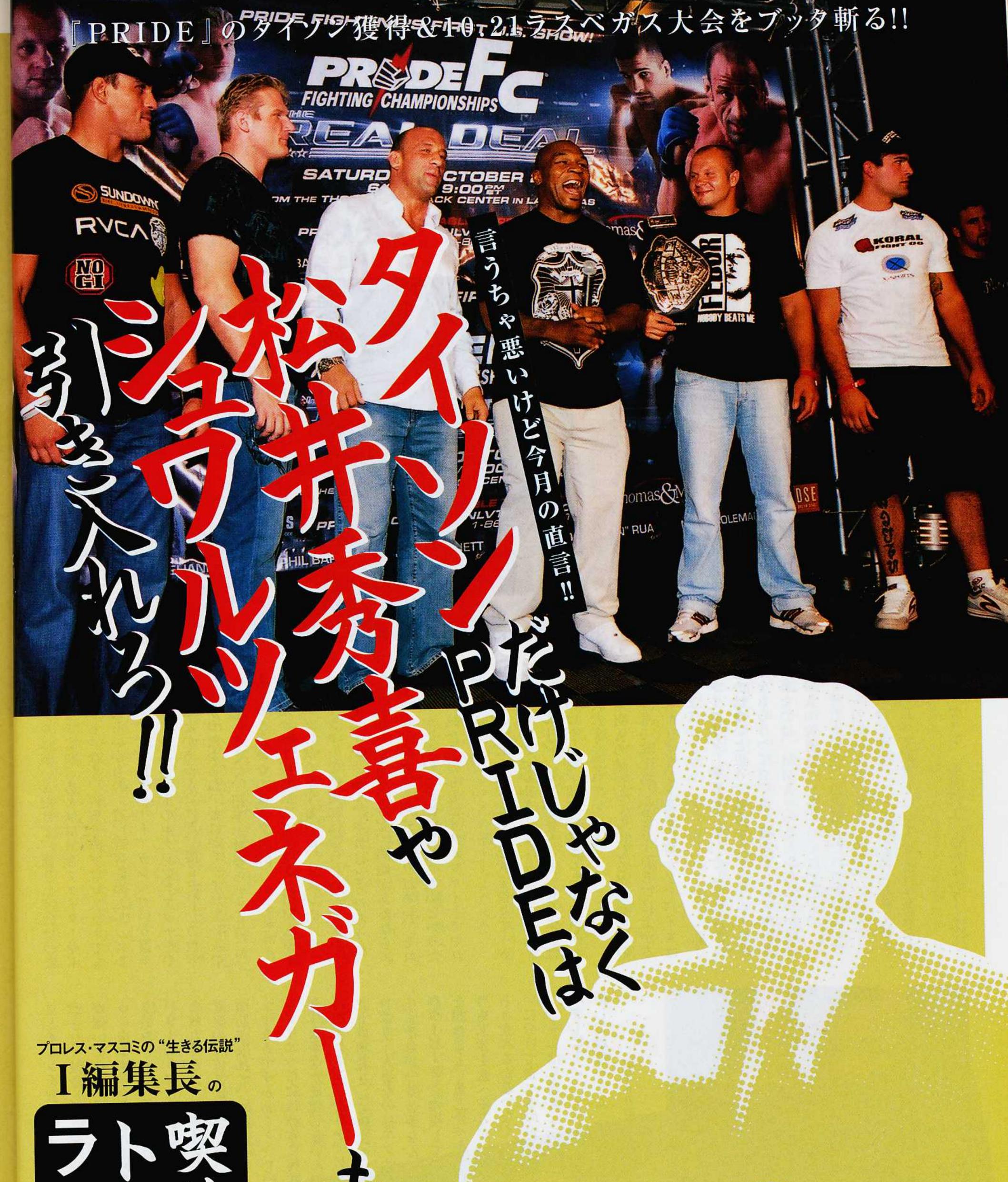
――さて、井上さん。今日はですね、当然
ら流されてくる試合の模様をテレビで観て
ら、もの凄いドルの札束が転がり込むこと
&『Dynamite!!』、NHKの『紅白

『PRIDE』のタイソン獲得&10.21ラスベガス大会をブッタ斬る!!

言うちゃ悪いけど今月の直言!!

タイソンだけじゃなくPRIDEは松井秀喜やシュワルツェネガーも引き入れろ!!

プロレス・マスコミの"生きる伝説"

I編集長の喫茶店トークラウンド

タイソンとの電撃合体発表でが然、夢が広がる『PRIDE』の海外戦略。現在のところ、まだまだ未知数な部分だらけだが、そうなるともちろん『井上小説』の出番。I編集長の妄想パワーが今月も大爆発します!!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／黒田史夫(松井の写真も)

I編集長とは?

井上義啓。元『週刊ファイト』編集長。「活字プロレス」の創始者であり、その影響を受けたプロレス者の数は計り知れない。70歳を越えたいまも、毎日、プロレス&格闘技のことを考える哲人だ。

タイソンvsホリフィールドの大晦日上海決戦が実現すれば、もの凄いドルの札束が転がり込む！

——さて、井上さん。今日はですね、当然マイク・タイソンの『PRIDE』登場問題について、うかがいたいと思うのですが。

井上　タイソン⁉ そんなもん、もうあちこちでいろんな人間に書きまくられてるでしょうが！

——いやいや。だからこそ、井上さんらしい、独創的で鋭い切り口のお話を聞かせていただきたいと思いまして（笑）。

井上　まぁ、俺も『kamipro』でありふれた話などする気は小指のさきほども持ち合わせてはいないがね。

——となると今日のメーンのテーマはズバリなんですか？

井上　言うまでもなく、イベンダー・ホリフィールドとの大晦日上海決戦ですよ！

——ホリフィールドと大晦日に上海で！　もうタイソンの対戦相手、日時、場所が決まってますか（笑）。

井上　だと思うね。そうでなけりゃ、今頃になってホリフィールドがカムバック声明を出したりはせんよ。ボクシング界はソッポを向いてしまっているから、闘う場所は必然的にプロ格闘技のリングになってくる。UFCという手も考えたのだが、タイソンが『PRIDE』で闘うとノロシを上げたのを見て、「それならオレも」と考えてもおかしくない。これは、おいしいビジネスになると踏んだわけだ。

——まぁ、タイソン、ホリフィールド双方にとって、もっとも話題になるマッチメークではありますよね。

井上　いまやアメリカのマット界もボクシングではなくプロ格闘技全盛だ。向こうから流されてくる試合の模様をテレビで観ていて、いつも感心するのが、こんなに早くプロ格闘技が人気爆発しているのかということだ。当然、ドン・キングはこのことに気づいている。だからこそのホリフィールドのカムバックだが、さて、私の思惑通り、タイソンとのどつき合いの大ゲンカになるかどうか。榊原信行DSE社長が、どこまでホリフィールドをコントロールできるのかが問題となる。ドン・キングが何もかもみんな持っていってしまうと、タイソンとのいがみ合いどころじゃなくなるからな。

——と言いますと？

井上　たとえば10・21ラスベガスだ。ここでタイソンがリングに上がってデモンストレーションを打つと見ているが、『井上小説』だと、そこへホリフィールドが突然姿を見せて、リング上でタイソンと、ののしり合いの大ゲンカをおっ始める。無論、パンチ、キックの乱打だ。

——いきなりタイソンとホリフィールドの大乱闘ですか（笑）。

井上　セコンドが大慌てで止めに入るが、どうにも収拾がつかない。とまあ、こういった筋書きだが、そこまで榊原社長がホリフィールドをつかんでいるかどうか。丸っきりつかんでいないとすれば、夢物語だが。それならなぜ、いま頃になってホリフィールドのカムバックなのかとなる。タイソンの舞台は中国、アメリカ、ヨーロッパの主要都市とゼニになるところばかりだ。世界中にPPVで流されるから、もの凄いドルの札束が転がり込むことになる。

——ドルの札束（笑）。

井上　それを見越してのホリフィールド陣営のカムバックだろう。タイソンのビッグマウスではなく実現可能な話なんだとわかってきたからなんだ。私は、そう見ている。だから大晦日は日本でヒョードルと無差別級GP王者が実力世界一を賭けて闘い、中国ではタイソンvsホリフィールドの大ゲンカとなる。そうなると、フジテレビはホゾを噛むな。

8月19日にロサンゼルス、FOX SPORTS GRILLで行なわれたファン公開会見イベントのサプライズゲストとして登場したタイソンは、榊原代表とガッチリ握手。今後の展開が大いに注目される。

——切るんじゃなかった、と。

井上　まさか『PRIDE』にこんなおいしい話が次から次へと出てくるとは考えもしなかっただろうからね。まあ、結果論で仕方のない話なのだろうが、仮にタイソンvsホリフィールドをフジテレビが大晦日の夜にオンエアしたとすれば、TBSの亀田兄弟&『Dynamite!!』、NHKの『紅白歌合戦』などぶっ飛びますよ！

——そこまで強力ですか。

井上　そりゃそうですよ！　タイソンとホリフィールドの大ゲンカなら、誰だってチャンネルを合わせますよ！　これがボクシングの試合なら、またクリンチ（ホリフィールド）、噛み付き（タイソン）ぐらいの見せ場しかないのでクソおもしろくもなんともないが、どつき合いの大ゲンカだからねぇ、PPVでの申し込み数なんてゲーッ！と驚くぜ。

——ゲーッと驚きますか（笑）。

井上　DSEにもかなりのドルの札束が流れ込んでくる。榊原社長の計算は正確だったってわけだ。

——先ほどから景気のいい話がボンボン出ているわけですが、井上さんと谷川（貞治FEG）代表の親密な関係がある（笑）、K―1のほうはいかがでしょうか？

井上　ちょうど、その話をこれから展開させようとしているところだ。もう一つの20尺の大花火ですよ！

——20尺の大花火！　そんな秘策、隠し球がK―1にもありますか。ぜひ、聞かせてください！（笑）。

井上　言うまでもなくウラディミール・クリチコですよ！

——待ってました、クリチコ！

井上　あれほどの超大物をいつまで放ったらかしにしておくつもりなんだろう。もっとも、本人が「プロ格闘技なんて死んでも嫌だ」と言い張っているのなら仕方がないが……。親友のミルコの線から、てっきり『PRIDE』が引き入れると見ていたのだが、一向にその気配がない。本当言うと、K―1が引き入れて、ドイツのシュツットガルトあたりで大々的に記者発表しないとウソだ。『PRIDE』がタイソン、K―1がク

リチコという構図ができ上がってみろ。凄い話になるぜ。

―そりゃ、凄い話でしょうね（笑）。

井上　とにかく、クリチコの、あのもの凄いストレートとフックにはしびれるからねえ。私は大のクリチコファンなんだ。兄のビタリも凄いがね。

―クリチコ兄弟が揃うとなると、ラスベガスなんか大盛況間違いなしですかね。

井上　世界中が大盛況ですよ。何せ、スケールがまるで違うからねえ。惜しい話だ。そうそう世の中、うまくいくとは限らないんだが。

―これも『井上小説』の中だけで終わりますか（笑）。

井上　その気配濃厚なのがもどかしい！　クリチコ兄弟あたりを引き込まないと、K―1の立つ瀬がない。谷川代表にエールを送りたいね。

―とにかく、プロ格闘技がプロボクシングに肩を並べて、世界を席巻するという夢ですね。

井上　そうだ。人間、夢を持たないといけない。プロレスだけが夢舞台であってはならないんだ。武藤が企業とのタッグで新しい方式の興行形体を作り出したのがその例でね。しかし、さすが武藤。スポンサーはタニマチでいればよろしいじゃなく、積極的にプロレスのプロデュースに参画させて利益の一部をスポンサーが配分するという、思ってもみなかったサプライズをやってのけた。あの方式はプロ格闘技にも通用しそうなので、どんな広がりを見せるのか楽しみにしてるんだ。

―確かに凄い思いつきでしたね。プロレス界の復興も夢ではないとの見方もありますね。

井上　昨日また、かくありけり。今日もまた、かくありなんでは駄目なんだ。一夜明けたら、世の中変わっていたとならないとな。『PRIDE』もラスベガスに進出するなら、3階建てのオクタゴンを作って、タッグマッチをやるぐらいの発想がほしい。

―3階建てのオクタゴンで夢のタッグ戦！　ほとんどキン肉マンの世界ですよ！（笑）。

井上　（無視して）シングル対決がすべてだと考えてはならない。あんまり奇をてらうとひんしゅくを買うが、目新しい方式はどんどん採り入れる必要がある。『PRIDE』がやらないなら、なぜプロレス界がオクタゴン3階建てマッチをやらないのか不思議でならんよ。誰かがやるだろうと見ているのだが、ウンともスンとも言わない。こんな調子じゃあ、ありふれた巡業などいくらやったって儲かりっこない。第2、第3の武藤よ、出でよだな。

かつては大晦日に『タイソン・ボンバイエ』開催をぶち上げたこともあるFEG谷川社長。はたして今年の大晦日には、どんなサプライズを見せてくれるか。

ザ・ゴジラに扮した藤田和之と対峙する もう一匹のゴジラ、それが松井秀喜ですよ！

DSEがタイソンを獲得したからには K―1はクリチコ兄弟を引き入れろ！

―ところで、10・21ラスベガス大会ですが、『PRIDE』はどういったサプライズを仕掛けるべきでしょうか。ザ・ゴジラ、ザ・モスラに続くラスベガス大会成功の秘策を教えてください（笑）。

井上　とにかく騒ぐことだな。試合は勝負論でビシッとやるとして、それ以外のデモンストレーションは思い切り羽目をはずして大胆に、かつ派手にドカーンとやる。藤田をザ・ゴジラのリングネームで紹介しろと言ったのは、こうした狙いがあったからこそだ。当然、それだけで終わるような〝大阪のバカ〟じゃない（笑）。

―さらなる秘策がありますか（笑）。

井上　まず選手全員にマスクを被せ、コスチュームもド派手なものにしてリング登場させることだ。試合前に、出場全選手をリングに上げて紹介するだろ。藤田なんかが、いつもの格好、いつもの表情でシラーッとリングに上がってきたりするからおもしろくもなんともないとなる。だから藤田はゴジラの縫いぐるみをまとって、ガオーッとうなり声を上げながらリングに乱入してくる。ところがだ。

―ところが、どうなんですか（笑）。

井上　もう一匹、別のゴジラが反対方向からリングに走り寄ってくるって寸法だ。

―さらに、もう一匹ゴジラが現われますか！（笑）。

井上　そして二匹のゴジラがリング上でガオーッと向き合う。やがて、二匹とも縫いぐるみを脱ぐのだが、なんと、ひとりは藤田で、もう一人は……。

―もう一人は……？（ゴクリとつばを飲む）。

井上　もちろんニューヨーク・ヤンキースの松井秀喜ですよ！

―ダハハ！　あの松井がついにPRIDE登場ですか！

井上　無論、松井はヤンキースのユニフォームを着て、手にはバット、グローブを握っている。そこでアナウンサーが怒鳴るね。「みなさん。今日ご覧になったマスク、コスチュームはすべてインターネット・オークションで競りにかけますが、このゴジラの縫いぐるみも同じで、高値で落札してください。売り上げたお金はハリケーン・カトリーナで被災に遭ったニューオーリンズの人たちに寄付されます」とね。

―突然そんなチャリティがスタートしますか（笑）。

井上　そして、そこへだ。マスクを被った男女十数人がドカドカとリングに上がってくる。みんなド派手なマスク、コスチュームに身を包んでいる。やがて、一人一人が正体を明かすのだが、なんと、そのうちの一人はカリフォルニア州知事のシュワルツエネガーという趣向だ。知事は言うね。「みなさん。次回はロサンゼルスでも『PRIDE』の試合を行ないます。そのときはこぞって応援してください」とね。

―シュワルツェネガー知事まで引っ張り出しますか（笑）。

井上　当然だ。大会の趣旨は『ニューオーリンズの人々を救おう』だからな。タレント、歌手たちがまとっていたマスク、コスチ

えられ
競技場。

リンズの人々を救おう』だからな。タレント、歌手たちがまとっていたマスク、コスチュームもすべてオークションにかけられる。とにかくド派手に動くことだ。ベガスなんだからな。金を持った連中はウジャウジャいる。みんな惜し気もなく金をはたいてくれるよ。

――しかし、有名人、タレントなどを駆り出すとすると、出費も大変ですし、交渉にも時間が掛かりますね。

井上 当然だ。一年掛かりでやらねば間に合わない。10・21ベガスをやると決めた日に、スタッフが動いていなければ話にならない。イベントとは一年掛かりで取り組むものだ。3ヵ月や4ヵ月で何もかもうまくいくはずがないじゃないか。

――それは、たしかにそうですね。

井上 こういう経験がある。『週刊ファイト』の編集長時代に女子プロのプロモーターがやって来て、「大阪府下の堺市で全日本女子の興行を打つのですが、何かいいチエはありませんかね」と言う。一ヵ月前の話だ。あきれ返ったね。興行の日取りは一年前には決まっている。なぜ、その日に相談に来ないのかと。「女子レスラーに2日か3日、安物のマフラー、ジャケット、ショルダーバッグなどを使わせておいて、それをオークションにかける。そのくらいしかチエは出んな」とね（笑）。

――あとはチケットナンバーで抽選ぐらいですかね。

井上 オッ、なかなか冴えた頭してるじゃないか（笑）。トトカルチョで勝負予想をさせるという手もある。試合前に主だったレスラーをリングに上げて、トークショー、質問会をやるのも一つの手だ。チケットを売りさばくだけが仕事じゃない。いかにすれば客が会場に足を運んでくれるか。それをまず考えることだ。試合以外のプラスアルファに気がつかない連中が興行になんかタッチするんじゃない。必死になって考えろ。考えて、考えて、考え抜け！　それが仕事っていうものだろ。話を聞いてみると、ほとんど何も考えていない。この男、何してるんだろうとあきれ返ったね。某団体にも、そんな御仁がいたじゃないか（笑）。「毎日出社してるんだ。考える時間は腐るほどある。それなのに、何も手を打っていない。毎日、何やってるのだろう」とプロ格者と喫茶店で顔を見合わせたもんだ。「あんなことでは団体経営なんてうまくいくはずがない。まったくもってあきれ返った話だ」とね。

――大晦日のビッグサプライズ、他にまだ何かありますかね。

井上 「来年は当方（DSE）とK−1さんで対抗戦を行ないます」とぶち上げることだ。「夏から秋にかけて国立代々木競技場で10万人規模の一大イベントを行ないます」とやればワーッとくること間違いなしだな。

――相変わらず、独創的な意見、ありがとうございました。

【06年9月3日／電話取材にて収録】

2002年8月に『PRIDE』とK-1合体イベントという、いまでは考えられないことが行なわれ主催者発表で9万人の大観衆を集めた国立競技場。格闘技ファンとI編集長の夢が再び実現することはあるか？

『PRIDE』HPで絶賛販売中!!
http://www.prideofficial.com/
『紙プロHand』でも購入可能!!

死神の目が光る!
ラインストーン付き!!

ハリトーノフ
"死神"Tシャツ
ホワイト ¥4,200(税込)
S･M･L･XL

SERGEY KHARITONOV

ハリトーノフ スポーツタオル
¥3,150(税込)

ロシアの残虐超人セルゲイ・ハリトーノフ

ハリトーノフ パラシュートTシャツ
ホワイト/レッド ¥3,990(税込)
S･M･L･XL

ハリトーノフSTAR Tシャツ
レッド ¥3,990(税込)
S･M･L･XL

ハリトーノフFACE Tシャツ
レッド/ホワイト/カーキ ¥3,990(税込)
S･M･L･XL

コピィロフTシャツ
ホワイト ¥3,990(税込)
S･M･L･XL

ヴォルク・ハンTシャツ
ホワイト ¥3,990(税込)
S･M･L･XL

ミーシャTシャツ
ホワイト ¥3,990(税込)
S･M･L･XL

ハリトーノフ ジャージ
ホワイト&レッド¥7,350(税込)
M･L･XL

ロシアン・トップチームグッズは『kamipro』通販でご購入できます。電話、メール注文もできますよ!!
(株)ダブルクロス TEL.03-5368-1797(平日13:00〜19:00まで)

【メール注文方法】郵便番号、住所、氏名、電話番号(携帯)、商品名、サイズ、枚数、年齢を書いたメールをkapra@kamipro.comまで送りください。申し込みメール確認後、佐川急便にて発送。代金引換でのお受け取りになります。商品代金のほかに送料一律¥500(何枚でも可。離島、山間部は除く)代引手数料約¥315がかかります。(代引金額によって異なります)。御支払は、現金、デビットカード、クレジットカードの中から選べます。販売元:(株)ダブルクロス

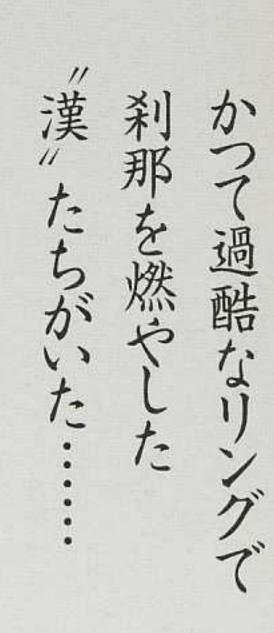
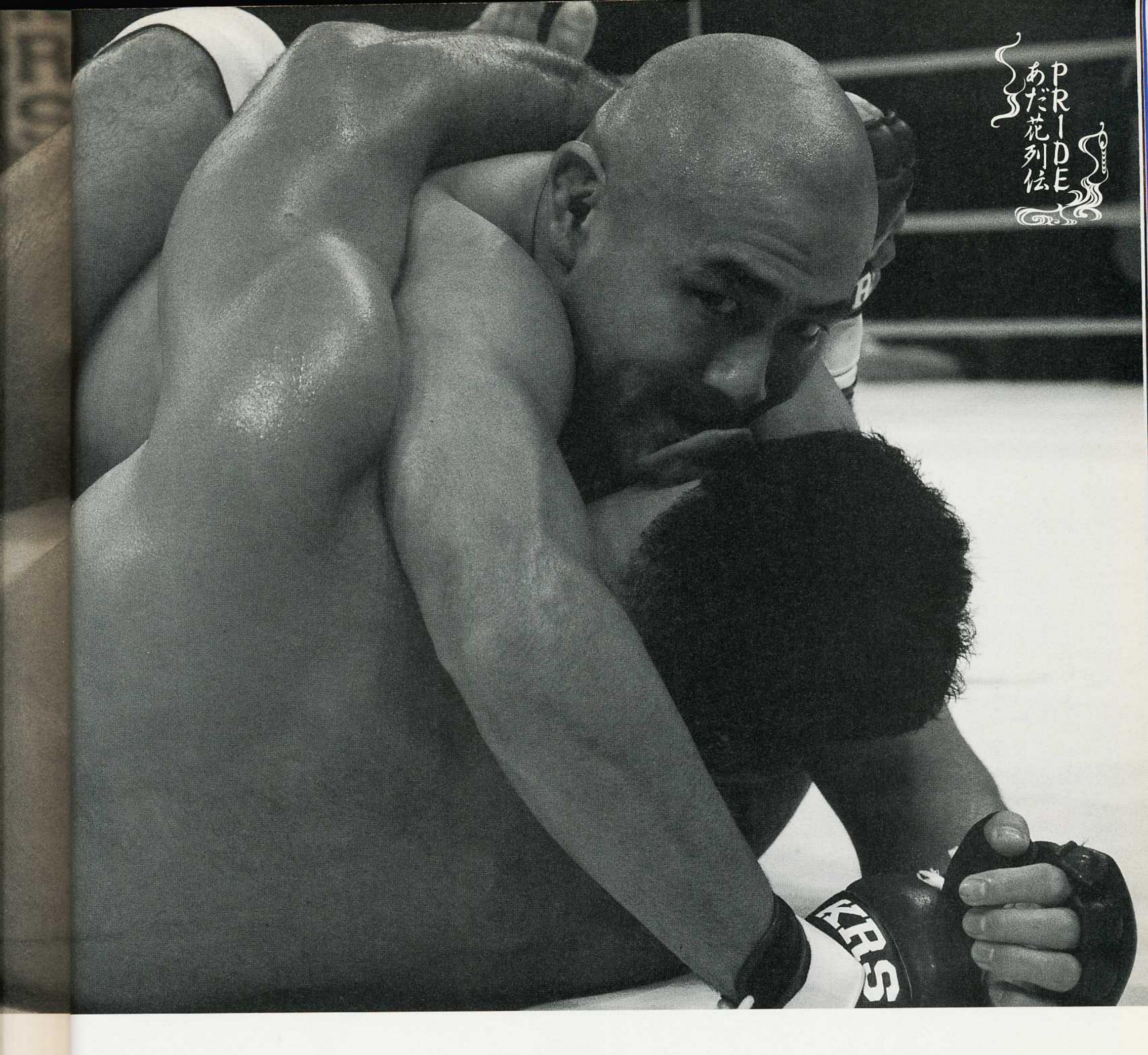
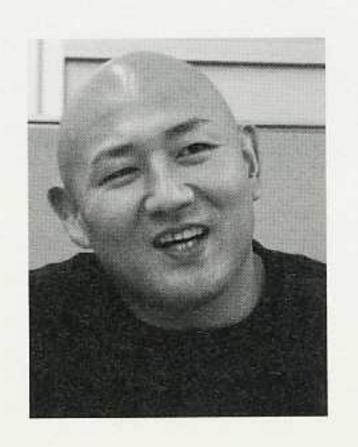
アクセス方法

DoCoMo	iMenu ▶	メニューリスト ▶	スポーツ ▶	格闘技/大相撲 ▶
au/TU-KA	トップメニュー ▶	カテゴリで探す ▶	スポーツ ▶	格闘技 ▶
vodafone	メインメニュー ▶	メニューリスト ▶	スポーツ ▶	格闘技 ▶
WILLCOM	趣味&スポーツ ▶	スポーツ ▶	総合 ▶	
	エンターティメント ▶	TV・メディア・本 ▶	本 ▶	

kamipro Hand

[通販の問い合わせ先]
株式会社ダブルクロス(衣料部)
TEL.03-5368-1797
(受付時間/13時〜19時)
販売元:株式会社ダブルクロス

かつて過酷なリングで
刹那を燃やした
〝漢〟たちがいた……

PRIDE あだ花列伝

いまや自他ともに認める、
総合格闘技最高峰のリングとなった『PRIDE』。
しかし、その黎明期はプロレスラーを始めとした腕自慢が、
一攫千金を狙い大博打を打つ闘いの〝鉄火場〟でもあった。
そんな初期『PRIDE』のリングで一瞬の輝きを放った
〝あだ花〟たちの生き様を振り返ってみよう。

クサンダー大塚

初期『PRIDE』ヒーローの光と影

98年10月『PRIDE.4』で"ヒクソンの天敵"マルコ・ファスを破る大番狂わせ!! 一躍、マット界の救世主に躍り出たのが、当時、格闘探偵団バトラーツ所属のプロレスラー、アレクサンダー大塚だった。技術を度外視したクソ度胸&プロレス頭で名勝負を生んだ初期『PRIDE』のヒーロー、アレク。だがある時期を境に"勝てない"アレクの迷走が続き、やがて『PRIDE』を去ることに……。そんなアレクの『PRIDE』時代の光と影をアレクの旧友である原タコヤキ君が、その核心ド真ん中に迫る直撃インタビュー！

聞き手／原タコヤキ君（自転車LOVE）　構成／真下義之

アレク

やっぱりボクには格闘技は合ってなかった……

アレク （息を切らせながら）はぁはぁ、遅れてすいませ～ん。

――どないしたの？ アレクが遅れてくるなんて珍しい。

アレク いや～、ちゃんと間に合う予定だったんですけど、今日、『ロト6』の発売日だっていうことを思い出して、買いに行ってたんですよぉ。今回、キャリーオーバーで6億円まで上がってるんで。

――へえ。俺は宝くじとかまったく買わないんやけど、アレクはそういうのけっこう買う人なの？

アレク いや～、たまにですけど。

――ちなみに今回、6億当たったらどうします？

アレク えーっと。まずは何に使うかというと、自転車買います！

――ワハハハ！ いま、スポーツサイクルに狂ってる、ボク用のコメントをありがとうございます（笑）。まあ自転車の魅力を語りだすと全ページ、自転車の話題になるので、さっさと本題に行きましょう！ 今回は『PRIDE』の特集なんですけど、『PRIDE』の魅力も、いまと初期とではだいぶ違うわけですけど、そのへんをアレクと振り返ってみたいと思います。

アレク は～い、お願いいたします。

――さて、いまからさかのぼること8年前、″ヒクソンの天敵″″路上の王″と呼ばれた98年10月のマルコ・ファス戦が『PRIDE』デビューなんやね。そもそもマルコ・ファスと闘うことになった経緯ってどんななんですか？

アレク えっとぉ、『PRIDE』が立ち上がる前に、プロレスラーがUFCで闘ったじゃないですか。

――ケン・シャムロックがホイス・グレイシーとやったよね。

アレク そうです、そうです。プロレス界に関わってることで、そのへんから総合格闘技は意識してましたね。

――意外と早くから意識してたんやね。

アレク それで『PRIDE・1』の高田対ヒクソン戦を観て、いちプロレスラーとして、プロレスというものを守るためにも出てみたいなという思いを持ちましたね。で、そういう話を島田（裕二）さんにはしてたと思います。一応、UWFの流れを汲んでいる者としても（笑）。

――ワハハハ。まあ、ちょろっと汲んでるよね（笑）。汲みながらパーマンの格好とかしてたけどな（笑）。

アレク で、『PRIDE・1』から島田さんがレフェリーをしてて、『PRIDE・4』でマルコ・ファスの相手が見つからなくて、ボクに話が来たんです。

――ちなみにそのときはアレク以外に、誰か候補は上がってたんかな？

アレク いや～、全然知らないです。

――どのくらい前にオファーが来たの？

アレク （資料を見ながら）あ、この日に発表されたんです。

――98年9月6日のバトラーツ、TOKYO FM大会か。じゃあ試合の一ヵ月前やん！ しかも島田さんから聞いて、その日に発表したんや（笑）。

アレク そうです、そうです（笑）。「ゴリさん、マルコ・ファスと決まったから！ よろしくぅ～！」って言われて「はあ、そうですかあ」って言いました。どんな人だろうと思いながら。

――マルコ・ファスがどんな実績があるかはすぐにわかったと思うんやけど、アレクはそれでも自信があったの？

アレク はい！（即答）。なんの根拠もなくすこぶる自信を持ってました（笑）。

――まあ、無謀だよねえ。

アレク そうですねえ。レスリングのバックボーンがあるなんて言われましたけど、高校時代やってただけですからねえ。

――それでね、試合当日、アレクはなんとリング設営もやってるわけですよ！ これはみんな本当に驚いたんやけど、自分で志願したの？

アレク　普通どおりのほうが自分の力を発揮できると思ったし、あとはやっぱり……プロとして魅力を作る部分においても、これはおいしいかなあって（笑）。自分で言っちゃダメですよね。

——いやでも、そのセンスはいま考えても素晴らしいよね。入場パフォーマンスで付加価値をつける選手はいまでもいっぱいおるけど、早朝から会場入りしてリング設営なんて誰もやらんもん（笑）。

アレク　朝4時半入りでしたね、たしか。（資料読みながら）運営マニュアルに名前が入ってるんですよね。

——現場のスタッフもびっくりしたやろなあ（笑）。で、そうやって自分を追い込みながら試合が始まるわけやけど、試合直前の心境はどうやったの？

アレク　とくに変わらなかったですね。

——1ラウンドは押されてたよね。

アレク　そんな目立ったダメージはなかったんですけどね。2ラウンドでスタンドでコーナーに押し込んで、それで引きずり込んだんです。かなり冷静でしたよ。リングサイドの髙橋義生さんとか田代まさしさんの顔も見えましたから。

——へえ。余裕やねえ。この頃の『PRIDE』でいまと違うのは、プロレスラーがどれだけプロレス技を出してくれるかが見どころやったやんか。

アレク　ああ、はいはい。

——実際、アレクも期待されていたと思うんやけど。

アレク　ジャイスイ（ジャイアント・スイング）出すんじゃないか、とか言われてましたね。

——そういう意識はあったの？

アレク　微塵もなかったです（キッパリ）。

——そらそうやわな（笑）。

アレク　あと、試合で印象に残っているのは、1ラウンドでスリーパー取られて、残り30秒くらいだったんですけど、モニターに映ってる自分が見えたんですよ。それで、「これを耐えたらおいしいな」と思いましたね。

——いい絵だなと（笑）。アレクコールも凄かったしね！

アレク　それも聞こえましたね、はい～。

——結局、そこからパウンドで勝利を収めたわけやけど、それはゲームプランどおりなの？

アレク　まあ結果的に。

——サブミッションは考えなかったの？

アレク　ヘタクソですから（笑）。

——うまくないもんねえ（笑）。

アレク　これといったフェイバリットがないですから。

——だからアレクのフェイバリットは〝発想〟だったわけですよね。平気でセオリーを無視できるというか。

アレク　まあそうですねえ。とりあえずいい結果が出てよかったし、とにかく気持ちよかったです。

——『PRIDE』デビュー戦がマルコ・ファス戦であり、『PRIDE』史上に残る名勝負となり、そして勝ったと。しかもロッキーじゃないけど、家族で喜びを分かち合ったりして、本当に感動的だったですよね。

アレク　本当は娘の愛（いと）をリングに上げたかったですけどね。まだ家族をリングサイドに呼べるような立場じゃなかったんで。

——試合終了後、対ロード・ウォリアーズ戦（98年11月23日、バトラーツ両国大会で対戦）をアピールしてたし、いい仕事してたよねえ。まさに当時のアレクはマット界の救世主でしたよ。このときはアレク本人、バトラーツという団体が絵に描いたような急上昇だったよね。

アレク　まあ、バブルだったんですかね（笑）。

——バブルというか、やることなすこと全部歯車が噛み合ってたよね。給料もガーンと上がった？

アレク　いや、団体としての給料はあんまり……。でもボクはそこから外の仕事が増えたので。

——ああ、テレビとかもちょいちょい出てたもんね。そのときって、やっぱりテングになってた？

アレク　うーん。自分ではそういうつもりはなかったですけど、ほかの人から見ればそうだったかもしれませんねえ。

——で、マルコ・ファス戦のあとは『PRIDE』に上がるのは一年後になるんだ？　意外やなあ。

アレク　プロレスラーとしての自分が大きかったので、当時も言ってましたけど、次に『PRIDE』でやるんならヒクソンだなあと思っていました。

——でもマルコ・ファス戦後はオファーはしょっちゅうあったでしょう？

アレク　いやあ、どうなんでしょう。来てたとしても島田さんのレベルで止めていたんじゃないですか。

——で、それが99年9月の対髙田延彦戦ですね。

アレク　まあ、ヒクソン以外でやるんなら髙田さんだと思ったので。それまでの『PRIDE』の髙田さんはそれこそアイ・アム・プロレスラーらしくないじゃ

見てみぃ！　この低空ドロップキック！　90年代後期、桜庭和志と並行して、そして美濃輪育久に先駆けて、“プロレス頭で総合に挑む”プランを次々と成功させていたのがアレクサンダー大塚だった。当時のファンはそのクソ度胸に何度も胸を熱くしたものだ。

これがアレクサンダー大塚PRIDE全戦績だ!

98.10.11 東京ドーム／PRIDE.4
○vsマルコ・ファス［2R 終了後 TKO］

事前の勝敗アンケートでは、誰一人としてアレクの勝利を予想しない超逆境。なおかつバトラーツ社長の石川雄規が「ゴリさん大丈夫、ゴリさんなら勝てるよ」とアドバイスにならないアドバイスを送る中、1R終了直前にはスリーパーも凌いで、2Rはアレクがパンチの雨でマルコを戦意喪失させ、まさかの逆転勝利！

99.09.12 横浜アリーナ／PRIDE.7
×vs髙田延彦［2R 1分32秒 TKO 裸締め］

「プロレスラーの評価を上げるため」髙田に対戦希望したアレクは、ドロップキックにコブラツイスト狙い!　そしてブレーンバスターまでくり出した。PRIDE史上、最もプロレス技が出た驚愕の展開に。髙田が寝そべる“猪木vsアリ”状態ではアレクが「目を覚ませ！」と絶叫!ついに髙田もローリングソバットをくり出した異質な試合。

99.11.21 有明コロシアム／PRIDE.8
×vsヘンゾ・グレイシー［2R終了 判定 5-0］

アレクは事前に予告していた“パーマンマスク”を持参して入場。12日前にプロレスの試合（vs松永光宏戦）の額の傷も治らないまま、4度もタックル成功。完璧に極まった十字も脱出する大健闘。ヘンゾもジャーマンでアレクを投げるなど、桜庭がホイラーを撃破した歴史的大会のセミで、もう一つのグレイシー名勝負を展開。

00.01.30 東京ドーム／PRIDE GP2000 開幕戦
×vsイゴール・ボブチャンチン［1R終了 判定 3-0］

後楽園でのバトラーツの試合（アレク＆カール・マレンコvs石川雄規＆モハメド・ヨネ）とのダブルヘッダーとなったこの試合。セコンドにはザ・グレート・サスケと村上一成。優勝候補、ボブチャンチンの200発以上のパンチで顔面ボコボコになりながら打撃戦を挑み、ローリングソバット、低空ドロップキックも披露して、大会ベストバウトを生む。

（マット界の救世主、といわれた時期は まあ、バブルだったんですかね（笑）

ないかと思っていましたね。……ボク、じつは髙田さんとの試合後に「ノブ兄さん」と呼ぶ許可を御本人からもらってるんですけど。「ノブ兄さんも、もっと気楽にプロレスラーとしてやればいいじゃないですか」と。で、ノブ兄さんもヒクソン戦のあと「もう一丁！」って言ってたじゃないですか。だからボクもノブ兄さんのそういう気持ちを盛り上げられればなあと思ってましたし、「もう一丁！」の前でボクが勝っておけば、代わりにボクがヒクソンとできるかなあ、とも思っていました（笑）。

——まあ、初期『PRIDE』を振り返る中で、本当に異色中の異色の試合やわなあ。

アレク　バーリ・トゥードはなんでもありなんだから、そのルールの中でプロレスラーらしいことができればいいんじゃないかなと思いましたね。

——『PRIDE』では位置づけしにくい試合ですけどね。いま、『PRIDE』の定義はどんどん狭まっているからねえ。

アレク　初期のUFCなんか、キックボクサーが片手がグローブで片手が素手なんていう人もいたじゃないですか（笑）。だから自分の得意分野を出しつつも、総合の中に溶け込もうとしていたんですよね。

——トップロープからニードロップとかしてたっけ？

アレク　（あきれ顔で）そんなことしてませんよぉ！！

——俺、どんな試合だったと記憶してるんやろ（笑）。なんか派手な技出したっけ？

アレク　ノブ兄さんにはブレーンバスターかなあ。

——この試合は満足いった？

アレク　はい。対髙田延彦という試合の中での役割は果たせたというか。まあ100パーセントじゃないでしょうけど。負けてるし。

——次は短いスパンやね。11月の『PRIDE.8』でヘンゾ・グレイシー戦か。

アレク　ここからはパンパンパンと試合に出てますね。

——このときは『PRIDE』の主役の一人だったわけじゃないですか。アレクは『PRIDE』が本職というふうには思わなかったの？

アレク　それはないですね（キッパリ）。二足のわらじが楽しかったですね。凄い忙しくてしんどかったですけど、それが楽しいというか。とくにヘンゾ戦は減量もあったので。

——これは判定負けか。でもええ試合やったよねえ。この日にサクがホイラーに勝ってるのか。個人的に一番『PRIDE』がおもしろかった時期だなあ。で、00年1月に対ボブチャンチン戦でグランプリ（『PRIDE GP2000開幕戦』）に出場してますよね。

アレク　グランプリに出られるというので、対戦相手は誰がいいか聞かれて、ボクも凄い勢いで強さをアピールできていた時期なので、ボブチャンチンとやりたいと言ったと思います。

——ボブチャンチンの嵐のようなパンチをかいくぐってね。現ザ・クロマニヨンズの甲本ヒロトさんも絶賛したという。

アレク　はい〜。嬉しかったです！

——（資料読みながら）あ、この日はリング設営したあとにバトラーツの試合に出て、ダブルヘッダーを敢行したんや!? ああ、そうやったっけ。凄いことやってたねえ！　アレク的に前回よりもっとインパクトのあることをやりたかったの？

アレク　まあ、ちょうど試合が重なってたというのもありましたけどね（笑）。

——ここまではアレクの作るサイドストーリーやら試合内容やら、すべてが神懸かり的にドラマチックだったよね。

アレク　このあたりまでは『PRIDE』をもっと広めていきたいと考えていたので、そういう意味ではいい仕事をできていたのかなと思います。

——そうですよね。

アレク　でもこのとき「レスラーだから帰るところがある」なんて言われてて。

でも、誰であっても負けても帰る場所なんてあるわけじゃないですか（笑）。だから負けを単なる負けにするんじゃなくて、自分の魅力をいかに出せるかというか、観てる人の記憶に残るようにしよう、と思っていたので、結果的によかったんじゃないかなと思います。

——なるほど。で、これ以降からアレクは戦績的にも試合内容的にも低迷していってしまうんですけど。アレクはずっとプロレスラーとして『PRIDE』に上がっていたじゃないですか。それは練習内容とかも含めて。でも、本当はこのあたりから、バーリ・トゥーダーとして自分を変えてもよかったと思うんですけど、それは本人としてはどうですか？

アレク　うーん。でもやっぱり自分の中においてプロレスが一番だったんですね。

——『PRIDE』でこれだけ注目されていてもプロレスが一番だったんですか？

アレク　はい、そうですね。でもそれを意識しすぎていた部分もありますね。次のケン・シャムロック戦（00年5月『PRIDE GP2000決勝戦』）では、WWF（当時）に目が行っていたので、いろいろとアピールしたりしたんですけど……。

——ああ、『PRIDE』がPPVでアメリカで放送されるのは、この日の興行が最初やったんですよね。このシャムロック戦を足がかりに、WWF参戦を目論んでたわけや。

アレク　でも、こっから落ちていっちゃうんですねえ……。

——でもね、『PRIDE』で初めて世間から注目を浴びたわけじゃないですか。で、自分が大好き、いっぱい目立ちたいアレクなら『PRIDE』に専念して、総合用の練習だけしよう、とはならなかったんですか？

アレク　うーん。『PRIDE』で年に

00.05.01 東京ドーム／PRIDEGP2000 決勝戦
×vsケン・シャムロック［1R 9分43秒 TKO］

『PRIDE』が全米PPV中継されたこの大会。アレクはWWF（当時）を過剰に意識して、新調した白のスーツ姿で登場。ロープの反動を利用したパンチ、ローリングソバットなどトリッキーな動きもくり出し、打撃でも真っ向勝負したが、スタンドでもグラウンドでもシャムロックが余裕を漂わせ、最後は左フック一発で撃沈。

00.10.31 大阪城ホール／PRIDE.11
○vsマイク・ボーク［1R 2分37秒 ダブルアームバー］

4連敗で結果がほしいアレクは、この日は元キング・オブ・ケージ王者と対戦。ボークは「いつもこの格好だから」とタンクトップで試合。低空ドロップキックもジャストミートできず、アレクらしさは不発だったが、『PRIDE』で初となる関節技の勝利を飾る。だがプロレスと格闘技、二足のワラジのキツさも見え隠れし始める。

00.12.23 さいたまスーパーアリーナ／PRIDE.12
×vsガイ・メッツァー［1R 1分54秒 レフェリーストップ］

試合を膠着させる“膠着男”ガイ・メッツアー戦を自ら志願したアレク。セコンドにはなんとつぼ原人を帯同するが、これにメッツアーは「すこしムッとした」からか、試合早々からカウンターの右フックを炸裂！　すかさずメッツアーが上からパンチ連打で無念のレフェリーストップ。ここから約一年間、『PRIDE』への試合の出場はなし。

01.10.11 東京ベイNKホール／格闘探偵団バトラーツ
×vsクイントン・“ランペイジ”・ジャクソン［2R 5分00秒 ドクターストップ］

アレクのホーム、バトラーツマットで3週間後の『PRIDE.17』の出場権を賭けて、PRIDEルールの試合が実現。ブレイク前のジャクソンは豪快ファイトで圧倒！　アレクはローブローをもらって持ち味が出ず。最後はジャクソンのパンチ連打でドクターストップ。この日、石川社長はバトラーツの活動休止を宣言。否応なくアレクは総合に専念。

01.12.23 マリンメッセ福岡／PRIDE.18
×vsヴァンダレイ・シウバ［3R 2分22秒 ドクターストップ］

桜庭に2連続勝利したあとで、ノリにノリまくっていたヴァンダレイ・シウバ戦が突如実現。「なぜ、おまえができるんだ？」と異論もある中で、試合はアレクの持ち味が久しぶりに大爆発した好試合となる。だが、アレクはシウバのヒザで鼻から大量出血。ドクターチェックで鼻底骨折と診断され、TKO負け、病院送りに。

2、3試合だけしか出ていないと、練習するにしても3ヵ月先の試合のためじゃないですか。それが苦痛なんですよ。

——モチベーションがもたない？

アレク そうですねえ。だから基本にプロレスがあり、合間でテレビなどの仕事をさせてもらったり、舞台に出させてもらったりのほうが充実してましたね。集中できますし。

——総合用の練習はしなかったんですか？ どっかでキック習ったり、出稽古したりとか。

アレク 基本は……なかったですね。ただ、普通の練習でも、頭の中はバーリ・トゥードを前提としていたと思います。だから、その頃からズレてきたんじゃないですか？ へんに結果を出さなきゃと意識しすぎて。

——なるほどね。

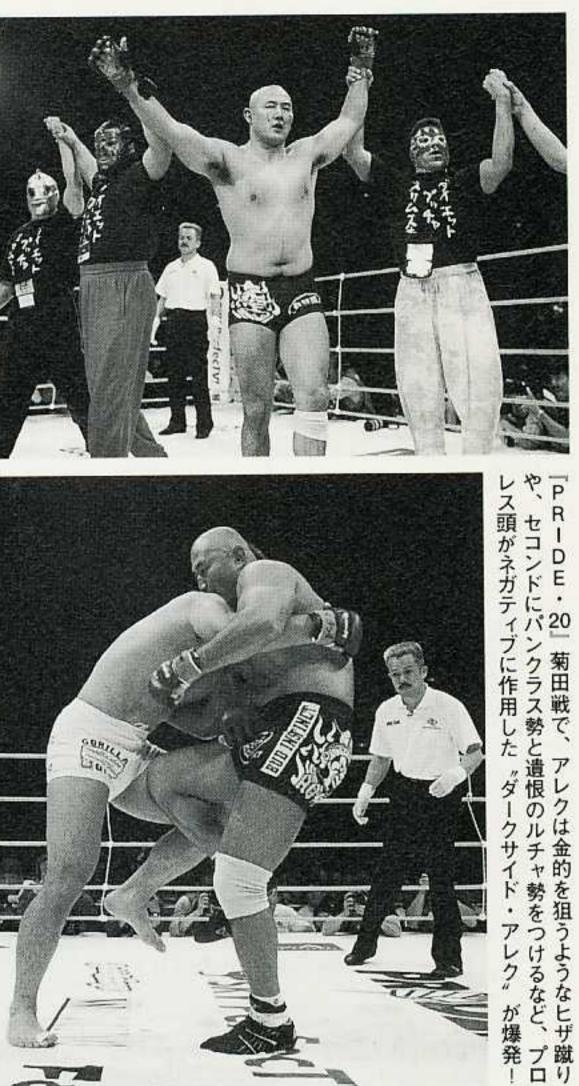
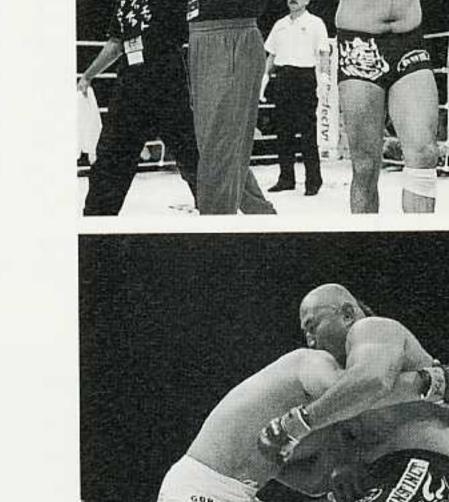
アレク でも、このあとのヴァンダレイ・シウバ戦（01年12月『PRIDE・18』）から一～二年は『PRIDE』に専念してますけどね。でも、いまだから言えますけど、いざ専念してみて、やっぱり格闘技は合ってないなと思いましたね。

——ああ、専念したがゆえにわかってしまったと。じゃあ、それこそマルコ・ファス戦みたいに、誰かも知らないヤツと一ヵ月前に急にオファーが来るとかのほうがまだ集中力も続くんだよね。

アレク 一ヵ月前くらいがちょうどいいですね。普段通りやってることが、普段通り出せれば一番いいですね。

——でも、『PRIDE』のリングもどんどん進化していくわけやから、普段どおりが通用しなくなっていきますよね。

アレク そうですねえ……。変に意識していたのはあるでしょうね。総合の練習も向いてないし、それでも3ヵ月も練習してみて、で結果も出ない。それがもうつらかったですねえ。

『PRIDE・20』菊田戦で、アレクは金的を狙うようなヒザ蹴りや、セコンドにパンクラス勢と遺恨のルチャ勢をつけるなど、プロレス頭がネガティブに作用した"ダークサイド・アレク"が爆発！

——それはでも、言い方悪いけど、自分の中では言い訳を用意しちゃっていたのかもしれないですね。「こんなにやってるんだから」みたいな。

アレク ああ、そうですね。

——で、正直、ここからずっと迷走が続きますね。

アレク ……うーん……（しばらく考え込む）。まあ『PRIDE』全体のレベルは上がってきましたよね……。

——いや、『PRIDE』がダメでも、本業のプロレスがうまいことといっていればいいんですよ。ところが、プロレスのほうも歯車が狂い始めてたじゃないですか。

アレク ああ、そうそう!! そうなんですよ～。両方ダメだったんですよ。

——バトラーツっていつ休眠状態になったんやったっけ？

アレク ヴァンダレイ戦の前ですね。だからこそプロレスという本業がまともにできていないのに、副業がうまいことといくわけないでしょ、ってのがボクの考えなんですね。

——なるほど。でもその思いとは逆に、ここから『PRIDE』に専念していくかたちになるんですけどね。ほんなら、プロレスという本業に専念してもよかったんじゃないですか？

アレク そうなんですけど（笑）。まあバトラーツも解散して、でも『PRIDE』に出てほしいというファンの声も気になっていたし……。まあ自分がなくなっていましたよね。で、あれですよ。『火祭り』の件**【※注】**もあってZERO－ONEにも出づらくなっていたし。一番表立って絡んでいただけに余計に。

——悪い方向へ行っちゃってたよねえ。気持ちはプロレスに行ってるけど、逆にやれることは『PRIDE』だけになっちゃっていたという。

アレク そうです、そうです。

——そうは言いつつも、このヴァンダレイ戦は大善戦で、かなり評価されたよね。

アレク じつはこれで負けたら『PRIDE』はやめようと思っていたんですよ。ところがやってみて、周りも善戦だって言ってくれて、ボクもまた根拠のない自信が出てきたんですね。フッフッと（笑）。

——ワハハハハ。

アレク 「あれ、まだ行けるなあ、ワイ」って思っちゃいました（笑）。へんにやめるきっかけを失なったというか。

——まあ、もっとPRIDEファイターとして自分を改造してもよかったよね。

アレク それは思いますね。もうちょっと一生懸命練習してもよかったなあと。まあ、いかんせん、高校時代のレスリングの練習で目一杯でしたから。

——ワハハハハ！ すでにやり尽していたと（笑）。

アレク 楽しくやるのが一番いいと（笑）。

——02年4月『PRIDE・20』の菊田早苗戦は笑ったけどね（笑）。「（菊田は）個人的に大嫌い」「ブチ殺したい」って会見でも怒りを爆発させていたけど、なんでまたそんなにテンション上がっちゃったの？ 本当に道端で会ったら殴っていたかもしれないの？

アレク あ、絶対殴りかかっていましたね（キッパリ）。

——へえ。

アレク もちろん、仕事として試合には臨むんですけど、でも気持ちの中では100パーセント、ケンカでしたね。

——たしかにね、菊田選手はプロレスを貶めるような発言をしてたわけですけど、そんなに怒らなくても（笑）。

アレク うーん、ボクの中では怒りはありましたね。天山（広吉）さんとか小島（聡）さんの名前を出して、「ロクな死に方しない」とか言ってたじゃないですか、『紙プロ』で。で、プロだったら、一度

【※注】『火祭り』の件
01年8月、橋本真也が格闘イベント『真撃』にマーク・ケアーの招致を勝手に発表したことで当時『PRIDE』プロデューサーの猪木と関係悪化。猪木側についたバトラーツはZERO－ONEのリーグ戦『火祭り』参加をキャンセル。これがファンの反感を呼んだことで、バトラーツの動員が激減、団体休眠に至る遠因となった。

04.02.01 大阪城ホール／PRIDE.27
×vsムリーロ・ニンジャ［1R 5分25秒 肩固め］

約一年ぶりに『PRIDE』に登場した崖っぷちなアレク。だが、ニンジャのヒザがアレクのファールカップを破壊するローブローとなり、アレクは悶絶。あとの試合を前倒しにするインターバルのあと再試合、という異例処置となるが、再試合でもニンジャの猛攻に押されてタップ負け。これが現時点で最後の『PRIDE』登場となる。

03.03.16 横浜アリーナ／PRIDE.25
○vs山本喧一［3R終了 判定 3-0］

大会前に、元WBCバンタム級チャンピオンの薬師寺保栄とボクシング特訓するも「あいかわらずパンチが下手」と酷評されたアレクだったが、試合では、ヤマケン相手にパイルドライバーやドロップキックが炸裂。序盤からポジションを取ることの多かったアレクが、判定ながら2年5ヵ月ぶりの勝利。だが低調な試合内容にブーイングが発生。

02.12.23 マリンメッセ福岡／PRIDE.24
×vs山本宜久［2R 終了 ドクターストップ］

アントンが（女性に背中を刺され謹慎していた）棚橋弘至をリングで闘魂ビンタしていたこの大会。5試合目に登場のアレクはヤマヨシと激突！ 膠着が長引く状態から、アレクのヒザ蹴りが山本の急所に直撃するなど煮え切らない展開。2R終了後には、アレクが右ふくらはぎの筋肉断裂で立ち上がれなくなり、無念のドクターストップ。

02.09.29 名古屋レインボーホール／PRIDE.22
×vsアンデウソン・シウバ［3R終了 判定 3-0］

"ブラジリアン・スパイダー" アンデウソン・シウバはマイケル・ジャクソンの曲でリズミカルにダンスを披露しつつ入場。アレクは体重差を生かしてポジション取りに成功したが、その攻めを鉄壁のディフェンス力で封じ込んだシウバが判定勝利。試合後、アレクはまたも病院直行（左足首関節の靭帯損傷）でノーコメント。

02.04.28 横浜アリーナ／PRIDE.20
×vs菊田早苗［3R終了 判定 3-0］

シウバvsミルコの初対決が実現した大会のセミで行なわれた遺恨マッチ。プロレスを貶める菊田の過去の言動を引き合いに「ブチ殺したい」と会見で挑発したアレクはソラールらルチャ軍団をセコンドにつけて登場。試合は菊田の頭をナデナデしたり、金的を狙うようなヒザ蹴り連発！ その試合態度にファンから酷評を受ける。

もう総合をすることは、ない……いまは男盛（おとこざかり）に熱くなってます!!

口にしたら責任持てよっていう。
――いやあ、でも天山選手や小島選手がキレるんならわかるけどさあ（笑）。じゃあテーマ作りとかじゃなくて、本当に怒っていたんですね。
アレク　当時は怒っていました！
――この試合、本当に評判悪いわけですけど（笑）。これ、タイミングやわなあ。アレクが一番調子いい頃だったら、ベビーフェイスの立場で、プロレスラー代表として、大ヒール、菊田選手を制裁しに行くという図式で成立したんだろうけど。
アレク　そうならなかったのが当時のボクなんですよねえ（しみじみ）。でも、自分の中で、結果負けたのは悔しいですけど、いい仕事ができたなとは思っています。まあ、マイクだけはしょっぱかったですけど……。
――「たしかに俺は負けたけどなあ。内容ではおまえの負けだ！」ってヤツね（笑）。
アレク　（菊田は）一時プロレス業界に身を置いていたから逆にああいう発言をしてたんでしょうけど、それにしても言葉数が多すぎるんじゃないですか、ってとこはありましたね。またそのあと、自分の実力でアブダビで寝技世界一とかになっているから余計小憎ったらしく感じて（笑）。
――まあアレクが負のモチベーションを持ったらこうなるんだという珍しい試合ですよね。これ以降もけっこう試合してるよね。対アンデウソン・シウバ、対山本宜久、対山本喧一、対ムリーロ・ニンジャ……。正直、あまりいい印象は残せなかったわけですけど。やっぱり闘うモチベーションが持てなかったということですかね。
アレク　まあそうですねえ。
――こうやって振り返ってみてどうですか？　ズバリ、『PRIDE』のリングに上がってよかったと思う？
アレク　いやもう、よかったですねぇ。
――でも、実際は低迷期のほうが長いわけじゃないですか。本人としてはしんどい時期のほうが長く感じるのかなと思ってんけど。
アレク　『紙プロ』でも振り幅という言い方をよくしていたじゃないですか。それってどんな仕事をしていても当てはまると思うんですよね。その人自身の奥行きだとか、そういうものにつながってくると思うんです。だからこれからの人生というか、死ぬまでに大きな幅の目線で、苦楽を感じられたことは、自分にとっていいことなんじゃないかなって。
――まるで修行僧みたいなこと言うねえ。
アレク　いやいや、純粋に、普通にそう感じますよ。
――たしかにアレクはプロレスと総合の間でも振り幅を見せてくれたし、総合の中でも振り幅を見せてくれたよね。ただ、アレク的には、『PRIDE』に上がって一番よかったこととして、ネームバリューが上がったことを最初に挙げるかなと思ったけど。
アレク　ああ、当時はそれを一番に感じていたかもしれないですね。でも、いまになってみると、さっき言ったようなことを感じますね。ボクはよく木にたとえるんですけど、プロレスという太い幹があれば、いろんな枝をつけられるわけじゃないですか。だから『PRIDE』のリングに上がることもできたし、いろんなテレビや舞台に上がることもできたわけで。
――そうやね。でも考えてみれば、いまは残念ながら『PRIDE』は地上波放送がなくなったけど、最近までは『PRIDE』の選手もテレビに出まくってたわけやから、アレクも『PRIDE』のリングに上がるのがもうちょっとあとだったら、いろいろおいしかったかもしれないね。
アレク　そういう気持ちはちょっとありますねぇ（笑）。でも、ボクは目立ちたがりだから、そうなると逆に他の仕事をやりすぎて、おかしくなっていたかもしれないです。まあ、わからないですけど。
――『PRIDE』で一度、世間からも脚光を浴びたじゃないですか。でもそのあと長い低迷期に入ると、アレクの周りから離れていく人もいたりしたのかな？
アレク　う〜ん。でも、『PRIDE』で活躍する前からも、等身大のボクとして、いろんな人と付き合ってもらったり、かわいがってもらったりしたので、急に離れていくような人はいなかったですねぇ。
――それはアレクの人徳かもしれないね。じゃあ、リング上の低迷期は、あくまでリングの上だけだったのかな？
アレク　いやあ、現実面でいろんなものを失ないましたよ。それまでベンツやBMWを乗っていましたけど、それも手放しましたし。でも、ボクが一番大事にしてる人間関係は、変わっていないと思います。
――もう、総合のリングに上がることはない？
アレク　う〜ん、ない……ですねぇ。
――総合のリング独特の勝負論とかヒリヒリ感が懐かしく思うことはない？
アレク　なくはないですけど、ボクの根本的な性格は、飽き性というか、熱しやすく冷めやすいじゃないですか。そういう勝負論が、自分の中で落ち着いた感があるんですよね。シャムロック戦の時点ですでにそういう気持ちでしたもん。だから、シャムロック戦後のコメントでも言いましたけど、気持ちがリングの上になかったんでしょうね。
――それが低迷期の入り口だから、本当にアレクはモチベーションのみで動いてるし、すべて結果がつながっていくよね。いやあ、とてもわかりやすいわ。だから、またアレクには何かに“熱して”ほしいですね。
アレク　いや、いまはボクと別人ですけど、男盛（おとこざかり）には熱くなってますよ。やってて、いま自分らしくいられてると思うし、本当におもしろいですから！
――まだ正直、手探り状態だと思うけど、でもアレクがそれだけ熱くなってるって言うんだったら、また『PRIDE』とは別の輝きを見せてほしいと思います！　ほんなら、6億円が当たったら、何かおごってくださ〜い！
アレク　はい〜。

［9月2日／仕事にはホウ・レン・ソウが必要だと痛感しながら都内某所にて収録］

あれくさんだー・おおつか■1971年7月17日、徳島県出身。AO／DC所属。93年に藤原組に入門。95年8月18日の米山サトシ（現モハメド・ヨネ）戦でデビュー。96年「格闘探偵団バトラーツ」に参加。98年10月に『PRIDE・4』で、マルコ・ファスにまさかのTKO勝ち。一躍、脚光を浴び、ヘンゾ・グレイシー、イゴール・ボブチャンチン、ケン・シャムロックらと真っ向勝負を展開。だが、04年の『PRIDE.27』のムリーロ・ニンジャ戦を最後に『PRIDE』には上がっていない。05年からみちのくマットでふんどし一丁のニューキャラ“男盛”として活動中。

PRIDEあだ花列伝

谷津嘉章

五輪経験プロレスラー、44歳の挑戦を振り返る

聞き手／松澤チョロ

「目ぇつぶって30秒！」に代表される数々のビッグマウスを本誌インタビューで次々とブッ放してきた谷津嘉章。ただのビッグマウスならば黙殺されるところだが、谷津はレスリングで五輪出場経験もあり、プロレス界入りしてからもジャンボ鶴田とタッグ王者に輝いたりと、数多くいる『PRIDE』参戦日本人選手の中でも、かなりのビッグネームだ。そんな谷津が44歳にして2000年10月の『PRIDE・11』に出場。当時、〝PRIDEの門番〟と言われたゲーリー・グッドリッジに真っ向勝負を挑み玉砕したものの見る側に大きな感動を与えてくれた。その後、グッドリッジとの再戦に敗れ、それ以来、『PRIDE』のリングには上がっていない谷津にとって、『PRIDE』挑戦とはなんだったのか、ざっくばらんに振り返ってもらった。オリャ、オリャ！

――いきなりなんですが、そもそも、なんで谷津さんは『PRIDE』のリングに上がろうと思ったんですか？

谷津　なんだよ。ホントにいきなり、ぶしつけな質問だな（笑）。まあ、当時は「男のロマン」とか言ったけど、やっぱり、『PRIDE』っていうのは、プロレスラーから見ても格闘家から見ても、当時のギャラとしては破格だったわけよ。

――やっぱりお金ですか（笑）。

谷津　早く言やそうだよな（笑）。いまはもう、昔と違って、お金の話を言えないような時代でもないし。逆にギャラがいいとこに行くのはプロとして当然だろ？

――そういう時代になってきてますよね。谷津さんもSWS移籍のときは「金で動いた」とか、よくターザン山本！さんとかから言われたりしてましたけど（笑）。

谷津　そんなこともあったよなぁ（苦笑）。昔の日本では言えなかったけど、いまはそんなこと言ってらんないからな。総合なんてとくに、現役期間っていうのはアッという間に終わっちゃうんだから、稼げるうちにドンドン稼いでおかないと。

――たしかに。

谷津　あの当時の『PRIDE』はプロレス界から見ると非常に魅力的なギャラだったんだよ。でもな、俺の場合はギャラ自体はそんなに高くなかったの。

――ギャラ自体は高くなかった？

谷津　そうそう。ただ、俺は倍増するオブラートを作ってたのよ。

――倍増するオブラートですか（笑）。

谷津　ボリュームをバーンッとな。要するに単独のファイトマネーだけではなくて、他の付随する部分が大きかったの。いわゆるボーナス的なものだよな。

――勝ったらいくらだとか、スポンサーとか含めてギャラ以外に、いろいろとプラスになる話があったわけですね。

谷津　そういうこと。

――谷津さんは〝ブッカーK〟の異名でお馴染みの川崎（浩市）さんからのオファーで出場することになったんですよね？

谷津　そう。『紙プロ』とかのインタビューを見て、熱心に声をかけてくれてね。

――ウチのインタビューで谷津さんは「三沢や川田は目ぇつぶって30秒」、「タックルだったら誰にも負けない」とか幻想が高まる発言を連発してましたからね。

谷津　そういうのを読んでくれてたみたいでな。もちろん、ギャラが良かったっていうのもあるんだけど、俺が出た頃って、ちょうどプロレスが細分化してる時代だったでしょ？

――いまは、もっと細分化しちゃいましたけどね（笑）。

谷津　そうだよなぁ（苦笑）。俺が『PRIDE』に出たぐらいからプロレス界

俺にとってのPRIDE？……まあ、一言で言えば、“売名行為”だな（笑）

見よ！ これが伝説の“谷津ガード”だ!!

はドンドンドン組織が細分化してきちゃって、だから、ある意味、自分の名前を売るのにはチャンスだったんだよ。同時にそれだけスポットが当てられたから、個人だけじゃなくて、団体としても、ある意味おいしかったんだよな。猪木さんだってプロデューサーとか言って新日本の連中を送り込んだわけでしょ。

――そうですね。当時、猪木さんは「PRIDEエグゼクティブ・プロデューサー」の肩書がありましたし。

谷津　藤田（和之）にしても（ケンドー・）カシンや安田（忠夫）にしてもそうでしょ。そういった部分で当時の『PRIDE』はプロレスの名を借りて一気にガーンっていった部分もあるわけよ。

――初期の『PRIDE』ではプロレスラーの参戦が売りになってましたからね。

谷津　でも、なかなか結果が出せなかったでしょ。それまで新日本はキング・オブ・スポーツだったのが、ある意味、全部『PRIDE』に売っちゃったわけだよ。実績とか、それこそプライドを。

――ここ最近はプロレスラーが総合に挑戦って、なかなか聞かなくなりましたよね。『PRIDE』に限らずですけど。

谷津　いまのレベルまでいったら無理だよ。逆に、いまは出てもリスクのほうが多いから。それでカ●ワにでもなったらワリに合わないもんな（笑）。

――まあ、そうですよね（笑）。

谷津　また、それでもいいって思って出るようなガッツがあるプロレスラーもいないでしょ。だって、ガッツと自信があるんなら、藤田みたくプロレスのほうは一時、休んでも自分でやってるって。

――両立するのは難しいってことは、やる側も見る側もわかってきましたからね。

谷津　そうだろ。いまの『PRIDE』で勝っていくには、もう小さいうちから総合格闘技専門でやっていかないと勝てないよ。

――谷津さんみたいにアマレスがバックボーンだったり……。

谷津　（さえぎって）もう無理無理。結局、投・打。あと足腰のバランスが良くないとできないよ。打撃も練習して、寝技も練習してってやってかないとな。やることの懐が大きいから集中力が凄いアバウトになっちゃうんだけど、専門的にレスリングとか空手とかボクシングだけやってたんじゃ勝てないからな。

――谷津さんが『PRIDE』に出た時代だったら、そういう選手もギリギリ通用する部分もありましたけど、いまはもう何か一つだけでは通用しなくなってきてますからね。

グッドリッジじゃなくて佐竹とか髙田だったら勝てたかもしれない(笑)

谷津　だから、『PRIDE』っていうのは、ある意味、格闘技のデパートみたいなもんだからな。だから、ポテンシャルがあって、器用なヤツじゃないと無理。俺みたいにレスリングしかできないってヤツは通用しない。そういうヤツが一時の思惑だったり、お金だったりで動いちゃうと失敗する。俺なんか、いい例だよ（笑）。

――いやいや（笑）。でも谷津さんは当時"いける"っていう思いも当然あったわけですよね。

谷津　ギリギリ通じるかなと淡い期待はあったんだよな（苦笑）。なぜなら、まだそこまで世界全体の技術力が成熟してなかったから。いまは熟しまくってるからな（苦笑）。

――熟してますね（笑）。

谷津　もう日本人は敵わないでしょ。ということは、もう日本のマーケットは、ある意味、終わってるんだよ。

二度にわたって激闘を繰り広げた谷津とゲーリー。その後、「アイツとなら友だちになれそう」と言っていた谷津とゲーリーの対談を『紙プロRADICAL No.43』で敢行。その際、プロレスのリングでタッグ結成の話で盛り上がったが、実現には至っていない。

――あら、終わっちゃってましたか？

谷津　日本人が出ない限りマーケットは大きくならないわけよ。そういう意味で、日本での総合における次のマーケットは軽量級になってるんだよな。

――『HERO'S』とかも中・軽量級が中心の大会ですからね。

谷津　そうでしょ。なぜかっていうと、それは昔から歴史があったんだよね。たとえば佐山（聡）が作った修斗とか。ああいうのは基礎の部分で、いま活躍してる選手はみんなそうでしょ。山本KIDもそうだし、木口道場の五味（隆典）君なんかもそうでしょ。

――軽量級は修斗系の選手がほとんどですからね。あの連中だったら世界と互角に闘えるけど、ヘビー級は無理だよ。

――それは人種的な問題だったりするんですかね？

谷津　それもあるし、ある意味では総合格闘技に限らずヘビー級が格闘技の一番の醍醐味だからな。柔道にしても、ボクシングにしてもなんでも。それを考えると、やっぱり日本人の骨格もあるけど、小さいうちから総合格闘技をやらせるような土壌はまだないんだよね。そんな野蛮な国ではないから（笑）。

――まあ、一昔前に比べると総合の道場もかなり増えてきてはいますけどね。

谷津　そうだよな。でも、それは超一流を目指すんじゃなくて、健康のためとか、にわかにやりたいってヤツとかが行くんであって、超一流を目指してスパルタ的にやってるヤツなんかいないと思うよ。「おまえは総合でトップを獲って金を稼ぐんだ」って感じのな。

――それこそ総合の世界では亀田親子みたいに子どもの頃からスパルタ教育している人って、なかなかいないでしょうからね。

谷津　そうそう。ああいうのは凄いレトロチックな匂いがするんだよね。懐かしいというか。なんか昭和の時代みたいなハングリーさを感じるよな。

――だからこそ、いまの時代では異質でウケてる部分もあるんでしょうね。

谷津　そうでしょ。ある意味、新鮮味があるからな。そう考えると、ヨーロッパだとか東欧諸国、あとは南米の連中もそうだよな。向こうの物価指数を考えると、

谷津嘉章とPRIDE

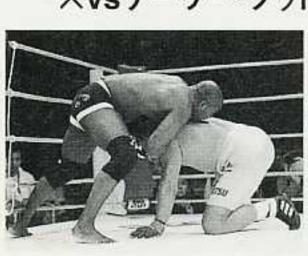
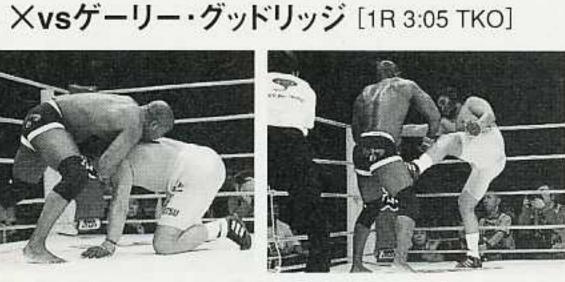
門番は強かった――。谷津にとっての『PRIDE』はゲーリーとの二連戦なり。オリャ！、オリャ！

2000.9.24［PRIDE.11］大阪城ホール

×vsゲーリー・グッドリッジ［1R 8:58 TKO（レフェリーストップ）］

44歳での『PRIDE』初挑戦となった谷津は左手を前に突き出す"谷津ガード"や秘策のヒザ固めでチャンスを作るも最後はグッドリッジのパンチ、キック、ヒザ蹴りとメッタ打ちに遭い敗戦。その驚異的な打たれ強さには観客はおろか、対戦相手のグッドリッジも口をあんぐり。

2001.10.31［PRIDE.16］大阪城ホール

×vsゲーリー・グッドリッジ［1R 3:05 TKO］

一年越しのリベンジマッチとなった『PRIDE.16』大阪大会。前回とは違いレスリングシューズで試合に臨んだ谷津だったが得意のタックルは通用せず、またしても打撃を食らいまくる。最後はタックルにいったところをチョークにとらえられセコンドからタオルが投げ入れられた。

PRIDEに出てたのは過去の話で、いまはただの会社員だから！（笑）

日本で稼いで向こうに持って帰ったら10倍とかになるわけよ。それを考えたら、いまの総合格闘技は出稼ぎ天国なわけよ。

――一昔前はプロレス界が出稼ぎ天国なんて言われてましたけどね。

谷津　いまは完璧に総合のほうだよな。ただ、やっぱりナショナリズムはあるから、「ヘビー級は無理だけど、軽量級は世界に通用するから応援しよう」ってなってるわけよ。それで五味君だったり、KIDなんかの人気がグーって上がっていくんだよな。もちろん、軽量級だからこそのスピーディーな試合を見せてくれるってところもあるし。日本人がもっとタッパがあって、農耕民族じゃなくて狩猟民族だったらヘビー級だってスターが生まれたかもしれないけど、でもできないって。小川（直也）とか吉田（秀彦）とか藤田とか、僭越ながら俺にしたって無理なんだよ（苦笑）。もう小さいうちから総合をやらせないと。逆にハンマー投げの室伏（広治）とかいるじゃん？

――よく総合に挑戦してほしい選手として名前が挙がりますよね。

谷津　ああいう感じでロシアとかポーランドの血が入って、セカンドジェネレーションの日本人じゃなくちゃ、もう勝てない。無理無理！

――谷津さんは、試合前には強気な発言も多かったわけですけど、ぶっちゃけ"勝てる"って思って挑戦したわけですよね。

谷津　まあ、いろいろとゲーリー（・グッドリッジ）を分析してね、あの当時は、まだそんなにコンタクトを知らなかったでしょ？　殴るばっかで。

――そうですね。その後は総合でも立ち技でも、かなり成長しましたけどね。

谷津　それでけっこう、アイツは思いっきりがいいからな。負けてても勝ってもおもしろいじゃん、アイツの試合は。

――そういう部分も含めて、「コイツとだったらいい試合になる」と思って対戦相手に選んだわけですか？

谷津　そうだね。その前に大刀光が負けてるっていうのもあったけどな。

――ああ、リベンジマッチ的な部分もあったんでしたね。

谷津　まあ、自分にとっては痛い思いもしたけど、いい思い出だね。まあ、結果的には『PRIDE』では結果は残せなかったけど、前田が"格闘王"と言われたり、UWFインターで髙田が"最強"って言われた時代とはわけが違うからな。そういうのは、あくまでもプロレス的な話であってな、じつを言うと（苦笑）。

――いまのファンは、そういう部分も理解している人が多いと思いますけどね（笑）。

谷津　そうでしょ。それをいまの総合格闘技全盛時代に"格闘王"とか"最強"って言ったってナンセンスだよ、そんなの！（笑）。いまになったらファンとかも「な〜んだ」って思ってるでしょ。若き格闘家たちはとくにそうだよな。「騙された〜」とかな（笑）。

――実際、そういうことを口にする格闘家も多いですからね。谷津さんは、過去の『PRIDE』史上でも例を見ない44歳での挑戦になったわけですけど、年齢っていうのは感じました？

谷津　そりゃあ、あったよ（苦笑）。俺が挑戦した頃って、UFCが始まって10年とか経ってたけど、まだあの頃は、ちょっとやれば通用もしたんだよ。いまなんか、いくらオリンピックに出たとかいっても通用しないじゃん。

――それは言えますね。

谷津　そうでしょ。あの頃はタックルかなんかでテイクダウンして、バック取ってスリーパーか殴ればいいやって感じだったけど、いまはそんなこと無理！

――初期の頃はマウントを取られただけで、もう終わりって感じでしたからね。でも、谷津さんは『PRIDE』に出るにあたって、モノ凄い練習をしてましたよね。日大レスリング部で合宿しながら、ボクシングやサンボの道場にも通ったりして。

谷津　そんなんじゃダメだよ。だって、8月に記者会見して、10月に試合だったからな。2〜3ヵ月でできるんだったら、みんなやってるよな（笑）。まあ、そう考えると、俺にとっての『PRIDE』っていうのは、ただの売名行為かな（笑）。

――アハハハ！　『PRIDE』参戦は売名行為でしたか（笑）。

谷津　そう。自分で団体を主宰してやってたから、少なくても、その団体がちょっとでも注目されるようにマスコミとかで活字になればいいなぁっていうぐらいしかないんだよ（笑）。

――試合前に話を聞いたときには「『PRIDE』挑戦は男のロマン」って格好いいことを言ってましたけどね。

谷津　もちろん、純粋なそういう気持ちもあったよ。ひょっとしたら、勝てるのは誰かって考えたら当時はゲーリーだったんだよ。まだ穴があったからな。

――結果としては二度対戦して、どちらも敗れてしまいましたが、どちらもいい試合だったと思います。

谷津　逆に、あの頃、出てた選手でいえば佐竹（雅昭）とかね、髙田（延彦）あたりだったら、きっと勝ったかもしれないよ（笑）。

――いいですね〜、佐竹戦とか髙田戦は観たかったですよ。

谷津　アイツらにとっては失礼な言い方だけど、まだ日本人対決のほうがおもしろかったかもしれないな。だけど、それはそれで終わっちゃったことだから。まあ、これからの『PRIDE』は日本人のヘビー級のヒーローは、なかなか出てこないだろうし難しいと思うよ。プロレスラーで言えば、アレクサンダー（大塚）なんかも出てたけど続かなかったでしょ。

――アレクはマルコ・ファスに勝って一気に注目されましたが、だんだんとフェードアウトしていっちゃいましたからね。

谷津　そうでしょ。まあ、アレクサンダーも、にわかで飛び入り参加みたいなもんだからな。アイツは度胸があるから「わかりました。やります！」なんて言ってやってるけど、実際はにわかでやってるからね。だから、アレクサンダーにしても俺にしても「『PRIDE』に出てた」っていうのは過去の話であって、いまはインディー団体の大塚であり、俺なんかも、ただの会社員なんだよ（笑）。

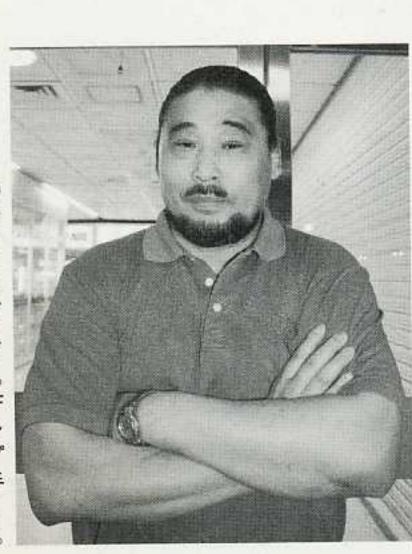
――あ、いまは会社員でしたか（笑）。

谷津　そう（苦笑）。やっぱり、輝かなきゃいけないのは現役の選手。俺みたいな過去の話はどうだっていいんだよ。

――いやいや、今日は貴重なお話をありがとうございました！

谷津　『PRIDE』版の「あの人はいま」って感じだな（笑）。まあ、私は頑張って生きてますので、『PRIDE』の選手も、ファンの方も一所懸命生きていきましょう！　それではご機嫌よう!!

【8月29日／群馬県高崎市内の「スターバックスコーヒー」にて収録】

以前から「プロレスラーはエンターティナーじゃないとダメ。プロレスと格闘技は決別しろ！」と口を酸っぱくして言っていた谷津。『PRIDE.11』でゲーリーに敗れたあと自らが主宰するSPWFに登場したのは奇抜なコスチュームにペイント姿の"津谷章嘉"だった。

やつ・よしあき■1956年7月19日、群馬県出身。レスリングでモントリオール五輪に出場、モスクワ五輪は日本のボイコットにより幻の代表に。新日本に入団後、ニューヨークMSGで華々しいデビュー戦を飾るも、すぐさまジャパンプロレスに移籍。その後は全日本→SWS→SPWF→WJ→SPWFと激動のプロレス人生を送る。1986年には"プロレスラー"として全日本選手権で優勝を飾っている。『PRIDE』には二度参戦。186cm、110kg。

あのときの敗因は、即席で作ったマウスピースを飲み込んじゃったこと！

奇跡の『PRIDE GP 2000』トーナメント出場を振り返る

大刀光

聞き手／坂井ノブ　試合写真／平工幸雄

「相撲は強いんだよ！」と戦闘竜が『PRIDE』のリングで叫ぶ5年前、一人の男が相撲最強伝説を証明すべく『PRIDE』のリングに立った。大相撲出身のプロレスラー・大刀光だ。1999年の年末に本誌のインタビューで「パンチよりツッパリのほうが強い」「PRIDEに出たい」と猛アピールしたところ、なぜか突然『PRIDE GP 2000』トーナメントの出場オファーが舞い込んだのだ。本誌（というか当時、スモー・ノブだった私、坂井）はこの無謀とも思える挑戦を熱狂的に大プッシュ！　根強く残る相撲最強幻想を証明すべく『PRIDE』に乗り込む大刀光を精力的に取材。そして迎えた当日、大刀光は〝PRIDEの門番〟として活躍していたゲーリー・グッドリッジと対戦したものの秒殺負け！　強烈なインパクトは残したが、その後は『PRIDE』のリングに上がることがないまま現在に至っている。プロレスからも遠ざかりつつあるという大刀光に『PRIDE』のことを振り返ってもらった。

——ごぶさたしてます！

大刀光　久しぶりだねぇ。

——最後に取材させてもらったのが、曙さんのK－1転向のときですから約3年ぶりですよ。『PRIDE』に出てたのは何年前でしたっけ？

大刀光　6年前。あの頃はまだ若かったよなぁ。

——いま、おいくつですか？

大刀光　42歳。

——36歳での総合格闘技挑戦だったんですね。

大刀光　まだやろうと思えばできるよ。

——おお、力強い！　やりましょう！

大刀光　オファーが来ないよ（笑）。来てもウチの女房が許してくれないよ。「殺されるよ！（怒）」って。

——タチさんが最後にやった総合格闘技の試合って、『DEEP』の（エル・）カネック戦ですよね。あの試合はホントに惜しかったですよね。

大刀光　ええ～!?　全然ダメだったよ。リングじゃなくて街中でケンカやらせてくれればいいんだけどね。

——誰もやらせてくれないですよ（笑）。

大刀光　相撲取りはそっちのほうが強いから。

——でも、タチさんは『PRIDE』に出る前は「相撲取りは絶対に倒されないから」って言ってたじゃないですか。

大刀光　まあね。

——やっぱりパンチとかキックがあると全然違いましたか？

大刀光　そういうルールだから。

——角界から総合格闘技に転向する選手の先陣を切ったのがタチさんだと思うんですけど、あとに続く選手はかなり苦戦してます。曙、戦闘竜、玉海力と大勢いますよね。

大刀光　ヘンリーさん（戦闘竜の本名）はまだやってるの？　今度会ったらよろしく言っておいてよ。

——わかりました……あ、そうか。タチさんと同じ友綱部屋出身でしたよね。

街中でケンカをやらせてくれればいいのに
相撲取りはそっちのほうが強いから。
PRIDEのルールじゃ勝てないと思う

相撲甚句で東京ドームの長い花道を通って入場してきた大刀光。開始早々、グッドリッジのパンチを受けてしまったところで、すくい投げ気味にテイクダウンを奪われ、上に乗られてしまう。最後はグッドリッジの前腕部がノドに食い込んだところでタップ！　いま思えば、総合格闘技の練習を充分に積んでいない大刀光が『PRIDE GP』にエントリーされるということ自体が奇跡的だったのだ。初期『PRIDE』おそるべし！

大刀光　俺の付き人だったんだから（笑）。昔、俺が風呂に行くときにパンツを忘れてきたから、「ダメじゃないか」って軽く頭をゴツンってやったこともあるけど。マジメなヤツだったよね。

――タチさん、相撲時代はおっかなかったんですか？

大刀光　とんでもない。俺は温厚だったよ。そのときも軽くこづいた程度だし。もし俺が後輩に厳しくあたってたら、魁皇もいまごろ相撲を辞めてるって（笑）。

――そうか、大関もタチさんの後輩なんですね。

大刀光　……曙も苦労してるみたいだね。

――おもいっきり苦労してますよ（笑）。

大刀光　アメリカでプロレスをやってれば凄く人気が出てたんじゃないの？

――曙さんに限らず相撲から総合格闘技に転向する選手は多いですけど、なかなか結果が出てないですよね。

大刀光　難しいんじゃないのかな？　たとえ現役バリバリの相撲取りが来ても『PRIDE』のルールじゃ勝てないと思うよ。

――『PRIDE』はどんどんルールが変わって、いまは寝転がってる相手の頭を蹴ってもいいんですよ。タチさんが出てたときよりも過激になってますからね。

大刀光　ホント？　そりゃますます勝てないわな。

――では、『PRIDE GP 2000』でのゲーリー・グッドリッジ戦を振り返っていただきたいんですが……。

大刀光　あのときは、まず入場でお客さんが多すぎて参っちゃったよね。（東京）ドームだったでしょ。プロレスでもあんな大きな会場で試合をしたことなかったし、相撲のときだって（両国）国技館はせいぜい1万人しか入らないんだから。

――プレッシャーがケタ違いでしたか。かなりの歓声でしたよね。

大刀光　東京ドームの長い花道を相撲甚句で入場したんだからインパクトありすぎだよ（笑）。よくやったよなぁ（しみじみ）。

――よく出ましたよね（笑）。

大刀光　オファーがきたとき、二つ返事で「いいですよ」って言っちゃったから。

――しかも、最初はヴァンダレイ・シウバと対戦するはずだったんですよね。

大刀光　そうそう。あんなに有名になるんだったら、あのとき対戦しておけばよかったなぁ。でも、グッドリッジもK-1で頑張ってるよね。

――そうですね。グッドリッジ戦は残念な結果に終わってしまいましたが、『PRIDE』に出てからいろんな大会のオファーは増えましたよね？

大刀光　うん。いろんなところに出させてもらって、ちょっとは名前が知られるようになったからね。いい思い出ですよ。

――試合前は家族も心配したんじゃないですか？

大刀光　子どもたちはまだ小さかったからよくわかってなかったけど、女房は「怪我するよ！」って。俺は「ケンカで一回も負けたことない人間が怪我するか!?　たいしたパンチでもねえのに死にゃしねえよ！」って言ってたよ。ヤバかったらレフェリーが止めてくれるしね。街のケンカじゃ、そういうわけにはいかないけどさ。負けた直後は「（ルールに）慣れたら、そうはいかねえぞ」って思ってたよ。いま思えば「あれが実力かな」って気もするし（笑）。だって、あのときはマウスピースを飲み込んじゃったんだから！

――えっ、飲み込んじゃったんですか？（笑）。

大刀光　そうだよ！　それで俺は一回タップしてるんだけど、それはレフェリーが見逃してたんだよ。（食道周辺を指して）このあたりまでマウスピースを飲み込んじゃったの。ギロチンチョークでノドをグーッと押されて、「あ、このままじゃ胃まで入っちゃうな」と思って、そこでタップしたんだ。

――総合格闘技初じゃないですか、マウスピースを飲み込んじゃう人って（笑）。

大刀光　即席で作ったからね。だいたい、あんなモノいらないんだよ。息はできないし、あのときも殴られたダメージはなかったし。殴られて意識が飛んだことは一回もないから。

――相撲取りは首も丈夫ですから、パンチのダメージは受けにくいらしいですね。

大刀光　あの当時は相撲を辞めて、そんなに時間も経ってなかったから首も丈夫だったけど……まあ、もう一度、総合格闘技の試合をやるなら仕事を休んで一年ぐらい練習しないと無理だろうな。

――仕事は何をやってるんですか？

大刀光　水道屋さん。

――その仕事を一年休んで練習するというのは……。

大刀光　（さえぎって）絶対無理！　独身だったら考えてもいいけど、上の子どもは高校に行って金がかかるしね。剣道やってて、中学校時代は千葉県代表になったんだよ。

――凄いですね！

大刀光　真ん中の子は中学校で、下の子は小学校に行ってる。真ん中の子は相撲やってて、ウチの近所にある阿武松（おおのまつ）親方（元関脇・益荒雄）

総合格闘技に再挑戦？　絶対無理!!
独身だったら考えるけど、子どもが3人
いるから汗かいて現場で働かないと!!

の部屋に通ってるんだよ。

——へぇ、それは将来が楽しみですね！

大刀光　でも、小さいからね。175センチしかないんだもん。

——中学生にしては大きいですよ。

大刀光　そう？　俺は183センチあったよ。

——タチさんが大きすぎたんですよ（笑）。

大刀光　親方がいろいろ良くしてくれるからね。そういえば阿武松部屋には所（英男）クンも練習に来たらしいよ、前田（日明）さんの関係で。

——意外なところにつながるなぁ（笑）。

大刀光　でも、プロレスの雑誌を全然読んでないから、誰が誰だか全然わからないよ。

——最近は試合してないんですか？

大刀光　最後にやったのは去年かな。熊本の知り合いが「熊本に遊びにおいでよ。ついでに試合も出れば？」って（笑）。それで幸村（ケンシロウ）の団体（プロレスリング求道軍）に出たのが最後。いまやれって言われても、たぶん身体が動かないよ。

——じゃあ、もう現役引退ということになるんですか？

大刀光　ただ、谷津（嘉章）さんが「またやろう」とか言ってるんだよ。「みんなで引退興行でもやるか」って（笑）。

——みんなで引退興行（笑）。

大刀光　「それいいね」って言ったけど（笑）。そういえば、こないだWARの最終興行があったでしょ？

——後楽園ホールですね。超満員でした。

大刀光　荒谷（望誉）は出たの？

——出てなかったです。というか、タチさんも出てなかったですね。

大刀光　そうだよ！　なんで俺に声が掛からないんだよ!?

——セコンドに菊地淳さんはついてたんですけど。

大刀光　ウソ!?　菊地……懐かしいなぁ。遊びに行こうかなと思ってたんだけど、声が掛かってないのに行ってもみっともないから。

——そうですね、たしかに。当日は何をしてたんですか？

大刀光　仕事。毎日穴を掘って、水道管を担いで、汗かきながら現場で働いてますよ。子どもが3人いるから、働かないとね。プロレスのギャラなんかたかがしれてるから。どこか地方で試合に出てそのあと遊びに行ったら、赤字になっちゃうよ。それだったらウチでおとなしくしてるほうがいいでしょ？

たちひかり■1963年9月12日、千葉県出身。18歳で角界に入り、前頭15枚目まで昇進。廃業後はWARやSPWFを主戦場に暴れまくっていたが、00年1月30日に東京ドームで行なわれた『PRIDE GP 2000開幕戦』に出場。1R51秒でゲーリー・グッドリッジのギロチンチョークに沈んだ。2001年には『DEEP』のリングで謙吾やエル・カネックと対戦したが未勝利だった。

——そうですね。水道屋さんは朝が早いんですか？

大刀光　朝7時半に会社に行って、そこから現場に移動して、夜は6〜7時ぐらいまでかな。こないだ初めて熱中症になって、目の前が真っ白になって尻もちついたよ。

——ハードですねぇ。言われてみれば、『PRIDE』に出た頃から比べるとだいぶ痩せましたよね。

大刀光　10キロぐらい落ちた。メシも前ほど食わなくなったから。40歳を過ぎたらムチャしたらいけないですよ。

——いい意味で、非常に真っ当な生活をしてるんですね。素晴らしいなぁ。プロレスラーは引退してからの第二の人生で道を踏み外す人も多いですけど……。

大刀光　相撲の世界だって、引退して店をやるか、反社会的勢力になるか、どっちかだからね。俺はマジメなんだよ(笑)。

——こう言っちゃ失礼ですけど、意外にマジメですよね（笑）。

大刀光　WARのときだって、家のある千葉から道場のある川崎まで週6日も通ってたんだから。周りのプロレスラーが「相撲出身でこんなマジメにやってる人は初めて見た」って言ってたよ。あの相撲取りが嫌いな平井（伸和）とも仲良くやってたし。

——もしも、将来お子さんが「プロレスやりたい」って言ったらどうしますか？

大刀光　（即座に）絶対やらせない！

——総合格闘技は？

大刀光　反対するよ！　花が咲くのはちょっとの期間だけだもん。相撲なら頑張って上のほうに行けば、一生安泰だからね。それにプロレスラーと相撲取りじゃ世間の見る目が違うよ。

——なるほど。それはタチさんが身をもって経験してるだけに説得力ありますね（笑）。プロレスとか総合格闘技には未練はないですか？

大刀光　総合をもう一回だけやってみたいんだよね。だいぶ前だけど、IKUSAって団体で「試合をしないか？」って話があったんだよ。

——そうなんですか？　IKUSAってキックボクシングの大会ですよね？

大刀光　総合ルールの試合もあるみたい。相手は元相撲取りで、いまは総合格闘技をやってる人らしいんだけど。結局、その選手が「やりたくない」ってことで流れちゃったんだ。毎日練習してる人だったら、俺より強いと思うんだけどねぇ(笑)。

——素朴な疑問なんですが、タチさんは出稽古して本格的に総合格闘技の練習したことはあるんですか？

大刀光　伊原ジムに通ってたことはあるよ。伊原ジムに小笠原仁ってムエタイのチャンピオン（ラジャダムナンスタジアム・ジュニアミドル級）になった選手がいたでしょ？　彼が俺の地元の後輩の舎弟だったんだよ。その関係で「紹介してくれ」って言って、練習させてもらうことになったんだ。あれは、たしか撃圏道の大会に出る前で「さすがにちょっとは打撃をやっておかないと」と思ってさ。伊原会長が直々にミットを持ってくれたんだけどね。

——伊原会長の練習はいかがでしたか？

大刀光　しんどかった（しみじみ）。ハンパじゃなかったよ。でも、「いまからでも遅くないから、（キックの）プロになれ」って言われたんだ（笑）。「さすがに無理じゃないですかねぇ」って答えたけど。縄跳びをやったり、シャドーやったり、初めての経験だったからね。いい経験だよ。あのときは3週間しか通ってなかったけど、5キロ体重が落ちたもんね。

——もしこれから練習を始めるにしても、朝から晩まで仕事をして、そのうえ練習というのはちょっと厳しいですよね。

大刀光　もう若くないからね。仕事といえば、今日このあとCM撮影なんだよ。

——えっ!?　CMに出るんですか？

大刀光　なんか講談社のCMに出ることになっちゃってね。瑛太って月9のドラマに出てる俳優と共演するらしいんだけど……。娘に言ったら大喜びされちゃったよ(笑)。

——それは意外すぎる組み合わせですねぇ(笑)。

大刀光　まあ、俺がチンピラみたいにからむっていう設定みたいだけど。こないだも映画にちょい役で出たんだけど、そのシーンはボツになったかもしれない。

——かなり芸能活動もやってるんですね。

大刀光　たまに知り合い経由で話が来るんだけどね。まあ、ボチボチやってます。

——タチさんは迫力あるからイケますよ。

大刀光　まあ、話がくればね。子どもも三人いるから、なんでもやるよ。だから、『PRIDE』もオファーが来れば出るから。

——わかりました（笑）。忙しいのに時間を割いていただいて、今日は本当にありがとうございます。

【06年8月23日／JR品川駅前にて収録】

第6期生募集中　**画期的技法公開**

手に職を！
骨法整体で開業！

骨法整体は関節をボキボキ鳴らす
危険な施術を一切しません。
驚くことに体を「揺さぶる」だけで全身のゆがみを治す、
安全で効果抜群の整体です。

**H18年10月～H19年4月
までの第1・第3日曜日
PM1:00～PM6:00**

創始者・堀辺正史と、医師・苗代和彦が教授します

**6ヵ月の特訓で、全くの素人を
プロの整体師にまで責任指導。
修了後は骨法整体院連合の正会員として
継続指導の道も開かれています**

☆資格＝高卒以上の男性　☆見学説明会あり

※詳しくは下記にお問い合わせください

日本武道傳骨法會
整体指導部

〒164-0003　東京都中野区東中野4-3-2
03-3362-0010(PM7:00～PM10:30)
http://www9.big.or.jp/~koppo/

8.26『PRIDE武士道 −其の十二−』

検証特集

復活した五味隆典を頂点とし、
強豪ひしめく『PRIDE武士道』ライト級戦線。
PRIDEライト級王者、五味隆典を中心とした人間模様、周囲との関係性は、
近年まれに見る格闘群像劇爆発の予感に満ちている。
五味の首を狙う一番手は誰か、続く者は?
はたまた新政権が誕生するのか?
『武士道』群像絵巻、読み始め!!

隆典包囲網だ!!

五味隆典がPRIDEライト級、不動の"絶対王者"となってはや9ヵ月。
だが今年に入って、アウレリオに初の敗戦、そしてニューカマーの台頭など
王者を取り巻く環境は刻々と変化している。ドラマとドグマ、思惑と野望が渦巻く、
いま現在の"五味隆典包囲網"を徹底解析！

構成／須羽ミツ夫、真下義之

五味隆典が囲まれている。2ページぐらいじゃ入りきらないぐらい、いろんな選手からグルングルンに囲まれちゃっている。

理由は簡単。五味が強いから。チャンピオンだから。武士道のエースだから。だからみんな五味に勝ちたいし、ベルトもエースの座も奪いたいわけだ。

いまや、70kg前後のMMAファイターにとって、「五味を倒せ！」は世界的な合言葉だと言っていいだろう。ちょうど、「グレイシー・ハンター」として名を馳せていた頃の桜庭和志と同じ現象が、いま、五味を取り巻いているのだ。いや、世界からの狙われっぷりは、桜庭以上かもしれない。それは、ヘビー級やミドル級では日本人など寄せつけもしていないブラジリアン・トップチームやシュートボクセといったチームの選手たちを、五味がことごとく撃破しているためだ。彼らにとっては、もはや「打倒！　五味」は至上命令。チームのメンツにかけて、(他のチームより先に）五味を倒す選手を送り込むことに血道を上げているはずだ。

五味を巡る状況に大きな変化が訪れたのは、今年の4月。アメリカン・トップチームのマーカス・アウレリオが、王者になったばかりの五味をあっさりと破ったのだ。それまで『PRIDE』で4戦して3勝1敗と戦績はいいがすべてが判定決着、そして敗れた相手が三島☆ド根性ノ助というアウレリオは、対五味戦線では正直、ノーマークだった。いくら五味自身の調整不足が明らかだったとはいえ、このニュースは衝撃を伴なって世界に伝えられた。

物語はさらに続く。次期タイトル挑戦者に急浮上したアウレリオが、今度は茨城のさわやかファイター、石田光洋に敗れてしまった。石田といえば昨年、GP一回戦で五味に挑んで壮絶に散った川尻達也のチームメイト。これでアウレリオに代わって石田に大きな注目が向けられることになった。

五味が、石田を意識しているのは確実だ。先日、会見である記者が「五味vs石田」実現を煽るような質問をした際、五味ははばかることなく不快感を示した。だが8月大会の一夜明け会見で、11月5日、横浜大会でのタイトルマッチ開催を榊原代

囲め！ 囲め！ ライト級"絶対王者"危機一髪!! これが五味隆典

五味隆典　PRIDE武士道全戦績

[2006.08.26] 名古屋市総合体育館レインボーホール
PRIDE 武士道 -其の十二-
○vs デビッド・バロン
（1R 7分10秒 裸絞め）

[2006.04.02] 有明コロシアム
PRIDE 武士道 -其の拾-
×vs マーカス・アウレリオ
（1R 4分34秒 肩固め）

[2005.12.31] さいたまスーパーアリーナ
PRIDE 男祭り 2005 頂-ITADAKI-
○vs 桜井"マッハ"速人
（1R 3分56秒 KO）

[2005.09.25] 有明コロシアム
PRIDE 武士道 -其の九-
○vs ルイス・アゼレード
（2R 終了 判定 3-0）

[2005.09.25] 有明コロシアム
PRIDE 武士道 -其の九-
○vs 川尻達也
（1R 7分42秒 裸絞め）

[2005.07.17] 名古屋市総合体育館レインボーホール
PRIDE 武士道 -其の八-
○vs ジーン・シウバ
（2R終了 判定 3-0）

[2005.05.22] 有明コロシアム
PRIDE 武士道 -其の七-
○vs ルイス・アゼレード
（1R 3分46秒 KO）

[2004.12.31] さいたまスーパーアリーナ
PRIDE 男祭り 2004-SADAME-
○vs ジェンス・パルヴァー
（1R 6分21秒 KO）

[2004.10.14] 大阪城ホール
PRIDE 武士道 -其の伍-
○vs チャールズ・"クレイジー・ホース"・ベネット
（1R 5分52秒 アームロック）

[2004.07.19] 名古屋市総合体育館レインボーホール
PRIDE 武士道 -其の四-
○vs ファビオ・メロ
（1R 8分07秒 KO）

[2004.05.23] 横浜アリーナ
PRIDE 武士道 -其の参-
○vs ハウフ・グレイシー
（1R 0分06秒 KO）

[2004.02.15] 横浜アリーナ
PRIDE 武士道 -其の弐-
○vs ジャドソン・コスタ
（1R 4分55秒 KO）

表が正式発表。代表は「アウレリオを第一候補に」と発言したが、五味は「おもしろい試合をするならギルバート・メレンデス」と、弟分・帯谷信弘を倒した男を逆指名。挑戦者は誰になるのか？

しかし、挑戦資格という点で見たらあの男も充分。そう、"北欧の処刑人"ヨアキム・ハンセンだ。ライト級GPではマッハに敗れたが、『PRIDE』でも他は全勝で申し分なし。また今回は無理だろうが、青木真也が初参戦したことも話題だ。

五味は怒濤の10連勝でエースの地位を不動のものとし、日本人初のPRIDE王者にもなった。その五味に一勝したところで彼の立場に取って代われるものではない。だが、ベルトが移動すれば、PRIDEライト級の世界は新王者を中心に回らざるを得ない。五味を真の意味で蹴り落とす男は、どこから現われるのか？ それとも、なみいる刺客からの追撃を振り切り、五味がさらにその座を盤石のものにするのか？ 武士道ライト級戦線は、いま、世界中のMMAでも最も熱く、注目を集める闘いの舞台なのである！

打倒・五味隆典のさわやか最右翼!

石田光洋 Mitsuhiro Ishida

「五味選手との試合?
ボクにも欲があります!!」

いま、五味包囲網の真っ正面に立ちはだかる男は石田光洋ではないだろうか——。『武士道』3戦を闘っていまだ無敗。五味を敗ったアウレリオに見事勝利を収めている石田は、チャンピオン五味がその名を口にする頻度が一番高い選手である。その注目の人物は、いま五味に対して何を思っているのか。胸の内をさわやかに、ときに眼光鋭く語ってくれた!

聞き手/松下ミワ　撮影/丸山剛史

五味隆典
包囲網
其の壱

――石田さん、今日はお休みのところわざわざお越しいただいてすみません！

石田　いやいやいやいや、とんでもないです！　どうぞ、どうぞ、お座りください。どうぞ！

――あ、ありがとうございます（笑）。本題に入る前にちょっとお聞きしたいことがあるんですが、石田さんは中学校まで野球をやってたんですよね？

石田　はい。野球やってましたね。

――では、今年の甲子園ってご覧になりましたか？

石田　見ました、見ました！　おもしろかったですねえ。あ、でもボク、野球を1回から9回までぶっ通しで見れる人間ではないんで、大半は「熱闘甲子園」って番組で見てましたね。

――……石田さん、野球少年なのに（笑）。

石田　（不思議な表情で）だって、見れますか？　1回から9回まで。

――自分は見ました。

石田　（目を見開いて）ええっ!?　マジで～。凄いっすね！　いやあ、凄いです!!

――あ、ありがとうございます（笑）。

石田　ボク、ダメなんですよ。投手戦とかとくに見てられなくて。

――野球少年なのに（笑）。

石田　一日目の決勝戦はとくに投手戦だったんで、とりあえず、もう「熱闘甲子園」に頼りました（笑）。

――投手戦が耐えられない石田さんからすると、話題の斎藤佑樹投手は……。

石田　（眼光鋭く）さわやかですよね！

――あ、さわやかですか（笑）。

石田　（冷静に）はい。さわやかです。

――石田さんと比べるとどうですかね？

石田　いや～、彼のほうがさわやかなんじゃないですか（照れながら）。彼、ハンカチ王子ですしね（笑）。

――石田さんからすると、ハンカチはさわやかのキーワードになるんですか？

石田　（さえぎって）ボクはハンカチを使わないんですよ。持ち歩いてもないです。小学校のときとかみんな持ってたじゃないですか、ハンカチとティッシュは必ず。でも、ボクは絶対持たなかったですね！

――それはまたどうして？

石田　とくに意地で持たなかったってわけじゃないんですけど、長続きしないんですよねえ。ハンカチとか、必ずどっかでなくしちゃう人間なんで！（照れながら）。

[『PRIDE武士道』ライト級ワンマッチ]
○石田光洋 vs クリスチャーノ・マルセロ×
（2R判定 3-0）

快勝すれば一気に五味戦か!?　との期待も高まる試合だっただけに「固い試合になってしまいました……」という石田。序盤から得意のタックルで寝技に持ち込み、終始パウンドを落とし込んで試合を優位に進めるが、マルセロも執拗に下から十字を狙う。一瞬、この十字が極まりかけたシーンもあったが、石田は"気持ち"でこれを振り切り判定勝ちに。苦戦するシーンを見せたものの、手堅く『武士道』3勝目を挙げた。

――それはさわやかじゃないですね、エチケットとして。

石田　そ、そうなんですかねえ（苦笑）。もともと自分ではあんまりさわやかだと思ってないんですけど……。

――でも、石田さんは髙田本部長から"新・青春のエスペランサ"襲名のお墨付きをもらっていますし。

石田　ええ、まあそうなんですけど。正直、ボクでいいのかなっていう気持ちですけどね……（鋭い眼光で）。

――じゃあ反対に、『武士道』の中で石田さん以外にその名を襲名できそうな選手っていそうですか？

石田　さわやかな人ですか？

――さわやかな人です。

石田　……（考え込んで）やっぱり髙田さんじゃないですかね。

――それじゃ、もとに戻っちゃいますよ（笑）。

石田　う～ん、選手では、あんまり思いつかないです。というか、ボク、さわやか……かなあ。

――悩みますね（笑）。こないだの『武士道』も3連勝達成されたのに、複雑な表情をされてましたけど。

石田　ああ、そうか、3連勝か……（複雑な表情で）。

――ん？　どうしたんですか？　あまり嬉しそうじゃないですけれども。

石田　ええ、まあ。あの試合はちょっとですねえ……。

――クリスチャーノ・マルセロ戦はそんなに納得できる内容じゃなかったですか？

石田　そうですね。ちょっと固くなったまま試合をしてしまったんで。なんだか今回は目に見えないプレッシャーがあったというか。みんな、ボクのことを前回のマーカス・アウレリオ戦の印象で見てるって感じがして、周りの期待が膨らんでるのを感じちゃったんですよ。それを凄いプレッシャーに感じたのかもしれないです。ボクの中では『武士道』の試合では一番出来がよくなかったと思います。

――たとえば、どういった点がダメだと感じましたか？

石田　気持ち的にあんまりよくないパターンが出てしまいましたね。焦ってる自分がいるなって。練習中なんかは全然焦ったりしなかったんですけど、試合が近づいてくるにつれて精神統一ができなくて……。そうしたら、やっぱり本番中もいつもと違うなという感覚になってしまいましたね。

――石田さんの中でその原因というのはわかってるんですか？

石田　やっぱり一番大きいのは周りの期待感ですね。あとは名古屋での初めての試合というのもあったし、そこで初めてボクを見てくれるという人もいるわけじゃないですか。そういうことを含めて全部かもしれないです。それに……。

――それに？

石田　川尻くんが素晴しい勝ち方をしたのがですねえ……。

――余計なプレッシャーになりましたか（笑）。

出来がよくなかった原因？　それは川尻くんが素晴しい勝ち方をしたのがですねえ……

7月24日、『武士道・其の十二』参戦者発表記者会見で、アウレリオを敗った石田に対してコメントを求められた五味は、「そういう質問は大ッ嫌いなんですよ、オレ!!」と露骨に不快感を表わし、なんと、その場を退席！　一瞬にして会見場はピリピリモードに。

石田　よ、余計っていうか、もちろん嬉しいんですよ！（あわてて）。

―いつも試合順でいうと川尻選手のほうがあとですけど、今回は逆でしたもんね。しかも川尻選手は見事ＫＯで快勝したという。

石田　だから、嬉しい気持ちでいっぱいなんですけど、でも嬉しさプラス……今度はボクに重いバトンがドンと渡されたみたいで。まあ、いつもは川尻くんがボクよりあとだったんで、そんなふうに感じることはなかったんですけど、いままでの川尻くんの気持ちがよくわかった気がします（しみじみ）。

―なるほど。

チャンピオン自ら名前を口にしていただける時点で凄くありがたいことですから！

石田　でも、そこはボクがプレッシャーをいいプレッシャーに受け止めないといけなかったんですよね。俺も続いてやるぜ！っていう。そこを、マイナス思考になっちゃった自分が少しいたんですよ。対戦相手のマルセロ選手も初参戦でよくわからない選手だったし。

―石田さんとしてはのびのび闘えた感覚はなかったということですね。

石田　そうですね。試合当日には絶対「負けたらどうしよう!?」なんて考えたことなかったのに。

―今回はさわやかに試合へ臨めませんでしたか。

石田　でも、それはそれで凄く今後に活きる試合だったし、活かさなきゃいけないと思うんですよ（真剣なまなざしで）。だから、マルセロ選手にはこういう経験をさせてくれたことに感謝しなきゃいけないと思います！

―そのネガティブ思考になった原因の一つと言っていいかはわからないですけど、やっぱりそのプレシャーには五味隆典という存在が影響してたりしますか？

石田　……そうですねえ（考え込んで）。どうだろう。現実味がまだないんで、なんとも言えないんですけどね。周りからは「いつやるの？　いつやるの？」って言われますけど、それで焦ったりすることはないですし、べつにまだならそれはそれで経験を積もうと思うし。その過程でもし負けたら所詮それまでの人間だったってことですから。

―石田さんがアウレリオを倒してからというもの、記者会見なんかでは五味選手に関する質問があとを絶たないようなところがあったと思うんですけども。

石田　いま考えると、知らず知らずのうちにそういうプレッシャーもあったのかなって思いますね。やっぱり『武士道』のチャンピオンがボクのことを名指しにしてくれて「強い勝ち方してアピールしてこいや」って言っていただいたのでですね。少なからず圧力を感じちゃった部分も……（急に思い直して）いや、どうだろうな？　あんまり意識はしてなかったんですけどね、ボク的には（笑）。

―どっちなんですか（笑）。印象的だったのは、『武士道・其の十二』の参戦選手発表記者会見なんですよ。石田さんと五味選手はお互いのことに関して繰り返し質問されてましたよね。

石田　あ、そうでしたっけ？

——記者の一人が五味選手に「石田選手のことをどう思いますか？」っていう質問をしてしまって、五味選手が気分を害して退場してしまったという。

石田　う～ん、あったかなあ、そんなこと……（しばらく考えて）あっ！　ありましたねえ、そういうの。

——忘れてましたか（笑）。石田さんにとっては、そんなにたいしたことではなかった、と？

石田　っていうか、ボクはべつになんとも思わなかったですけどね。まあ、チャンピオンからしてみればあんまりおもしろくない質問だろうなとは思いましたけど。……ボクが同じ質問をされてたらって考えると、本当たまらないですよねぇ。

——では、五味選手にいきなりそういう態度をとられて、石田さん自身が不快に思ったとか、そういうことはなかったですか？

石田　ボクはべつに……。それより、やっぱりなんでそんな質問をするんだろうって思いましたね。ぶっちゃけ（苦笑）。やっぱ、その質問は怒るだろ！　って。

——石田さんが五味選手の立場でもやっぱり怒りますか？

石田　逆の立場だったら五味選手と同じことをするかもしれませんね。

——さわやかに退席しますか！

石田　い、いや、退席っていうか……。やっぱ、その場になんないとわからないですけど。（考え込んで）う～ん、ただおもしろくはない質問だなとは思うと思います。

——ただ、勝手な言い方をすると、観るほうにとっては、この関係性は刺激的だと思いますよ。

石田　あ～、そうですよねえ。ファンの方々からすれば。

——選手本人からすればイヤかもしれないですけど、ファンの想像力を刺激するのもプロの仕事ですから。大変ですけど。

石田　大変というか、五味選手って、ボクが想像しているよりずっとそういうこと言われてるんだと思うんですよね……。

——あ、気遣いますか。優しいですねえ、石田さんは（笑）。でも、五味選手って川尻さんとの対戦の前もそうでしたけど、けっこう相手選手を挑発するというか、過激な発言が出たりしますよね。そういうことについては、石田さんはどう受け止めてますか？

アウレリオと闘いたいって言ってましたね　だから「あれ、変わっちゃったのかな」って

Mitsuhiro Ishida
いしだ・みつひろ■1978年12月29日、茨城県出身。T-BLOOD所属。01年7月にプロ修斗デビューを果たし、06年2月に修斗環太平洋ウェルター級王者に君臨。現在『武士道』三連勝中で五味の持つライト級のベルトをさわやかに狙う。168cm、72kg。

石田　よく、試合前とか「ブッ殺す!!」とか言ってる選手がいますよね。でも、べつに本当に殺されるわけではないですから！（さわやかに）。

——それはそうですよね（笑）。

石田　レフェリーがいないでとことんやるんだったら殺されるかもしれないですけど、レフェリーがいるんで、ヤバいときは止めてくれると信じてるんで。

——逆に石田さんには挑発したい感情というのは？

石田　挑発は……いままではしたことはないですね。基本的に選手に対してはリスペクトしてますし、苦しい練習を積んでリングに上がってるわけですからね。

——そういう行為は石田さんの美学に反する、と。でも、五味選手と闘いたい感情、闘争心はあるわけですよね。

石田　でも『武士道・其の十二』後の一夜明け会見で、五味選手ってアウレリオと闘いたいって言ってましたよね？　だから「あれ～、変わっちゃったのかなあ」って思ってたりしたんですけどね（笑）。まあでも、名前を出してもらえてる時点で凄くありがたいことですから、そこは嬉しいですね！

——もし五味選手と闘うとしたら、どんな対策を練ってどんな弱点を突こうと思いますか？

石田　弱点……。（しばらく考えて）どうなんですかね、ないような感じです。だって、強いですよね！　本当に。

——いや、強いですよね（笑）。

石田　打撃も強いし、プレッシャーも凄いし、スタンドでの距離感とか間合いとかもいいし、レスリングも、うん、腰も強い！　弱点はどこですかって聞かれても見当たらないような気がします!!（キッパリ）。

——見当たりませんか！

石田　だから、ボクは頑張る……じゃなくて（照れながら）、本当に気持ちで負けないような闘い方をしたいなっていうか、ちょっとでも引いたらダメですし、自分の持ってる力を信じてやるしかないのかなって。ボクって、戦略を立てて闘うタイプじゃないんで。自分を信じてって感じです。

——もしかしたら、11月の『武士道』で実現する気配はありますけども。

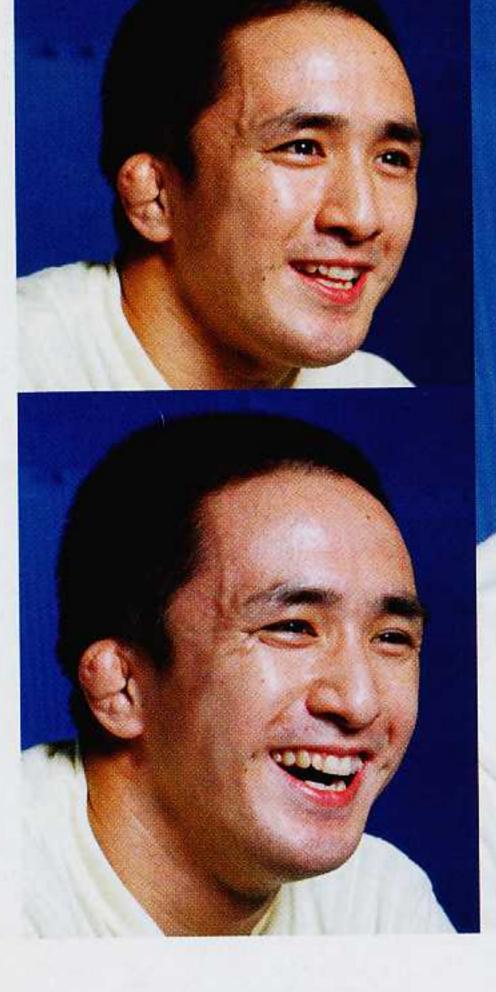
石田　もう、オファーがいただければ断る理由は何もないんで、いつでも！

——いつでも！

石田　はい。闘いたいという気持ちはありますからね。『武士道』に上がって3戦目なので、それに対して周りがどう思うかっていうのはありますけど、でも……ボクにも欲があるんです！

——わかりました。では、石田さんの欲、期待してます！

【06年9月4日／T－BLOODにて収録】

Tatsuya Kawajiri

川尻達也

「あわてずベストタイムを待ちますよ」

『PRIDE』の歴史に残る五味隆典との超激闘で、『PRIDE武士道』躍進のきっかけをつくった川尻達也。盟友・石田光洋が五味への第一コンデクターに浮上しているとはいえ、“五味隆典包囲網”は、この男の動きも見逃せない!!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／丸山剛史

五味隆典
包囲網
其の弐

運気を取り戻すべく異様なテンションで試合に臨んだ川尻達也。

——今日は、川尻さんが大好きなあだち充マンガの魅力を語ろうと思ってこんな夜遅くにやってきました!
川尻 あ、マジですか!?
——いや、そんなわけはないんですけど、とりあえず語ってもらいましょう! (笑)。
川尻 ボク、あだち先生と対談したいぐらいなんですよ!
——そんなに大好きなんですか?
川尻 好きですねえ。全作品持っているし、一番好きなのは『ラフ』ですけど、きっかけは『タッチ』の主人公(上杉達也)と名前が一緒だからっていうことで。
——か、簡単ですねえ。
川尻 単純ですよ!
——でも、その作品性にも惹かれたところはあったんですよね?
川尻 あの青春の甘酸っぱさ……ですかね(笑)。
——「タッちゃん!」「南!」という感じの思い出ですか? (笑)。
川尻 そういう感じですねえ。そういうこともあの頃あったよね、みたいな(笑)。
——「あのときああしてれば……」っていう苦い思いはよみがえってこないですか?
川尻 それはないですけどね。
——あ、ない。失礼しました(笑)。人間って、自分にないものを求めたがると思うんですけど、そういうさわやか系というか、甘酸っぱい系は……。
川尻 まあ、ボクにはあんまりないですよねえ。見た目からないですね、さわやかさは。ないというか、どっちかというと、さわやかじゃないですからね(笑)。
——ハハハハ!
川尻 言われてみれば、自分にないものを望んでるのかもしれないですね。ま、石田くんはかわいいキャラですけど。
——どうでしょう、石田さんは私生活でも本当にさわやかなんですか?
川尻 まあそうっスよ。もちろんそうですよ! (笑)。
——何か暴露したいことでも……。
川尻 いやいや、とんでもないですよ。余計なこと言うと殺されるから(笑)。
——はあ(笑)。で、その石田さんは五味選手との試合が浮上していますよね。
川尻 そうですね。
——川尻さんは、五味選手へリベンジしたい気持ちは高まっていないんですか?
川尻 いや、まだまだですよね。まだ自分の中では高まっていないですから。
——先日の『武士道』の試合後に川尻さんは完全復活を宣言されましたが……。

試合に勝ったあと あんまり喜ばないんですけど……

[『PRIDE武士道』ライト級ワンマッチ]
○川尻達也 vs クリス・ブレナン×
(1R 29秒 KO)
『PRIDE武士道』の常連ファイター、"西部の関節職人"ブレナンを秒殺!! 首相撲からのヒザ蹴りで崩れ落ちたブレナンにパウンドのラッシュ! 異名どおりの"クラッシャー"ぶりを見せつけ、マイクで「復活」宣言。

川尻 もう、かなり充実してましたね。試合後に、はしゃいでしまうぐらい(笑)。ボク、いつもは試合に勝ったあとあんまり喜ばないんですよ。ガッツポーズもあんまりしないんですけど。
——かなり喜んでましたよね。
川尻 自分でもビックリするぐらい。修斗でシャオリン(ビトー・"シャオリン"・ヒベイロ)に勝ったときより、リング上でテンション高かったから。
——それはまたどうしてですか?
川尻 まず秒殺が初めてだったというのもあったし、ボクはけっこうスロースターターだって言われてたんですけど。で、久しぶりに会心の勝利だったんで、そういうのも含めてテンションが本当に上がっちゃいました。
——じゃあ、あのマイクも勢いに任せて「しゃべっちゃえ!」という感じだったんですか?
川尻 そうですね。
——それで「完全復活を宣言します!」ということでしたけど、川尻さんとしては"自分が落ちていた"いう感覚があったんですか?
川尻 実力が落ちていたわけじゃなくて、運気が落ちてたみたいな。ヨアキム・ハンセン戦のアクシデントとか、物事がうまくいっていないことを凄く感じていたんで。
——修斗ウェルター級王座の防衛戦。金的攻撃で反則勝ちとなった試合ですね。精神的には「なんとかしなきゃ!」という思いは強かったわけですね。
川尻 そうですね。6月の『武士道』でベネット(チャールズ・"クレイジー・ホース"・ベネット)に勝つまでその気持ちはずっとありましたね。
——そのベネットに対しては、イロモノ的な目線もあったみたいですね。
川尻 ああ、正直ありました(苦笑)。「なんでオレがやんなきゃなんないんだ?」というのがちょっとありましたけど、まあそれはね、五味くんに負けて、ヨアキムとはアクシデントであいうかたちになったから、しょうがないかなって。そこまで落ちちゃったなと。
——ボクなんかからすると、非常におもしろいカードだと思ったんですけどね。
川尻 そうですか? (笑)。
——え〜っと、稀な意見だと思ってくださってけっこうですけど(笑)。
川尻 修斗ってランキング制だから、そういうカードってありえないじゃないですか。そこはやっぱちょっと納得できないところがありましたけど、でも向かい合ったら、プロとしてのオーラみたいなものをベネットに感じましたね。
——キャラじゃなくて本当にイカレてますからね、あの馬鹿馬は(笑)。
川尻 恐怖っていうか、怖くはないんで

運気を取り戻すべく異様なテンションで試合に臨んだ川尻達也。入場シーンは瞬き一切なし、瞳孔が開きっぱなし!! あだち充ワールドとはほど遠いキャラだよ!

すけど、ファイターとしてオーラを持ってるなって思いましたね。

——では、また一つプロとしての考えが変わった部分があるんですかね？

川尻　そうですね。吹っ切れたし。

——それで、今回の煽り映像では、五味選手との再戦は「二年待ってほしい」という川尻さんの発言が使われてましたけど、昨年の今頃、五味選手に負けた直後にも同じことをおっしゃってましたよね。

川尻　いや、アレはあんなふうに使われると思わなかったんですよね。「どのくらいの時期に闘いたいですか？」って聞かれたから、時間がほしいということと、いますぐはやりたくないっていう意味で「二年ほしい」って言ったんですけど。

——時間がほしいという意味だった、と。

川尻　あとボクは「リベンジしたい」って言葉に出すよりは、自然とそうなる流れを待つのが合ってるんですよね。「やりたい、やりたい!!」って言うんじゃなくて、最高のベストタイムでまた闘えるときがくるまで自分を高めていればいいかなっていう。

——ガツガツしないで、自分がやることやってりゃいいという。

川尻　常にそうですね。いままでのリベンジもそうだったし、シャオリンのときも自然にタイトルマッチっていうベストタイムでリベンジの舞台が整ったし、そういう意味で自分からやりたいっていうんじゃなくて、「やらざるをえない」というベストタイムが来るまで自分を高めていたいなっていう感じですね。

——前回の五味戦もそうでしたもんね。状況的にも、ここでやらざるを得ないという。

川尻　そうそう。高まったところでもう一回やれればいいかな、と。いまは「闘いたい」とか「倒したい」とかはないですね。自分を高めるだけだから。

——たとえば自分は高まってないけど、ファンのニーズが湧き上がってきたらどうします？

川尻　それはもうやっぱり、ファンの声が一番だと思うから、ボクも自然と盛り上がるじゃないですか、乗せられて。両方が頂点にいったベストタイムで闘いたいです。

これまで客観的にやってきたのが自分の強みですから

Tatsuya Kawajiri
かわじり・たつや■1978年5月8日。現・修斗世界ウェルター級王者。写真隣は多くの格闘家に打撃の指導をしている山田武士トレーナー。タクシーが乗車拒否しかねない絵図、男臭さである。171cm、80kg。

——客観的にご覧になって、ファンは五味さんの対戦相手として誰を求めていると思いますか？

川尻　それはやっぱり石田くんか（マーカス・）アウレリオじゃないですかね。

——その五味選手は試合前の会見で「俺と闘いたいヤツは試合後、リングに上がってこい！」という発言をしてましたけど、川尻さんはあの発言をどう受け取っていたんですか？

川尻　よくわかんないですね。

——わかんないですか（笑）。

川尻　ボクはまだ、そう言われてリングに上がる資格がないと思うんで。……五味くんのこと聞かれても、何も出ないですよ！（笑）。

——ハハハハ！　いや、対戦表明しなくても、いまライト級はメンツが揃ってるから、群像劇としての絵を楽しみたかったところはあるんです。良質なプロレス的視点で見ると。五味さんが勝った瞬間も、リングサイドに座っていた川尻さんと石田さんの絵が抜かれてたじゃないですか。

川尻　あ、アレはビックリしましたねえ。あのとき、ビジョンを観てたら自分が映っていたんで。それからはもういつ撮られるかわからないから、神妙にしてましたけど。

——多くのファンはライバルたちが「五味の復帰戦をどう見たのか？」という好奇の目を持って見てますよね。

川尻　というか、ボクは石田くんが（カメラに）抜かれると思ってたんですよ。だから石田くんに「近くに来ないでよ！」って（笑）。

——石田さんに「リングに上がりなよ」とかアドバイスしなかったんですか？

川尻　そうそう。「言っちゃえよ！」とか。そしたら何も言わないから「ないのかよ!?」って。

——ズッコケたと（笑）。

川尻　ま、ボクは二人の行方をファンとして見てるから。楽しんで見てますよ。でも、そのあいだ、自分のことは高めています。

——いまはマッハさんや石田さんと茨城勢が充実してますが、『武士道』のトップを茨城勢が占めてしまったらどうしますか？

川尻　それはもうGPの決勝とかだったら闘うしかないでしょうね。それをファンが望んでくれたらいいと思いますし、決勝だったらね。

——来年はライト級GPが開催される予定ですけど、川尻さんは修斗の防衛戦もあるので、調整が大変なんじゃないかなと思うんですけど。

川尻　まあ、けど自分で選んだ道なんで大変とは思わないですけど。一応、次は10月の修斗に出たいなってボク的には希望してるんですけど。まだ先のことはわからないですね。

——どうなっても、次の横浜アリーナは、石田さんのセコンドにつくことになるんですかね。

川尻　そうですね。野次馬として石田くんを炊きつけます（笑）。

——それはマスコミとしても望むところですが、ガツガツしてないですね、川尻さん。

川尻　これまで客観的に見てやってきたのが自分の強みですから。自分を高めて、ベストタイムを見計らって、慌てずに勝負します！

【06年9月4日／茨城T－BLOODにて収録】

PRIDE 武士道 -其の十二- PLAYBACK

“強い”五味隆典、ついに再起動!! 11月横浜で防衛戦実現?

[ライト級ワンマッチ]
○五味隆典 vs デビッド・バロン×
(1R 7分10秒 チョークスリーパー)

敗戦からリセットしたい五味は、バロンの果敢なタックルにパンチで応戦。一度はグラウンドに持ち込んだがスタンドへ移行し、タックルを切ってバックを奪いチョークで一本奪取！　喜び爆発の五味は「今日は最高！みんなどう?」とマイクも「やりたい奴は上がってこい」発言はなかった。

“頂上”はすぐそこだ!!　PRIDEウェルター級GP 2nd ROUND DIGEST

○三崎和雄 vs ダン・ヘンダーソン×
(2R終了 判定 3-0)

今年、二度目となるダンヘンvs三崎。両者はほぼパンチの打ち合いに終始、ダンヘンは的確なパンチで反撃もスタミナ切れか徐々にペースダウン。深追いせずスタンドにこだわった三崎が判定勝利、「為せば成る！　次は決勝の横浜まで日本人の闘いを見に来いや～っ!!」とマイクで絶叫。

○郷野聡寛 vs ケガール・ムサシ×
(2R 4分17秒 腕ひしぎ十字固め)

郷野はDJ GOZMA仕様の『アゲ♂アゲ♂EVERY騎士』で必要以上に上達したダンスを披露。セコンドは全身白タイツ＆金髪アフロ。これにカチンと来たかムサシが猛ラッシュ！　だが郷野は寝技でペースを守り、2R残り1分で腕十字で一本！「今夜はパンツをサゲサゲで」と下ネタマイク。

○パウロ・フィリオ vs 長南 亮×
(1R 2分30秒 腕ひしぎ十字固め)

“優勝候補”フィリオは試合序盤から、テイクダウンに成功。もがく長南を横目にフィリオはマウントへ移行。ブリッジで必死に脱出を試みる長南だが、クールに動きを読んだフィリオはガッチリと腕十字！　長南に何もさせず「決勝へ隙なし」と思わせるフィリオの完勝劇だった。

○デニス・カーン vs アマール・スロエフ×
(1R 4分10秒 チョークスリーパー)

絶好調のカーンはパンチで先制攻撃！　さらにスロエフの右足をつかんで非情な右ストレート爆発！　鼻から出血したスロエフを捕獲したカーンはバックから強烈なチョークで締め上げると、スロエフはスローモーションのような動きでタップ。試合後、カーンはマイクで堂々の優勝宣言！

[ワンマッチ]
○美濃輪育久 vs バタービーン×
(1R 4分25秒 腕ひしぎ十字固め)

新テーマ曲に黒のショートタイツと“新型”仕様の美濃輪は、まずドロップキック2連発!!　バタービーンが上になるもサイドから逆十字を極め、完勝。日の丸を背負い「オイ！　オイ！」と咆哮三昧。

[ライト級ワンマッチ]
○桜井“マッハ”速人 vs ルシアノ・アゼベド×
(1R 6分35秒 TKO)

マッハはアゼベドの執拗なタックルにパンチとヒザで防戦。テイクダウンも奪われるが、最後は飛びヒザがクリーンヒット！　大流血によるドクターストップ勝利も「不甲斐ない」と反省しきり。

[ライト級ワンマッチ]
○日沖 発 vs ジェフ・カラン×
(2R終了 判定 3-0)

地元、名古屋出身の23歳のホープ、日沖が長身からの右ロー連打でペースを握り、スタンドで圧倒！　カランも大振りの右フックやヒールホールドでチャンスを狙うも、3-0の大差で日沖が判定勝利

[武士道挑戦試合]
△阿部裕幸 vs 松下直揮△
(2R終了 引き分け)

手数が多く前へ出る松下、カウンター狙いで打撃を連ねる阿部。スタンドで意地がぶつかり合うも、武士道挑戦を意識しすぎたか、両者とも決め手に欠ける状態。時間切れで無念のドロー裁定に。

[武士道挑戦試合]
○中村大介 vs 池本誠知×
(1R 3分12秒 腕ひしぎ十字固め)

田村潔司のゲノムを持つ中村は、同じくUの遺伝子を受け継ぐ池本と一本を狙い合う好勝負展開！　中村は腕の取り合いから腕十字で池本をキャッチ、一度は脱出されたが再度十字を極めて一本勝ち！

武士道もリスタート！『PRIDE』のホーム、名古屋に凱旋！

約一年ぶりに、『PRIDE』のホーム、名古屋凱旋となった武士道大会。同時にフジテレビの地上派撤退後、最初の武士道開催でもあったが、大会セットや演出もほぼ変更なしでファンもひと安心。

MMA11戦全勝！
『武士道』にまたとんでもない男がやってきた！

Gilbert Melendez

ギルバート・メレンデス

「自分がベストであることを証明するために五味を倒したい！」

群雄割拠、強豪だらけのPRIDEライト級戦線に、また一人、とんでもない男がやってきた。修斗で高谷、植松、ルミナを次々と倒し、“日本人キラー”と呼ばれたメレンデスがついに登場。『武士道』デビューとなる8.26名古屋で、帯谷を圧倒したこの男が狙うのは、もちろん王者・五味隆典の首だ！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

Gilbert Melendez
1982年4月12日、米国カリフォルニア州出身。修斗ライト級戦線で高谷裕之、佐藤ルミナ、植松直哉を撃破し“日本人キラー”と呼ばれ、今年6月にストライクフォースのライト級王座に輝く。8.26『武士道12』で待望の『PRIDE』デビューをはたした。175cm、73kg。

帯谷はいままでで一番タフな相手だった。俺のPRIDEデビュー戦にふさわしい男だよ

――祝勝会の真っ只中に恐縮ですが、まずは『PRIDE』に初めて出た感想を聞かせてください。

メレンデス　自分の夢が叶った喜びでいっぱいだよ。もちろん、これが最終的なゴールじゃないけど、自分にとって一つの大きな目標が『PRIDE』に出ることだったからね。

――壮絶な殴り合いを演じた帯谷選手の印象はいかがですか？

メレンデス　帯谷はウォリアーだね。精神と肉体が強くて、ファイトスタイルも自分と同じようにアグレッシブ。とにかくタフなファイターだったよ。

――あれだけ殴っても最後まで向かってきたのは、驚いたんじゃないですか？

メレンデス　凄い精神力だと思ったね。普通、あれだけパンチをもらったら、肉体的ダメージはもちろん、気持ちが折れてあきらめてしまうものなんだ。でも、帯谷は勝つためにどんどん前に出てきた。あのハートの強さは凄く尊敬するよ。

――これまで修斗のリングで、日本のトップクラスのファイターと何人か対戦して勝ってますけど、彼らと比べて帯谷選手はいかがですか？

メレンデス　帯谷はおそらく自分がいままで試合をやった選手の中で、一番タフなファイターだね。

――それは外国人などみんな含めて？

メレンデス　国籍に関係なく一番タフなファイターだよ。俺のPRIDEデビュー戦にふさわしい相手だったと思う。

――『HERO'S』ではなく『PRIDE』に参戦を決断した理由は？

メレンデス　『HERO'S』にはとても魅力的なKIDヤマモトという素晴らしいチャンピオンがいる。でも、KIDと同等かそれ以上のトップファイターがズラリと揃っているのが『PRIDE』のリングだ。だから俺は『PRIDE』を選んだんだ。『HERO'S』に上がっているタカヤ（高谷裕之）とは以前、修斗のリングで闘ったことがあって、そのときは判定だったんだけど、いまだったら間違いなくKOか一本で決める自信があるよ。

――では、このタフなファイター揃いのPRIDE武士道マットで、次は誰と闘いたいですか？

メレンデス　このリングに上がってるファイターで弱いヤツはいないから、誰でもいいよ。でも、その中でもチャンピオンの五味はやっぱりベスト。彼のことは凄く尊敬しているんだけど、自分がベストだと証明するために、早く彼と闘えるぐらいの実績を作りたいよ。

［『PRIDE武士道』ライト級ワンマッチ］
○ギルバート・メレンデス vs 帯谷信弘×
（2R判定 3-0）

両者、MMA無敗での『PRIDE』デビューとなった帯谷戦では、序盤から積極的に前に出て、豪腕フックでKO寸前に追い込む。タフな帯谷の粘りで判定決着となったが、内容では完勝だった。

――今日、ご自分の試合が終わったあと、他の試合はご覧になりましたか？

メレンデス　凄く観たい試合が多かったんだけど、拳の痛みがあってドクターに診てもらっていたんで、観れなかったんだ。

――『武士道』のリングには修斗のチャンピオンである、川尻選手や石田選手もいます。彼らについてはどう思いますか？

メレンデス　もちろん機会があればファイトしたいよ。川尻とは修斗では階級が違ったけど、いまは俺もウェートアップしたからね。これから、どんどん強いヤツと闘っていきたい。

――じゃあ、これからは『PRIDE』とアメリカのストライクフォースを行ったり来たりという感じになりますか？

メレンデス　そうなるだろうね。ただ、『PRIDE』のほうがより優先度は高くなる。やはり自分が世界最強だと証明するためには、『PRIDE』のリングのほうが、いいファイターがたくさんいるからね。ただ、ストライクフォースは、俺の地元のサンフランシスコ・サンノゼエリアを中心に、とても人気のある大会で、素質と野心のある選手がどんどん集まってくる。だから、俺のホームリングでもあるということさ。

――現在、所属チームは？

メレンデス　ジェイク・シールズ・ファイティング・チームだ。もともと俺のトレーナーでありトレーニング・パートナーだったジェイク・シールズのところに、UFCでも闘っていたタフなやつらが自然と集まってきて、いまの俺たちのチームができあがったんだ。

――メレンデス選手の強烈な武器であるパンチもジェイクから習ったんですか？

メレンデス　打撃に関してはジョン・サナンというタイ人から習っている。現役時代は5回ムエタイの世界チャンピオンにもなっている人なんだ。

――自分の一番の持ち味はパンチだと思いますか？

メレンデス　いや、なんでもできるオールラウンドのMMAファイターだということが、俺の強みだよ。グラウンドに持ち込んで、パウンドでフィニッシュというのは、俺の得意パターンでもあるからね。

――次の試合の予定は？

メレンデス　まだ決まってないけど、今後も『PRIDE』で勝ち上がっていきたいね。組んでもらえるなら、11月の大会にも出たい。何試合でも闘えるスタミナも俺の持ち味だからね。

【06年8月27日／名古屋市内のクラブにて真夜中に収録】

ギルバート・メレンデス MMA全戦績

[2002.10.18] WEC 5
○vs Gary Quan
（2R 4分34秒 TKO）

[2003.03.27] WEC 6
○vs Jeff Hougland
（2R 2分05秒 TKO）

[2003.10.10] ROTR 4
○vs ステファン・パーリング
（2R 4分59秒 TKO）

[2004.05.21] WEC 10
○vs オラフ・アルフォンソ
（3R 4分54 秒TKO）

[2004.11.20] ROTR 6
○vs ケイナン・カク
（2R 3分58秒 TKO）

[2004.12.14] 修斗
○vs 高谷裕之
（3R判定 3-0）

[2005.05.04] 修斗
○vs 植松直哉
（2R 4分30秒 TKO）

[2005.08.20] 修斗
○vs 佐藤ルミナ
（1R 1分32秒 TKO）

[2006.03.10] Strike Force
○vs ハリス・サリエント
（2R 0分44 秒 TKO）

[2006.06.09] Strike Force
○vs クレイ・グイダ
（2R判定 2-1）

[2006.08.26] 武士道11
○vs 帯谷信弘
（2R判定 3-0）

昨年8月のルミナ戦ではヒザ蹴りで流血に追い込み、わずか1分半でTKO勝ちを収めた。

馬鹿が生き残るんですよ!!

天才グラップラーががっぺPRIDEデビュー!!

青木真也

『PRIDE』デビュー戦となった『武士道·其の十二』において、戦慄の勝利を飾った修斗世界ミドル級王者、青木真也！　評判通りの寝技もさることながら、“黄色いエガちゃん”ふうな出で立ちもがっぺ衝撃的。『武士道』の“殴り者”の世界観を覆そうとする、“狂気の寝業師”に迫る!!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

――先日の『PRIDE武士道』デビュー戦は、前評判を超えるインパクトを残されましたね！

青木　あ、ホントですか？（笑）。

――ホントです（笑）。ご自分では手応えはなかったんですか？

青木　寝技になったとき「これはイケるな！」っていう確信はありましたけど。いつも修斗で闘ってるときと変わらないぐらい落ち着いてましたね。ホント、リラックスしてて。下から固めて殴ってるときに相手の肩口にヒジを入れてたんですけど、「俺、余裕があるなあ」って思うぐらい余裕がありました。

――闘っている自分を客観視できるぐらい。試合は素晴らしかったんですけども、青木さんは入場からもの凄いテンションが高くて。

青木　気持ちよかったですね、『武士道』。もっと緊張して不安要素もあるかと思ったんですけど。

――といいますと？

青木　演出の緊張があるかなと思ったんですけど。それがいい方向に向かってくれて、本当に心地良かったです。

――榊原代表も試合後のコメントで、「青木選手には“俺のために集まってくれた！”という度胸があった」とほめてましたけど。

青木　……どんだけ図々しいヤツかってことですよね（苦笑）。

――いやいや、それだけハマっていたってことですよ。入場曲のウルフルズの『バカサバイバー』も雰囲気にピッタリでしたし。あの曲を使うことに何かイメージしてるものってあるんですか？

青木　ストレートに言うと、馬鹿ってことですよ！（笑）。

――ハッハッハッ！　青木さんは馬鹿でしたか！

青木　そうですねえ。まともじゃないですけど、つまり“馬鹿が生き残る”ってことですから。

――なるほど（笑）。『kamipro』では「馬鹿」という言葉は、もの凄くいい意味で使ってるんですよ。猪木さんの「馬鹿になれ！」じゃないですけど、みんなに馬鹿になって己をさらけ出してほしいという。

青木　それで「夢を持て！」と（笑）。

――そうです、そうです（笑）。それで、青木さんは入場や試合に加えて、あのロングスパッツも素晴らしくて！

青木　……あれしか印象にないんじゃないですか？（笑）。

――そ、そんなことはないですけど（笑）。そもそもどういった理由であのロングスパッツを穿こうと思ったんですか？

青木　まあ、極めにいくときに滑りにくくするためですよね。外国人って汗でヌルヌルしますから。それだけです。

――なんでまたイエローにしたんですか？

青木　最初は黒にしようとしたんですけど、絶対に「江頭２：50だ！」って言われると思ったんですよ（笑）。それって最悪じゃないですか。もう試合どころじゃなくなっちゃう。

【『PRIDE武士道』ライト級ワンマッチ】
○青木真也 vs ジェイソン・ブラック×
（1R 1分18秒　三角絞め）
極めに定評があるジェイソンを引き込んだ青木は、ラバーガードからの三角絞めでガッチリ固定して、頭部に鉄槌を叩き込むエグイ攻撃!! なんとか逃れるジェイソンの頭を押さえつけ、そのまま三角絞めで一本勝ち！　ストライカーが幅を利かせる『武士道』に“日本最強のグラップラー”の技を見せつけた。それにしても、身体の柔らかさ、足の利かせ方が江頭並みだよ！

BAKA SURVIVOR

ロングスパッツを穿いたのは、極めるときに滑りにくくするためです

――とんでもない『武士道』デビュー戦ですよね。「修斗王者来たる！」「跳関十段ついに登場！」ってことでフタを開けてみたら、江頭２：50だったなんて（笑）。

青木　ねえ！

――でも、黄色にしても「江頭！」って周りから言われませんでしたか？

青木　……そうなんですよ。「黄色いエガちゃん」って言われてるですよ！

――ハッハッハッ！　黒でも黄色でも、色は関係なかった（笑）。

青木　もう慣れましたけど。一応、江頭って芸能人ですからね（誇らしげに）。「似てる」って言われたら凄いですよ!!

――でも、「江頭２：50に似てる」っていうのは微妙じゃないですか？

青木　いやいや、「あくまでコスチュームが」っていうだけですからね。

――ああ、そこの線引きはある。

青木　当たり前ですよ。線引き、ありますよ！（笑）。

――さすがに（笑）。話は戻りますけど、どうして黄色を選んだんですか？

青木　どの色にするかけっこう考えてて、赤はありきたりだなとか思って。

――青木さんの柔術着も赤ですし。

青木　そうなんです。それで「黄色でやってみようか」って。じつは誰にも相談してないし、前もって見せてないんですよ。

――へえ～。じゃあ、周りはビックリしたでしょうね。

青木　というか、俺も当日まで試着してなくて（キッパリ）。

――ワハハハハハ！　それはチャレンジャーすぎますよ、青木さん!!

青木　いや、黒バージョンは試着したてんですけど。「ま、いっか」ぐらいしか思わなくて。

――やりますねえ（笑）。ちなみに黄色って、青木さんの中ではどういうイメージがあるんですか？

青木　ま、元気な色ですよね。太陽みたいで。クックックッ！

――何がおかしいんですか（笑）。でも青木さんのイエローは蛍光色も入ってるから、元気の意味ももちろんあるんでしょうけど、悪い表現をすると、狂信的なイメージもありますよね。

青木　そうなんですよね。ちょっと狂った感じで、「●●」みたいな。

――載せられません（笑）。『PRIDE』だと煽り映像なんかで選手のイメージをアピールしますよね。青木さんでいうと「跳関十段」とか「修斗ミドル級王者」とか。で、普通はそのイメージに選手は収まるもんですが……ずいぶんはみ出しましたねえ、青木さんは。

青木　はみ出してないですよ（笑）。

――いやいや（笑）。で、そこに計算を感じない。「ウケるだろうな」とか「格好良く見せよう」とか。

青木　話題にはなるだろうとは思ってましたけど、そこは狙ってないですね。試合で魅せられる自信はあったし。まあでも結果的に俺の勝ちですよ、話題になったら。

——もし自分の姿を客観的に見たら……。
青木 「こいつ、おかしいだろうな」って思いますよ、絶対（笑）。試合の前にテンションにしても。
——『バカサバイバー』を熱唱されながら入場してましたし。
青木 俺、みんなにね、「興奮剤やってんのか？」って聞かれるんですよ（笑）。本当に失礼な話で。
——やっぱり打ってましたか（笑）。
青木 やってないですよ（笑）。コーヒーぐらいしか飲んでないですよ。
——興奮剤をやらなくても試合になれば興奮できる。
青木 そうですね。興奮できます。
——青木さんって人の視線は気にしてます？
青木 気にしてないですねえ。けど、見られるのはそんなに嫌いじゃないんで。
——青木さんの試合での立ち振る舞いには、人の視線をまったく気にしてないすがすがしさを感じたんですけども。
青木 ああ、それはあるかもしれないですね。俺は俺なんで。
——普通はお客さんの視線を気にしたり、ニーズに合わせて何か振舞ったりするもんですけど、青木さんはまるで「俺だけを見てりゃいいんだオラー！」という感じのスタンスで。
青木 そんなことないですよ（笑）。俺、けっこう謙虚で真面目なんで。
——ああ、そこはこっちが誤解してるんですね（笑）。
青木 誤解です！
——そういえば、マイクであまり自己主張されなかったですし。
青木 まあ、第二試合目でしたからね。
——そこは不満でした？「俺が第二試合かよ！」という。
青木 いやいや、そんな不満はないですけど、前座からマイク持つわけにもいかないから。「あれ、こんなところでマイク持っていいのかな」みたいな。だからしゃべることも考えなかったし。
——そこは興行論をちゃんと考えてらっしゃるんですね、青木さん。
青木 一応考えてますよ。第二試合で初参戦だし。メインならまだしも、下の試合でマイク握るのはね、ちょっと。
——興行論つながりで聞くと、青木さんってボクシングの亀田興毅現象はどう見てるんですか？
青木 いや、亀田選手は凄いと思いますよ。俺はボクシングを知らないからどんだけ強いのか、勝ってるのか負けてるのかもわからないですけど、あんだけ注目浴びるということは単純に凄いです。あれでもうプロとして勝ちですよね。
——注目される舞台に立ってるだけでよし！と。
青木 そうですね。ああいう舞台に立って、あんだけ注目されて、あんだけ周りを養うというか。亀田選手一人で興行があるようなもんじゃないですか。そこは普通に凄いと思いますけどね。
——弟の亀田大毅も凄いですよね。試合と歌がセットですから（笑）。
青木 あれはできないよなあ、普通は。あそこまで突き抜けられないっスね、なかなか。

人の視線は気にしない。けど、見られるのは嫌いじゃない

——この時代に『THE虎舞竜』と『T-BOLAN』を歌ってるわけですから（笑）。
青木 あとあの親父が最高におもしろいですよ！（笑）。ヤバイっすね。あの親父、エンターテインメントとして勝ち組ですね。
——個性が売り物になってますよね。
青木 普通におもしろい。なんか『ガチンコファイトクラブ』の匂いがしますよね。ああいうのもいいんじゃないですかね。総合でもやったらいいですよね。
——青木さんって、思ったよりエンターテインメントの理解度が広いんですね。
青木 ハッスルなんかもおもしろいですよね。
——あ、ハッスルをご覧になってるんですか（笑）。
青木 一回だけ観ましたね。和泉元彌が出た『ハッスル・マニア』。あれ、普通におもしろかったっスね。
——格闘技側には、まだまだプロレスに偏見を持っている人は多いですけど。
青木 なんだろうな。ハッスルってべつにプロレスというわけでもないですもんね。ファイティング・オペラですもんね。インリンも出てるし……そういえば、江頭も出てるじゃないですか。
——ああ、じゃあ川田19：55に続いて、青木さんの登場も期待してます（笑）。
青木 じゃあ、いつか（笑）。
——で、そんな余計な話はともかく、『武士道』の話題に戻しますが、相手のジェイソン・ブラックはどうでした？
青木 ジェイソン選手もグラウンドが得意だったと思うんですけど、「寝技を嫌ってるな」って組んだときに感じて。組み技の選手なのに打撃で当てて逃げようとしてるから、「絶対に勝てる！」って思ったんですよね。
——ジェイソンはそれぐらい青木さんの組み技に対して……。
青木 ビビッたんじゃないですかね。だから自分は2回目のコンタクトのときに“引き込む”っていう選択肢を選んだんですよ。相手がガッチリ寝技で勝負する気だったら、絶対に上を取ろうと思ったんですけど。相手が徹底して寝技を嫌がってるから、「じゃ引き込もう」って。
——試合後のコメントでは、組んでコーナーに押し込んでいく作戦もあったということでしたけども。
青木 そうですね。それも考えたんですけど……まあ、それって夢がないですよ。
——夢がない！ いい言葉ですね。
青木 だって『武士道』にはランキングがあるわけでもないし、2ラウンドしかないんだから、そこで固めてもおもしろくないっスもんね。『PRIDE』のリングって、魅せられない選手には、存在価値がまるでないわけで。だから引き込んで自分から動きを作ろうと思ったんですよね。相手から作ることはない。相手が「待ち」の状態だったんで。
——それは試合前から考えてたんですか？それとも試合になってからですか？
青木 試合になってからですね。けっこう試合中に思いつくこと多いんですよ。「じゃあ、イケちゃう」みたいな。「じゃあ、いいや、いっちゃおう」とか。
——判断にためらいはないんですか？
青木 ひらめきですね、ひらめき。深く考えてないですね。
——そういえば、以前、弘中（邦佳）選

手との修斗の試合で、青木さんが三角締めマウントを奪って殴り続けて。で、弘中選手が出血してその体勢のままドクターチェックされてるときに、青木さんが馬乗りのままガッツポーズしたじゃないですか。こりゃ並の神経じゃないなって。

青木 ……ホント悪い人ですよね！ 悪者ですよねえ。

——振る舞いとしてそうなんでしょうけど（笑）。闘いに没頭するその精神状態、スイッチオンでののめり込み具合には、ゾッとする凄味を感じました。

青木 本当に狂ってますよね……。相手は自分の下で血がダラダラ流れてるわけですから。

——あのときも深く考えてなかったんですか？

青木 それがまったく意識ないんですよ。たぶんですね、自分を自分で客観的に見ると、相当気持ちいい状態だった思うんですよね。

——じゃあ悪気はないんですね。

青木 だからタチ悪いんですよ！

——で、あとからいろいろ文句を言われたり、批判をされたりという。

青木 はい。

——そうすると青木さんは後悔するんですか？ 自己嫌悪に陥る瞬間があったりとか。

青木 そこはないですね（キッパリ）。

——ないんですか！

青木 う～ん。うまく言えないけど、自分じゃないんですよ、あんときは。

俺、格闘技を"ゲーム"とは思ってないですから

——犯罪心理学みたいな話になってきました（笑）。

青木 ボクは勝つために闘うだけ、一本を極めにいくだけ。強くなるために練習するだけ。あとは深く考えていないんですよね。

——前号のインタビューでボクも質問したんですけど、「一生、修斗しかやらない」発言って、マスコミやマニアからかなり非難されたりしてるんですね。

青木 みたいっスね。

——そこも「俺じゃないんで！」っていう感じですか？

あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。幼少の頃から柔道に励み、全日本ジュニア強化選手に選出される。早稲田大学時代は柔術、サンボで数々の実績を残し、現・修斗世界ミドル級チャンピオン（76キロ以下）として『武士道』に参戦。180cm、75kg。

青木 都合の悪いことは聞こえてこない‼（笑）。

——ハハハハ！

青木 けど、べつにボクはこれから修斗に上がらないわけじゃないし、今回いい試合を見せたことで納得してもらえるんじゃないかなあっていう感じですけどね。

——そうですね。まあ、極端なことを言うと誰にも迷惑かけてないですから。

青木 もともと自己チューなんで（笑）。

——でも、これからもいちいち言われそうじゃないですか。「めんどくせえな」って思わないですか？

青木 だけど、ボクは試合さえできたらいいですからね。というか試合がしたいですね、すぐに。次は誰とやるとか具体的にはわからないですけど、『武士道』に出ているファイターだったら誰とやっても、おもしろい試合になるなって俺は感じますね。

BAKA SURVIVOR

——日本人と外国人だったらどちらと闘いたいですか？

青木 どっちでもいいですけどね。そこらへんはホントに気にせず。一つだけ言うと、動きのある選手と闘いたいですね。もちろん勝つことを一番重要視されるんでしょうけど、『PRIDE』は勝ちプラスアルファが求められるリングだと思うんですよ。勝ちプラスアルファを求められるというか、自分も「勝ちプラスアルファを見せたい！」と思ってるんで、強い弱いじゃなくてそれを見せられる相手じゃないと意味ないですよね。

——『PRIDE』は「どう勝つか」ということも問われますからね。

青木 そうですね。あと「どれだけインパクトを残せるか」ということも必要だと思うんで。そういう姿勢がない相手とはやりたくないですよね。

——青木さんはスポーツマンとして闘いたいのか、格闘技者としてありたいのか、どちらですか？

青木 う～ん、どうだろうな。俺、格闘技を"ゲーム"とは思ってないですから。柔術家とか"ゲーム"だと思ってる人もいますけど、俺は格闘技としてやってますね。

——だから究極の精神状態まで没頭できるのかもしれませんね。

青木 やっぱり、相手をどう制すかというゲームとして考えてたら、おもしろくないですよね。人の価値観はそれぞれだけど、格闘技はやっぱり一本かKOじゃないと。

——その姿勢があっての判定だったらいいわけですか？

青木 そうですね。

——いま『武士道』の中で一番そういう意識がある選手は誰だと思いますか？ 青木さんの階級でいうと。

青木 みんなアグレッシブじゃないですか、トップにいる選手は。メレンデス選手にしても、五味選手にしても。川尻選手にしても、石田選手にしても、マッハさんにしても。

——その中で青木さんが意識している選手は誰ですか？

青木 いないですね。

——とくには。

青木 全然いないですね。べつに、誰に負けたくないとかも考えてないですからね。とにかく自分が強くなりたいってことですね。

——じゃあそこは周りにどう思われようが自分の好きなように。

青木 はい。関係ないですね。

——何を言われようが自分が思うように好きなように振る舞うという。その精神は強いですね。

青木 まあ、ちょっとズレてますから（笑）。だけどみんな自分のこと、まともだと思ってますからね。俺も自分のこと、まともだと思ってるふしがあるし、みんな自分のことをスタンダードだと思ってる。それはいい意味で自分が中心であるという意識があるからなんでしょうけど。

——それが周りからするとズレてるってことなんでしょうね。

青木 でも、それを貫き通して、ただ強くなりたいんですよ、俺は！

【06年8月31日／DEEP道場にて収録】

『武士道』の混沌に拍車をかけろ！座談会

あるいは格闘セレブの与太話

堀江ガンツ
『kamipro』編集部若頭。熱狂的かつ変態的なUWF信者～リングスファンを経て、業界入り。現在は『PRIDE』を中心にミルコ番、ノゲイラ番、所くん番として絶賛活躍中。血中UWF度が濃縮＆凝縮され、『PRIDE』を通過した果ての俺イズムから来る、ブレない格闘論は定評がある。アルコールが入ると、いろんな意味で手がつけられない。

橋本宗洋
日本最重量級フリーライター。『格闘技通信』でアルバイト後、『SRS-DX』を主戦場とし、編集長の谷川貞治からサダハルンバイズムの洗礼を受ける。同誌休刊後は、あらゆる媒体で活躍。K-1、『PRIDE』から、キックボクシングまで、総合から立ち技を分け隔てなくカバー。最近は自転車移動で減量作戦敢行と、無駄な抵抗を試みている。

ジャン斉藤
『kamipro』編集部、冷酷の進行役。“雀鬼”こと桜井章一の内弟子という、異色経歴を経てダブルクロス入り。内弟子のくせに“雀鬼”のマブダチ、ヒクソンの打倒を叫んでいたヒネた性格を持ち、大興行の失敗やドタバタぶりを主食とする破綻興行マニア。アントン番として、永久電機の進展や、GENOMU度溢れる発言の情報収集に余念がない。

ジャン斉藤　先日、名古屋で行なわれた『PRIDE武士道・其の十二』は評判がいいですね。

橋本宗洋　格闘技ファンのあいだでは「ハイレベルで良質な大会だった」って評価が多いよね。じゃあ、今日はとくに語ることもないんじゃないの？　さっさと終わらせてゴールデン街で飲もうよ。

堀江ガンツ　ちょ、ちょ、ちょっと待ったぁ～！　『武士道』に一言……いや、いろいろもの申～すっ!!

ジャン　どうしたんですか？　青木真也のロングスパッツが似合いそうな雄叫びぶりは。

ガンツ　そんな「純粋で良質な大会」はMARSに任せといてさ、『武士道』がこんなもんで満足してたらダメでしょう。

ジャン　「純粋で良質な大会」はMARSには任せられないですよ。

ガンツ　ボケをマジメに切り返すな（笑）。俺は正直に言うと、あの大会観たあと物足りなさでがっぺムカついたよ！

橋本　『武士道』は、もっともっと伸びるよ～～～ぉ（稲庭うどんを食べるサダハルンバ谷川調）って感じ？

ジャン　お、なつかしの「季菜」ネタ。ここ最近の読者にはまったく意味不明な話はともかくですね、ガンツ2：50は、まだまだ『武士道』のポテンシャルは発揮されてないという見解ですか？

ガンツ　だってさ、今回のメンバーなんて、「武士道オールスター」の売り文句に恥じない、中軽量級の強豪をズラリと揃えた豪華メンバーなんだから、黙っててもある程度おもしろくはなるでしょう。

ジャン　（急に小声になって）いやあ……。4大タイトルマッチを組んだオールスター戦だってコケるときはあるんですから、それは余計なお世話ってもんですよ。

橋本　余計なことを言っているのは、おまえだよ！　それは翌日横浜でやった某団体！

ガンツ　そうだそうだ！　あのメンバーで「オールスター」だなんて、失礼だろ！　どこにスターがいるんだ！

橋本　おまえのほうがよっぽど失礼だよ（笑）。まぁ、その点、8・26『武士道』には青木真也と帯谷信弘が待望の初登場、川尻達也、石田光洋、マッハ、五味隆典のライト級の精鋭が揃い踏み、おまけにウェルター級GPときたら、東京のファンも「夏休みの最後の思い出として、名古屋ぐらい行っとくか」ってなっても全然おかしくはないよね。

ガンツ　夏はすぅぎ～、風あざみ～♪　……だからって、今大会のテーマが「夏休みの思い出」っていう打ち出しは、どうかと思うけどね。だいたい格闘家に夏休みはないでしょう。そんなの、俺もありませんよ！（笑）。

橋本　井上陽水の「少年時代」から『Rage Against The Machine』へつないだオープニング映像ね。

ジャン　レイジの「Guerilla Radio」の復活は個人的にはうれしいんですけど。どうせだったら、『PRIDE』が名称変更してテレビ朝日で放映するという噂の新団体名『コンドル』にあやかって、「コンドルは飛んでいく」でも流せばよかったのに（笑）。

ガンツ　『PRIDE』はアメリカへ〝高飛び〟するというメッセージも込みで（笑）。

橋本　実際、『コンドル』体制での地上波中継はあるの？

ガンツ　……え？　あの『コンドル』ってギャグじゃないの!?　そりゃいつかは地上波中継も復活する日がくるかもしれないけどさ。

橋本　聞くんじゃなかった（笑）。話は戻るけどさ、テーマの「夏休み」は映像側の打ち出しでしょ。

ガンツ　『PRIDE』っていうのは映像、演出、試合を含めたパッケージイベントだから。俺は煽り映像で選手に夏休みの思い出を語らせる意味がわからない。たとえば、これが屋外のナゴヤ球場で開催する〝真夏の武士道スペシャル〟みたいな興行だったらわかるよ。でも、ただ8月に開催っていうだけなんだから。

橋本　俺が気になったのは、かつての佐藤大輔テイスト映像を踏襲しようとしている流れになってることかな。それぞれ作家や演出家の個性があるから、踏襲しようとするとどうしてもズレが出ちゃうじゃん。ファンからニーズがあろうが、独自のカラーを全開にして突き進んでほしいよね。

ジャン　今回は力を込めてしっか

り作りこんでいたから長編が多かったですけど、すべてを伝えようとしなくてもいいんですよね。笑いやシリアスさに着地する必要もなくて、選手の個性や試合のテーマの輪郭だけがほんのりわかればオッケーで。

橋本　あとはファンが勝手にイマジネーションを湧かせればいいってことか。でも、一般客で格闘技をそんなに知らない人はどうするんだよ？

ガンツ　『kamipro』を買って、あらかじめ情報を収集することをオススメします。ほら、そこのアナタ、立ち読みをやめていますぐレジへ！

橋本　心配するな。一般層が本屋で『kamipro』を手に取ることなんかまずないから。

ジャン　ホントのことだけど、ひどいこと言いますね。一般層をガッチリつかもうとウチだっていろいろ考えてるんですよ！　版元がeb!（エンターブレイン）だから、eb＝エビちゃんということで彼女をイメージキャラクターにして一般層を取り込もうとか。

ガンツ　それがeb!のお偉いさんを交えた3時間にもわたる100号記念号制作会議の結論だったね。ヴォルク・ハンとエビちゃんの対談や、I編集長の「赤鬼と青鬼とエビちゃんがいる公園」私小説をやろうってことで（笑）。

橋本　だったら最初からエビちゃんの本、つくれよ！

真の"ヘブン"とは何か?

ジャン　試合自体の感想はありますか？

橋本　「こりゃあダメだ～！」と思った試合はなかった。

ガンツ　たしかにレベルの高い好勝負は多かったと思うよ。ただ、そのままの価値が観客にちゃんと届いていたかというと疑問だね。

ジャン　といいますと？

ガンツ　たとえば、帯谷信弘vsギルバート・メレンデスは、マニアからしたら要注目のカードで、試合自体熱戦だったけど、『PRIDE』だけ観てる人からしたら帯谷もメレンデスも初物じゃない。その二人がいきなり闘っても、メレンデスが強いのか帯谷が弱いのか、メレンデス相手にあそこまでやった帯谷がじつは凄いのか、帯谷を倒せないメレンデスがダメなのか、たぶん判断がつかないと思うんだよね。

橋本　こないだの無差別級GPの例でいうと、中尾KISS vsすげえレベルの高い韓国人みたいなもんだよ。中尾が強いのかどうかわからないという。

ジャン　「すげえレベルの高い韓国人」。名前を覚えさせない『PRIDE』がダメなのか、それとも名前を覚えないライターがダメなのか……。

橋本　とにかく！　実力の高さが見えにくいという。じつにもったいない。

ガンツ　『PRIDE』や『HERO'S』とか格闘技の興行って、ガチンコであってもプロレスやマンガと一緒で一つの物語なんですよ。その物語に初めて登場する人の従来の登場人物との関係性が見たいわけじゃない。いまの『武士道』、とくにライト級にはこれまでの日本マット界にない群像劇が展開できる布陣なのに、五味、川尻、石田、マッハあたりが、それぞれがただ別個に試合してるだけにしか見えなかったんだよね。

背筋が凍るデニス・カーンの強さ!!　ウェルター級GP開幕戦はニンジャを瞬殺、続く二回戦はブスタマンチを下したアマール・スロエフに完勝。ウェルター級随一を誇るその攻撃能力で、観る者を唖然とする爆発力を発揮している。これぞ"THIS IS PRIDE"という闘いぶりなのだ。

橋本　"点"として存在するだけで、"線"になってない感じはしたよね。

ガンツ　だから、今回はおもいきって五味vs石田をやってよかったと思うんだよね。せっかく前回の『武士道』で石田が五味の目の前でアウレリオを下すという最高の前フリがあったんだからさ。

橋本　いきなり石田戦なんて組まれたら、五味はもの凄く不機嫌になりそうだけど（笑）。まぁ、猪木さんじゃないけど、選手が嫌がる試合ほど観たいものはないからね。実現したら絶対に注目を集めることは間違いないし。

ガンツ　実現したら凄い試合になると思うんだよ。だからこそ、旬なカードはガンガン実現させてほしい！　と。

橋本　俺とガンツは会場観戦だったけど、PPV観戦のさいちんはどうだったの？

ジャン　ボクは全般的に満足でしたけど、唯一イマイチだったのは美濃輪育久の試合ですね。もしかしたら、「美濃輪育久の役割はこれでいい」というふうに認識している人が多いのかもしれませんけど。

橋本　それは美濃輪育久の本当の"ヘブン"を知らない連中の言うことだね。

ガンツ　美濃輪のヘブン級の試合っていうのはさ、俺は大肯定するんだけど、こういった試合こそ対戦相手が問われると思うのよ。簡単に言うと、何が起こるかわからない、幻想がかき立てられる相手ね。だから今回もバタービーンが初登場だったらヘブン度が高まるけど、実際はすでに須藤元気が退治しちゃってるわけじゃない。そうすると、途端に観る側のハードルが高くなっちゃうんだよね。ただ勝つだけじゃもうダメになっちゃう。

橋本　ただ勝つだけでは許されないのが美濃輪育久だからね。今回は開始早々、ドロップキックを放ったけど、あのドロップキック一発でKOするぐらいじゃないとヘブンじゃない（笑）。

ガンツ　今回の美濃輪っていうのは、言うなれば、かつてのK－1における角田さんの役割なわけじゃない。だったら、『K－3グランプリ』というハイレベルでシリアスな大会の中の"箸休め"的な試合を組まれながら、なぜか『格通』の表紙になっちゃった伝説の角田vsジョー・サンぐらいのインパクトがほしかったよね（笑）。

橋本　美濃輪自身は角田さんに負けず劣らずの"光る天才"だと思うんだよ。ただ、それは勝負論があってこそ爆発する。昨年4月のアイブル戦が"ヘブン"だったのは、あのときはアイブルのほうが絶対有利だと思われてて、そこを電光石火の試合ぶりで覆したから"ヘブン"だったわけで。

ジャン　美濃輪って単なる"にぎやかし"と思われてるけど、じつは一番勝負論が問われるんでしょうね。「"にぎやかし"だからこういうマッチメイクがいいでしょ」では済まない。勝負論が落とし込まれてこそ"ヘブン"になる。

橋本　そうそう。クソ真面目に見ないとダメなんですよ、美濃輪は。だって美濃輪は本気なんだよ。こっちが本気で「美濃輪、大

丈夫かよ？」って応援したくなるシチュエーションでこそ、美濃輪育久は光るんですよ。

『PRIDE』と日本人

ジャン　ウェルター級GPはどうでした？

橋本　デニス・カーンとパウロ・フィリオに尽きるでしょ。「こいつらはやっぱ凄いぞ！」っていう素直な驚きね。へんな話、ここにきてやっとウェルター級GPを積極的に観たり語ったりする気になったよ。

ガンツ　ヘビー級3強やハリトーノフと同じノリでデニス・カーンを見られつつあるよね。

橋本　つまり、それはウェルター級の世界観ができつつあるってことなんだけど。

ジャン　決勝戦に残った三崎和雄と郷野聡寛は？

ガンツ　三崎は強いね。ダンヘンに勝つのは凄いことだと思う。でも、『PRIDE』って「ワーク・トゥ・フィニッシュ」、つまり必ずKOか一本取るか、もしくは取りにいく積極性を最大限に評価するリングじゃなかったの？　っていう思いはある。このあいだの三崎の試合を見るかぎり、ダンヘンをKOしそうだなっていう雰囲気がなかったんだよね。そこが期待値の点でデニスやフィリオに遅れをとった最大原因だと思う。

橋本　三崎や郷野はもうちょっと相手のレベルが落ちればガーッとド派手なKOする力もあるんだけど、相手がダンヘンやパローニだったり強い選手だったりするから。だから我慢して我慢しての闘い方になって、このレベルの相手に勝つんだったらそれしかないかなっていうのもわかんなくはない。必死でペースを奪い合って、15分間綱渡りをするようにして勝つ闘い方を否定したら格闘技ってダメだから。

ガンツ　要はK―1における武蔵みたいな感じだと思うんだけど、武蔵の場合、K―1ヘビー級で日本人が勝ち上がることがいかに難しいかっていうことが認知されてるから、〝武蔵スタイル〟で判定で勝ち上がることもよしとされる。でも、まだPRIDEウェルター級に、そこまでの理解はないからね。『格通』で長南亮も言ってたけど、そういうジレンマはあるでしょう。

橋本　うん。強い外国人ばっかいる中で、日本人が日本人らしい闘い方で勝っても、なんとか結果を出しましたっていう喜びはちょっと薄れるよね。

ジャン　あと打ち出しの問題もありますよね。「日本人に勝ってほしい」とか『PRIDE』のファンはそれほど強くは望んでいないと思うんですよ。

橋本　はいはい。ここ最近、マスコミの煽りや伝え方のキーワードが「日本人」ばっかりだって風潮が戻ってきてるよね。興行論として、その視点の必要性は絶対に否定はしないけど。

ガンツ　ナショナリズムからのアングルは必要ですよ。でも、そこだけすくい上げられても、逆に冷めちゃう。だいたい我々が桜庭和志や小川直也を死ぬ気で応援していたのは、べつに日本人だからっていう理由ではないからね。たとえば桜庭和志が出てきたときは、プロレスというジャンルにとってつない閉塞感があって、それを打ち破る桜庭和志にみんなが共有できたものがあった。みんなが一緒に桜庭和志の夢に乗っていこう！　っていう機運があったわけじゃん。

悪夢のアウレリオ戦以来となる試合に臨んだ五味隆典。復活戦は危なげない試合運びで勝利した。次戦はチャンピオンシップが予定されているが、現在の包囲網は、五味を“武士道のエース”から“PRIDEのエース”へと飛躍する大チャンスといえるだろう。格闘群像劇、大期待だ！

橋本　「日本人が勝てる階級」ということでスタートしたK―1 MAXでさえ、「日本人が勝てなくなってつまんなくなった」とは思わないでしょ。ブアカーオはブアカーオで強いし、おもしろいしさ。

ガンツ　でも、魔裟斗が優勝できなくなってトーンダウンしているところはない？

橋本　それは〝魔裟斗〟という個性が見えないとK―1 MAXじゃないという、あくまでもテレビ的価値観での話じゃないかな。格闘セレブ的にはそこが絶対的な肝にならないし、ましてや『PRIDE』のリングなんかもっとそんな価値観は後回しじゃない。だって、ファンはロシア人とクロアチア人が闘ってるのを見て大熱狂してるんだよ。

ジャン　結局、「日本人」というのは興行におけるあくまで一つの要素なんでしょうね。その〝とっかかり〟をどう転がすかのかが問われるのであって。

橋本　壮大なドラマ性が溢れていれば、人種を越えて熱狂できる奇跡的なリングなんですよ、『PRIDE』は。どっかの格闘技雑誌みたいに「外敵から守れ」「ニッポンの魂」というトンチンカンな打ち出しは、世の中全体の右傾化にうっかり乗りすぎたんじゃないかな（笑）。

ガンツ　だいたい、W杯やWBCみたいな国民的イベントとウェルター級GPみたいなマニアックなイベントを同じ見方をしようとすることが間違ってるでしょ。

橋本　べつに「日本」というキーワードを捨てろとは思わないけど、その打ち出し方が深くないよね。マスコミ、伝える側が深く考えないで、とりあえずの〝とっかかり〟で報道しちゃってる。それは逆に『PRIDE』を、格闘技自体をつまらなくするだけだよ。

ガンツ　『PRIDE』という過酷な舞台で日本人がホントに活躍してスターになったら、それは拍手喝采ですよ。だけど「日本人だから勝ってほしい」っていう願望は、少なくともコアなファンにはないし、一般層に簡単に拡がりを持つとは思えない。五味隆典が日本人だろうが宇宙人だろうが、去年のような圧倒的な試合してくれれば、みんな熱狂するでしょ。

『武士道』的風景をつくりだせ!!

ジャン　あとウェルター級GPで語るんだったら、長南亮が前戦で負傷した眼下底骨折が完治してなくて、プレートを埋め込んだままリングに上がっていたということなんですけども。

ガンツ　じゃあ佐々木健介と一緒だったんだ。健介でさえタッグマッチなのに、それがパウロ・フィリオとやるんだから、健介がいま『X―1』に出るようなもんか。

橋本　『X―1』のことは忘れてやれよ！（笑）。

ジャン　強く言いたいのは、長南の覚悟は買うけど万全の状態で出てきてほしかったし、安全面を考慮して主催者側は出場を止めるべきですよね。

『武士道』の混沌に拍車をかける！

橋本　長南はもともと「このGPに俺が出る資格があるのか」と言ってたけど、出たからにはケジメをつけきゃいけないって思ったんだろうね。

ジャン　こっちは「リングで死ねたら本望でしょうが！」というI編集長的ロマンを持って見るしかないけど、桜庭問題があった直後だけに、こういう隙はつくってほしくなかったという。長南には事情があるにせよこれだけの惨敗をしたんだから、意地でもビッグカムバックしてほしいですね。

橋本　あと俺が絶対に否定したいのは郷野の入場やタイツかな。

ガンツ　どうして!?　あんなにおもしろいのに！

橋本　……どうせ冷笑でしょ、キミらは。

ガンツ　何を言いますか!?　NOAHのクリスマス興行ばりに大爆笑じゃない。

ジャン　そうですよねえ。三沢光晴の金八先生、ブームから一年遅れてなぜかトライした小橋建太のヨン様コスプレを見るようで。

橋本　それが冷笑だっていうんだよ！（笑）。

ガンツ　だって学祭のノリというか、忘年会の宴会芸はそうやって楽しむもんだから。

橋本　どうして宴会芸を『PRIDE』でやるの!?　ってことだよ。これがDEEPやパンクラスだったら、「ま、いいか」って気にもなるけどさ。でも『PRIDE』は世界最高峰のリングだとうたっているんだから、パフォーマンスも世界最高峰じゃなきゃダメでしょ。

ガンツ　まあ、我々が熱狂してきたパフォーマンスは、本人の無自覚さをおもしろがったり、たとえ狙った〝笑い〟が表面上を覆っていたとしても、それだけで終わらないメッセージが含まれましたから。

橋本　かつての桜庭和志は絶対に負けられないホイス戦でサクマシンを被ったけどさ、その行為自体が『PRIDE』という舞台に大きな価値を落としこんだ。桜庭は『PRIDE』を動かしたんだよ。でも、いまは五味隆典とか一部の選手を除いては、『PRIDE武士道』というステージに乗っかってる状態でしょ。

ジャン　舞台が分母で、分子の選手がまだまだ多いってことですね。

橋本　なら、よっぽど自分を剥き出しにしないと訴求力は生まれないよ。

ガンツ　郷野でいうと、せめて菊田早苗もアフロを被って全身白タイツにして一緒に踊るぐらいじゃないと。そして郷野がもし試合でKO寸前になったら、菊田がタオルの代わりにアフロを投げるとかさ（笑）。

橋本　ふざけすぎだろ！（笑）。でも、それぐらい遊びを真剣にやれってことだね。

ジャン　みんながなんとなく郷野を評価しているのは、『PRIDE』に暗いニュースが多かったから、明るい〝とっかかり〟がほしかったのかもしれませんね。

橋本　まあ、キャラ的にも見出しにはしやすいしね。

ジャン　もともと今年の『武士道』最大のポイントは、「ゴールデンタイム地上波中継」だったじゃないですか。地上波で露出することでどんな大変化をするか、どんなパイの拡がりを持つかに期待感があった。それが幻に終わったいまだからこそ、『武士道』の世界観を考え直す機会でもあるんですけど、『PRIDE』ファンって、ナンバーシリーズと『武士道』をどういうふうに分けて見てると思いますか？

橋本　多少分けて見てるんじゃないの。じつは客層は100パーセント、カブッてないかもしれないし、その必要もないんじゃないかっていう。

ガンツ　『武士道』って、持ってるポテンシャルのわりにまだ世間的に認知されてないわけじゃない。ノーテレビの状態でパイを拡げるためには、まずはコアなファンたちを爆発させなくちゃいけないんですよ。それはかつての『PRIDE』やK-1、第一回のK-1 MAXがそうだったように。

橋本　で、五味隆典vs川尻達也戦でそれをやってのけたわけでしょ。

ガンツ　そうそう。だって去年の『PRIDE』なんか、圧倒的なドラマ性を含んだ小川直也vs吉田秀彦や、まさに〝世界最強決定戦〟のヒョードルvsミルコがゴールデンタイムで行なわれたのに、大会から一週間遅れで夕方放映の五味vs川尻が年間ベストバウトをさらっていったわけでしょ。

橋本　だから、あの一戦には、『PRIDE』ナンバーシリーズにも、K-1や『HERO'S』にもない新しいノリがたしかに生まれたんだよね。

ジャン　知る人ぞ知る、明日なき暴走が格闘セレブ層を突破したという『武士道』的風景ですね。

橋本　ヨアキム・ハンセンが挨拶のために登場しただけで、「ハンセンが来た！」ってドヨメキが起こる世界（笑）。あれが『HERO'S』の会場だったら、静まりかえってるよ。

ガンツ　で、今回の『武士道』の試合はおもしろかったのにいまいち物足りなく感じたのは、そこなんだよね。格闘セレブがヨダレを垂れ流して待っていた群像劇爆発の伏線はあったわけじゃない。五味なんてさ、自分の目の前で石田くんがアウレリオに勝ったら、あれだけ表情を曇らせて。

橋本　いい光景だったよねえ。

ガンツ　だからたとえば今回は石田くんがメインで、五味が出直しの第一試合に据えられていたら、観客ばかりかバックステージまでヒリヒリする怖い空気になってだろうね。

橋本　そこで揺れ動く選手おのおのの感情は浮き彫りになるよね。それで今回、五味は「俺と闘いたいヤツはリングに上がってこい！」とまで言っていたけど……。

ガンツ　誰か上がれよって！（笑）。そうしたら、五味の前回の敗戦、今回の復活にもの凄い意味が出てきたと思う。こういうときこそマイクを握って、かつてのZERO-ONE〝イナバの物置〟状態でファンを興奮させなきゃ！

橋本　ライト級の選手がマイクを奪い合って勝手な自己主張をして。これだけのためにハンセンやアゼレードが来日してさ。ZERO-ONEワールドをイメージするなら、バタービーンもちゃっかり紛れ込ませないと（笑）。

ジャン　はいはい、勝手な妄想はそこまで！　話をまとめると、いまのマット界で底が見えてないのはじつは『武士道』だけってことですね。

橋本　底が見えてないってことは、まだそこまで選手の格付けができてない。その混沌を次の11月横浜アリーナでどう生かすかがポイントでしょう。「仁義なき闘い・横浜死闘編」になってくんないと。

ジャン　（突然）混沌は飛んでいく！

橋本・ガンツ　は？

ジャン　（小声になって）いやいやあ、さっき話題に出た『コンドル』と混沌を、アントンふうなダジャレですね……ゴニョゴニョ。

橋本　う～ん。宴会芸だなあ。

ジャン　というわけで混沌としたまま、本日はお開きダー！

【06年7月28日／都内・「格闘セレブ酒場」にて収録】

SPECIAL PRESENS

優勝バンザ〜イ!

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(賞品は10月16日以降発送予定です)。
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤面白かった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦(優勝者)とヒョードルはどちらが強い?⑧「PRIDE」に望むことは?
【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ケ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス「kamipro」編集部「鳥肌立った」係まで
※締切は2006年10月15日(日)当日消印有効

kamipro SPECIAL 応募券 ありがとうございましたっ!

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

PRIDE GP 2006 OPEN-WEIGHT

PRIDE■http://www.prideofficial.com/

ミルコ・クロコップ サイン入り大会パンフ 1名様

ミルコ優勝おめでとう! 前回の速報号では4強のうち、ミルコのサインだけおあずけでしたが、今回は"王者"ミルコのサインを入れて、「PRIDE無差別級GP2006決勝戦」のパンフをプレゼントします! この貴重さは、まさしく60億分の1!!

BACK

PRIDE無差別級GP チャンピオンベルトTシャツ 2名様

(ブラック×1、ホワイト×1)[S・M・L・XL ¥4200(税込)]

PRIDE無差別級GP決勝戦記念Tシャツ第二弾として、不思議な迫力を放つチャンピオンベルトTシャツが登場! バックには準決勝に進出した4選手のサインがプリントされている。PRIDEファンのキミなら着るしかないぞ!!

ART JUNKIE ジョシュメタルTシャツ 1名様

[XS ¥4200(税込)]

ART JUNKIEさんがジョシュ直々にオファー受けて完成したジョシュメタルTシャツが完成! 歓喜のあまり叫んでしまったジョシュのコメントはコチラ→「アートジャンキーノイラスト、キャラクター チョーカッコイイ!」。

『ART JUNKIE』
infor@artjunkie.jp
http://www.artjunkie.jp
『GROUND COBRA(通販可)』
福岡市中央区天神1-11-1 天神ビブレ5F
TEL 092-711-1021
『One up.』
東京・中野ブロードウェイ3F.4F
TEL 03-3387-8994
http://www.one-up.org/

PRIDE無差別級GP チャンピオンベルト デジタオル 2名様

[¥3150]

Tシャツ同様、タオルもチャンピオンベルトをデザインした新商品が登場。腰に巻いてチャンピオン気分に浸るもよし、一発ギャグに使うもよし、冬場に向けて乾布摩擦に使うもよし、利用方法は自由!

ジョシュロゴTシャツ 各2名様

(ホワイト×1、ブルー×1)
[S・M・L・XL ¥4725(税込)]

ハリトーノフ スポーツタオル 2名様

[¥3150(税込)]

ハリトーノフ死神Tシャツ 2名様

[S・M・L・XL ¥4200(税込)]

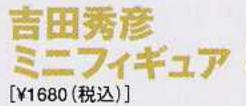
『PRIDE.31』以来、久々の登場となったハリトーノフ。う〜ん、アレキ戦はアレキだからしょうがない気がする? というわけで、死神復活に向けてタオルor新作Tシャツを手に入れて次戦に備えよう! タオルはハリトーノフが入場シーンで着てたTシャツと同じデザイン、新作Tシャツは死神の目が光るラインストーン入りです。ドシドシ応募してくれ〜い。
商品協力/(株)ダブルクロス

ジョシュフォトTシャツ

(ホワイト×1、ライトブルー×1)[S・M・L・XL ¥4725(税込)]

無差別級GP準優勝に輝いたジョシュ。おめでとうございます! その素晴しい闘いっぷりを讃えて、Tシャツも大盤振る舞いです。新作ジョシュTを2枚ずつ4名様にご提供します。

吉田秀彦 ミニフィギュア 1名様

[¥1680(税込)]

「PRIDE STORE」で常に上位にランクインしている人気グッズ・吉田秀彦ミニフィギュアを1名様にプレゼント。吉田道場アメリカ支部設立を目論む吉田選手には、ぜひ「ラスベガスでもできるかな?」と言ってほしい!

商品協力/(株)ドリームステージエンターテインメント

BUSHIDO

青木真也 グラップラーTシャツ　2名様

[S･M･L･XL　¥3990(税込)]

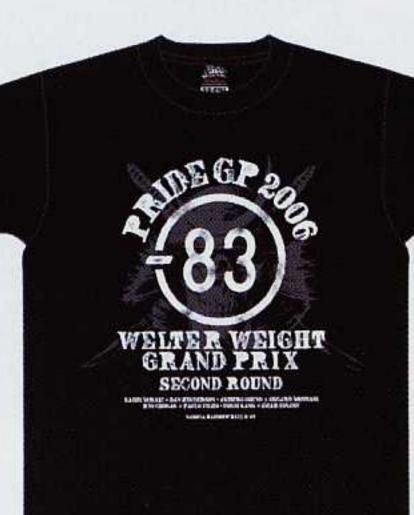
エガちゃん万歳!!　というわけで、エガちゃんポーズをとってほしい!　と大声で叫ぶファン(編集部)の期待に見事に応えてくれた青木選手から、サインまでいただきました。次回はぜひ「スリル」で入場してほしい!!

ZOOM

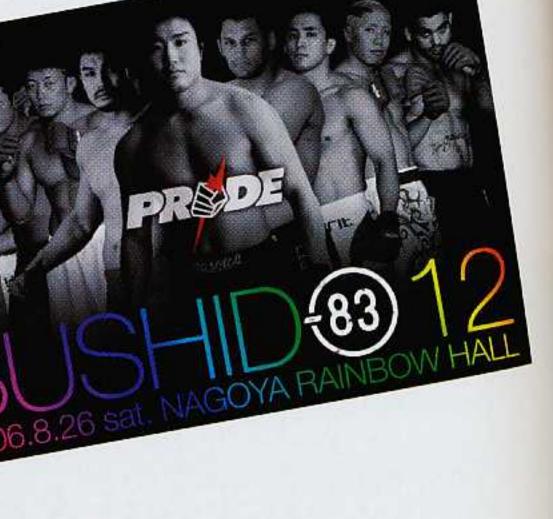
サイン入り

武士道・其の十二 パンフレット　2名様

[¥2100(税込)]

五味隆典の復活、ウェルター級GPの二回戦など、数々のテーマを据えて行なわれた同大会。参戦選手紹介はもちろん、PRIDE広報佐伯さんとTKのおもしろGP予想も掲載!　佐伯さんvsTKの勝負は……読んで確認しよう〜。

武士道・其の十二 〜ウェルター級GP2ndROUND〜 大会記念Tシャツ　2名様

[S･M･L･XL　¥4200(税込)]

8月26日名古屋大会で4強が出揃ったウェルター級GP。さ〜あ、二代目優勝者は誰になるんでしょう?　乞うご期待。ちなみに、Tシャツの色はブラックのみ販売中。

石田smileTシャツ　2名様

(ブラック×1、イエロー×1)

[S･M･L･XL　¥3990(税込)]

さん、さん、さん、さわやか3組ぃ〜♪　と、いまにも合唱したくなる石田選手の笑顔とともに、石田選手のsmileTシャツをプレゼント!　さわやかさんに変身したいあなたは、まずこのTシャツを着るべきだ!!

五味キャラクターTシャツ　2名様

(ホワイト×1、ブラック×1)

[S･M･L･XL　¥3990(税込)]

『武士道・其の十二』で4ヵ月ぶりの勝利をあげた五味選手。しかし、アウレリオ、石田、メレンデス……。まだまだチャンピオンは忙しいぞ〜。そんな五味選手を応援するキミ!　ほら、このTシャツに応募するんだ!!

ミルコ タンクトップ

[S､M､L､XL　¥3675(税込)]

シュートボクセ タンクトップ

[S､M､L､XL　¥3675(税込)]

美濃輪NEW TYPE ジャガードスポーツタオル　2名様

[¥3465(税込)]

入場テーマ曲コスチュームともに心機一転試合に臨んだ美濃輪育久。巨漢バター・ビーンを相手に豪快なドロップキック→腕十字とまさに完勝!　次はもうコーナーからのキン肉バスターしかない!!

真夏も真冬もタンクトップだ!　というわけで、一年中ランニングの鼻たれ小僧に負けないように、寒い寒いなんて言ってないでキミもPRIDEタンクトップに応募しよう。おにぎりをほしがる甘えん坊キャラにもなれるぞ!!

各1名様

BTT タンクトップ

[S､M､L､XL　¥3675(税込)]

ヴァンダレイ タンクトップ

[S､M､L､XL　¥3675(税込)]

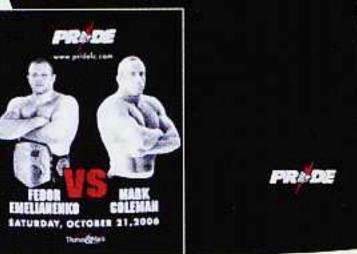
ヒョードル タンクトップ

[S､M､L､XL　¥3675(税込)]

USA

WOWOW提供! UFCキャップ　5名様

絶賛UFC放送中のWOWOWさんからUFCキャップを5名様にプレゼント。ヴァンダレイが参戦するからといって慌てているあなた!　今日からさっそくWOWOWに入ってUFCを徹底的に分析しよう〜。

BACK

PRIDE ラスベガス大会 記念Tシャツ　1名様

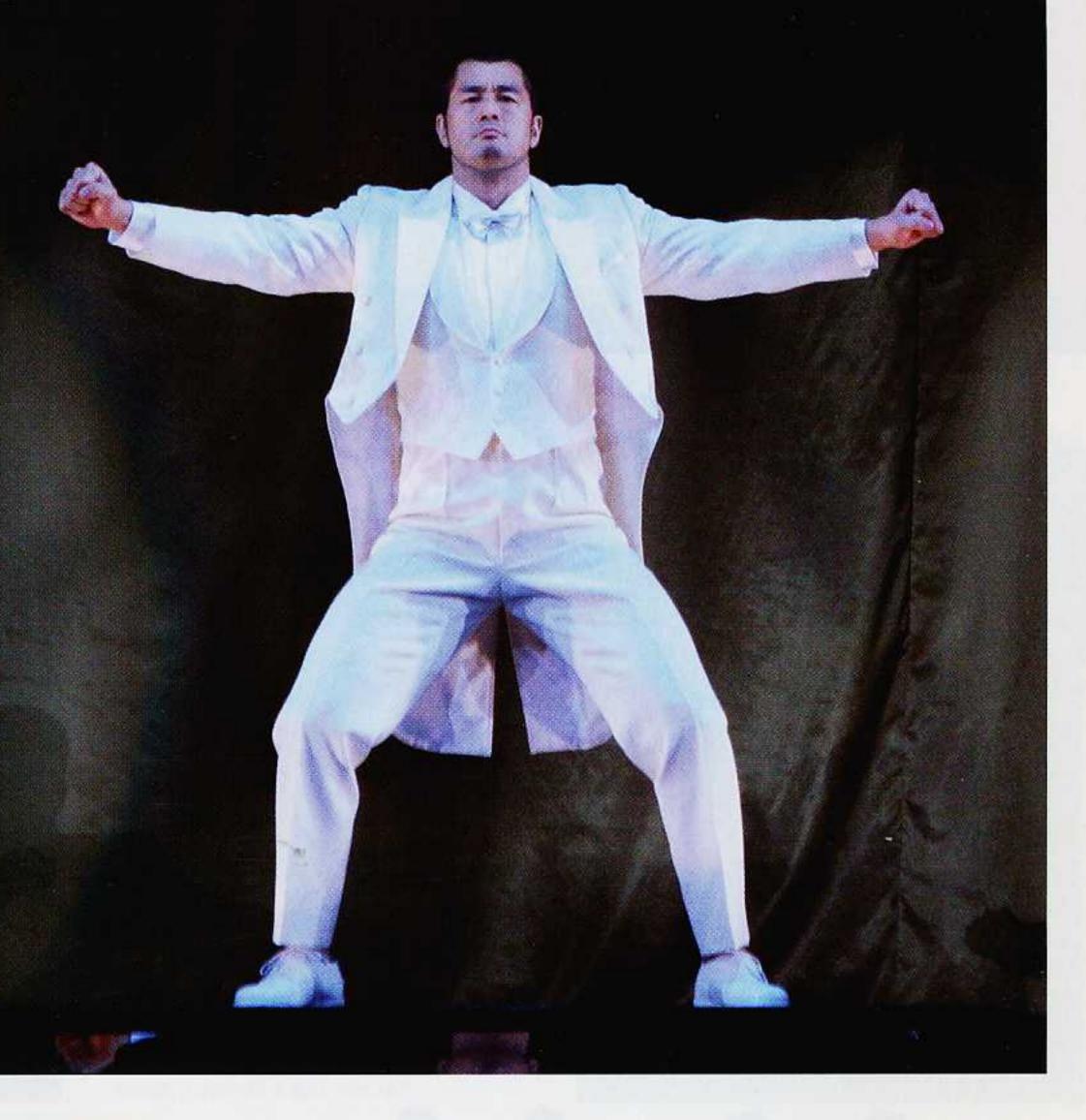
『PRIDE無差別級GP』も終わり、いよいよ開催が迫ってきたラスベガス大会。現時点では、ヒョードル、ショーグン、コールマンらの参戦が発表されているけど、もしかしたら耳をかじったあの人も……!?(適当)。

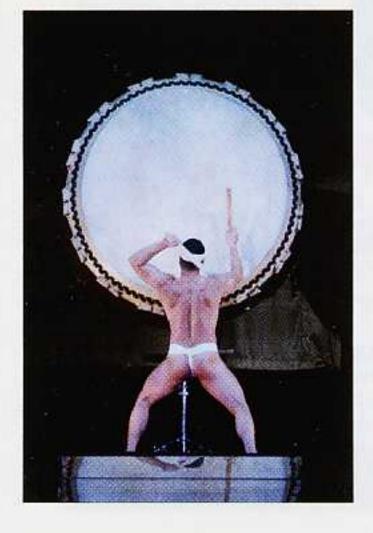
★WOWOWではUFC63を9月25日(月)午後10:00に放送!

WOWOWへの加入申し込みはTEL:0120-480-801またはHP:http://www.wowow.co.jp/へ急げ!!

kamipro Special 2006 WINTER

大晦日速報号、出てこいや〜っ!?

今年も出るか、タップ&ショーツ!?
次回のカミスペは
12.31PRIDE男祭り徹底速報
ほか、ダイナマイッ!!な企画満載予定

kamipro No.103は
9月29日(金)発売予定!
※地域によっては多少発売日が遅れます

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2006 AUTUMN
2006年9月30日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
山口日昇
青柳昌行

編集若頭代行
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
真下義之
松下ミワ
八木賢太郎（ホームパーティのため非番）

編集見習い
バギーパンツGT

電気部
ささきぃ
松澤チョロ
上杉パントマイム

企画制作部
坂井ノブ

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子RGM

編集次長リローデッドPart.11.5
松林 貴

デザインカントク
出田さん（TwoThree）

デザインキャプテン
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木しらき
（以上、TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
丸山剛史
平工幸雄
山口比佐夫
松本 崇
黒田史夫
吉場正和
平 専英

お勘定&衣料部
ニュー林様

妄想!?
入江マーク・カー（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
割石“BL猛勉強中”芳司

“誕生日プレゼント受付フェア開催中!”な編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

広告営業
株式会社ビューポイント
（広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで）

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

［カスタマーサポート］
☎0570-060-555（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00）　メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL:http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

kamipro Special 2006 AUTUMN 最強を目指し続けた男の夢ついに叶う! ミルコの魂百まで!!
2006年9月30日
発行人/浜村弘一　編集人/山口日昇、青柳昌行　発行・発売所/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555（代表）
印刷・製本/大日本印刷株式会社　©2006 ENTERBRAIN,INC.　©2006 DOUBLECROSS

ISBN4-7577-2975-8
C9476 ¥724E

定価:本体724円+税
雑誌61954-44 Ⓗ2007.10
Printed in Japan 大日本印刷
enterbrain